スターリン全集

第四巻

〈一九一七年十一月——一九二〇年〉

ロシア連邦共和国の組織
十月変革と民族問題
ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策　他86篇

スターリン全集月報

第4号

1954. 2. 15

スターリンの死去一周年にあたって

スターリン全集刊行会

おもえばスターリン全集刊行会の発足は、一九五二年三月のことであった。それ以来翻訳者、校閲者の努力によって、第一巻を世にだしたのが同年七月のことである。さいわいにしてこの事業は日本の勤労大衆の支持を得て順調にすすんでいった。

ところが、全集完結の一歩まえ、第十一巻の翻訳、校閲、印刷を終えたとき、はからずも晴天の霹靂のごとく、スターリン重病の報をうけ、刊行会一同は深い憂色にとざされた。そして、偉大な指導者のすみやかなる回復をひとえに念願しつつあったやさきにつづいて、ソ同盟共産党中央委員会、ソ同盟閣僚会議、ソ同盟最高ソヴェト幹部会からの、

「親愛なる同志ならびに友よ！」

ソ同盟共産党中央委員会、ソ同盟閣僚会議、ソ同盟最高ソヴェト幹部会は、ここに深い悲しみをもって党ならびにソ同盟の全勤労者にたいしソ同盟閣僚会議議長、ソ同盟共産党中央委員会書記長ヨシフ・ヴィッサリオーノヴィチ・スターリンが重病ののち三月五日午後九時五〇分死去したことをつげる。レーニンの戦友にしてその事業の天才的な継承者、共産党およびソヴェト国民の賢明な指導者、教師であるヨシフ・ヴィッサリオーノヴィチ・スターリンの心臓は鼓動をとめた」という知らせを深いかなしみのうちにうけとったのであった。

いままたこの日から一年の歳月がながれ、われわれは、深いかなしみと追憶の念をもってふたたび三月五日をむかえようとしている。

スターリンの死にさいして、われわれは、スターリン全集の刊行の継続と完成とをちかったのであるが、読者諸君の支持によって無事この任務をはたすことができた。スターリン全集普及版の発行は、第二の任務であるがこれまた現在読者諸君の支持のもとに着々とすすみつつある。第三にもっとも重大な任務としてスターリン思想の普及がある。これは現在の国際、国内情勢から、民主主義の完全な勝利と国民生活の向上、民族の文化、科学、芸術の発展と平和をまもるための指導理論としてのスターリンの教えが、いかに貴重なものであるかを考えてみるならば、この事業の重大性がわかると思う。

これらの事業は、けっして困難なしに遂行されるものではない。しかし、この事業、この闘争で、われわれの勝利の道は保証されている。

スターリンの理論は、じつにこのことをおしえているのである。あの中国革命も、このスターリンの理論にみちびかれてはじめて成功したものであることは、偉大な指導者毛沢東のいうところであるが、彼はスターリンの業績をさらにつぎのようにのべている。

「同志スターリンは、全面的に、かつ画期的にマルクス＝レーニン主義の理論を発展させ、マルクス主義の発展をあらたなる段階へおしすすめた。同志スターリンは独創的に、資本主義不均等の法則にかんするレーニンの理論と、社会主義が一国内でまず勝利しうるという理論を発展させた。同志スターリンはまた独創的に資本主義体系の全般的危機にかんする共産主義建設にかんする理論をうちたて、また植民地、半植民地における革命にかんする理論をうちたてた。同志スターリンはさらにレーニンの党建設にかんする理論を独創的に発展させた。同志スターリンのこのすべての独創的理論は、全世界の労働者をいっそう堅く結合させ全世界の被圧迫階級と被圧迫人民をいっそう堅く結合させて、世界の労働者階級と被圧迫人民の解放と幸福のための闘争とその勝利を、いまだかつてない規模に発展させた。」

しかしこの理論は、一年まえの三月五日にスターリンが死去してのちは直接彼の口から聞くことは、ソヴェト同盟においてすらできなくなった。したがって、スターリン全集の意義はとくに重大となった。スターリンの思想、その理論の研究にとって、全集のだいじなことは、従来とても変りはなかった。しかしながら、スターリンの生存中は、『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』のように、世界的な新しい問題にたいする、彼の明快な指導を得ることができたが、今後は、スターリンの貴重な遺産にわれわれが、新しい情勢にみずから対処してゆかなければならないようになった。このためにも、とくに全集による彼の全著作の系統的な研究が重要な意義をもつ。また現在の諸情勢は、さきにもあげたように、この理論の普及化、大衆化をさらに緊急な任務としている。この全集を通じて、スターリンの理論をわが国民民主勢力の血肉とし、日本人民解放のための武器とすることは、今後のわれわれに課せられた任務である。

スターリンの最後の労作となった『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』のなかにある天才的な予言、すなわち資本主義諸国内の対立と民主主義陣営の成長は、今日ではだれの目にもあきらかになった。

ソヴェト同盟を中心とする平和と民主主義の勢力が着実な発展をとげアメリカを先頭とする侵略的な反民主主義の勢力はしだいに孤立しつつある。このため、アメリカに隷属する諸国を自己の側にひきつけておこうとする努力も、ますます強くなっている。わが国をあらたな戦争にかりたてようとするMSAの受入れ、再軍備の強行、社会保障費の大削減などは日本を奴隷化して、日本国民をアメリカの人的資源にしようとするアメリカ帝国主義と日本の代理人たちの政策である。

しかしながら、これにたいする労働者階級を中心に国民大衆の反抗もしだいにおこっていることは、事実がこれをしめしている。社会保障費の削減にたいしては、保育園から養老院、さては地方官庁の高級職員までもがたたかった。われわれは、この全国民のたたかいをさらにおしすすめなければならない。

スターリンの理論は、日本国民のこのたたかいに欠くことのできない武器となるであろう。現にこの闘争の先頭に立っている日本共産党の指導者は、

「わが日本共産党の三十周年にあたり、もっとも痛感することは、マルクス＝レーニン主義によって武装し、平和の旗手であり、勤労者の偉大な指導者であり同志である、ヨシフ・ヴィッサリオーノヴィチ・スターリンの指導原則を厳格にまもることが、必要欠くべからざることである」といっている。また現在おこなわれていている日本共産党の党内教育学習運動はこのスターリンの思想と理論をまなぶことが、その中心的な任務になっている。

われわれは、こうした運動をさらにおしすすめ、これを国民のあらゆる階層にひろげ運動をおこそう。

スターリンの名を実際に全国民の親しい名とするために、なおいっそうの努力をしなければならない。

「スターリンの不滅の名はソヴェト国民とすべての進歩的な人類の心に永久に生きるであろう」ということは歴史がこれを証明するであろう。われわれは、このことを確信している。だが、このことのためにわれわれのはたさなければならない仕事は、はかりしれないほど重く、また大きい。

スターリン学説の体系的研究の土台になる全集の完成についでわれわれは、レーニン全集の刊行に着手している。このレーニン全集とさきに刊行したマルクス＝エンゲルス選集とによって、創造的マルクス主義の発展のあとをたどり、この理論を、その根源にさかのぼって、よりいっそう深い理解にたっすることができるであろう。この事業は、スターリン全集の刊行にくらべると、その困難もさらに大きい。しかし、われわれには、スターリンの理論にみちびかれつつ、これができるというしあわせがある。さらに、マルクス＝エンゲルス選集以来の読者諸君の熱烈な支持が期待できる。

全集刊行委員会は、この光栄ある任務を、日本の進歩的な勢力のもとに遂行することをちかうものである。

第四巻解説

第四巻は、一九一七年十一月から一九二〇年末までの著作をおさめている。この三年間は、ソヴェト国家の歴史上で、もっとも緊張した時期の一つであった。この時期にソヴェト権力は、国内の反革命と外国帝国主義者の武力干渉とたたかいながら、新しい生活を建設していった。搾取のない新しい社会組織の基礎、民族的抑圧のないもっとも民主主義的な国家制度の基礎がきずかれ、これをまもる赤軍が成長し、その指導原理である新しい戦略・戦術がつくりあげられた。この時期全体の特徴は、『**プロレタリア独裁の三年間**』に概括されているが、この時期にスターリンは、レーニンと密接に協力しながら、政治・経済・軍事のすべての分野を指導し、十月社会主義大革命の成果をまもりかためたのである。

一

第四巻で中心的な地位をしめ、また、われわれがもっとも注目しなければならないのは、民族問題とソヴェト権力の民族政策についてスターリンがあたえている深い分析であり、この問題についてマルクス主義を発展させた高い理論的業績である。われわれは、第一巻、第二巻で民族問題についてのスターリンの深い理解をまなんだが、十月革命後ソヴェト多民族国家の建設のための戦いのなかで、その理論がどう具体化され、発展させられたかを、この巻で知ることができる。「民族問題は、現存の制度の改革という一般的な問題の一部分にすぎないので、社会情勢の諸条件、国内権力の性質、一般に社会的発展の全行程によって完全に規定される」（本巻一八一ページ）。したがってその解決方法、プロレタリアートの民族政策もまた、それに応じて変化する。スターリンは、この見地を、『社会民主党は民族問題をどう理解するか』（第一巻）、『マルクス主義と民族問題』でもつらぬいているが、十月革命と国内・国際情勢の根本的な転換が民族問題の提起をどう変化させたか、――スターリンの民族問題論文集の序文『**著者から**』は、民族問題の提起における十月革命前の段階と後の段階との区別を、簡潔に要約している。

『**十月変革と民族問題**』は、十月革命後の民族問題の新しい提起の本質を、もっとも鋭く、包括的にとりあつかったものであって、ここで一般化されている民族問題の理論は、この巻の他の民族問題にかんする論文を研究するばあいに、つねに念頭におかねばならないものである。なぜなら、それは他の多くの論文からの結論であり、その総括だからである。

スターリンはこの論文で、まず、二月革命と民族問題の関係をのべ、ブルジョア民主主義革命の段階では辺境地方の民族運動は、ブルジョア民族解放運動の性格をもち、ブルジョア民族国家建設という目標をもっていたが、帝国主義時代の国内・国際情勢とプロレタリアートのすすんだ階級斗争の諸条件のもとでは、このようなブルジョア民族運動の展開の余地がなかったことをのべ、ついで十月革命後にはこれらのブルジョア民族政府は必然的に反革命的なものとなり、自分の存続のために外国帝国主義と結合し、これに隷属していったこと、ソヴェト権力と帝国主義と結合したブルジョア民族主義的反革命との斗争は、辺境地方の労仂者・農民の反帝国主義的・社会主義的運動を展開させ、両者の戦斗的な同盟をかためていったことを明らかにしている。だが十月革命は、ソヴェト・ロシアにおいてプロレタリア運動と民族解放運動の統合を実現したばかりでなく、東洋と西欧に深い影響をおよぼして、ソヴェト・ロシアを通じて、西欧のプロレタリア運動から東洋の植民地解放運動にいたる、統一された反帝国主義戦線をつくりあげ、民族問題を植民地問題に拡大・発展させた。こうして十月革命は、「プロレタリアートと同盟して、プロレタリアートの指導のもとにおこなわれる植民地革命の時代をひらいたのである」（スターリン）。

この巻におさめられた『**ウクライナ・ラーダについて**』、『**ウクライナの結び目**』など一連のウクライナのブルジョア民族運動を論じた論文は、この運動の反革命性を明らかにしたものである。この反革命性のために、ウクライナはドイツ帝国主義の侵略基地に転化していったことを、これらの論文は明らかにしているが、一連の他の辺境地方の「民族政府」が、反革命の基地となり、外国帝国主義に隷属し、武力干渉の基地となって

いった経過は、『**カフカーズの状況について**』、『**ドン地方と北カフカーズについて**』などで、いきいきとした筆致でえがき出されている。なお、ここでスターリンが、これらの地方の「民族政府」が、帝国主義者の侵略のついたてとして利用されていることをばくろしている点は、日本の現状とてらしあわせてきわめて重要である。

この時期には、また、ロシア革命の影響を東洋の被圧迫諸国に波及させる問題、世界帝国主義にたいする東西両洋の革命的統一戦線を結成する問題もまた、とりあつかわれた。『**東洋をわすれるな**』、『**帝国主義の予備軍**』、『**東部におけるわれわれの任務**』などがそれである。植民地東洋の解放なしには、「社会主義の最後的勝利とか、帝国主義にたいする完全な勝利とかは、思いもよらない」（本巻一九七ページ）という基本的態度は、帝国主義時代の深い分析から生まれたものであり、中国革命の勝利が、われわれの眼前でこれを実証していることを、われわれはわすれてはならない。

二

十月革命は、ロシアにおける諸民族間の関係を一変させた。革命は、民族的抑圧を一挙に粉砕して、支配民族の弱小民族にたいする抑圧と搾取とを永久に粉砕し、諸民族の友好の道をきりひらいた。こうして民族問題の解決における新しいソヴェト時代がひらかれたのである。

『**ヘルシンキにおけるフィンランド社会民主労働党大会での演説**』、『**フィンランドの独立について**』で、スターリンは、ソヴェト権力による民族自決の実現がもつ大きな意義についてのべている。スターリンは、そこで諸民族が「自分の生活をいとなむ完全な自由」を承認してはじめて諸民族の「自由意志による誠実な同盟」が可能であること、諸民族間の相互信頼を基礎としてのみ、「万国の労働者団結せよ！」というスローガンが実現されることを強調している。また「このような信頼にもとずいて、ロシアの諸民族は一つの軍隊に結集し、その結果としてはじめて、十月革命の成果はかためられ、国際社会主義の事業は前進させられるであろう」とのべている。民族問題が社会主義の事業の観点からとりあげられねばならないことを、これらの言葉ははっきりものがたっている。

だから、スターリンは、『**第三回全ロシア労・兵・農代表ソヴェト大会での演説**』で、民族の自決が民族主義的ブルジョアジーに利用されて、反革命の道具となったことにふれて「自決の原則はその民族のブルジョアジーの自決権としてではなく、その勤労大衆の自決権として解釈されねばならない。自決の原則は社会主義のための斗争手段でなければならないし、社会主義の原則に従属しなければならない」と強調した。

十月革命によって民族の自由を宣言された諸民族の労働者・農民は、自由意志による諸民族の同盟として、新しい多民族国家を建設する意志をしめした。こうして民族的諸地方の自治制の具体的形態の問題があらわれた。いうまでもなく、それはソヴェト自治制――ソヴェトを基礎とする自治制であった。スターリンはこのソヴェト自治制の本質を『**当面の任務の一つ**』、『**タタール＝バシキール・ソヴェト共和国憲法制定大会召集のための会議での演説**』のなかで特徴ずけている。

だがソヴェト自治制、それにもとずく連邦組織形態の問題の発展は、一八年下半期にはじまる国内戦と干渉の時期によって中断された。そして反革命と干渉が粉砕されて辺境地方が解放され、これらの地方にソヴェト権力が確立されるにつれて、これらの問題は、新しい確固とした地盤のうえに提起されたのである。

『**ウクライナは解放されつつある**』、『**光は東方から**』、『**民族問題にかんする政府の政策**』などのなかで、スターリンは、この解放の過程とそれにともなうロシア諸民族の同盟の発展とをえがいている。『**ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策**』は、ロシアの解放が達成されつつある時期、「帝国主義の干渉の企てにたいする保障として、中央と辺境地方との革命的同盟を確保する」ために、ソヴェト自治制の実行の問題が提出された時期に書かれたものであり、ソヴェト自治制の問題が広範にとりあげられている点で、きわめて重要な労作である。

スターリンは、「中央ロシアとその辺境地方の相互の支持なしには、革命の勝利は不可能であり、ロシアを帝国主義の毒牙から解放することは不可能である」（三八二ページ）と、両者の同盟の必要性をのべ、辺境地方の分離が、帝国主義にたいするこれらの地方の従属を不可避的にも

たらすことを証明している。

つぎに、スターリンはソヴェト自治制の諸形態についてくわしくのべているが、この自治制の形態の多様性とその伸縮性はもっとも注意しなければならない点である。特有の生活様式と民族的構成、これらの民族の発展段階に応じた多様な形態と段階こそ、ソヴェト自治制を、諸民族の生活と利益に合致させ、これらの民族を政治生活にひきいれ、中央との強固な同盟を確保させるものである。

だが、ソヴェト権力は、自治制の形式的宣言にとどまることはできない。民族の法律的平等が宣言された十月革命以後、ロシアの民族問題の主要点は、おくれた民族をどのようにして事実上の平等までたかめるか、先進の中央ロシアが、後進の辺境地方をそのためにどう援助するかの問題に発展した。スターリンは、この論文で、経済的・文化的におくれた民族をどのようにして発展させるかを具体的に指摘している。

帝国主義のおくれた民族にたいする政策は、民族的抑圧、経済的搾取、文化的同化である。これと対立するソヴェト民族政策こそ、植民地・半植民地の民族解放運動の燈台であり、他の国々のプロレタリアートの民族政策の模範である。中華人民共和国、東欧の人民民主主義諸国における民族問題の解決は、この模範の世界的意義を明らかにしている。

三

民族問題の解決と密接に関連して、ソヴェト多民族国家の構造の問題が提起される。スターリンは、『**ロシア連邦共和国の組織**』、『**ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の一般的規定**』で、この連邦制の本質と形態とを基礎ずけている。われわれは、ここで十月革命前の連邦制度にたいする否定的態度ではなく、新しい情勢のもとで連邦制度を発展させる問題が、提出されていることに注意しなければならない（第三巻『連邦制度に反対する』を見よ）。社会の発展と勤労者の利益は、この新しい問題提起の基礎であった。このような弁証法的な態度は一九二二年における民族諸共和国の合同とソ同盟の成立にしめされ、（これについては第五巻を見よ）さらに一九四四年のソ同盟構成共和国における外務人民委員部と陸海軍人民委員部の設置にもしめされている。ソヴェト自治制、ソヴェト連邦組織の具体的形態についてのスターリンの理論は、マルクス＝レーニン主義を新しい段階にたかめたものである。

われわれは、この巻におさめられた民族問題、民族政策問題にかんする労作から、帝国主義と十月革命以後の段階における民族解放斗争の基本線、プロレタリアートの指導のもとにおこなわれる、反帝国主義斗争の一環としての民族解放斗争の基本線を知ることができる。そして、いま民族解放斗争をたたかっている日本国民は、ロシアにおける民族問題の解決が、プロレタリアートの勝利によってのみ達成されたことを知ることによって、平和と民主主義と社会主義の陣営との密接な協力こそ、民族独立の保障であることを自覚するであろう。

四

第四巻では、ソヴェト共和国をまもり、赤軍の勝利を組織する問題が他の大きな中心となっている。「一九一八―二〇年の時期に、おそらく同志スターリンは、中央委員会が、もっとも弱い地点、革命にたいする脅威がもっとも急迫している地点をえらんで、戦線から戦線に派遣したただひとりの人であろう」（ヴォロシーロフ）。スターリンは、深い階級的分析と適確な軍事的判断にもとずいて、戦線をたてなおし、攻撃の方向を決定し、後方と戦線とを調整し、赤軍を強化して、赤軍の勝利を確保した。そして、この過程でソヴェト軍事科学（戦略・戦術）の基礎がきずかれていった。

一九一八年六月、「同志スターリンは、軍人としての彼の経歴をツァリーツィン戦線ではじめた」（ヴォロシーロフ）が、当時の国内戦の情況のもとでは、ツァリーツィンは第一の重要性をもっていた。ツァリーツィンの喪失は、北カフカーズの穀物とバクー油田の喪失を意味し、ドンの反革命派、コルチャック、チェッコ反革命軍の統一と、モスクワへの進軍を意味していた。『**南部ロシアについて**』は、ツァリーツィン作戦の意義をのべ、かつ赤軍の成功にふれて、それが赤軍の自覚と規律にもとずいたことを強調している。

ついで一八年末の東部戦線でペルミの陥落を中心とする破局状態がおこったさい、スターリンはこの破局を調査し、事態を

たてなおした。**『ペルミ陥落の原因についての報告』**は軍事的、組織的、政治的側面からこの問題を深く分析し、その対策を論じたものである。ここでは予備軍、司令部と軍隊の連絡、軍の編成、軍隊の階級的構成、後方の安定性とその政治状態、党とソヴェトの軍事行動における役割などの重要な軍事問題が、鋭い階級的分析によって解決されている。

一九年五月のユデーニッチのペトログラード進撃、これと関連したクラースナヤ・ゴールカなどの守備隊の反乱にさいしては、スターリンは反乱を鎮圧した（一九年六月十六日の**『レーニンへの電報』**）。スターリンはまた、**『ペトログラード戦線について』**で、戦線の分析と敵の勢力の評価をあたえている。この労作でコルチャックの危険性を、コルチャックが退却のための空間、軍編成のための人的資材、食糧をもっていることにもとめている点は、どの戦線に軍事行動の主要な努力をはらうかという戦略的問題にたいする重要な解答をあたえている。

一九年秋の南部戦線におけるスターリンの軍事的指導もまた、新しい軍略家としての姿をしめしている。当時、戦況をたてなおすために、「打撃がもっとも早く最大の成果をあげる方向にむかって決定的な打撃を組織する」こと、主要打撃の方向を決定することが必要であった。なぜなら、「とくに国内戦では、決定的勝利は、敵に主要打撃をあたえる地区をうまくえらぶことにかかっているばあいがすくなくない」からである（三五五ページ）。一九年十月十五日の**『南部戦線からのレーニンへの手紙』**は、軍事的情勢の判断と戦場の階級的分析にもとずいて、この戦略計画を、主要打撃の方向を決定した模範である。さらに**『南部の戦況について』**のなかで、スターリンは、デニキンの敗北の原因を分析し、デニキン軍の階級的性格が後方の不安定と被圧迫民族の抵抗をよびおこしたことにふれている。この分析はわれわれが軍事問題の分析においてしたがうべき基準をあたえている。

最後に**『連合国の新たなロシア出兵』**、**『西南戦線の状況について』**、**『西南戦線について』**、**『ポーランド戦線について』**は、二〇年五月のポーランド軍の進撃、これに呼応するヴランゲリ軍の進撃のさいに書かれたものである。スターリンは最初の論文で、後方の問題、主要打撃の問題についてくわしくふれているが、その他の論文では敵の軍隊にたいする反攻の組織の問題について多くの示唆をあたえている。この問題もまた、新しい戦略的原則としてスターリンによってしあげられたものである。

以上の各戦線での活動のなかで、スターリンが、赤軍の政治的教育、その担い手であるコミッサールの活動の意義について、とくに重要な意義をあたえている点に、われわれは注意しなければならない。**『共和国戦斗予備軍の創設について』**の声明もまた、赤軍の建設について大きな意義をもっていたものである。予備軍の問題は、スターリンが戦略の決定のばあいにとくに重要視したものであって、われわれはこの声明でこの問題が明確に解決されていることを知る。しかし予備軍は、ちょくせつ軍事的な意味をもつ予備軍だけではない。軍事問題の分析のばあいにも、これにかぎることは誤りであろう。この意味で『帝国主義の予備軍』はこの側面にふれたものとして重要である。

以上でのべた戦略的問題は、ドイツ・ファシストにたいする祖国戦争の時期に、さらに大規模に、また新しい軍事技術上の進歩に照応して、研究され、発展させられたことを、われわれは、本全集の後の巻で知るであろう。

「スターリンは、赤軍が国内戦でなぜ勝利者となったかを説明しながら『党小史』〔第八章第五節〕のなかで、軍事上の戦略・戦術の諸原則の簡潔ですばらしい定式をあたえている。……プロレタリア革命とその軍隊の組織者であり、指導者であったスターリンだけが、戦争におけるわれわれの戦略・戦術上の勝利の原因をこんなにも明瞭にまとめることができたのである。スターリンの軍事的戦略・戦術は、マルクス、エンゲルス、レーニンの政治的・階級的な戦略・戦術に完全に根をおいている。」ヴォロシーロフのこの言葉ほど、スターリンの戦略・戦術をはっきり特徴ずけているものは他にないようにおもわれる。

日本国民の民族解放斗争が、軍事的な問題についても、明確な理解を要求しつつある現在、スターリンの戦略・戦術についての理論は、きわめて実践的な意味をもつと言わなければならないであろう。（H生）

スターリン全集刊行会訳

スターリン全集

第四巻

大月書店刊

万国の労働者団結せよ！

訳者はしがき

一　本巻は、ソ同盟共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会付属　マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編集の『イ・ヴェ・スターリン全集』第四巻の翻訳である。

一　スターリンの原注は＊をもってしめす。そのほかの注は、日本の読者の便宜を考え、原書の編集者注を参考にして、訳者がつけたものである。ごく簡単な注は角がっこ〔　〕にかこんで本文中にいれたが、他は事項注と人名注とにわけ、本文の終りに一括してつけた。人名は、本文のなかに出てくるかぎり、原則としてすべて注をつけることにした。事項注は本文に出る注番号の順に、人名注は「アイウエオ」順に、それぞれ排列した。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、隔字体の箇所には傍点をつけ、頭文字だけでくんである箇所は活字をいちだん大きくした。ただ見出しのところは、かならずしもこの方針によらなかった。

一　本文のうえの欄外にある算用数字は、翻訳底本とした原書のページ数をしめす。

一　翻訳の参照は、マルクス、エンゲルスについては、『マルクス＝エンゲルス選集』（大月書店版）、レーニンについては、『レーニン二巻選集』（社会書房版）によった。したがって角がっこ〔　〕中の巻数、分冊数、ページ数は、右の二つの選集の巻数、分冊数、ページ数である。

一　人名、地名は現地の発音に近く表記することを原則としたが、慣用のものについては、それをもちいたばあ

いが多い。

一　翻訳は、それぞれ担当の訳者がまず訳出し、これに校閲者団が、各国語訳および邦訳をも参照しつつ、厳密に校訂をくわえ、さらに術語、用字、文体などの整理、統一をおこなって、完成したものである。

序　文

イ・ヴェ・スターリン全集第四巻には、十月革命ののち、一九一七年十一月から一九二〇年十二月までに書かれた著作がおさめてある。

この時期の著作は、外国の武力干渉と国内戦の年々における社会主義国家機構の強化、ソヴェト権力の民族政策、赤軍の創立と強化、軍事的戦略・戦術の諸問題にあてられている。

国家建設とソヴェト権力の民族政策との諸問題は、第三回全ロシア・ソヴェト大会でのイ・ヴェ・スターリンの演說、『ロシア連邦共和国の組織』という会談、『ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の一般的規定』、『十月変革と民族問題』、『ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策』という諸論文、その他の労作のなかで、展開されている。

一連の論文（『ウクライナの結び目』、『ドン地方と北カフカーズについて』、『光は東方から』など）では、ソヴェト権力を樹立するために、外国の侵略者にたいしておこなったウクライナ、カフカーズ、バルト海沿岸地方の諸民族の斗争が明らかにされている。

国内戦の諸戦線における情勢の分析にあてられたものは、『一九一八年十二月のペルミ陷落の原因についての党中央委員会および国防会議の調査委員会の同志レーニンへの報告』、『すべての党組織に』というロシア共産党

3　序　文
(VI)

（ボ）中央委員会の手紙の草案、『南部の戦況について』、『連合国の新たなロシア出兵』という諸論文、ツァリーツィン、ペトログラード、南西部各戦戦の戦況概観、レーニンあての一連の手紙と電報である。

国内戦におけるソヴェト人民の斗争と勝利の総決算は、『共和国の政治情勢について』、『プロレタリア独裁の三年間』というイ・ヴェ・スターリンの報告のなかでなされている。

この巻には『ロシア共産党の組織者および指導者としてのレーニン』という論文と、ロシア共産党（ボ）モスクワ委員会のヴェ・イ・レーニン生誕五〇年記念集会でおこなった演説とが印刷されているが、これらは、偉大なレーニンの姿をえがいている。

この巻ではじめて発表されるのは、ヴェ・イ・レーニンにあてたイ・ヴェ・スターリンのツァリーツィンからの手紙（一九一八年七月）、西部戦線の状況にかんする手紙（一九一九年八月）、共和国の戦斗予備軍の創設について、党中央委員会におくった覚え書と声明（一九二〇年八月）、その他の文書である。

多くの電報、手紙、直通電話による会話の控え、命令その他の作戦文書ならびに赤軍の個々の軍隊・戦士および指揮官にあてられたあいさつは、この巻にはおさめられていない。

新暦へうつったとき（一九一八年二月十四日）までの日付は、ぜんぶ旧暦によってつけてある。

ソ同盟共産党（ボ）中央委員会付属
マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所

目　次

一九一七年十一月—一九二〇年

(1)

ヘルシンキにおけるフィンランド社会民主労仂党大会での演説

一九一七年十一月十四日

同志諸君！

私がここに派遣されたのは、資本主義制度の基礎を根本的にゆりうごかした、ロシアの労仂者革命を代表して諸君にあいさつするためである。私がここにやってきたのは、ロシアの労農政府を代表し、この革命の火のなかで生まれた人民委員会議を代表して、諸君の大会にあいさつするためである。

だが私がここにやってきたのは、ただあいさつするためだけではない。私がなによりも諸君におつたえしたいのは、ロシア革命が勝利し、ロシア革命の敵が四分五裂の状態にあり、死にかけた帝国主義戦争の空気のなかで革命の好機が日ましに大きくなっているという吉報である。

農村における権力が農民の手にうつったので、地主への隷従はうちくだかれた。軍隊内の権力が兵士の手に集中されたので、将軍の権力はうちくだかれた。工場と銀行にたいする労仂者管理が急速に樹立されたので、資本

(2)家はくつわをかまされた。全国が都市も農村も、後方も戦線も、権力をその手ににぎる労仂者、兵士および農民の革命的委員会でおおわれた。

敵は、われわれをケレンスキーや反革命的将軍でおどかしてきたが、ケレンスキーはおいはらわれ、将軍たちは、兵士や労仂者・農民の要求に、これまた共鳴していたカザック人によって包囲された。

敵は、われわれを飢えでおどかしてきた。そしてソヴェト権力は、食糧事情の崩壊という魔手にかかってほろびるだろうと予言するものがあった。だが、われわれが投機業者にくつわをかませ、農民にうったえただけで、もう数十万プードの穀物が、都市にながれこみはじめた。

敵は、われわれを国家機構の乱脈や官吏のサボタージュなどでおどかしてきた。新しい社会主義政府は、たんに旧ブルジョア国家機構を奪取して、それを自分のものにすることはできないということを、われわれ自身も知っていた。しかし、われわれが旧機構を刷新し、そこから反社会的分子を一掃することに着手しただけで、もうサボタージュはおとろえはじめた。

敵は、われわれを戦争という「おもいがけない贈り物」で、また、われわれが民主主義的講和を提議したことに関連して、帝国主義者の徒党が紛糾をおこすかもしれないという危惧でおどかしてきた。そしてまた、じっさい危険が、しかも、きわめて大きな危険があった。そして、それはエーゼル島が占領されたのち、ケレンスキー政府がペトログラードをあけわたしてモスクワへにげだす準備をととのえ、イギリス・ドイツの帝国主義者が**ロシア**を犠牲にして講和の密約をおこなっているときであった。**このような**講和を基礎とすれば、帝国主義者は、実際にロシア革命の事業を、おそらくは国際革命の事業を失敗させることができたであろう。だが十月革命がち

ようどいいときにやってきた。十月革命は平和の事業を自分自身の手ににぎり、国際帝国主義の手からもっとも危険な武器をたたきおとし、それによって革命をきわめて大きな危険からまもった。あらゆる国にもえあがりつつある革命運動に屈して講和をうけいれるか、それとも戦争をつずけることによってひきつずき斗争するか、帝国主義のおおかみにのこされた道は、二つに一つしかなかった。だが全世界が戦争の魔手にかかって息もたえだえになっているとき、「直面する」多季戦が各国の兵士のあいだに怒りのあらしをよびおこしているとき、けがらわしい秘密条約がすでに公表されているとき、戦争をつずけてその第四年目にはいることは、——戦争をこのような条件のもとでつずけることは、きまりきった失敗の運命を自分におわせることである。帝国主義のおおかみは、こんどは誤算をしたのだ。だからこそ帝国主義者の「おもいがけない贈り物」も、われわれをおどかしはしないのである。

(3) 最後に、敵はわれわれをロシアの崩壊で、ロシアの多くの独立した国家への細分でおどかしてきた。そして人民委員会議の宣言した民族自決権は、「破滅をまねく誤り」だとほのめかされた。だが私は断固たる態度で言わなければならない。もしわれわれがロシアの諸民族に自由な自決権をみとめないならば、われわれはもはや民主主義者ではないであろう。（社会主義についてうんぬんするまでもない！）もしフィンランドとロシアとの労仂者のあいだに、兄弟のような信頼を復活するために、あらゆる手段を講じないならば、われわれは社会主義を裏ぎるものであろうと、私は声明する。だが、だれにも明らかなように、フィン民族にたいして自由な自決権をきっぱりと承認せずには、このような信頼を復活させることは考えられない。しかも、このばあいに重要なことは、この権利を口頭で、——たとえそれが公式のものであっても——承認することだけではない。重要なことは、こ

の口頭の承認が人民委員会議によって確認され、それがためらうことなく実現されることである。なぜなら、言葉の時代はすぎさっているからである。なぜなら、「万国の労仂者団結せよ！」という古くからのスローガンが実現されるべき時代がきているからである。(4)

フィンランドの民族にたいしても、ロシアのその他のあらゆる民族にたいしても、自分の生活をいとなむ完全な自由！　フィンランドの民族とロシア民族との自由意志による誠実な同盟！　フィンランドにたいする上からのどんな後見も監督も廃止する！　これが人民委員会議の政策の指導原理である。

このような政策の結果として、はじめてロシアの諸民族の相互信頼がつくり出されるであろう。このような信頼にもとずいて、はじめてロシア諸民族の一つの軍隊への結集は実現されうる。このような結集の結果として、はじめて十月革命の成果はかためられ、国際社会主義革命の事業は前進させられるであろう。

だからこそ民族自決権の思想の実現にともなって、ロシアは不可避的に崩壊するという言葉をきくたびに、われわれは微笑を禁じえないのである。

敵は、以上の諸困難をもち出して、われわれをおどかしてきたし、また今も依然としておどしている。しかし、われわれは、革命の成長につれて、これを克服しつつある。

同志諸君！　われわれにたっした情報によれば、諸君の国も、十月革命の前夜にロシアが経験したのとほぼ同様な権力の危機を経験している。われわれにたっした情報によれば、敵は飢えやサボタージュその他のもので諸君をもおどかしている。ロシアにおける革命運動の実践からえられた経験にもとずいて、諸君に言明することをゆるしてもらいたいが、これらの危険は、たとえそれが現実的なものであっても、けっして克服できないもので

はないのである。これらの危険は、もし断固としてためらわない行動をとるならば、克服することができるもの(5)である。戦争と崩壊の空気のなかでは、西欧に革命運動がもえあがり、ロシアで労働者革命の勝利がますます増大しつつある空気のなかでは、諸君の襲撃にもちこたえうるような危険や困難はなにもない。このような空気のなかでもちこたえ勝利しうるものは、社会主義的権力だけである。このような空気のなかで役にたつのは、ただ一つの戦術、すなわちダントンの戦術だけである。つまり、大胆なれ、大胆なれ、もういちど大胆なれ！である。

そして、もし諸君がわれわれの援助を必要とされるようなことがあれば、われわれは兄弟のように手をさしのべて諸君を援助しよう。

諸君はそれを確信していてよい。

『プラウダ』第一九一号
一九一七年十一月十六日

(6)

戦線と後方のウクライナ人の同志への答

ウクライナ・ラーダ(一)との関係が尖鋭化して以来、私は、ラーダとの紛争の問題にかんしてウクライナ人の同志たちが出した決議や手紙をたくさんうけとっている。これらの決議や手紙にたいして個々にこたえることはできないし、また、よけいなことだと、私は考える。というのは、これらの決議や手紙は、ほとんどいつも重複したことを言っているからである。そこで私は、それらのなかから、もっともしばしば出っくわす問題をえらび出して、それにたいして明確に、疑問の余地をのこさないように、こたえることにした。それらの問題は周知のように、つぎのようである、——

(一) 紛争はどうしておこったか、
(二) 紛争はどういう点でおこったか、
(三) 紛争を平和的に解決するためには、どんな手段が必要か、
(四) 兄弟である諸民族の血がながされるのではあるまいか。

そして、これにつずいて血緣の二民族間の紛争は、兄弟の血をながさなくとも、平和的に解決されるであろうという共通の確信がのべられる。

(7)

まず第一に、ウクライナ人の同志が概念をいくらか混同していることを指摘しておく必要がある。彼らはときとすると、ラーダとの紛争を、ウクライナ民族とロシア民族とのあいだの紛争としてえがいている。しかし、これは正しくない。ウクライナ民族とロシア民族とのあいだには紛争はないし、また、ありえない。ウクライナ民族とロシア民族とは、ロシアの他の諸民族と同様に、労仂者と農民とからなり、兵士と水兵とからなっている。彼らはみないっしょになって、ツァーリズムとケレンスキー政権に反対して、地主と資本家に反対して、戦争と帝国主義に反対してたたかった。彼らはみないっしょになって、土地と平和のために、自由と社会主義のために血をながした。地主や資本家との斗争において、彼らはみな兄弟であり、同志であった。その切実な利益のための斗争では、彼らのあいだに紛争はなかったし、また、ありえなかった。もちろん勤労者の敵にとっては、ラーダとの紛争をロシア民族とウクライナ民族との紛争としてえがくことが有利であった。なぜなら、こういうふうにえがき出せば、血縁の諸民族の抑圧者にとってよろこばしいことには、これらの民族の労仂者や農民をおたがいにけしかけることが、もっとも容易になるからである。だが諸民族の抑圧者にとって有利なことは、諸民族には有害であるということを理解するのが、自覚した労仂者や農民にとって、むずかしいことであるだろうか。紛争はロシアの民族とウクライナの民族のあいだにおこったのではなく、人民委員会議とラーダの総書記局とのあいだにおこったのである。

では紛争は、どんな問題についておこったのか。

紛争は中央集権と自決の問題についておこったのであって、人民委員会議はウクライナ民族が権力をその手ににぎって、自由に自分の運命をさだめることをゆるしていない、と言うものがある。そうだろうか。いや、そう

ではない。人民委員会議はまさに、ウクライナの全権力がウクライナ民族のものに、すなわちウクライナの労仂者と兵士のもの、農民と水兵のものになるように努力している。ソヴェト権力、すなわち地主と資本家をぬきにした、労仂者と農民の、兵士と水兵の権力、これこそ人民委員会議がそれをめざしてたたかっている、あのもっとも人民的な権力である。総書記局はこのような権力をのぞまない。なぜなら、それは地主や資本家なしにやっていくことをのぞんでいないからである。すべての本質はここにあるのであって、中央集権にあるのではない。

人民委員会議は最初から自由な自決の見地にたっていたし、今もたちつづけている。人民委員会議は、ウクライナ民族が分離して独立国家になったとしても、それに反対するつもりはまったくない。それについては、すでにいくどか公式に声明してきた。しかし民族の自決がカレーヂンの独裁と混同されるばあいには、またラーダの総書記局が、カザックの将軍たちの反革命的暴挙を民族自決の現れとしてえがこうとするばあいには、人民委員会議は、総書記局がこの自決をもてあそび、この遊びにかくれてカレーヂンやロジャンコとの同盟をおおいかくしているのだということを、指摘しないわけにはいかない。われわれは民族の自決に同意する。だが、きのうまでフィンランドの息の根をとめるためにたたかっていたカレーヂンの独裁を自決の旗にかくれて密輸入することには反対する。

紛争はウクライナ共和国の問題にかんしておこったのであって、人民委員会議はウクライナ共和国をみとめないのだ、と言うものがある。そうだろうか。いや、そうではない。人民委員会議は「最後通牒」とペトログラード・ウクライナ本部にたいする「回答」[三]のなかで、ウクライナ共和国を正式に承認している。人民委員会議は、ロシアのどの民族州であろうと、その州の勤労住民が希望するばあいには、その共和国を承認する用意があ

(9)る。人民委員会議は、ロシアの諸州の勤労住民がそれをのぞむならば、わが国の政治生活の連邦制度を承認する用意がある。しかし人民の共和国がカレーヂンの軍事独裁と混同されるばあいには、ラーダの総書記局がカレーヂンやロジャンコのような君主主義者を、共和国の柱の役割をしているものとしてえがき出すばあいには、人民委員会議は、総書記局が共和国をもてあそんでいて、この遊びにかくれて、その成金＝君主主義者への完全な従属をおおいかくしているのだ、と言わざるをえない。われわれはウクライナ共和国を支持する。しかし、きのうまでは旧制度の復活と兵士の死刑とのためにたたかっていた人民の仇敵、カレーヂンやロジャンコのような君主主義者を、共和国の旗でおおいかくすことには反対する。

いや、中央集権と自決の問題は、ラーダとの紛争には関係がない。論争はこれらの問題をめぐっておこったのではない。中央集権と自決とは、ウクライナの大衆の目から紛争の真の原因をかくすことをあてにした戦略的トリックとして、総書記局によって、この問題にわざとまきぞえにされたものである。

紛争は、中央集権と自決の問題についておこったのではなく、つぎの三つの具体的な問題についておこったのである。

第一の問題。紛争は、総書記局員ペトリューラが戦線にあてた、戦線を完全に四分五裂にさせる恐れのある命令からはじまった。司令部や戦線の利害を考慮せずに、講和交渉や平和の事業一般について考慮せずに、ペトリューラは、その命令で、陸海軍のウクライナ部隊をぜんぶウクライナによびあつめはじめた。もしもウクライナ部隊がペトリューラの命令にしたがっていたら、戦線は一瞬で瓦解したであろう、ということは容易に想像できる(10)。北部のウクライナ部隊はえんえんとして南方にむかい、南部の非ウクライナ部隊は北方へむかい、他の民族

もまた「自宅に」移動することになり、鉄道は兵士と装備の輸送だけに没頭して、食糧品はこれをはこぶ手段がないために戦線にとどかなくなるであろう。そして戦線はあとかたもなくなるであろう。それによって休戦と講和の事業は根底からぐらついたであろう。平時にあっては、ウクライナ人兵士には、なによりも自分の故郷であるウクライナで、場所があたえられることは、いうまでもない。軍隊の「民族化」が承認できる、のぞましいものであることは、いうまでもない。これについては、人民委員会議はいくども正式に声明している。しかし講和の事業がまだ解決されておらず、戦線が民族的標識にしたがって構成されていないで、わが国の輸送力の弱さのために軍隊の「民族化」が兵士の退去と戦線の崩壊をもたらし、講和と停戦の破滅をもたらす恐れがあるような、戦争条件のもとでは、——こういう条件のもとでは、民族部隊の即時退去が問題とならないことは、いうまでもない。ペトリューラが、その無思慮な命令によって戦線を破壊し、講和の事業を失敗させたことを自覚しているかどうか、私は知らない。しかしウクライナの兵士と水兵とは即座にこのことを理解した。なぜなら、彼らはみな、わずかな例外をのぞけば、ペトリューラの命にしたがうことをこばみ、講和の締結まで自分の部署にとどまったからである。これによって、ウクライナ人兵士は平和の事業をすくい、ペトリューラの無思慮な命令の問題は、さしあたり、とくに鋭いものではなくなった。

第二の問題。ペトリューラの命令にはじまった紛争は、ウクライナの代表ソヴェトの武装解除をはじめたラーダの総書記局の政策によって尖鋭化された。総書記局の部隊が夜間にキーエフでソヴェト軍隊をおそい、これを武装解除した。同様の企てはオデッサやハリコフでもおこなわれたが、この企ては反抗にあって失敗した。だが、われわれに確実にわかっているところでは総書記局は、ソヴェト軍隊を武装解除する目的で、オデッサやハリコ

(11)

フにむかって軍隊を集結した。われわれに確実にわかっているところでは、それ以外の多数の小都市では、ソヴェト軍隊はすでに武装を解除されて、「家にかえされた。」こうしてラーダの総書記局は、ソヴェトを武装解除するというコルニーロフやカレーヂン、アレクセーエフやロジャンコの綱領を実現することを、その目的としている。だがソヴェトは革命のとりでであり、希望である。ソヴェトを武装解除するものは、革命を武装解除するものであり、平和と自由の事業を破滅させるものであり、労仂者と農民の事業を裏ぎるものである。ソヴェトはコルニーロフ運動のくびきからロシアをすくった。ソヴェトはロシア人民のために土地と停戦とをかちとった。ソヴェトはケレンスキー政権の不名誉からロシアをすくった。ソヴェトはロシア人民のために土地と停戦とをかちとった。ソヴェトが、そしてソヴェトだけが、完全に勝利するまで人民革命を遂行することができる。だからソヴェトにむかって手をふりあげるものは、地主と資本家をたすけて、全ロシアの労仂者・農民の首をしめるものであり、カレーヂンやアレクセーエフ一味をたすけて、兵士やカザック人にたいする、その「鉄の」権力を強化させるものである。

総書記局には社会主義者がいる、したがって総書記局が人民の事業を裏ぎることはありえないなどと、われわれに言わないがよい。ケレンスキーは社会主義者と自称していたが、それにもかかわらず彼は、革命的なペトログラードにたいして軍隊をうごかした。ゴッツは社会主義者と自称していたが、それにもかかわらず彼はペトログラード[12]の兵士と水兵にむかって士官学校生徒と士官を決起させた。サヴィンコフとアフクセンチエフは、社会主義者と自称していたが、それにもかかわらず戦線の兵士に死刑をくわえた。社会主義者を判断するには、彼らの言葉によらずに、その行爲によらねばならない。総書記局はウクライナのソヴェトを解体して武装解除し、カレーヂンがドン河と炭田に残忍な制度を確立するのを容易にした、――このことは、どんな社会主義の旗をつか

ってもおおいかくすことのできない事実である。だからこそ人民委員会議の政策が反革命の政策であることを確認したのである。だからこそ人民委員会議は、総書記局の政策が反革命の政策でてたたかったウクライナの労仂者や兵士たちが、自分たちの総書記局に秩序をたもてと呼びかけるか、あるいは諸民族間の平和の利益になるように、それを改選することを期待している。

ロシアとウクライナとのあいだの軍隊の「交換」、境界設定等についてうんぬんするものがある。人民委員会議は境界設定の必要を十分に意識している。しかし境界設定は友好的に、おだやかに協定によってやるべきもので、強制的であってはならず、いま総書記局が、食糧をうばい、貨物をとりあげ、軍隊を飢えと寒さにさらしているようなやりかたで、「とれるものはなんでもとれ」、「できるばあいは、だれでも武装解除しろ」というような「原則」によってはならないのである。

第三の問題。紛争は、カレーヂンにむけられたソヴェトの革命的軍隊の通行を、総書記局がにべもなく拒絶したとき、最高潮にたっした。総書記局の部隊は、革命軍をのせた列車を停止させ、行先をといただし、発砲しておどかし、われわれは、自分の領土を「外国」軍隊に通過させることはできないと言明した。ウクライナをおしつぶそうとしていた刑吏の将軍たちに抗して、きのうまでウクライナ人といっしょにたたかってきたロシアの兵士、この兵士が今は「外国人」なのだ！　しかも、これは当の総書記局が、カレーヂンのカザック部隊と全国のすみずみからカレーヂンのところへはせ参じつつある反革命的将校たちに、自分の領土をとおって自由にロストフへ通過させているときのことなのである！

ロストフの赤衛軍をコルニーロフやカレーヂンが槍にかけているのに、ラーダの総書記局は、ロストフのわれ

(13)

われの同志をたすけることをさまたげているのだ！　カレーヂン派の将校たちが鉱山のわが同志たちを射殺しているのに、総書記局はわれわれが鉱夫の同志に援助の手をさしのべることをさまたげているのだ！　きのうまではうちくだかれていたカレーヂンが、きょうはドネツ炭田を占領し、ツァリーツィンをおびやかしながら、さらに北進しつつあることは、おどろくべきことだろうか。**総書記局がカレーヂンおよびロジャンコと同盟しているいる**ことは明らかではあるまいか。**総書記局が人民委員会議との同盟よりも、コルニーロフ一味との同盟をこのんでいる**ことは明らかではあるまいか。

人民委員会議はラーダの総書記局と協定を結ばねばならない、と言うものがある。だが現在の書記局との協定が、カレーヂンやロジャンコとの協定であることは、理解しにくいことであろうか。人民委員会議が自殺行為をすることができないことは、理解しにくいことであろうか。われわれが地主と資本家に抗して革命をはじめたのは、刑吏のカレーヂン派との同盟をもって、この革命をおわらせるためではなかった。労伪者と兵士が血をながしたのは、アレクセーエフやロジャンコの言うままになるためではなかったのである。

(14)

二つに一つである、——

あるいは、ラーダおよびカレーヂンと手をきり、ソヴェトに手をさしのべ、ドン地方における反革命の根城にむかう革命軍に道をひらく**か**、——そのばあいには、ウクライナとロシアの労伪者と兵士は、交歓の新たな爆発によって、その革命的同盟を確認するであろう。

あるいは、ラーダはカレーヂンと手をきることをのぞまず、革命的軍隊に道をひらかない**か**、——そのばあいには、ラーダの総書記局は、人民の敵がめざしたが、むだであったこと、すなわち兄弟である諸民族の流血をめ

ざすことになる。

危険な紛争を平和的に解決するために、自分の総書記局に秩序をたもてと呼びかけるか、あるいは、それを改選するかは、ウクライナの労仂者と兵士の自覚と革命性とにかかっている。

総書記局がいまどちらの同盟に味方するか、革命に対抗してカレーヂンやロジャンコとの同盟にか、カデットと将軍の反革命に対抗して人民委員会議との同盟にか、を明確に言明させることは、ウクライナの労仂者と兵士の確固として断固たる態度にかかっている。

紛争の平和的解決の事業はウクライナ人民の手ににぎられているのである。

人民委員　イ・スターリン

一九一七年十二月十二日

『プラウダ』第二一三号
一九一七年十二月十二日

ウクライナ・ラーダについて

全ロシア中央執行委員会の会議での演説
一九一七年十二月十四日

自決の原則を、つねに断固として固持している人民委員会議が、これまた自決の原則から出発するラーダとのあいだに紛争をおこしたということは、奇妙におもわれるかもしれない。この紛争の起りを理解するためには、ラーダの政治的性格の問題を提起しなければならない。

ラーダは、一方ではブルジョアジー、他方ではプロレタリアートと農民、このあいだで権力を分割するという原則から出発する。ところがソヴェトはこのような分割を拒否し、全権力をブルジョアを除外した人民にあたえる。だからこそラーダは、「全権力をソヴェトへ」(すなわち人民へ)というスローガンにたいして、「全権力を都市と農村の自治機関へ」(すなわち人民とブルジョアジーへ)という自分のスローガンを対置するのである。

紛争は自決の問題を基礎として生まれた、と言うものがいる。しかし、それは誤りである。ラーダはロシアに連邦制を樹立することを提案する。ところが人民委員会議はラーダよりもさきにすすんで、分離権までをみとめ

(16)ている。したがって人民委員会議とラーダとの意見の相違は、この問題にあるわけではない。中央集権が意見の相違の出発点であるというラーダの主張もまた、ぜんぜんまちがっている。人民委員会議の型にならって樹立された地方的中央部(シベリア、白ロシア、トゥルケスタン)が人民委員会議に指令をもとめてきている。人民委員会議はこうこたえた、諸君自身が、——現地の権力が、自分で指令をつくるべきであると。したがって意見の相違はこの点にはない。人民委員会議とラーダとの現実の意見の相違は、つぎの三つの点について生じたのである。

第一の問題、ウクライナ部隊の南部戦線への集結。うたがいもなく、その民族の軍隊がもっともよくその領域を防衛することができる。しかし、げんざいわが戦線は、民族的標識にしたがって構成されてはいない。輸送が解体しているのに民族別に戦線を再編成することは、戦線の完全な崩壊にみちびくであろう。平和の事業は、これによってほりくずされたであろう。ウクライナの戦士たちは、総書記局よりも理性的で誠実であることをしめした。というのはウクライナ部隊の大部分は、ラーダの命令にしたがおうとしなかったからである。

第二の問題、ウクライナにおけるソヴェト軍隊の武装解除について。ウクライナ・ラーダは、ウクライナの地主と資本家の利益をまもって、ソヴェト軍隊を武装解除することによって革命に打撃をあたえている。この点にかんするラーダの行動は、コルニーロフ—カレーヂンの行動と本質的にはなんらことなるところはない。いうまでもなく人民委員会議は、ラーダのこのような反革命的政策にたいして全力をあげてたたかうであろう。

(17)最後に、第三の問題、ロシアの全反動勢力がそれを中心としてあつまっているカレーヂンを攻撃するソヴェト軍隊を通過させないことについて。ソヴェト軍隊を通過させないことは、「自決しつつある」カレーヂンにたいする「中立的態度」によるものだとラーダによって説明されている。しかしラーダはここで、勤労カザック人の

自決をカレーヂンの独裁にすりかえている。ソヴェト軍隊の通過をさまたげることによって、ラーダはカレーヂンの北上をたすけている。同時にカレーヂン配下のカザック部隊は、ラーダによって自由にドンへの通過をゆるされているのである。われわれの同志がロストフやドネッツ炭田で射殺されているときに、ラーダはわれわれがこれに援軍をおくることをさまたげている。ラーダのこの裏切行為ががまんできないものであることは、いうまでもない。

人民委員会議はカレーヂンとの斗争をやめることはできない。カレーヂンの反革命の根城は破壊しなければならない。これは、さけられないことである。もしもラーダが、カレーヂンにたいする、われわれの前進をさまたげ、身をもって彼をかばうならば、カレーヂンにむけられた打撃は、ラーダのうえにおちるであろう。人民委員会議はラーダとの決戦をためらわないであろう。なぜならラーダがカレーヂンと秘密同盟を結んでいることは、人民委員会議にはよくわかっているからである。人民委員会議は暗号電報をおさえたが、これによって明らかであるように、ラーダは講和を春までひきのばすことを目的として、フランス代表団と直接に結びつき、フランス代表団を通じてカレーヂンと結びついている。この同盟は、講和と革命にたいしてむけられている。この同盟は破壊しなければならないし、また破壊されるであろう。

(18)

われわれは、ラーダにたいして断固たる政策をとっているといって、非難されている。しかし、この断固たる政策はラーダのブルジョア的本質をあばいて、ウクライナの労仂者・農民の目をひらいた。このことは、ソヴェト権力を承認してブルジョア的ラーダに反対する、ウクライナの新しい革命権力が、ウクライナに組織されたという情報からでも、明らかなところである。（拍手）(四)

『イズヴェスチヤ』第二五四号
一九一七年十二月十七日

ウクライナ・ラーダとはなにか

読者はつぎにソヴェト権力がさしおさえた一通の暗号電報を見られるであろう。この電報は、ラーダの真の本質を実証し、「わが同盟国」の軍事代表団の講和問題にかんする真の意図を実証している。電報から明らかなように、フランス代表団とラーダとのあいだには、ある同盟がすでに結ばれていて、しかも「フランス代表団員はラーダと直接に連絡しながら活動している。」さらに電報から明らかなように、この同盟の目的は「ロシア戦線の外見を二月か三月まで維持し、停戦の最後的締結を春まで**ひきのばす**」ことにある。最後に、電報から明らかなように、フランス代表団は「ルーマニア戦線と南西部戦線（計画によれば、この両戦線はラーダによって占領されるはずであった――**イ・スターリン**）に石炭と食糧とを供給する」ために「軍部筋」（すなわちカレーヂン「政府」）「と協定」を結んだ。

要するに講和の破壊を目的とし、それを「春まで」「ひきのばす」ことを目的とした同盟が、ラーダ、カレーヂンおよびフランス軍事代表団のあいだにあるらしい。しかしフランス軍事代表団は、独立して行動しているのではなく、「フランス政府からの至急訓令」によって行動しているのである。

われわれはここでは、「わが同盟国」の軍事代表団の態度にふれようとはおもわない。彼らの役割は十分に明

らかにされている。八月には彼らはコルニーロフをたすけ、十一月にはラーダとカレーヂンをたすけ、十二月には反乱分子に装甲自動車を供給している。こうしたことは、みな「戦争を最後まで遂行する」ためである。われわれは、「同盟国」の強行的な考えが、民主主義的講和をめざすロシア人民の斗争によってうちやぶられるであろうということをうたがわない。代表団は中央アフリカにいるかのようにふるまっている。しかし、やがて「同盟国」は、ロシアは中央アフリカではないことを確信するようになるであろう……。ここで、われわれに興味があるのは、主としてラーダがひきうけた、みにくい役割である。

今ではわれわれは、ラーダがウクライナ部隊をルーマニア＝南西部戦線に集結しているのはなぜか、を知っている。つまり軍隊の「民族化」という旗によって、ラーダは、停戦を春までひきのばすことを目的としたフランス代表団との条約を、おおいかくそうとしているのである。

今ではわれわれは、ラーダがカレーヂンを攻撃するソヴェト軍隊を通過させないのはなぜか、を知っている。つまりカレーヂンにたいする「中立」という旗によって、ラーダはソヴェトに対抗するカレーヂンとの同盟を、おおいかくそうとしているのである。

今ではわれわれは、ラーダがウクライナの内部生活へ人民委員会議が「干渉する」のに抗議するのはなぜか、を知っている。不干渉という言葉によって、ラーダは革命の成果を一掃するためにフランス政府が、ウクライナと全ロシアの生活へ実際に干渉しているのを、おおいかくそうとしているのである。

ウクライナの同志は、たびたび私に、ラーダとはなにかという質問をしている。

私はこたえよう。

ラーダ、より正確にはその総書記局は、社会主義の裏切者の政府であり、大衆をあざむくために社会主義者と自称しているのである。社会主義者と自称したケレンスキーやサヴィンコフの政府とちょうどおなじように。ラーダ、より正確にはその総書記局は、ブルジョア政府であり、カレーヂンと同盟してソヴェトとたたかっているのである。かつてケレンスキー政府は、コルニーロフと同盟して、ロシアのソヴェトを武装解除した。いまラーダの政府は、カレーヂンと同盟して、ウクライナのソヴェトを武装解除している。

ラーダ、より正確にはその総書記局は、ブルジョア政府であり、イギリス・フランス資本家と同盟して、平和に反対してたたかっているのである。かつてケレンスキー政府は、講和をひきのばして数百万の兵士に肉弾の役割をおわせた。いまラーダの政府は、「春まで停戦をひきのばし」て、講和を破壊しようとしている。

ケレンスキー政府は、そのために、ロシアの労仂者と兵士の共同の努力によってくつがえされた。

ラーダの政府もまた、ウクライナの労仂者と兵士の努力によってくつがえされることを、われわれはうたがわない。

新しいラーダだけが、ウクライナの労仂者・兵士・農民ソヴェトのラーダだけが、カレーヂン一味とコルニーロフ一味にたいし、地主と資本家にたいして、ウクライナの人民の利益をまもることができるのである。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第二一五号
一九一七年十二月十五日

(22)

フィンランドの独立について

全ロシア中央執行委員会の会議での報告
一九一七年十二月二十二日
（新聞に出た報告）

さいきんフィンランドの代表者が、フィンランドの独立の即時承認と、ロシアからフィンランドが分離した事実の確認とを、われわれに要求してきた。人民委員会議は、これにこたえて要求に応ずることにし、フィンランドの完全な独立にかんする布告を発布することを決定した。この布告はすでに新聞紙上に発表された。

人民委員会議の決定の本文は、つぎのとおりである、――

「フィンランド共和国の独立承認にかんするフィンランド政府の要請にこたえて、人民委員会議は、民族自決権の原則に完全にしたがって、つぎのように決定する。すなわち、（イ）フィンランド共和国の国家的独立を承認し、（ロ）フィンランドのロシアからの分離によって生じる実際的諸措置の研究のための特別の委員会（両国政府代表からなる）を、フィンランド政府の同意をえて組織することを、中央執行委員会に提案すること。」

人民委員会議がこれ以外の行動をとることができなかったのは、当然である、なぜなら、ある民族が自分の代表者を通じてその独立の承認を要求するばあいには、プロレタリア国家は民族に自決権をあたえるという原則にもとずいて、これに応じなければならないからである。

ブルジョア新聞は、われわれが国を完全な崩壊にみちびき、フィンランドをもふくめた一連の国々をうしなった、と言っている。しかし同志諸君、われわれがフィンランドをうしなうはずはない。なぜなら実際にはフィンランドがわれわれの所有物であったことは、かつてないからである。もしわれわれが暴力的な方法でフィンランドを保持するとしても、それは、けっしてわれわれがフィンランドを獲得したということにはならないであろう。

ヴィルヘルムが暴力と暴政によって一連の国家をいかに「獲得」しているか、そして、そのおかげで、人民とその抑圧者とのあいだの相互関係の、どんな地盤がつくられているかを、われわれはよく知っている。

社会民主主義の原則、そのスローガンと意向とは、諸民族間の相互信頼という、まちにまった空気をつくりだすことにある。そして、これを基礎としてのみ、「万国の労伪者団結せよ！」というスローガンは実現される。こうしたことはみな、古く周知のことである。

フィンランドが独立を獲得した有様を、もっと注意ぶかく熟視するならば、われわれはつぎのことを発見するであろう。すなわち実際には人民委員会議が自由をあたえたのは、フィンランドの人民にでも、プロレタリアートの代表者にでもなくて、その意志に反してフィンランドのブルジョアジーにたいしてあたえたのであった。そして、フィンランドのブルジョアジーは、奇妙な成り行きの結果、権力をにぎり、ロシアの社会主義者の手から

独立を獲得したのであった。フィンランドの労働者と社会民主主義者は、ロシア社会主義者の手から自由を直接にうけとるのではなく、フィンランド・ブルジョアジーの援助をうけて、これをうけとらねばならない状態におちいった。ここにフィンランド・プロレタリアートの悲劇があると考えるわれわれは、つぎのことを指摘せずにはおれない。すなわちフィンランドの社会民主主義者が、みずから権力をにぎって、フィンランド・ブルジョアジーの手から自分の独立をうばいとるために、断固たる措置をとらなかったのは、ただ不決断と理解できない臆病さのためであった、と。(24)

人民委員会議をののしったり、これに批判的態度をとることはできる。しかし人民委員会議がその約束をまもらないと主張できる人はあるまい。なぜなら人民委員会議にその約束をやぶらせるような力は、この世にはなにもないからである。フィンランドに独立をあたえよというフィンランド・ブルジョアジーの要求にたいして、まったく公平無私の態度をとり、フィンランド独立の布告発布に即座に着手するという事実によって、われわれはこのことを証明した。

フィンランドの独立をして、フィンランド労働者・農民の解放の事業を容易ならしめよ。そして、われわれ諸民族の友好のための強固な地盤を建設せしめよ。

『プラウダ』第二二二号
一九一七年十二月二十二日

(25)

「トルコ領アルメニア」について

いわゆる「トルコ領アルメニア」は、「戦争の権利によって」ロシアに占領された唯一の国であるとおもわれる。これは、多年のあいだ西欧の貪欲な外交的野望と、東欧の残忍な行政演習との対象となってきた（そして今もなっている）あの「天国」である。一方ではポグロムやアルメニア人の虐殺、他方では新しい虐殺の援護物としての、あらゆる国々の外交官の偽善的な「仲介」、そして、その結果として血まみれになり、あざむかれ、隷属させられたアルメニア、――これらの「文明」諸国の外交的「手腕」の生んだ「ありふれた」光景を知らないものがあるだろうか。

祖国の英雄的な擁護者ではあるが、遠眼の政治家ではなく、帝国主義的外交の略奪者のうそに再三ひっかかったアルメニアのむすこたちは、外交的術策の古い道はアルメニア解放の道ではないことを、今では知らざるをえない。被圧迫民族の解放の道は、十月にロシアではじまった労仂者革命を通じていることが、明らかになりつつある。いまや、だれにとっても明らかなように、ロシアの諸民族の運命、とくにアルメニア民族の運命は、十月

(26)

革命の運命と堅く結びついている。十月革命は民族的圧迫の鎖をたちきった。十月革命は諸民族の手足をしばりつけていたツァーリの秘密条約を破棄した。十月革命が、そして十月革命だけが、ロシア諸民族の解放の事業を

最後まで遂行することができるであろう。

このような考えから出発して、人民委員会議は「トルコ領アルメニア」の自由な自決にかんする特別の布告を発布する決定をおこなった。このことは、自分の帝国主義的本性に忠実なドイツとトルコの政府が、占領地域を暴力的にその権力のもとに保持したいという希望をあらわにしている現在、とくに必要である。ロシア革命とその政府には、侵略の渇望は縁もゆかりもないことを、ロシアの諸民族に知らせよ。民族的圧迫という帝国主義的政策にたいして、人民委員会議は、被圧迫民族の完全な解放という政策を対置するものであることを、すべてのものに知らせよ。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第二二七号
一九一七年十二月三十一日

(27)

ドイツとの講和問題にかんするロシア社会民主労仂党（ボ）中央委員会の会議での演説

一九一八年一月十一日
（短い議事録的控え）

同志スターリンの考え。革命戦のスローガンを採用することは、帝国主義をたすけることになる。トロツキーの立場は、立場とよぶことができない。西欧には革命運動はない、革命運動の事実はなく、あるのは、たんなる潜勢力にすぎない。だが、われわれは実践においては、潜勢力だけにたよることはできない。もしもドイツ人が攻撃をはじめるならば、それはわが国の反革命をつよめるであろう。ドイツには自分のコルニーロフ軍たる「近衛兵」があるから、ドイツは攻勢に出ることができるであろう。十月にわれわれが帝国主義反対の聖戦をとなえたのは、「平和」という一言が西欧に革命をぼっ発させると、報道されていたからである。しかし、それは実証されなかった。われわれによる社会主義改革の実行は、西欧に不安をまきおこすであろうが、それを実行するには時間が必要である。トロツキーの政策を採用すれば、われわれは、西欧の革命運動のために最悪の条件をつく

ることになる。したがって同志スターリンは、ドイツ軍との講和締結にかんする同志レーニンの提案を採択するよう提案する。

ロシア社会民主労働党中央委員会議事録　一九一七年八月—一九一八年二月。モスクワ—レニングラード、一九二九年にはじめて印刷

(28)

キーエフのブルジョア的ラーダについて

ブルジョア新聞は「ラーダと人民委員会議とのあいだに交渉がひらかれた」かのようなうわさを一生懸命ひろめている。反革命家に近い連中は、いろいろとこのうわさをひろげ、その「特別の」意義を強調している。ついに多数の同志がキーエフ・ラーダとの交渉という作り話を信じ、しかも、そのうちの多くが、私にそれがたしかかどうかという質問状をよこしたほどである。

私はだれにもきこえるように声明する、——

(一) 人民委員会議はキーエフ・ラーダとどんな交渉もおこなっていないし、また、おこなうつもりもない。

(二) カレージンと完全に結びつき、ロシアの諸民族にかくれて、オーストリア＝ドイツの帝国主義者と裏切的な交渉をおこなっているキーエフ・ラーダ、——こういうラーダとは、ウクライナ・ソヴェトが完全に勝利するまで、容赦なくたたかうよりほかに道がない、と人民委員会議は考える。

(29)

(三) ウクライナの平和と平穏とは、ブルジョア的なキーエフ・ラーダの完全な解消の結果としてしか、すなわち新しい社会主義的なソヴェト・ラーダ——その中核はすでにハリコフで組織された——をもって、これととりかえる結果としてしか、おとずれることができない。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第九号

一九一八年一月十三日

(30)

第三回全ロシア労・兵・農代表ソヴェト大会での演説(五)

一九一八年一月十―十八日

一　民族問題についての報告

一月十五日

(新聞に出た報告)

報告者〔スターリン〕はつぎのようにのべた。ロシアをとくにわきたたせている問題の一つは、民族問題である。この問題の重大性は、大ロシア人がロシア人口の絶対多数をしめていないで、ロシアの辺境地方にすむ「弱小」諸民族の環で包囲されているという事実によって、ますます深刻なものになっている。

ツァーリ政府は民族問題の重大性を考えて、民族にかんすることを乱暴にあつかった。政府は辺境諸民族の強

制的ロシア化政策をとり、政府の行動方法は母語の禁止、ポグロム、その他の圧迫手段であった。

ケレンスキーの連立政府は、この民族的な首かせを破壊したが、その階級的性格からして、民族問題を完全に解決することはできなかった。革命の第一期の政府は、民族の完全な解放の道にたたなかったばかりでなく、ウクライナやフィンランドについて見られたように、多くのばあいに民族運動を弾圧するための圧迫措置をとることをためらわなかった。[31]

ソヴェト権力だけが、ロシアからの完全な分離にいたるすべての民族の自決権を公然と宣言した。新しい権力は、この点では若干の民族内の民族的グループよりも、急進的ですらあった。

しかも、それにもかかわらず一連の紛争が、人民委員会議と辺境地方とのあいだにおこった。けれども、これらの紛争は、民族的な性格をもった問題をめぐっておこったのではなく、ほかならぬ権力の問題をめぐっておこったのである。発言者〔スターリン〕は、辺境地方のブルジョア民族主義的な、にわかずくりの政府(有産階級の上層部の代表者からなっていた)が、自分の民族問題を解決すると見せかけて、ソヴェト組織やその他の革命的組織と、はっきりした斗争をおこなおうと、いかにやっきになったかという非常に多くの実例をあげた。辺境地方と中央ソヴェト権力とのあいだにおこったあらゆる紛争の根源は、権力の問題にある。したがって、あれこれの地方のブルジョア層が、これらの紛争に民族的な色合いをつけようとやっきになったとすれば、それは、そうするのが彼らに有利だったからであり、その地方の勤労大衆の権力との斗争を、民族的なよそおいのうしろにかくすことが、つごうがよかったからにほかならない。

発言者はラーダの例をくわしく説明し、自決の原則がウクライナの排外主義的なブルジョア層によって、その

(32)
階級的、帝国主義的目的のために利用されていたありさまを、納得のいくように証明した。

こうしたことは、みな自決の原則がその民族のブルジョアジーの自決権としてではなく、その勤労大衆の自決権として解釈されねばならないことをしめしている。自決の原則は、社会主義のための斗争の手段でなければならないし、社会主義の原則に従属しなければならない。

ロシア共和国の連邦組織の問題については、発言者は、ソヴェト連邦の最高機関はソヴェト大会でなければならないとのべた。大会から大会にいたる期間には、大会の機能は中央執行委員会にうつる。

二　ロシア共和国の連邦的諸機関についての決議草案

(一) ロシア社会主義ソヴェト共和国は、ロシア諸民族のソヴェト共和国連邦として、これら諸民族の自由意志による同盟にもとずいて創設される。

(二) 連邦における権力の最高機関は、全ロシア労・兵・農代表ソヴェト大会であって、すくなくとも三カ月ごとに召集される。

(三) 全ロシア労・兵・農代表ソヴェト大会は、全ロシア中央執行委員会を選出する。大会から大会にいたる期間には、最高機関は全ロシア中央執行委員会である。

(四) 連邦政府、すなわち人民委員会議は、全ロシア・ソヴェト大会、または全ロシア中央執行委員会によって、全体的にも、部分的にも選出および交迭される。

(33)

（五）特有の生活様式と民族的構成とによって区別される、個々の地方のソヴェト共和国が連邦政府に参加する方法、ならびにロシア共和国の連邦的、および地方的諸機関の活動範囲の区画は、地方ソヴェト共和国が設立されれば、ただちに全ロシア中央執行委員会および、これら共和国の中央執行委員会によって規定される。

一月十五日

（新聞に出た報告）

三　民族問題にかんする報告の結語

同志**スターリン**は、ロシア共和国の連邦的諸機関にかんする決議草案についての結語をのべている。

彼はこうのべる、提案された決議は法律ではなく、ただロシア連邦共和国の将来の憲法の一般的原則をたてるものにすぎない。一方では民族主義的反革命、他方ではソヴェト権力、この二つの政治的潮流のあいだの斗争は、今のところまだおわってはいない。それがおわるまでは、ソヴェト共和国の国家機構のあらゆる細部をはっきり正確に規定した、確定的な憲法は、問題になりえない。

決議はただ憲法の一般的原則をふくむにすぎない、これらの一般的原則は、これをくわしく研究するために、中央執行委員会にうつされ、つぎのソヴェト大会に提出されて最後的に確認されるであろう。

ブルジョア的ラーダと斗争するさいに、ソヴェト権力がしめした異常なきびしさについての非難にこたえて同

(34)

志**スターリン**は、民族的＝民主主義的形態をよそおったブルジョア反革命との斗争だったからであるとのべた。

同志**スターリン**はこう強調した、ラーダの先頭にたっている、あれこれの政治活動家（ヴィンニチェンコのような）のもっている民主主義的な旗は、まだ真に民主主義的な政策を保障するものでは、けっしてない。われわれは、ラーダをその言葉によって判断せずに、その行為によって判断する。

ラーダの「社会主義者」の社会主義は、どこにあらわれたか。

宣言の言葉のうえでは、彼らはすべての土地を人民に移譲することを支持すると声明したが、実際には、公布された解釈によって彼らはこの移譲を制限し、人民に移譲されない一部の地主所有地は神聖であると声明した。

言葉のうえでは彼らはソヴェトへの忠誠を公言しているが、実際には、彼らはソヴェトにたいして死にものぐるいの斗争をおこない、ソヴェト軍隊を武装解除し、ソヴェトの仂き手を逮捕し、ソヴェトがこんご存在するあらゆる可能性をたちきった。

言葉のうえでは彼らは革命への献身をうんぬんするが、実際には革命の最悪の敵であることをばくろした。彼らはドンとの斗争には中立をうんぬんしていたが、実際にはカレーヂン将軍に直接的に、積極的に共同し、ソヴェト軍隊を射殺することをたすけ、食糧を北部へおくらせなかった。

こうしたことは、みな周知の事実であり、ラーダが本質的にブルジョア的、反革命的なものであるという事情には、まったく疑いの余地がない。

ではマルトフがここで言っているのは、ソヴェトのどんな反民主主義斗争のことなのか。

右派の発言者たち、とくにマルトフは、おそらくラーダの政策のなかに自分の政策の反映を見るので、ラーダをほめ、これを弁護するのであろう。協調主義者諸君のお気にめす、あらゆる階級の連合を代表しているラーダ

のなかに、彼らは憲法制定議会の原型を見ている。おそらくラーダが右派の代表者の演説をきけば、やはり彼らを熱心にほめそやすであろう。牛は牛ずれとはよく言ったものである。（笑い声、拍手）

さらに発言者は、カフカーズの自決について言及し、またカフカズ委員部が(七)、カフカーズのソヴェト組織と戦線のソヴェトとにたいして明らかに侵略的な政策をとり、同時にカフカーズの反革命運動の英雄ブルジェヴァーリスキー将軍と連絡をとっていることを、正確な資料にもとづいて証明した。

以上のすべてのことから出発すれば、いわゆる国内戦をつずけなければならない。それは本質的にいって、辺境地方に連立的・協調主義的権力を樹立しようとする潮流と、社会主義的権力の樹立のために、勤労大衆のソヴェト、すなわち労仂者・兵士および農民代表ソヴェトの権力のためにたたかっている潮流と、の斗争である。

一方では人民委員会議と、他方では辺境地方のブルジョア民族主義的連立政府と、のあいだにおこっている鋭い紛争の内容とその歴史的意義は、ここにある。民族の独立をまもるためにたたかっているのだという、これらの政府の口実は、勤労人民にたいしておこなわれている攻撃の、偽善的な援護物にほかならない。（あらしのような拍手）

(36)

ソヴェト権力がロシアの辺境地方ではプロレタリア権力を要求し、クールランド、リトワニア、ポーランド等等のためには、トロツキーがブレストで主張した住民投票で満足しているのは、矛盾しているではないかという、ソヴェト権力にむけられたマルトフの非難にこたえて、同志**スターリン**は、西部地方にソヴェトがまだなく、社会主義革命がまだないときに、ソヴェト権力を要求することは完全なナンセンスであろうと指摘した。

発言者はこう言う、――もしマルトフの処方箋にしたがって行動するとすれば、ソヴェトがないばかりでな

く、ソヴェトへの道がひらかれてもいないところに、ソヴェトを考え出さなければならないであろう。このような条件のもとで、ソヴェトを通じての自決をしゃべりたてることは、ばかをとおりこしている。

終りにあたって報告者は、まいちど社会民主主義の左右両翼の基本的な意見の相違に言及した。左翼は下層の独裁、少数者にたいする多数者の支配のために努力しているのに、右翼はブルジョア議会主義のすでにとおりすぎた段階へのろのろと後退することをすすめる。フランスやアメリカにおける議会主義の経験が明らかにしめしたように、普通選挙権の結果として生まれた、外見は民主主義的な権力は、実際は完全な民主主義からまったくかけはなれた金融資本との運合である。フランス、このブルジョア民主主義の国では、全人民が代議士を選挙するが、大臣を任命するのはリヨン銀行である。アメリカには普通選挙があるが、権力についているのは百万長者ロックフェラーの手代である。

――これは事実ではないだろうか、――と発言者は質問する。そうだ、われわれはブルジョア議会主義をほうむった。だからマルトフ派が、われわれを革命のマルトフ段階にひきもどそうとしてもむだである。（笑い声、拍手）労働者の代表たるわれわれに必要なことは、人民がたんに投票する人民であるばかりでなく、支配する人民となることである。権力者とは、選挙し投票するものではなくて、支配するものである。（あらしのような拍手）

(37)

『プラウダ』第一二、一三号
一九一八年一月十七、十八日

（38）

ロシア社会民主労仂党（ボ）ペテルブルグ委員会への筆記電話

ペテルブルグ委員会執行委員会とボリシェヴィキ党のすべての地区委員会に勧告する。ただちに全労仂者を立ちあがらせ、今夜採択されるはずのペテルブルグ・ソヴェトの決定にしたがって数万の労仂者を組織し、全ブルジョアジーを労仂者の監督のもとに、ひとりのこらずペテルブルグ付近のざんごう掘りにかり出せ。革命が危機にひんしている今、革命をすくう道はこれ以外にはない。ざんごうの線は軍人が指示する。武器を用意せよ。だが、もっともたいせつなことは――ひとりのこらず組織され、動員されることである。

一九一八年二月二十一日

レーニン
スターリン

はじめて印刷されたもの

(39)

ウクライナ・ソヴェト共和国人民書記局（八）への電報

五日まえにホフマン将軍は、休戦協定（九）期間の満了をわれわれに声明し、それから一日あとに軍事行動を開始した。講和交渉の再開に同意するという人民委員会議の声明にたいする回答はまだない。明らかにドイツ政府が回答をいそいでいないのは、わが国を徹底的に略奪し、そののちにはじめて講和交渉をひらくためである。ドイツ軍に占領されたのは、ドヴィンスク、ロヴノ、ミンスク、ヴォリマール、ガプサリである。ドイツ軍はピーテル〔ペトログラード〕とキーエフにむかって前進しつつある。明らかに、進軍の目的は略奪だけではなく、主として革命とその成果の息の根をとめることとである。

人民委員会議は、ピーテルからの反攻を組織し、全労仂人口とブルジョアジーを動員し、もしブルジョアジーがざんごうをほることをのぞまなければ、力ずくでこれをあつめ、労仂者の監督のもとにざんごうをほらせることを決定した。

同志たちの共通の意見はこうである。諸君キーエフ市民は、一分もうしなわずに同様の西からの反撃をキーエフから組織し、生活能力あるものをすべて動員し、砲兵を配置し、ざんごうをほり、労仂者の監督のもとにブル

(40)ジョアジーをざんごう掘りにかり出し、戒厳状態を宣言し、完全な厳格さをもって行動しなければならない。共通の任務はピーテルとキーエフを固守し、どんなことがあってもドイツ軍の徒党を阻止することである。

情勢は諸君の想像する以上にゆゆしいものである。ドイツ軍の徒党は、ピーテルからキーエフまで散歩し、そこで、これらの首都で、はじめて講和交渉の話をはじめようとのぞんでいるということは、われわれにはうたがいない。諸君はまだ旧ラーダとドイツ軍との条約(一〇)を廃棄していない、と私は考える。もしそうなら、諸君はこの廃棄をいそぐ必要はあるまいとおもわれる。

くりかえして言うが、一分もうしなわずに、議論ぬきで仕事にとりかかり、ソヴェト権力が自分をまもりうることを、すべての人にしめさねばならぬ。

われわれのすべての希望は労仂者にかけられている。なぜなら復員される、いわゆる軍隊は、ただ恐慌と逃亡の能力しかないことがわかったからである。

即答をまつ。

人民委員会議の依頼により

イ・スターリン

ペトログラード

一九一八年二月二十一日

『一九一八年ウクライナにおけるドイツ

占領軍粉砕にかんする文書』国立政治文献出版所、一九四二年にはじめて印刷

(41)

ウクライナ・ソヴェト共和国人民書記局への直通電話についての覚え書

人民委員会議の依頼により、人民委員スターリン。

一昨二月二十二日、ドイツ政府から過酷な、（残忍なといえる）講和条件をうけとった。しかもドイツ軍はこれらの条件を八時間内に受諾するよう要求した。同時にドイツ軍部隊はレーヴェリ〔現在タリン〕とプスコフとを攻撃し、ペトログラードをおびやかしているが、わが軍はまったく抵抗をやめている。諸君がこれらの条件を知っているかどうか私は知らない。われわれはそれを無線電信でいたるところにつたえた。そのなかの重要な点をお知らせする。

「第四条。ロシアはウクライナ人民共和国と即時講和を結ぶ。ロシア軍隊と赤衛軍とはただちにウクライナとフィンランドとから撤退する。」「黒海その他にあるロシア軍艦はただちにロシアの港湾にうつされ、そこで全般的な講和締結まで抑留されるか、武装解除されねばならない。」「黒海その他の海上の商業航路は、休戦条約に規定されたとおりに再開される。水雷の清掃はこれを即時開始する。」

(42)

「第三条。ロシア軍隊と赤衛軍はただちにリーヴランド〔ラトヴィアの州〕とエストニアから撤退し、国家組

織がその地の公安と治安を保障するにいたるまで、ドイツ警察によって占領される。政治的理由によって逮捕された住民はすべて即時釈放されねばならない。」

「第五条、ロシアは、その力に応じて全力をつくし、トルコにその東部アナトリア諸州の計画的返還を即時保障し、かつトルコの降伏の撤回を承認する。」

さらに通商条約にかんする条項があるが、諸君もご承知の旧ラーダとオーストリア＝ハンガリアとの条約が、その基礎になっている。

全体として、条件は信じられぬほど残忍である、と言わねばならない。ウクライナにかんする条項はヴィンニチェンコ権力の復活を意味するものではなく（この権力はそれ自体としては、ドイツ軍に価値のあるものではない）、われわれと諸君が旧ラーダとオーストリア＝ハンガリアの条約を承認するのに同意することを予期した、われわれにたいするきわめて現実的な圧迫であるようにおもわれる。なぜならドイツ軍に必要なのは、ヴィンニチェンコではなく、穀物と鉱石とにたいする工業製品の交換だからである。

ドイツ軍の攻撃とわが軍隊の逃亡とに関連した現在の情勢を、われわれはつぎのように評価する。われわれは自国の帝国主義者を一掃したにもかかわらず、西欧の革命運動のテンポがおそく、わが軍ががんきょうでなく、かつドイツ帝国主義者がかつてないほど略奪的であるために、いちじ外国帝国主義者の支配下におちいった。いまやわれわれは、西欧における革命勢力の発展（われわれの意見では、この発展はさけられないものである）を期待しながら、ドイツ帝国主義にたいする祖国戦争の組織のために勢力を準備しなければならない。この準備のためには最小限の息つぎが必要である、そして残忍な講和でさえ、これをあたえうるであろう。どんなばあいに

も幻想をえがいてはならない。現実を正視して、われわれがいちじドイツ帝国主義の支配下におちいったことを承認する勇気をもたねばならない。全ロシア・ソヴェト中央執行委員会が今夜三時に残忍な条件で講和することを決定し、ブレストに代表団を派遣することを人民委員会議に依頼した(この派遣はすでにおこなわれた)のも、この考えにしたがったためにほかならない。中央執行委員会は、このような条件のもとでのみ、ソヴェト権力を維持することができるであろうと決議した。さしあたっては、ドイツ帝国主義にたいする聖戦の組織を準備し、もういちど準備しなければならない。

われわれ一同の考えでは、貴人民書記局はブレストに自己の代表団をおくり、もしヴィンニチェンコの冒険をオーストリア＝ドイツ軍が支持しなければ、人民書記局は旧キーエフ・ラーダが締結した条約の原則に反対しないであろうと、ブレストで声明すべきである。諸君のこのような措置は、第一には南北のソヴェトの思想的・政治的友好を強調することになるであろうし、第二にはウクライナにソヴェト権力を維持することになるであろう。そして、このことは国際革命全体にとって大きなプラスとなるものである。諸君がわれわれの言うことを理解し、この不幸な講和のもっとも重要な問題にかんしてわれわれに同意するよう、せつに希望する。

つぎの二つの質問について即答をまつ。すなわち、きょうにもペトログラードへ、あるいは、より簡単には、ちょくせつブレストへ、ドイツ軍との共同交渉のために代表団を派遣するかどうか、これが第一。第二、ヴィンニチェンコとその一味がいなければ、ヴィンニチェンコの条約を承認しうるという、われわれの見解に同意するかどうか。委任状を準備し、諸君のブレストへの旅行を組織するために、以上の質問にたいする回答をまつ。

人民委員　イ・スターリン

ペトログラード
一九一八年二月二十四日

はじめて印刷されたもの

(45)

ウクライナの結び目

二月末、ドイツとの講和が締結されるまえ、ウクライナ・ソヴェト共和国人民書記局は、ブレストに代表団を派遣し、旧キーエフ・ラーダによって結ばれたドイツ連合との条約に調印することに同意するという声明をおこなった。

ブレストにあるドイツ軍司令部の代表者で、有名なホフマンは、人民書記局の代表団と会見せず、人民書記局と講和交渉をおこなう必要はないと声明した。

これと同時にドイツ軍およびオーストリア＝ハンガリア軍の突撃隊は、ペトリューラ＝ヴィンニチェンコの強盗部隊とともに、ソヴェト・ウクライナにむかって進撃をくわだてた。

講和ではなくて、ソヴェト・ウクライナにたいする戦争、――これがホフマンの回答の意味であった。

(46)

旧キーエフ・ラーダが調印した条約によれば、ウクライナは四月末までに、三千万プードの穀物をおくらねばならない。ドイツの要求する「鉱石の自由輸出」については、言うまでもない。

ソヴェト・ウクライナ人民書記局には、うたがいもなく、条約のこの条項はわかっていた。だから書記局がヴィンニチェンコの講和〔条約〕に調印することを正式に表明したときには、自分がなにに応じたかということを

知っていた。

それにもかかわらず、ホフマンに代表されるドイツ政府は、ウクライナの都市と農村のすべてのソヴェトによって承認された人民書記局と講和交渉にはいることを拒否した。ドイツ政府は、ウクライナ人民に承認され、それだけが穀物の「必要量」をあたえうる人民書記局との講和条約よりも、死者との同盟を、打倒され、おいはらわれたキーエフ・ラーダとの同盟をえらんだのである。

このことは、オーストリアとドイツの侵入が、穀物の獲得を目的とするばかりでなく、主としてウクライナにおけるソヴェト権力をたおして、ブルジョア的旧制度を復活すること、を目的としていることを意味している。

このことは、ドイツ軍が、ウクライナから数百万プードの穀物をはこびさろうとしているばかりでなく、さらにウクライナの労仂者・農民を無権利にし、彼らが血をながしてかちとった権力をうばって、これを地主・資本家にあたえようとしている、ということを意味している。

オーストリアとドイツの帝国主義者は、その銃剣によって、昔のタタール人のくびきにすこしもおとらない、新しい、恥ずべきくびきをもたらしているのである。

ウクライナ人民はこのことを感じているようで、熱心に反撃を準備している。農民による赤軍の編成、労仂者赤衞軍の動員、最初の激しい恐慌のあとには、「文明的な」暴圧者との一連の小衝突で成功をおさめたこと、バフマチ、コノトープ、ネージンの奪取とキーエフへの接近、圧制者との戦いに幾千となくおもむいている大衆の熱意が増大したこと、——暴圧者の襲来にたいして、人民のウクライナはこうこたえている。

(47)

西欧からくる外国のくびきに抗して、ソヴェト・ウクライナは祖国戦争にたちあがっている、——これがウク

ライナでおこっている出来事の意味である。

このことは、ドイツ軍が一プードの穀物、一塊の金属をもたたかって、ウクライナ人民との死にものぐるいの戦いの結果として、とらねばならない、ということを意味している。

このことは、ドイツ軍が穀物を獲得し、ペトリューラとヴィンニチェンコを王座につけようとするには、ウクライナを本式に侵略しなければならない、ということを意味している。

ドイツ人が一挙両得しよう（穀物もえ、ソヴェト・ウクライナもうちやぶる）としていたその「一挙」は、外国の圧制者と、その穀物と自由をうばわれようとしている二千万のウクライナ人民との長期戦に転化する可能性がきわめて大きい。

ウクライナの労仂者・農民が「文明的な」暴圧者との英雄的な斗争に、その力をおしむものでないことを、以上のことにつけくわえる必要があるだろうか。

さらにウクライナではじまった祖国戦争は、全ソヴェト・ロシアからのあらゆる支持を期待しうることを証明する必要があるだろうか。

だが、もしウクライナにおける戦争が、長期的な性格をおびて、ついに全ロシアのものが、西方からの新しいくびきに抵抗する戦争に転化すればどうであろうか。

(49)
だが、もしこのような戦争の過程で、ドイツの労仂者と兵士が、ドイツの頭目どもをうごかしているものは「ドイツ人の祖国の防衛」という目的ではなくて、くいすぎた帝国主義的野獣どもの貪欲にすぎないことを理解し、このことを理解して、それに応じた実践的な結論をくだすとすれば、どうであろうか。

そこ、ウクライナで、いま国際的現情勢全体の基本的な結び目が、――ロシアにはじまった労仂者革命と、西欧からくる帝国主義的反革命との結び目が、とかれつつあるということは、以上で明らかではないだろうか。

ソヴェト・ウクライナで自分の首を折った、くいすぎた帝国主義的野獣、――諸事件にふくまれる、さけられない論理は、この結論にたっするのではなかろうか。

『イズヴェスチヤ』第四七号
一九一八年三月十四日
署名――イ・スターリン

(49)

タタール＝バシキール・ソヴェト共和国について

ロシア共和国の連邦制を宣言した第三回ソヴェト大会からすでに二ヵ月がすぎたが、辺境地方は、現地のソヴェト権力の確立にまだいそがしくて、今までのところ連邦を組織する具体的な形態については、明白適確に意見をのべていない。いま「文明的な」暴圧者どもによって、むごたらしくひきさかれているウクライナと、すでにソヴェト・ロシアとの連邦的結合に賛意を表したクリミアとドン地方とをのぞけば、タタール＝バシキリアは、その革命的組織がソヴェト・ロシアと連邦を組織する計画を、はっきりえがいた唯一の地方であるようである。われわれが念頭においているのは、タタール＝バシキール・ソヴェト共和国の正確にえがかれた組織概要のことであるが、いますべての人がこれについてかたっている、そして、これをつくりあげたのはタタール人とバシキール人のもっとも有力なソヴェト組織である。

タタール＝バシキール地方の革命的大衆の希望にこたえて、またロシアをソヴェト共和国連邦と宣言した第三回ソヴェト大会の決議を出発点として、民族問題人民委員部は、人民委員会議の指示にしたがい、ロシア・ソヴェト連邦のタタール＝バシキール・ソヴェト共和国にかんして、つぎのような規定をつくった。近く召集さるべ

(50)

きタタール＝バシキール・ソヴェト共和国憲法制定ソヴェト大会は、この規定の具体的な形態と細かな点とを研究完成するであろう。中央執行委員会と人民委員会議は、この大会の審議の結果を確認するであろう、――この点について、うたがうべき根拠はないのである。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第五三号
一九一八年三月二十三日

(51)

社会主義の仮面をかぶった外カフカーズの反革命家

ロシア連邦のすべての辺境地方のなかでは、外カフカーズは豊かで、民族的構成が多様であるという意味で、もっとも特徴のある地方だとおもわれる。グルジア人、ロシア人、アルメニア人、アゼルバイジャン系タタール人、トルコ人、レズギン人、オセット人、アブハジア人、——これくらいでは、とうてい外カフカーズの七百万住民の民族的多様性を完全にえがき出すものではない。

これらの民族的グループのどれ一つも、はっきりくぎられた民族的領域をもたず、みないりまじって雑然と生活している。しかも、それは都市だけでなく農村でも、そうである。外カフカーズの諸民族グループの、ロシアの中央にたいする共同の斗争が、彼ら相互の激しい斗争のために、たえずさまたげられているのも、もともとこれによる。そして、このことは民族的な旗や民族的な鈴で階級斗争をおおいかくすのには、きわめて「好都合な」情勢をつくっている。

外カフカーズのいま一つの、これにおとらずいちじるしい特徴は、その経済的な立ちおくれにある。主として

(52)

外国資本によってうごかされる、この地方の工業上のオアシスであるバクーをのぞけば、外カフカーズは農業国

で、海岸にそった周辺部には多少とも発達した商業活動がおこなわれているが、中央部にはまだ純農奴制的経済制度の強固な残存物がある。チフリス、エリザヴェートポリ、バクーなどの諸郡には、今日までタタール人の農奴主的地主やグルジア人の封建的諸侯がたくさんいて、彼らは大規模な私有地を所有し、特殊な武装部隊をもち、その手にタタール人、アルメニア人、グルジア人の農民の運命をにぎっている。この地方で農民の不満がしばしば鋭い形の農民「暴動」となってあらわれているのは、もともと、これによるのである。この地方の労仂運動が（バクーをのぞけば）たえず農民「暴動」によってぼかされて、力がなく、結晶していない原因もまた、ここにもとめねばならない。こうしたことが、有産階級といわゆる「社会主義的」インテリゲンツィア――その大部分は貴族的インテリゲンツィアである――とが、いまわが国で演じられている労仂者・農民の革命に対抗して結んでいる、政治的連合の有利な地盤をつくっているのである。

二月革命は、この地方勤労階級の状態に本質的な変化をもたらさなかった。農村のもっとも革命的な要素である兵士は戦線にいた。この地方の経済的な立ちおくれのために、階級としては一般に無力で、また組織された単位としてはまだ強固になっていない労仂者は、手にいれた政治的自由にうちょうてんになっていて、それ以上にすすむつもりはないようであった。全権力は有産階級の手中にあった。有産階級はしっかり権力にすがりついて、[53]エス・エル＝メンシェヴィキの戦略家たちがロシア革命はブルジョア的性格をもつ、社会主義革命は実現できない、等等といったりこうな言葉で、労仂者・農民をねむりこませるのを、よろこんで待ちうけていた。

十月革命は事態を激変させた。革命は一挙にすべての関係をくつがえし、勤労階級の手中へ権力を移行させる問題を提起した。「全権力を労仂者・農民へ！」という叫びが雷のように国中にひびきわたり、圧迫された大衆

を立ちあがらせた。そしてロシアの北の方であがったこの叫びが、そこで実現されはじめたとき、外カフカーズ地方の有産階級は、十月革命とソヴェト権力が彼らにもたらすものは、さけることのできない死であることを、はっきり知った。だからソヴェト権力に反対する斗争は、彼らにとっては生死の問題となった。また、すでに権力という知恵の木の実をあじわって、いまや権力をうしなうという見通しのまえに立たされた「社会主義的な」エス・エル＝メンシェヴィキ的インテリゲンツィアは、自動的に有産階級と同盟を結んだ。

外カフカーズにおける反ソヴェト連合は、こうして成立した。

一方ではハン＝ホイスキーやハスマメドフのようなタタール人地主がおり、他方ではジョルダニアやゲゲチコリのようなグルジアの貴族的インテリゲンツィアのいる外カフカズ委員部は、この反ソヴェト連立の生きた権化である。

諸民族グループ内の諸階級の連合のためには、グルジア人、タタール人、アルメニア人の「民族ソヴェト」が組織されている。その鼓舞者は、メンシェヴィキのジョルダニアである。

外カフカーズのすべての主要民族の有産者層の連合のために、外カフカズ委員部がつくられた。その指導者はメンシェヴィキのゲゲチコリであった。

ソヴェト権力と斗争するにあたって、この地方の「全住民」を統一するために、いわゆる「外カフカズ議会(セイム)」が組織され、それは、外カフカーズの憲法制定議会のエス・エル＝メンシェヴィキ＝ダシュナク＝汗系(カン)の議員から構成された。それにつけた飾り、ええと、議長は、メンシェヴィキのチヘイゼである。

ここには「社会主義」も「民族自決」もあったし、さらに、これらの陳腐な鈴よりももっと現実的なあるもの

——すなわち労仂者・農民の権力に対抗する有産者層の現実の同盟があった。

しかし鈴ではながく生きていくことはできない。同盟は「事業」を要求する。そして「事業」は、最初の現実的な危険があらわれるやいなや、ただちに登場してきた。それは講和交渉がはじまったのち、トルコ戦線からかえってきた革命的兵士のことである。この兵士たちは、反ソヴェト連合の首府チフリスをとおらなければならなかった。彼らは、ボリシェヴィキの手中にあるばあいには、外カフカズ委員部の存立にとって重大な脅威となるかも知れなかった。危険はもっとも現実的なものだった。そこで、この危険に直面して、ありとあらゆる「社会主義的な」鈴はなくなってしまった。連合の反革命的性格が表面にあらわれた。委員部と「民族ソヴェト」とは、戦線からかえってきた部隊を武装解除して裏切的な射撃をあびせ、野蛮な「民族的」な群集を武装した。「事業」をもっと強固にし、北方にたいして身をまもるために、外カフカズ委員部はカラウーロフやカレーヂンと協定を結び、カレーヂンに幾車輛もの弾丸をおくってやり、自力では武装解除することをあえてしなかった部隊を、彼が武装解除するのをたすけている、一般的にいって、ソヴェト権力との斗争において、あらゆる手段で彼を支持しているのである。手段をえらばずに、外カフカーズの有産階級を革命的兵士の侵害行為からまもること、これ(55)がこの下劣な「政策」の本質である。無自覚な回教徒の武装部隊をロシア人兵士にけしかけ、ロシア人兵士を、あらかじめしかけておいた伏兵のなかにひきずりこみ、虐殺し射殺すること、——これがこの「政策」の手段である。この恥ずべき武装解除「政策」をもっともよく説明するものは、エリザヴェートポリとチフリスとのあいだにあるシャムホールでおこなわれた、カレーヂンを攻撃するためにトルコ戦線からやってきたロシア人兵士を射撃した事件である。

（二）

『バクー労働者』はそれについて、こう報じている、――

「一九一八年一月前半に、チフリスからエリザヴェートポリにいたる鉄道沿線で、エリザヴェートポリの回教徒民族委員会の委員を首領とする武装した回教徒の数千の徒党が、外カフカズ委員部からおくられた装甲車の援助をうけて、ロシアへむかっている部隊にたいして、一連の強制的武装解除をおこなった。そのさい数千のロシア人兵士はころされたり、傷をおわされたりして、鉄道線路はその屍体でうずめられた。彼らから、小銃一万五千挺、機関銃七〇挺、火砲二〇門がとりあげられた。」

これが事実である。

外カフカーズの革命的兵士にたいする地主とブルジョアジーとの同盟――正式のメンシェヴィズムの旗のもとに行動している、――これが、これらの事実の意義である。

われわれはここで、エリザヴェートポリ＝シャムホール事件をつたえた『バクー労働者』の論文からの抜粋をのせることが必要だと考える。

「メンシェヴィキは、エリザヴェートポリ事件の真相をかくそうとつとめている。きのうの同盟者であったエス・エルの機関紙『ズナーミヤ・トゥルダー』でさえ、『事件をもみけそう』という彼らの企てを確認し、地方中央部で問題を公開で審理するよう要求している。

われわれはエス・エルのこの要求を歓迎する。というのは、外カフカーズにおける革命のこんごの運命は、シャムホールの悲劇の責任者が正式にばくろされて、一月六日―十二日の事件の真相を完全に明らかにするかいなかに、いちじるしく左右されるからである。

われわれは声明する。エリザヴェートポリ事件の責任者として、まず第一にあげねばならないのは、カフカズ社会民主党のかつての首領で、今はいわゆる『グルジア民族の父』であるノイ・ニコラエヴィチ・ジョルダニアである、と。通過する軍用列車を武装解除し、それをもって民族連隊を武装することを決定したのは、まさに彼が議長をつとめた地方中央部幹部会であった。シャムホール付近にあつまった軍用列車の武装解除についての電報は、彼の署名をうけてエリザヴェートポリの回教徒民族委員会にうたれた。彼ノイ・ジョルダニアは、軍用列車を武装解除するというおなじ依頼をうけた代表団をチフリスから派遣した。このことは、エリザヴェートポリにおける市民委員会の盛大な会議で代表団の一員である文士クルプコによって正式に公表されている。ノイ・ジョルダニアと彼のいつもばかげて熱心な助手のエヌ・ラミシヴィリは、アブハザヴァを長とする装甲列車を派遣し、アブハザヴァは回教徒に武器を分配し、彼らが数千名の兵士を射殺し、軍用列車を武装解除するのをたすけた。

ノイ・ジョルダニアは、自分は電報に署名しなかったと釈明している。しかし数十人の人たち——アルメニア人や回教徒——が確認するところでは、電報は彼によって署名され、その電報は現存している。ジョルダニアは、紛糾を知ったので、アブハザヴァと電話で話をし、軍用列車を強制的に武装解除しないよう、そして、それを通過させるようたのんだ、と言っている。アブハザヴァはころされているので、この言明はしらべることができないが、われわれは話合いがあったものと仮定しよう……。

ことわざにあるとおり、死人に口なしだが、この死人はさておくとしても、ジョルダニアの証言をくつがえし、電報のあて先もジョルダニアの署名も、武装解除などの依頼をうけた代表団の派遣も確言する、生き

た証人がいる。

もし彼らがうそを言っているのなら、ジョルダニアはなぜその責任を追及しないのか。なぜ彼とその友人とは『事件をもみけそう』とするのか。

いや、市民ジョルダニア、ラミシヴィリ一味よ。一月七日—十二日にころされた数千の兵士の血の重大な責任は、君らにあるのだ。

君らはこの重大な犯罪の申開きをすることができるか。しかし、われわれは個人的な申開きを言っているのではない。

ジョルダニアがこのばあい、われわれの関心の対象となるのは、個人としてではなく、外カフカーズで政治をおこなっている党の首領としてであり、外カッカーズの、もっとも権威あり責任ある代表者としてである。

彼はその犯罪行為を、第一には地方中央幹部会と上級民族ソヴェトの決定にしたがって、第二には明らかに、外カフカズ委員部の承知のうえでおこなった。ジョルダニアに、われわれが面とむかってなげつけるこの非難は、メンシェヴィキ党全体にも、地方中央部にも、外カフカズ委員部にもひろげられる。そこではチヘンリ氏やゲゲチコリ氏が、回教徒の地主やカンと堅く公然たるブロックを結んで、革命を破壊するためにあらゆることをやっているのである。われわれは、ジョルダニアやラミシヴィリの名まえが、電報や命令や、『強盗的』装甲列車の派遣と結びついているかぎりにおいて、彼らのことをのべているのである。真相究明のための審査は、彼らからはじめなければならない。

しかし、あげなければならないもう一つの名まえがあり、また一掃しなければならないもう一つの犯罪人の根城がある。この根城は、エリザヴェートポリの回教徒民族委員会であって、まったく反動的な地主や汗からなっている。そして、この委員会は、一月七日の夕刻、ジョルダニアの電報にもとずいて、『どんなことがあっても』軍用列車を武装解除することを決定し、一月九日―十二日に、信じられない恥しらずと残忍さとで、自分の決定を遂行したのである。

メンシェヴィキの新聞は、エリザヴェートポリ事件を報じるさい、それは外カフカーズには普通にある『強盗』の鉄道襲撃であるかのようにえがき出している。これはこのうえもなく恥しらずなうそである！強盗ではなくて、数千の回教徒の平和な住民が、正式に回教徒民族委員会の指導をうけ、ばくだいな獲物にまよわされ、これは、外カフカーズの統治者の命令によってやっているのだと信じて、シャムホールとダリャールの付近で、犯罪をおこなったのである。回教徒民族委員会は数千の回教徒をエリザヴェートポリに公然と集結させ、彼らを武装し、エリザヴェートポリ駅で汽車にのせ、シャムホールへさしむけた。そして『勝利』がえられると、――目撃者の言葉によると――、『敵』からうばいとった大砲にあつまって、『エス・エル』のサフィキュルツキーは、回教徒委員会の他の英雄たちをともなって、意気揚々と市へのりいれた。

いったいどんな強盗の襲撃のことを『言っている』のか。」（『バクー労仂者』第三〇、三一号）

これが、この犯罪的冒険のもっとも重要な英雄たちである。

冒険の作者をばくろする文書も、つぎにかかげよう、――

軍用列車の武装解除についての労・兵・農代表ソヴェト地方中央部議長エヌ・ジョルダニア

の全ソヴェトあての電報

「外カフカーズのすべてのソヴェトあて

チフリス発。第五〇五号、イ。一九一八年一月六日受理、発信第五六三六三号、受付者ナウモフ、字数五九。打電五—二八—二四、同文電報。

ロシアへさっていく部隊が武器をもっていくので、休戦が成功しないばあいには、民族部隊は戦線をまもるに十分な武器をもたない状態におかれる恐れがあることを考えて、労働者・兵士・農民代表ソヴェトの地方中央部は、——すべてのソヴェトがたちさっていく部隊の武器をとりあげる方策を講じ、かつ、そのつど地方中央部に報告するように提案することを決定した。

地方中央部議長　**ジョルダニア**」

タタール騎兵連隊長マガーロフあての騎兵大尉アブハザヴァの電報

「エリザヴェートポリ。

在ジェガマ、タタール騎兵連隊長マガーロフあて、第四二号、一九一八年一月七日ジュー発第一八五七号より受理、受付者ヴァータ、字数三〇、打電七日一五時。

火砲をもつ五台の軍用列車がつづく、ソヴェトの代表者はとらえられた。装甲車で反撃にいく。あらゆる武器での援助をたのむ。

騎兵大尉**アブハザヴァ**

デ・シャチラシヴィリ」

（『バクー労仂者』第三三号）

これが、その文書である。

このように、事件の経過中に、外カフカズ委員部の「社会主義的な」鈴はおちて、反革命的「事業」に地位をゆずった。チヘイゼ、ゲゲチコリ、ジョルダニアは、外カフカズ委員部のいまわしい行爲を、自分の党の旗でおおいかくしているにすぎない。事物の論理は、他のあらゆる論理よりも強力である。

(59)反革命的な外カフカズ委員部は、戦線からさっていくロシア人兵士を武装解除し、こうして「外国の」革命家とたたかうことによって、一挙両得しようと考えていた。すなわち、一方では有力な革命勢力、まさにボリシェヴィキ党の地方委員会が、主としてこれによることができたロシアの革命的軍隊を全滅させ、他方では、こうしてメンシェヴィキ的=反革命的委員部の主要な支柱であったグルジア人・アルメニア人・回教徒の民族部隊を武装するに「必要な」武器を手にいれたのである。「外国の」革命家にたいする戦争は、こうして外カフカーズの内部の「国内平和」を保障するという使命をおびていた。そして、この悪がしこい政策は、ゲゲチコリ氏やジョルダニア氏が、「後方」から、つまり北カフカーズから、北カフカーズのカレーヂンやフィリモーノフの一派からの支持をうけていると感じれば感じるほど、それだけ決然と実行されたのである。

しかし事件の経過は、外カフカーズの反革命家たちのあらゆる目算をくつがえしてしまった。

カレーヂンやコルニーロフの避難所となっていたロストフとノヴォチェルカッスクの陥落は、「北方の背後」を根もとからぐらつかせた。バクーにいたる北カフカーズ戦線全体の最後的な清掃は、この背後をゼロにしてしまった。北方からおしよせたソヴェト革命の波は、外カフカーズ連合の王国に侵入し、その存立をおびやかした。

外カフカーズ自身にもおなじぐらい「不利な」事情が生まれた。

戦線からかえってきた外カフカーズの兵士は、農村に農業革命をくばった。回教徒やグルジア人の地主の邸宅はもえはじめた。農奴制的残存物の基礎は、「ボリシェヴィキ化された」兵士＝農民による決定的な打撃をうけた。明らかに、土地を農民の手に移譲するという外カフカズ委員部のから約束は、農業革命の波にとらえられた農民を満足させることはできなかった。委員部に要求されていたのは、反革命的な事業ではなく、革命的な事業であった。

(60)

労仂者もまた事態に立ちおくれなかったし、また立ちおくれるはずもなかった。第一に、北方からきて労仂者に新しい獲得物をもたらした革命は、当然に、外カフカーズの労仂者を新しい斗争に立ちあがらせた。メンシェヴィキ反革命の支柱である、ねむれるチフリスの労仂者でさえ、外カフカズ委員部からはなれて、ソヴェト権力の支持を表明しはじめた。第二に、カレーヂンやフィリモーノフのもとで、チフリスに穀物を供給していた北カフカーズでソヴェトが勝利して以来、食糧の欠乏は激化せざるをえなかったが、このことは、とうぜん一連の食糧「暴動」をひきおこした、――革命的な北カフカーズは、反革命的なチフリスをやしなうことを断固として拒絶したのである。第三に、紙幣の欠如（地方的な紙幣は、これにかわりえない！）は経済生活を、まず第一に、鉄道運輸を混乱させ、それはうたがいもなく都市の大衆の不満を激化させた。最後に、十月革命の初めからソヴェト権力を承認し、外カフカズ委員部にたいする斗争をうまずたゆまずおこなってきた、革命的なプロレタリア的なバクーは、外カフカーズのプロレタリアートをねむらせないで、伝染力をもつ模範となり、社会主義への道をてらす生きた燈台となった。

(61)

こうしたことが一つになって、外カフカーズの政治情勢全体の革命化をもたらさずにはいなかった。ついに事態は、「もっとも頼みがいのある」民族部隊さえ「分解」して、ボリシェヴィキのがわにうつるほどになった。

外カフカズ委員部のまえには、ジレンマがあらわれた。すなわち、——

あるいは労仂者・農民とともに地主・資本家に対抗するか、——そうすれば、連合はやぶれる。

あるいは地主・資本家との連合を維持するために、農民と労仂運動にたいして断固たたかうか。

ジョルダニア氏とゲゲチコリ氏は、第二の道をえらんだ。

まず外カフカズ委員部は、グルジア人＝タタール人農民の農民運動を「略奪」・「暴挙」と呼んで、「煽動者」を逮捕し銃殺した。

農民に反対して地主のために！

さらに委員部は、チフリスにおけるボリシェヴィキ新聞をぜんぶ禁止し、この無作法にたいして抗議した労仂者を逮捕し、銃殺しだした。

労仂者に反対して資本家のために！

最後に、ジョルダニア氏やゲゲチコリ氏は、明らかに「脅威をとりのぞく」目的で、アルメニア人・タタール人の虐殺を見のがすというまでになった。——これは、これまでカデットでさえ、そこまで堕落したことのない不名誉な行為である！

労仂者・農民に反対する、外カフカズ委員部、外カフカズ議会（セイム）および「民族ソヴェト」、——これがこの「新」方針の意味である。

(62) こうして、外カフカーズの反革命家どもは、「外国の」革命家との斗争、ロシア人兵士との斗争を、国内の革命家との斗争、「自分自身の」労仂者・農民との斗争のなかでおぎない、発展させた。
外カフカーズの連合主義者の政策における、この「転換」を特徴ずけるうえできわめて興味ぶかいのは、数日まえカフカーズから人民委員会議あてでうけとった、ゲゲチコリ―ジョルダニア諸氏の反革命的非道の目撃者の一同志からの手紙である。私はこの手紙をぜんぶ変更をくわえずに引用しよう。それはつぎのようである、――

「当地では近ごろ新しい諸事件がおこった。事態はいまきわめて重大である。二月九日の朝、われわれの同志四名が逮捕されたが、そのなかには新しいボリシェヴィキ党委員会のメンバーであるエフ・カランダッゼがふくまれている。逮捕命令は、さらに他の同志、フィリップ・マハラッゼ、ナザレチャン、シャヴェルドフ、その他の地方委員にも出されている。ただミーハ・ツハカーヤだけは見のがされているが、これは明ちかに彼の病気のためらしい。全員、非合法状態にうつった。同時に、われわれの新聞『カフカズ労仂者』、『ブルゾーラ』（グルジア語）、および『バンヴォーリ・クリーフ』（アルメニア語）が禁止され、われわれの印刷所は封印された。

このことは労仂者のあいだに怒りをよびおこした。この日（九日）に鉄道修理工場で集会がひらかれ、約三千人の労仂者が出席した。集会は、同志の釈放と新聞の解禁とを要求するストライキを宣言することを、満場一致で（保留わずか四人で）決定した。要求がいれられないあいだは、ストライキをおこなうことが決定された。しかしストライキは完全ではなかった。がんこなメンシェヴィキの一団は、集会では留保も反対投票もしなかったのに、はたらいていた。そのおなじ日に、植字工・印刷工の集会がひらかれ、おなじ要求

(63)

をかかげた一日間の抗議ストライキを宣言することを、二二六対一九〇で決定した。もっと一致した態度でストライキを決定したのは、電気工、皮革工、仕立工、兵器工廠、トッレ工場、ザルガリヤンツ工場などである。

住民もまた市の怒りに同調した。だが翌二月十日に事件がおこって、逮捕や新聞のことをわすれさせてしまった。

鉄道従業員その他のもののストライキ委員会は、その日、十日の朝、アレクサンドロフスク広場で抗議集会をすることにきめた。集会を失敗させるために、あらゆる手段が講じられたにもかかわらず、この集会には三千名以上の労仂者と兵士(兵士はすくなかった。というのは軍用列車は都市から一五ヴェルスタのところにあったから)があらわれた。この集会にはまたかくれていた同志――カフタラッゼ、マハラッゼ、ナザレチャンらがあらわれた。集会の途中に民兵と「赤衛軍」(約二連隊の)が広場にはいってきた。赤旗を手にもち、集会に静かにするように合図しながら、彼らは参会者のほうへちかずいた。

散会しようとしていた集会の一部は、たちどまって、仲間がちかずいてくるのだと考えて、「ウラー」の叫び声をあげて彼らを歓迎しはじめさえした。議長のカフタラッゼは演説者を中止させて、あらわれた人々を歓迎しようとした。そのとき、やってきた連中はすばやく散開し、集会を包囲して、小銃と機関銃の砲火を集会にあびせかけた。ねらいはおもに演壇のうえにいた幹部団にむけられた。八名がころされ、二〇名以上が負傷した。カフタラッゼとおなじ服をきていたので、彼に似ていたひとりの同志は一〇発の弾丸をうけてころされた。そして「赤衛軍」は、カフタラッゼはころされたとさけびあった。大衆の一部は四散し、他

の一部は地上にふせていた。射撃は一五分ばかりつずいた。
ちょうどそのとき、外カフカズ拡大議会(セイム)の第一回会議がひらかれたところで、チヘイゼは、会館から遠くないところで破裂する小銃や機関銃の件奏つきで演説をしていた。
なんの予告もせず、しかも、こんなに裏切的な方法でおこなわれたこの一斉射撃は、労仂者のあいだに新たな怒りをよびおこした。そして、すでに労仂者をメンシェヴィキから決定的にきりはなしたとおもう。
ナザレチャンとツィンツァッゼとは、集会のあとでおいかけられ、射撃されたが、エス・エルのメルハーレフが彼らをたすけた。エス・エルも「おこったり」、抗議したりしている。ダシュナクツチューン派も全市民もおこっている。しかし、なにもやることができない。彼らは農村から武装した「赤衛軍」と回教徒のやばんな師団をかりあつめ、暴威をふるっている。指導的な同志は公然と射殺でおびやかされている。集会が一斉射撃された日には、都市には白帯をまいた多数の士官——白衛軍があらわれ、彼らは市中をかけまわってボリシェヴィキをさがした。シャウミャンに似ているといっては、ひとりの男を電車からひきずりおろし、みけんに発砲して、これがシャウミャンだとさけんだが、あてはずれであった。
昨十一日、われわれの同志も参加して、軍用列車で集会がひらかれた。そこで、騎兵をのぞく千六名の兵士は、逮捕された同志の釈放、新聞の解禁、十日の事件(集会の射撃、この集会ではこの軍用列車の兵士のひとりが射殺された)の調査を要求する決議をおこなった。きのう最後通牒をもった代表団が派遣され、回答のために二四時間の余裕をあたえた。
きょう期限はすぎている。報道によれば、委員部は反撃するために勢力を結集している。くわしいことは

今のところわからない。軍用列車出身の責任ある同志たちは、途上逮捕の恐れがあるから、とうぶんかえらない。彼らはそこで軍用列車の軍事革命委員会に選出されている。私はより正確な報道を待っている。

あすは市会の会議がひらかれることになっている。エス・エルとダシュナク派が抗議をおこない、われわれの代表者も出席するだろう。市内の気分はたいへんさわがしい。飢餓がはじまりつつあるので、きょうは婦人のデモンストレーションが市会付近でおこなわれた。全市いたるところ集会のビラだ。グルジア全土にわたってロシアからかえってきたグルジア人兵士の影響のもとに、農民運動がはじまっている。この兵士たちはみなボリシェヴィキであるか、あるいはボリシェヴィキ的な気分をもっている。メンシェヴィキはこの運動をポグロムだ、略奪だと声明し、「赤衛軍」をおくって鎮圧している。ゴーリでは、われわれの同志が逮捕された。きょう報道されたところでは、そこではわれわれの兵士が武装解除され、すでに射殺がおこなわれている。クタイスからの報道では、市はブードゥ・ムヂヴァニを先頭とするボリシェヴィキの手中にある。ここへは、いたるところからメンシェヴィキ勢力が結集されている。われわれの使者からの返事はまだうけとっていない。今か今かと待っている。きのうムフラニでボリシェヴィキのツェルツヴァッゼ老人が逮捕された。彼はムフラン公爵とその領地に反抗し、きのうおこすとおもわれていた農民の決起に関連して、そこに旅行していたのである。

げんざい逮捕されてメテヘにいるのは九人である。これまで監獄をまもっていたエス・エルの赤衛軍は、逮捕のために交替させられたが、われわれに奉仕することを申し出ている。

初めに私があげた、諸企業の代表者からなるストライキ委員会は、きのう、ゼネストを呼びかける檄を発

した。きょうこの問題はいたるところで審議されている。われわれはチフリスのプロレタリアートがどんなに自分の力をしめすかを見るであろう。

二月十日の議会（セイム）の開会に出席したのは、わずかにメンシェヴィキ（三七人）とひとりの回教徒だけで、他にはだれも出なかった。回教徒の議員が十三日まで延期するようたのんだので、そうされた。ダシュナク派やエス・エルもおそらく気のりがしないのであろう。」

(65)

これが「余貌」である。

歴史がすでにそれにくだす死刑の宣告の草案を書いているこの反革命的委員部が、まだながく生きながらえるかどうかは、わからない。いずれにしても、それは近い将来に明らかになるであろう。しかし、つぎのことは疑問の余地がない。すなわち最近の事件は、メンシェヴィキの社会主義的反革命家どもから社会主義の仮面をはぎとったので、外カフカズ委員部とその「セイム的＝民族的」耳飾りとは、外カフカーズの労仂者・農民にむけられたもっとも腹ぐろい反革命的ブロックであることを、いまや革命的全世界ははっきりと確信することができる。

これが事実である。

ところで言葉や飾はほろびていくが、事実と行爲はのこるということを知らないものがあるだろうか……。

『プラウダ』第五五、五六号
一九一八年三月二十六、二十七日
署名――イ・スターリン

(66)

ロシア連邦共和国の組織

『プラウダ』記者との会談

さいきんソヴェトの新聞紙上で、ロシア連邦の構成の原則と方法についておこった討論にかんして、本紙記者は民族問題人民委員、同志**スターリン**に、この問題について意見をのべてもらうように申し出た。本紙記者が提起した一連の質問にたいして、同志**スターリン**はつぎのような回答をあたえた。

ブルジョア民主主義的連邦

現存するすべての連邦組織のうちで、ブルジョア民主主義体制にとって、もっとも特徴的なものは、アメリカとスイスの連邦である。歴史的にいうと、それらは独立国家から形成された、――すなわち連合（コンフェデラツィア）（一二）をへて連邦（フェデラツィア）になったが、そのさい、それらは実際には連邦制度の形態だけをのこして、統一的な国家にかわった。この全発展過程――独立から中央集権への――は、いくたの強制と抑圧と民族戦争を通じていた。アメリカ(67)の南部諸州と北部諸州との戦争、スイスのゾンデルブンド（一三）と他の諸州との戦争をおもい出せば十分である。スイ

スの諸州とアメリカの諸州は、民族的な標識にしたがってもうけられたのでなく、まして経済的な標識にしたがってもうけられたのでなく、まったく偶然に、——移住者=入植者あるいは農村共同体が、たまたまどれかの地域を占取したためであることを強調しないわけにはいかない。

形成過程にあるロシア連邦は、それらとどうちがうか

ロシアでげんざいつくられている連邦は、これとはまったくちがった姿をしめしているし、また、しめさざるをえない。

第一に、ロシアの分離した諸州は、生活様式と民族的構成という意味で、まったく明確な単位となっている。ウクライナ、クリミア、ポーランド、外カフカーズ、トゥルケスタン、ヴォルガ沿岸地方、キルギーズ地方は地理的位置（辺境地方！）によって中央部と相違しているばかりでなく、一定の生活様式と民族的な人口構成をもつ、まとまった経済的地域としても相違している。

第二に、これらの州は自由な、かつ独立した地域ではなく、全ロシア的政治機構に強制的におしこまれた単位であり、それはげんざい連邦関係の形で、あるいは完全な独立の形で、必要な行動の自由をうけとろうとのぞんでいる。これらの地域の「統一」の歴史は、ロシアの旧権力のがわからの強制と抑圧の一続きの画面をしめしている。(68) ロシアにおける連邦制度の樹立は、これらの地域とそこに居住する諸民族を、古い帝国主義的なかせから解放することを意味するであろう。中央集権から連邦制度へ！

第三に、西欧の諸連邦では、国家生活の建設を指導しているのは帝国主義的ブルジョアジーである。「統一」

か圧迫なしにすまされなかったということは、おどろくにあたらない。反対に、このロシアでは、政治的建設を指導しているのは、帝国主義の仇敵、プロレタリアートである。だからロシアでは、諸民族の自由な同盟を基礎として、連邦をうちたてることができるし、また、そうすることが必要なのである。

以上が、ロシアの連邦と西欧の連邦との本質的な差異である。

ロシア連邦の構成の諸原則

同志**スターリン**はつづけて言う、――このことからロシア連邦は（ブルジョア的新聞・雑誌の漫画家たちが考えているように）個々の独立した都市の同盟、あるいは（若干のわれわれの同志たちが予想しているように）一般に諸州の同盟なのではなく、反対に、特別の生活様式ならびに民族的構成の点で特色のある、歴史的に区分された一定の地域の同盟であるということが明らかである。ここで問題なのは、けっしてそれらの州の地理的位置ではなく、あるいは、それらの地区が水域によって（トゥルケスタン）、あるいは山脈によって（シベリア）あるいはステップによって（おなじくトゥルケスタン）中央部からしきられているということでもない。ラツィスが宣伝するこの地理的連邦制度は、第三回ソヴェト大会で宣言された連邦制度とすこしも共通点がない。ポーランドとウクライナは山脈と水域によって中央部から仕きられてはいない。それにもかかわらず、これらの地理的標識がないために、前記諸州には自由な自決権はないのだと、かりそめにも主張するものはひとりもないだろう。(69)

同志**スターリン**は言う、――一方、モスクワの周囲に一四県を人工的に統一しようと努力するモスクワの州自立主義者(オブラスニック)たちの独自な連邦制度も、うたがいもなく第三回ソヴェト大会の連邦にかんする有名な決定とは、おな

じくすこしも共通点がない。全部で数県を擁する中央織物地帯は、まとまったある経済単位であり、そして、そのようなものとしてこの地帯は、うたがいもなく最高国民経済会議の一自治部門である、その州機関によって管理されるであろう。だが、やせたカルーガと工業的なイワノヴォ・ヴォズネセンスクとには、どんな共通点がありうるだろうか。そして現在の州人民委員会議は、どんな標識にもとずいて両者を「統一する」のか、――わけがわからない。

ロシア連邦共和国の構成員

明らかに、あらゆる地区と単位、あるいは地理的領域が、連邦の主体とならねばならないわけではないし、また、なりうるわけでもない。主体となるのは、生活様式の特殊性と民族構成の特質と経済的地域としてのある最低の全一性とを、そのうちに自然的にくみあわせている一定の州だけである。それは、ポーランド、ウクライナ、フィンランド、クリミア、外カフカーズ（ただし、外カフカーズがグルジア、アルメニア、アゼルバイジャン・タタールリアその他のような、いくつかの一定の民族的地域的単位にわかれるという可能性が、ないわけではない）、トゥルケスタン、キルギーズ地方、タタール＝バシキール地方、シベリアその他である。(70)

連邦に組織される州の権利。少数民族の権利

これらの連邦に組織される州の権利の範囲は、ソヴェト連邦全体の建設が進行していくうちに、もっとも具体的にきめられるであろうが、これらの権利の一般的輪郭は今でもえがくことができよう。海陸の軍事、対外問題、

鉄道、郵便電信、貨幣、通商条約、一般的な経済・財政・銀行政策、――こうしたことはみな中央人民委員会議の活動範囲となるはずである。その他いっさいの問題、まず第一に、一般法令の施行形態、学校、訴訟手続、行政などは州人民委員会議にうつることになろう。訴訟手続でも、学校でも、義務的な「国定の」言語は、なにもない！　各州はその州の人口構成に適する一言語または諸言語をえらび、そのさい、あらゆる社会的・政治的施設のなかで、少数者であろうと多数者であろうと、言語の完全な同権がまもられるであろう。

中央権力の構成

中央権力の構成、その建設の方法はロシア連邦の特質によってきまる。アメリカとスイスでは連邦制度は実際には二院制をもたらした。すなわち一方では、普通選挙の原則によってえらばれる議会、他方では、州によって構成される連邦会議である。これがあの二院制であって、それは実際には、おきまりのブルジョア的な立法上の渋滞をもたらしている。いうまでもなくロシアの勤労大衆は、こうした二院制にあまんじないであろう。この制度が社会主義の基本的要求にまったく適合しないことは、のべるまでもない。

(71)

同志スターリンはつづける、――ロシアの全勤労大衆によってえらばれたソヴェト大会、あるいは、その代行をする中央執行委員会が、ロシア連邦の最高権力機関になるだろうと、われわれにはおもわれる。そのさい普通選挙権の「原則」の絶対的正しさについての、ブルジョア的偏見に別れをつげるべきである。選挙権は、搾取されている人口層、いずれにせよ他人の労働を搾取しない人口層にだけあたえられるにちがいない。このことはプロレタリアートと貧農の独裁の事実の、当然の結果である。

権力の執行機関

ロシア連邦の執行権力機関、すなわち中央人民委員会議についていえば、それは中央と連邦に組織される諸州とからおされた候補者のうちから、ソヴェト大会によって選挙されるものと、われわれはおもう。中央執行委員会と人民委員会議とのあいだには、したがって、いわゆる第二院はないであろうし、また、あってはならない。(72)うたがいもなく実践は権力を構成する仕事で、州と中央の利益を結合するべつの、より合目的的な、弾力ある形態をつくりあげることができるし、また、つくりあげるにちがいない。だが実践がどんな形態をつくりあげようとも、それは、われわれの革命によって根絶され、ほうむられた二院制を復活させないであろうという一事は確かである。

連邦制度の過渡的役割

わが対談者はつずける。――以上が、私の意見によれば、われわれの眼前で形成されつつあるロシア連邦の一般的輪郭である。多くの人は連邦制度をもっとも強固なもので、かつ理想的なものであるとさえおもう傾きがあり、しばしばアメリカ、カナダ、スイスの例を引用する。だが歴史は、連邦制度に熱中することが正しいことを証明してはいない。第一に、アメリカまたスイスもすでに連邦ではない。それらは前世紀の六〇年代には連邦であった。それらは、全権力が州から中央連邦政府にうつされた前世紀の終りから、実際に統一的な国家にかわったのである。

アメリカとスイスの連邦制度が、州の独立からその完全な統一への過渡的段階であるということを、歴史はしめした。連邦制度は、独立から帝国主義的中央集権への過渡的段階としては、まったく合目的的な形態であったが、州を単一の国家的全体に統一する条件が成熟するやいなや、それは除去され、なげすてられた。

(73)

ロシア連邦の政治的建設の過程。ロシアにおける連邦制度は社会主義的中央集権への過渡的段階である

ロシアでは、政治的建設は反対の順序ですすんでいる。ここでは、ツァーリの強制的な中央集権は、自由意志的な連邦制度にとってかわられたが、それは連邦制度がロシアのすべての民族と部族の勤労大衆の、おなじく自由意志的で兄弟的な統合に、時とともに席をゆずるためである。――ロシアの連邦制度は、アメリカとスイスとおなじように、将来の**社会主義的**中央集権への過渡的役割を演ずる運命にあるとのべて、同志**スターリン**は、その談話をおえた。

『プラウダ』第六二、六三号
一九一八年四月三、四日

(74)

当面の任務の一つ

ロシアにおける革命発展の、この二カ月、とくにドイツと講和を締結し、ロシア国内のブルジョア的反革命を鎮圧したのちのこの二カ月は、ロシアにおけるソヴェト権力強化の時期として、また生涯をおえた社会・経済制度を新しい社会主義的な型へと計画的に組織がえする端緒として特徴ずけることができる。工場の国有化の進展、主要商業部門にたいする統制の強化、銀行の国有化、すでに目近にある社会主義社会の組織的細胞である最高国民経済会議の活動が、日に日に発展し、豊かな多様性をもっていること、——すべてこうしたことは、ソヴェト権力が社会生活の毛穴にいかに深い根をはっているかをかたっている。中央の権力は、すでに、勤労大衆の内部から生長した、真に人民的なものとなった。ここにソヴェト権力の力と威力とがある。このことを、ソヴェト権力の敵であったブルジョア・インテリゲンツィア、技手と技師、事務員、一般に、きのうはまだ権力をサボタージュしていたが、きょうは権力に奉仕する覚悟ができている専門知識人までが、あすに気ずいている。

(75)

だが文化的な点でおくれた分子が居住する辺境地方では、ソヴェト権力はまだこれとおなじほどに人民的となるにいたらなかった。中央ではじまった革命は、辺境地方へは、とくに東部辺境地方へは、いくらかおくれてひろがった。そのうえ経済的立ちおくれがめだっているところの、これら辺境地方の生活様式上・言語上の諸条件

は、そこでのソヴェト権力の強化の仕事をいくらか困難なものにした。権力がそこで人民的なものになり、勤労大衆が社会主義的になるためには、これら辺境地方の勤労被搾取大衆を革命的発展の過程にひきいれる特別の手段が、とりわけ必要である。大衆をソヴェト権力にまでたかめ、彼らのすぐれた代表者たちを後者と融合させることが必要である。しかし、このことは、これらの辺境の自治なしには、すなわち、その地方の学校、その地方の裁判、その地方の行政、その地方の権力機関、その地方の社会的、政治的施設ならびに教育施設を組織し、それに社会的、政治的活動の全領域で、その地方の勤労大衆にとっては生まれながらの地方的な言語の完全な権利を保障することなしには不可能である。

第三回ソヴェト大会が、ロシア・ソヴェト共和国の連邦制度を宣言したのも、これらのことを目的としたのであった。

昨年の十一月と十二月に、ヴォルガ流域のタタール人地方、バシキール人地方、キルギーズ人地方、トゥルケスタン地方の各辺境地方で発生したブルジョア自治グループは、革命の進行によってしだいに正体を明らかにしている。彼らから「彼ら自身の大衆」を決定的にひきはなし、そして後者をソヴェトのまわりに結集するためには、この自治制のブルジョア的なけがれをあらかじめきよめたうえで、彼らから自治制を「かりてくる」こと、そして、それをブルジョア的なものからソヴェト的なものにかえることが必要である。ブルジョア民族主義のグループが自治制を要求するのは、この自治を「彼ら自身の」大衆を奴隷化するための道具にかえるためである。(76)だからこそ彼らは「中央ソヴェト権力を承認しながら」、それと同時に彼らの「内政」への不干渉を要求して、地方ソヴェトを承認したがらないのである。地方の若干のソヴェトは、このために民族問題を武器によって「解

決」することをえらんで、まったくあらゆる自治制を放棄することにきめた。だが、このやりかたはソヴェト権力にとってまったく適当ではない。それは、つまりこのやりかたは、大衆をブルジョア民族主義的上層のまわりに結集することができるだけだが、これら上層を「祖国」の救済者、「民族」の擁護者としてしめすことは、けっしてソヴェト権力の考慮に入らないことである。自治制の否定ではなく、その承認がソヴェト権力の当面の任務である。必要なことは、この自治を現地のソヴェトの土台のうえにきずくことだけである。このようなやりかたによってのみ、権力は大衆にとって人民的な、親しいものとなることができる。したがって自治制が、その民族の上層のためにではなく、下層のために権力を保障することが必要である。ここに要点がある。

だからこそソヴェト権力は、タタール＝バシキール地域の自治を宣言するのである。これらのことを目的としてキルギーズ地域、トゥルケスタン地方等々の自治の宣言がもくろまれているのである。こうしたことはみな、これら辺境地方の郷、郡および都市の現地ソヴェトを承認することを基礎としている。

これらの地域の自治の性格と形態を決定するために、必要な材料と各種の資料を収集することが必要である。その民族の憲法制定ソヴェト大会と、ソヴェト諸機関とを召集するための委員会を創設する必要がある。そして、この大会はこれらの自治地方の地理的境界をつけるべきである。これらの大会を召集する必要がある。この必要な準備活動を、今のうちにおこなう必要がある。それは、将来の全ロシア・ソヴェト大会がロシア・ソヴェト連邦の憲法を作成することができるようにするためである。

(77)

タタール＝バシキール地域のソヴェトと、それに付属している回教徒人民委員部は、すでに仕事に着手した。タタール＝バシキール地域の憲法制定ソヴェト大会を召集するための委員会設立のために、四月十―十五日まで

に、カザン、ウファー、オレンブルグ、エカテリンブルグのソヴェトと回教徒人民委員部との代表者会議が、モスクワで召集されるだろう。

キルギーズ地方とトゥルケスタンでは、この種の活動がはじまったばかりである。これら辺境地方のソヴェトは、それぞれの諸民族のすべてのソヴェト的、革命的な分子をひきいれて、即座に仕事に着手する必要がある。若干のブルジョア的民族主義者の集団が提議しているように、「少数」民族代表と「多数」民族代表をもつ民族的区分（クーリャ）に区分することは、けっしてゆるされない。こうした区分は民族的敵意を激しくするだけであり、諸民族の勤労大衆のあいだの隔壁をかため、そして後進民族の光明と文化への道をとざすものである。憲法制定大会選挙の基礎となり、また自治の根底とならねばならぬのは、諸民族の民主主義的勤労大衆を、個々の民族的部類へわけることではなく、それぞれのソヴェト組織のまわりに、彼らを結集することでなければならない。

要するに、辺境地方の自治制の問題の材料の収集、ソヴェト付属の民族的＝社会主義的人民委員部の結成、自治州の憲法制定ソヴェト大会召集のための委員会の組織、この大会の召集、自決しつつある民族の勤労者層を州のソヴェト権力機関と接近させること、以上がソヴェトの任務である。(78)

民族問題人民委員部は、現地のソヴェトの困難で重要な活動を容易にするために、あらゆる手段を講ずるであろう。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第六七号
一九一八年四月九日

ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の一般的規定

全ロシア中央執行委員会のソヴェト共和国憲法作成委員会によって採択された草案（一四）

現在の過渡期をめあてとしたロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の基本的な任務は、強固な全ロシア・ソヴェト権力という形で、都市・農村のプロレタリアートと貧農との独裁を樹立し、ブルジョアジーを完全に抑圧し、人による人の搾取を絶滅し、階級への区分も国家権力もなくなる社会主義をもたらすことにある。

一、ロシア共和国は、都市と農村の〔労仂者・農民・兵士〕代表ソヴェトに統合された、ロシアの全勤労者の自由な社会主義社会である。

二、特別な生活様式と民族的構成を有する州の代表ソヴェトは、自治的・地方的な同盟に統合され、代表ソヴェトの州大会とその執行機関が、そのうえにたつ。

三、ソヴェトの地方的同盟は、連邦の原則にもとずいて統合され、ロシア社会主義共和国となる。そして代表

ソヴェトの全ロシア大会が、大会と大会のあいだは全ロシア中央執行委員会が、そのうえにたつ。

『イズヴェスチヤ』第八二号
一九一八年四月二十五日

(81)

第五回トゥルケスタン地方ソヴェト大会(一二五)あての電報

同志諸君、人民委員会議が諸君の地方のソヴェトを基礎とする自治制を支持することを、確信していただきたい。われわれは諸君のイニシアティヴを歓迎し、かつ諸君が全地方をソヴェトの網でおおい、現存するソヴェトと完全に連絡をたもって行動するものと確信する。諸君が組織に着手した憲法制定ソヴェト大会召集委員会を、モスクワのわれわれのもとに派遣して、諸君の地方の全権機関と人民委員会議の関係を規定する問題を、共同で研究することを諸君におねがいする。

諸君の大会にあいさつをおくり、大会が歴史によって課せられた任務を遂行することを期待する。

レーニン
スターリン

一九一八年四月二十二日

『イズヴェスチヤ』第八三号
一九一八年四月二十六日

(82)

ウクライナとの講和交渉

『イズヴェスチヤ』記者との会談

人民委員会議の召喚によって、報告のためにクールスクからモスクワに到着したソヴェト講和代表団長、同志**スターリン**は、本紙記者との会談でつぎのようにのべた。

休戦の締結

ソヴェトの講和代表団が、まず第一になすべきことは、ウクライナ国境の戦線での休戦をとりきめる任務であった。わが講和代表団がドイツ＝ウクライナ軍司令部と交渉をおこないはじめたのも、この方針によるものであった。われわれはクールスク、ブリャンスクおよびヴォローネジの各戦線での軍事行動の停止にこぎつけることができた。つぎの順番は南部戦線でも軍事行動を停止する問題である。こうして、われわれの意見によれば、休戦の締結と境界線の確定とによって、講和交渉遂行の第一段階がきまった。

その後の交渉

それにつづくわれわれの任務、すなわち講和交渉そのものの開始は、中央ラーダの代表団をながく待たねばならなかった[83]ということによって困難になった。代表団がヴォロジバーについたのち、ウクライナにおこったクーデターと、大小ラーダの解散とがわかった。このことは、もちろん休戦を確立し、交渉を開始する時と場所を決定するための予備交渉を困難にした。

あとの任務を遂行するために、われわれは、ウクライナ＝ドイツ軍司令部が申し出た、この司令部の中央参謀部の所在地、コノトープに特別軍使を派遣した。わが代表には交渉開始の場所にかんして協定するために、もっとも広範な全権があたえられていた。

ウクライナにおけるクーデターの影響

ウクライナにおこったクーデターが講和交渉の運命におよぼす影響について、なにか確定的なことをのべることはむずかしい。なぜなら新しいウクライナ政府の講和交渉にかんする見解がわからないからである。〔カザックの〕頭目スコロパツキーの呼びかけは、このことについて、なにも言っていない。クーデター以前には、われわれは、ウクライナのラーダのはっきりした講和綱領をもっていた。ところが新しいウクライナ政府の領土綱領は、われわれにはわかっていない。

大体にいって、ウクライナで生じたクーデターは、今のところでは講和交渉に否定的に反映していない。反対

に、ウクライナのクーデターは、ソヴェト権力とウクライナ政府とのあいだの講和締結を不可能にするものではない。クーデター以後、講和交渉をおこなうための予備作業でしめしたウクライナがわの不決断とぐずぐずがやんだということを注意すべきである。

(84) クーデターの諸原因

会談のおわりに同志**スターリン**は、ウクライナでおこったクーデターをひきおこした諸原因の問題にふれた。

私の考えによると、このクーデターはさけられなかった。その原因は、一方では社会主義をもてあそび、他方ではウクライナの労仂者・農民と斗争するために、外国軍隊を呼びよせた中央ラーダの矛盾した態度に由来していた。中央ラーダは、ドイツに財政的および軍事的に従属し、それと同時に、ウクライナの労仂者・農民にたくさんの約束をあたえたが、まもなく彼らにたいして、がんきょうな斗争をはじめた。ウクライナのラーダは、この自分の最後の行動によって、ブルジョア・地主層がラーダを急襲した危機にあたって、だれにも立脚しようがないといった条件を、自分でつくりだした。

しかも階級斗争の本質、その法則によっても中央ラーダは、ながく権力をたもつことはできなかった。なぜなら革命運動の過程で、しっかりと権力について地盤をきずくことができるのは、なんらかの階級によって支持される分子だけだからである。そこでウクライナでは、二つの活路しか考えられなかった。すなわち労仂者・農民の独裁か、それともブルジョア・地主層の独裁かである。中央ラーダは小ブルジョア的な本性により、前者を促

進することはできなかった。ラーダは後者と和合することもできなかった。ラーダは、中途半ぱの態度をえらび、それによって自分に死の運命をおわせたのである。

『イズヴェスチヤ』第九〇号
一九一八年五月九日

タタール＝バシキール・ソヴェト共和国憲法制定大会召集のための会議での演説（二六）

一九一八年五月十一十六日

一　開会の辞

五月十日

同志諸君！　本会議は人民委員会議の議長の同意をえて、民族問題人民委員部の発議によって、召集された。会議の目的は、この州の憲法制定ソヴェト大会を召集するための委員会を組織することである。きたるべき大会の目的は、タタール＝バシキールの自治の限界と性格をきめることである。自治の思想は、諸民族に自由をあたえた十月革命の本質そのものから出ている。十月当時に人民委員会議によってあたえられたロシア諸民族の権利宣言と、ロシアを特有の生活様式と人口構成で区別される自治的な諸州の連邦と宣言した第三回ソヴェト大会の有名な決定は、十月革命の本質の形式的表現にすぎない。

第三回ソヴェト大会は、ソヴェト共和国憲法の一般的規定をあたえて、ロシアの諸民族の勤労分子に、彼らが自分たちの州でどのような具体的な政治的形態の組織をもつことをのぞんでいるか、また彼らが中央にたいしどのような関係にたつことをのぞんでいるか、意見をのべるように呼びかけた。すべての州のうちでフィンランドとウクライナだけが、はっきりと意見をのべたようにおもわれる……独立に賛意をのべたのである。そして人民委員会議が、これらの国のブルジョアジーだけでなく、プロレタリア分子も独立をえようとつとめていることを確認したのち、これらの国は、なんの妨げもなく要求するものをうけとった。

他の諸州にかんしていえば、それらの州の勤労分子は民族運動の問題でやや無気力に見えた。だが彼らの無気力がだんだん大きくなればなるほど、ブルジョアジーはますます積極性をしめした。ほとんどいたるところで、すべての州にブルジョア自治グループ(クーリヤ)が生まれた。それは「民族ソヴェト」を組織し、その州を民族軍隊、民族的予算等々をもつ独立の民族的諸区分にわけ、このために自国を民族斗争と排外主義の舞台にかえた。これらの自治グループ(私が念頭においているのはタタール人、バシキール人、キルギーズ人、グルジア人、アルメニア人等の「民族ソヴェト」である)は、すべてこれらの「民族ソヴェト」は、一つのものをえようとつとめた。それは自治をえて、中央権力が彼らの問題に干渉せず、彼らを統制しなくなることとである。「われわれに自治をあたえよ。そうすれば、われわれは中央ソヴェト権力を承認しよう。しかし州ソヴェトを承認することはできない。それはわれわれの問題に干渉してはならぬ。われわれは、すきなように自分たちを組織する。われわれは、自民族の労仂者・農民を自分のかってにあつかう。」ブルジョアがえようとつとめるのは、その本質上ブルジョア的な、あの自治であって、彼らはこの自治の内部で「自分たちの」勤労者にたいするまったく完全な権力を要

(87)

求する。

ソヴェト権力がこのような自治制を是認することができないということは、自明である。自治をあたえて、ソヴェトの不干渉を要求する民族ブルジョアジーに、この自治の内部の全権力が属するようにすること、タタール人、バシキール人、グルジア人、キルギーズ人、アルメニア人等々の労働者をタタール人、グルジア人、アルメニア人等のブルジョアのえじきにすること、——いや、ソヴェト権力は、こんなことに応じるわけにはいかない。

自治制は形式である。すべての問題は、どのような階級的内容がこの形式におさまっているかにある。ソヴェト権力はけっして自治制に反対しない、——それは自治制に賛成である。それも、全権力が労働者・農民の手中にあって、すべての民族のブルジョアが権力から遠ざけられるだけでなく、彼らが政府機関の選挙に参加することからも遠ざけられるような自治制に賛成なのである。

ソヴェトの原則にもとずく自治制が、このような自治制となるであろう。

(88)

二つの型の自治制がある。第一の型は純民族主義的なものである。この自治は民族主義の原則にもとずいて超地域的にくみたてられている。「民族ソヴェト」、これらのソヴェトをとりまく民族軍隊、民族的クーリヤ別の人口区分、そのさい不可避的になる民族的不和、——以上がこの型の自治制の結果である。このような型の自治制は労働者・農民代表ソヴェトの不可避的死滅にみちびく。ブルジョア的ラーダはこのような型の自治制をえようとつとめていた。ラーダがその成長と発展のために労働者・農民ソヴェトと戦争をしなければならなくなったのは当然である。外カフカーズではアルメニア人、グルジア人およびタタール人の民族ソヴェトの存在が、まさに

おなじ結果をもたらした。ゲゲチコリが外カフカーズの代表ソヴェトと人民委員部に、「諸君には、人民委員部と代表ソヴェトが擬制になってしまったということがわかっているのか。というのは全権力は、実際に自分たちの所属の民族軍をもつ民族ソヴェトの手にうつってしまったからである」と声明したのは、正しかった。

この型の自治制を、われわれは原則的に排斥する。

われわれは、べつの型の自治制、すなわち一民族ないし数民族が優勢な州の自治制の型を提案する。どんな民族的クーリヤも、どんな民族的隔壁もあってはならない！　自治は代表ソヴェトに立脚するソヴェト的自治制でなければならない。このことは、その州の人間の区分が、民族的な標識によらないで、階級的な標識によっておこなわれねばならないということを意味する。自治制の土台としての階級的な代表ソヴェト、これらの代表ソヴェトの意志表示の形態としての自治、――これが、われわれの提案する自治制の性格である。

ブルジョア世界は、州の自治と中央との関係の点で、一定の形態をつくりあげた。私が念頭においているのは北アメリカ、カナダ、スイスである。そこでは、これらの国では、中央権力は、州の全住民からえらばれた全国的議会と、これに並行して州政府からえらばれた連邦会議とから形成されている。こうして立法上の渋滞と、あらゆる革命的事業の圧殺をともなう二院制がつくりだされるのである。

(89)

われわれはこのような方式で国内に権力を建設することに反対である。われわれがこの方式に反対するのは、社会主義がこのような二院制を根本から否定するからというだけでなく、現在の時機を実際的に考量するからでもある。現在の移行期に、すなわちブルジョアジーがうちやぶられたが、まだおしつぶされておらず、ブルジョアジーの陰謀によってつよめられている経済上および食糧上の崩壊がまだ根絶されておらず、古い資本主義世界

が崩壊したが、新しい社会主義世界がまだ建設されおわっていないとき、このような時機には、社会主義の敵を決定的に抑圧し、新しい共産主義的経済を組織することができる、強力な全ロシア的権力が国にとって必要である。つまり都市・農村のプロレタリアートの独裁と呼びならわしているものが、われわれに必要である。このような時機に、中央権力と並行して地方および州の主権のある権力機関を創設することは、実際にはあらゆる権力の崩壊と資本主義への逆行を意味するであろう。だからこそ全国的に重要なすべての機能を中央権力の手中にのこしておくこと、州機関には主として純然たる州的性格の行政的・政治的および文化的機能をまかすことが必要である。それは学校、裁判、行政、一般法令を民族的生活様式の諸条件に適するように実施するのに必要な政治的な措置・形態・方法などであって、これらはすべて住民が理解できる母語でなされる。州中央執行委員会を頭部とする諸州の連合という一般にみとめられた型が、このような自治制のもっとも目的にかなった形態である。

これが現在の移行期に、いやおうなくそれが必要であるとみとめさせられる自治制の型である。それはプロレタリアート独裁の強化をはかるためにも、またブルジョア民族主義、すなわち帝国主義のこの最後のとりで、とロシアのすべての民族のプロレタリアが共同でたたかうためにも、必要とされるのである。

こうしたことは、みなわれわれの会議の任務を十分にはっきりときめている。会議は、それぞれの州の諸民族の勤労大衆がもっている要求の一般的情景を知るために、現地の報告をきく。つぎに、会議は一般的予備的な地域要図を作成する。この地域の勤労住民は憲法制定州ソヴェト大会選挙にひきいれられるが、このばあい選挙権は、ソヴェトに組織された勤労大衆にあたえられる。すなわちその自治地域の大衆だけでなく、隣接諸地区の大衆にもあたえられる。最後に、会議は憲法制定州ソヴェト大会召集の任務をおった委員会をえらぶ。自治問題の

解決、自治の権限の規定、および州の境界の最後的設定は、憲法制定大会にまかされる。

以上が今回の会議の任務である。

会議をひらくにあたり、会議が自分におわされた任務を十分に処理するであろうという確信をのべさせていただきたい。

二　閉会の辞

五月十六日

人民委員会議は、東部、まず第一に、もっとも不幸な回教的東部の諸民族の被圧迫・被搾取大衆の解放運動を援助することを、自分の神聖な義務とつねにみなしてきたし、また、みなしつづけるであろうということを、中(91)央ソヴェト権力の名において諸君にのべさせていただきたい。われわれの革命の全性格が、ソヴェト権力の本性そのものが、全国際情勢が、最後に、帝国主義的ヨーロッパと圧迫されたアジアのあいだにくらいするロシアの地理的な位置までが、――これらのすべてのことが、うたがいもなく東部の被圧迫諸民族の解放斗争を兄弟として支援する政策をソヴェト権力に命じている。

現存するすべての抑圧形態のうちで、もっともずるく危険な形態は、民族的抑圧である。ずるいというのは、それがブルジョアジーの略奪者的な顔つきをうまくおおいかくしているからである、危険だというのは、それが民族的衝突をひきおこすことによって、雷がブルジョアジーにおちるのを、たくみにそらせるからである。もし

(92)

ヨーロッパの略奪者たちが労仂者をたがいに世界的屠殺場へかりたてることができたとしたら、もし彼らがこれまでなお、この屠殺をつづけることができているとしたら、これは、とりわけヨーロッパの労仂者の頭をまひさせたブルジョア民族主義の力がまだきえうせなかったからである。民族主義とは、ブルジョアジーの最後の陣地であって、ブルジョアジーに決定的にかつには、彼らをそこからふりおとす必要がある。だが若干のわれわれの同志がやっているように、民族問題をよけてとおり、それを無視し、否定することは、民族主義を粉砕することを意味しない。けっしてそうではない！　民族的虚無主義は、社会主義の大業を害するだけであって、ブルジョア民族主義者をたすけるものである。民族主義を粉砕するには、まず第一に民族問題を提起し解決することが必要である。だが民族問題を公然と、また社会主義的に解決するには、これを、ソヴェトに組織された勤労大衆の利害に完全に、また決定的に従属させて、ソヴェト的な軌道におくことが必要である。こうして、また、こうしてはじめて、ブルジョアジーの最後の精神的武器をたたきおとすことができる。いま創立されようとしているタタール＝バシキール自治共和国は、われわれの革命全体にとって一般的であり、重要である本問題の実践的な解決である。この自治共和国をば、東部の回教徒諸民族にとって、抑圧からの解放の道をてらす生命の燈台たらしめたいものである。

タタール＝バシキール共和国の憲法制定ソヴェト大会召集のための会議を閉会することを宣言し、かつ諸君の自治共和国を組織するうえでの成功をのぞむことをゆるしていただきたい。

『プラウダ』第九六、一〇一号
一九一八年五月十八、二十四日

(93)

あいかわらずのうそ

『ナーシェ・ヴレーミャ』(一七)(夕刊)第九七号に、同紙通信員の言葉を通じてコンスタンチノープルからのドイツ無線電報の本文がつたえられている。それはつぎのように言っている、「ボリシェヴィキは、トゥルケスタンとアストラハンから強力な増援隊をえて、攻撃にうつった。そして回教徒の英雄的な抵抗にもかかわらず、ボリシェヴィキはバクー市を占領した」と。

この挑発的な無線電報が、事実とは絲もゆかりもないということを、公然と声明する。

(94)

バクーは革命の最初からソヴェト権力をみとめたし、これまでもみとめてきている。ボリシェヴィキはいちどもバクーを攻撃しなかったし、また、するわけがなかった。あったのは、一団のタタール人とロシア人の地主・将軍の冒険的な攻撃だけである。そして、この攻撃は、この一団にたいする回教徒とロシア人の労仂者・農民のしめした断固たる拒絶的な態度のために、完全な失敗におわった。ボリシェヴィキはいちども回教徒と斗争しなかったし、するわけがなかった。バクー・ソヴェトの権力は、バクーとその地区のあらゆる民族の労仂者・農民の権力を、まず第一に、回教徒民族の権力を代表していたし、また代表しているのである。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第九七号
一九一八年五月十九日

(95)

カフカーズの状況

一 外カフカーズ

外カフカーズの状況はますます険悪になっている。議会（セイム）による外カフカーズ独立の宣言（四月二十二日）は、チフリス「政府」を自由にふるまわせるはずであったが、実際には外カフカーズを国際的略奪者たちのわなにかけた。バツームにおける、いわゆる「講和交渉」（二八）がどんなふうにかたずくかは、近い将来がしめすことだろう。チフリスのメンシェヴィキとその政府が、ロシア革命から独立することは、彼らが不可避的にトルコ＝ドイツの「文明的な」略奪者たちに奴隷として従属することになるだろうという一事は疑いがない。それは、権力をにぎっているチフリスのメンシェヴィキとトルコ＝ドイツ帝国主義者との反ロシア革命の同盟となるだろう。メンシェヴィキのチヘンケリが将来のカフカーズのゴルボーヴィチの役をする……マルトフ派とダン派の諸君、教訓に富んだ光景ではないか……。

議会（セイム）議員カルチキヤンはチフリスからこうつたえている、――

「チフリスは動揺している。アルメニア人たちは内閣から脱退した。労仂者と農民は、外カフカーズの独

(96)

立宣言がもとで、街頭で反政府のデモンストレーションを組織している。クタイス、ホニ、レチフム、ゴリ、ドゥシェットで、独立問題にかんする住民投票を要求するデモンストレーションがおこなわれている。」

全アルメニアは、議会(セイム)議員の辞職を要求し、僭称チフリス「政府」の権力僭取に抗議している。一方、回教の中心であり、外カフカーズにおけるソヴェト権力のとりでであるバクーは、レンコラニとクバからエリザヴェートポリにいたるまでの、東部外カフカーズ全体をそのまわりに結集して、全力をあげてソヴェト・ロシアとの連絡を維持しようと努力する外カフカーズの諸民族の権利を、武器をとって主張している。チフリス「政府」の悪党に抗して一致して立ちあがり、武器をとって彼らからスフムを防禦している、黒海沿岸の英雄的なアブハジア(一九)についてはのべるまでもない。「老人も若者も、全アブハジアは、南からの二千の侵略者の徒党に反抗して立ちあがり、スフム南方二〇ヴェルスタのスフム近接地を防禦して、もう八日になる」と軍事革命委員会議長エシバはわれわれに書いてよこしている。ある資料によると、外カフカーズ部隊の攻撃は、海から武装輸送船隊と駆逐艦隊によって支援されている。しかしブレスト講和によると、また、それのドイツ的な解釈によると、われわれはスフムを防禦するために海から攻撃してはならないだけではなく、防衛する権利さえもたないということになっている。以上が、ドイツの「平和促進者」たちから外カフカーズの侵略者にあたえられる現実の支援である。このような状況では、スフムの運命はほとんどあらかじめきまったようなものだということは理解するにかたくない。外カフカーズの住民はチフリス「政府」に反対している。外カフカーズの住民はロシアからの分離に反対している。外カフカーズの労仂者・農民は、一団の議会(セイム)議員にさからって住民投票を支持している。なぜなら、だれも、断じてだれも、外カフカーズをロシアから分離する全権を議会(セイム)にあたえなかったからである。

状況はこうである。
(97) メンシェヴィキのうちでもっとも良心的な人々、すなわちジョルダニア、ツェレテリ、それからゲゲチコリさえ(さえ!)、このけがらわしい仕事をメンシェヴィキのうちでもっともよりごのみせぬ人々にまかせて、手をひいたのは、もっともなことである。

チフリスからわれわれにつたえられるところでは、カルス付近のトルコ人の軍団長は、アルメニアのカルス明渡しにあたって、もし外カフカーズ政府が近いうちにバクーを占領し、バクー地区の回教徒をすくうことができないようならば、それをすくうためにトルコ軍を派遣することはさけられないとおもうと声明し、また、これと並行して「外カフカーズ政府首班あてのヴェヒブ・パシャの手紙には、このことはさけられないとほのめかしてあった。」

われわれにはこれらの報道を文書にもとずいて点検する可能性はないが、ただ一つ疑いのないことは、もしトルコの「救世主」たちが実際にバクーに前進するならば、彼らは、住民の各層からの、なによりもまず回教徒の労仂者・農民からの強力な抵抗に出あうであろうということである。

このときソヴェト権力が、外カフカーズの勤労大衆のうばうことのできない権利を、侵略のたくらみに反対して、全力でもってまもるであろうということは、いうまでもない。

二 北カフカーズ

(98)

早くも一九一七年に、フィリモーノフ、カラウーロフ、チェルモーエフおよびバンマトフのような、一団の北カフカーズの退職将軍連は、自分たちのことを山地人(ゴーレツ)〔カフカーズ人〕同盟と宣言して、黒海からカスピ海にいたる北カフカーズ政府の名称をかたり、そして、ひそかにカレーヂン一派との共同進軍の準備をしていた。一九一七年の十一月、ロシアの中央におけるソヴェト権力の勝利ののち、この「政府」は、――政府といっては失礼なことではあるが――ロシア＝ドイツ戦線での休戦をくつがえして、イギリスとフランスの軍事代表団にとりいっていた。一九一八年のはじめ、カレーヂンの冒険の失敗ののち、このえたいのしれぬ「政府」は、政治の世界からは姿をけして、列車の略奪襲撃と都市、農村の平和な住民にたいする悪がしこい攻撃を組織するに満足していた。今年の春までに、だれもみなこの政府のことをわすれてしまった。というのは北カフカーズにあるクバニ州とテレク州では、例外なくすべての北カフカーズの部族と民族の広い層をそのまわりに結集したところの、人民の代表ソヴェトが真に強固になったからである。カバルダ人とカザック人、オセット人とグルジア人、ロシア人とウクライナ人は、幅の広い環となって**テレク**の代表ソヴェトをとりまいて結集した。チェチェネツ人とイングーシ人、カザック人とウクライナ人、労働者と農民は**クバニ**州の多数の代表ソヴェトを自分たちの代表者でみたした。これらすべての部族と民族の広範な勤労者層は、その大会の席上で、ソヴェト・ロシアとの不可分の関係を声高く宣言した。すべてこのことは、チェルモーエフやバンマトフのような僭称「政府」に政治の舞台から姿をけすことをよぎなくさせずにはおかなかった。だれでもみな、この奇妙な「政府」が永遠にほうむられたものとおもった。じじつ、バンマトフ一派の親友、いわゆるダゲスタンの管長(イマム)〔回教徒の管長〕は、ペトロフスクとデルベント付近で鉄道の略奪襲撃を組織して、まだ三月ごろには政府が存在していると声明していた。だが四

月の半ばにはすでに管長の冒険は、バクーの労働者のソヴェト部隊と当のダゲスタン人とによって一掃された。

(99) 彼らはロシア人将校からなる従者をつれた管長を、ダゲスタン山中においはらったのである。

しかし帝国主義は、もしそれがこの世で目的のために「あの世」から死者をよびよせることができないなら、帝国主義でないであろう。つい一週間まえに、死者からよみがえったチェルモーエフとバンマトフが署名した、黒海からカスピ海までの(それ以上でもなく、それ以下でもない!)独立(ふざけてはいけない!)北カフカーズ国家の創立をつげた公式声明が、われわれにつたえられた。

この僭称政府の声明書にはこう言ってある。「カフカーズの山地人同盟は、ロシアから分離して、独立国家を樹立することを決定する。」

「新国家の領土が境界とするのは、北は、旧ロシア帝国内でダゲスタン、テレク、スタヴローポリ、クバニおよび黒海等の州および地方が有していたのとおなじ地理的境界、西は黒海、東はカスピ海、南は外カフカーズ政府との協定によって、そのくわしい点がきめられる境界が、それである。」

けっきょく外カフカーズ「政府」は、トルコ=ドイツの「解放者」と、北カフカーズ政府は外カフカーズと、「交渉」をはじめているのである。明白なことだ。北カフカーズの冒険屋たちは、イギリス人とフランス人に失望して、いまや後者の敵をあてにしている。しかしトルコ人とドイツ人の略奪熱は限度を知らないから、北カフカーズの冒険屋が、トルコとドイツの「解放者」と「協定」を結ぶ可能性も、おそらくないわけではないであろう。

(100) われわれは、後者から、自分がドイツ条約に忠実なこと、友好関係を維持する覚悟があること等々についての

保障があるのだろうということをうたがわない。けれども現在は言葉でなくて行為を信じることになっており、しかも、これらの紳士の行爲はまったくはっきりしているので、ソヴェト権力は、北カフカーズの諸民族をありうべき侵略から擁護するために、全勢力を動員しなければならないであろう。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第一〇〇号
一九一八年五月二十三日

(101)

カフカーズの状況について

民族問題人民委員部から

日曜日の諸新聞に、イギリス人のバクーとアプシェロン半島の占領にかんする報道が出た。それはこう言っている。

「オデッサの諸新聞の報道によると、バクーから到着した人々は、メソポタミアからペルシアをへてカフカーズに侵入していたイギリス軍が、三週間まえ貨物自動車で市に進入したとつたえている。部隊は多人数で、見たところ前衛らしい。イギリス人はコルニーロフの諸部隊と連絡をつけているらしい、という説もある。べつの新聞は、イギリス人が、アプシェロン半島とバクーを占領し、そこからチフリス、アレクサンドロ－ポリ、サリカムィシ、カルス、エルゼルーム方面に運動しつつあると報じている。五月二十四日。」

民族問題人民委員部は、これにかんして、この挑発的な、しかも、きわめてあやしい筋から出ている報道は、現実とはなんの共通点もないということを声明しなければならない。どんなイギリス軍部隊もバクーにはあらわれなかったし、またバクー県全体と外カフカーズの東部全体が、ソヴェト軍隊によって維持されていることだけからしても、あらわれるはずがなかった。このソヴェト軍隊は、呼びかけさえあれば、外国の兵力と（どんな制

服をまとっていようと、）たたかおうと覚悟しているのだ。五月二十五日付の非常委員会委員シャウミャンの報道によると、「バクーとその地区には、先日アジカブルに襲撃をおこない、ソヴェト軍によってはるか西方にうちしりぞけられたタタール人の地主をかぞえなければ、さしあたり、だれからの危険にもおびやかされていないのである。

外カフカーズ南部の状況にかんしていえば、そこでは、実際に危険がある。だが、それはイギリス軍のほうからではなく、トルコ軍のほうからであって、彼らは「北ペルシアのイギリス人に抵抗するために」、タヴリスにむかい、アレクサンドローポリ－ジュリファの線を突破しつつある。

外カフカズ議会(セイム)議員カルチキャンは、五月二十日、これについて、つぎのようにつたえている。——

「五月十三日に、トルコは、バツームでつぎの要求を提出した。それはイギリス人がモスルのほうから圧迫していること、トルコ軍としては、ごく短期間に北ペルシアを占領する必要があることを理由として、トルコ軍隊をアレクサンドローポリ－ジュリファ鉄道沿いにペルシアにむけ、通過させる要求である。トルコはその要求を実力によって裏ずけている。十五日朝、アレクサンドローポリの砲撃がはじまった。不意をおそわれたわが軍は攻撃を阻止することができず、十六日にアレクサンドローポリをあけわたした。十七日には、トルコ軍は、住民に手をふれないことを約束して、ジュリファへの彼らの軍隊の自由通過を保障することを要求した。反対のばあいには実力で突破すると脅迫した。アレクサンドローポリの退却は、まったく軍隊を混乱させたということと、抵抗するばあいにはスルマリンとエチミアジンの両郡の住民が非常な災厄にあうということを考慮して、われわれはトルコ軍の要求に同意せざるをえなかった。アレクサンドローポ

リ郡の住民はことごとくにげて、バンバクーロリ地区にあつまった。スルマリン郡の住民も、同様であった。本日、アハルカラクス郡の住民が出発して、ツァルカのほうにむかっているという情報をうけとった。バツームにいる代表団は最後通牒にかんして抗議を提出した。しかし、このことを開戦の理由とせず、交渉をつずけることに決定した。」

(103)

以上をつたえるにあたって、民族問題人民委員部は、オデッサからの虚報は、明らかに、すべての権利を侵害し、ペルシアの鉄道線路の占領をはかっているトルコの侵入をおおいかくすのを目的としているということを、確認しないわけにはいかない。

『プラウダ』第一〇四号
一九一八年五月二十八日

ドン地方と北カフカーズについて

（事実と陰謀）

キーエフのウクライナ代表団は、講和会議の第一回会議の席で、彼らはドン、北カフカーズその他の地方「政府」の声明をもっているが、これらの政府は、ロシアから分離し、ウクライナ＝ドイツ政府と友好関係を樹立したと宣言しているとのべた。ウクライナ代表団長シェルーヒン氏はこうのべた。「われわれは(二〇)ソヴェト権力の代表との交渉に反対するものではないが、われわれはロシア連邦の権力が、いったいどの州におよんでいるかを知りたいものである。というのは私の手もとには、ロシアの一員としてとどまることをのぞんでいない、多数の政府（ドン、北カフカーズ、その他）の声明があるからである。」

トルコ人とドイツ人は、ウクライナ人のこの主張に反対しないばかりでなく、逆に、いくたの声明で前記の半合法「政府」の要求を確認し、新しい地域の「自決」（すなわち強奪）を目的とする形式的手段として、これにつかまっている……。

だが、この神秘的な「政府」とはどんなものか。それは、どこからきたのか。

まず第一に奇妙なのは、これらの「政府」の援護者として、また、これらすべての運動の公式の首唱者として

あらわれているのが、たったきのう、だれかの……いずれにせよ人民のではない……恵みによってこの世に出たところの、ウクライナのゲットマン〔カザック軍長〕政府だということである。ウクライナ代表団は、いったいどんな権利があって、ロシア連邦の何千万という住民によって自由にえらばれ、自分のまわりに、とりわけ、その州の何百万という住民によってえらばれたドン、クバニ、黒海地方、テレクの広範な州ソヴェトを結集したところの、ソヴェト権力とこんな会話をする決心をしたのか。こうしたことを考えてみると、人民によってえらばれなかっただけでなく、一つの付設された法定財産選挙資格制の議会（せめて上層部の国会のようなものでもよいが）さえもたない現在のウクライナ政府に、どんな権威がありうるだろうか。それだけでなく、もし講和交渉がキーエフではなく、どこか中立地でおこなわれたとしたら、さいきん廃されたウクライナ・ラーダがあらわれ、ゲットマン政府との条約は、この政府をみとめていないウクライナ人民を拘束することはできないと声明するにちがいないということは、証明ずみと見てよいだろう。このさい二つの問題がおこるであろう。（一）ゲットマン政府の全権か、それともウクライナ・ラーダの全権か。どちらの全権をこのばあいに、より現実的なものとみとめることができるだろうか。（二）そのばあい、あらゆる「声明」を高く評価する現在のウクライナ代表団は、自分の正当なことをしめすために、なにをのべることができるだろうか……。

第二に、これにおとらず奇妙なのは、ウクライナ代表団の声明を支持し、また「自決」をはかるドンと北カフカーズの冒険主義的「政府」に、しきりにとりいっているところのドイツは、ポーランドのポズナニ〔ポーゼン〕、デンマークのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン、フランスのアルザス・ロレーヌの自決について、一語も口にしていないことである。前記諸地方のデンマーク人、ポーランド人およびフランス人の大衆的抗議にくらべると、

急ごしらえの、だれにもみとめられない南ロシア「政府」の冒険主義的声明が、あらゆる権威、あらゆる価値、あらゆる礼節をうしなっているということを、このうえ証明する必要があるだろうか……。
しかし、こうしたことは、みな「ささいなこと」である。肝心な問題にうつろう。
では南ロシアの神話的な「政府」の起源は、どんなものか。
ドン「政府」はその「覚え書」のなかでこう言っている。「一九一七年十月二十一日に、ウラヂカフカズ市において新しい連邦国家、すなわち東南同盟の創設にかんする条約が調印された。このなかにくわわったのは、ドン、クバニおよびアストラハンのカザック軍の地域の住民、北カフカーズおよび黒海沿岸の山地人ならびに東南ロシアの自由な民族である。」
五月十六日にわれわれに送付された北カフカーズ「政府」の代表者、チェルモーエフとバンマトフの無線電報は、これとほとんどおなじことを言っている、——
「カフカーズの諸民族は合法的に民族会議をえらんだ。それは一九一七年五月と九月に会議をもち、カフカーズの山地人同盟の創立について声明した。」そして「カフカーズの山地人同盟は、ロシアから分離して、独立国家を樹立することを決定する。この国家の領土が境界とするのは、北は、旧ロシア帝国内でダゲスタン、テレク、スターヴロポリ、クバニ、および黒海等の州および地方が有していたのとおなじ地理的境界、西は黒海、東はカスピ海が、それである。」
つまり、ケレンスキー政府をたおした十月革命の勝利の前夜に、この政府と関係のあった一団の冒険家はウラヂカフカズで会議をもったらしく、自分たちは「全権」政府であり、南ロシアはロシアから分離したと宣言した。

そのさい彼らは、これにたいするその住民の同意をきいてみる労すらとらなかった。もちろんロシアのような自由な国では、分離主義の空想にふけることは、だれにも禁じられていない。とはいえソヴェト権力が、南ロシアの諸民族とすこしも結びつきのない、空想家たちの冒険主義的声明を見ならうことはできなかったし、また見ならってはならなかったということは、容易に理解できることである。われわれはすこしもうたがわないが、もしドイツが、げんざいロシアでえられているような自由を市民にあたえるなら、ポズナニ、アルザス・ロレーヌ、ポーランド、クールランド、エストニアその他は、民族政府の網でおおわれることであろう。これらの政府は自民族からおわれて、げんざい亡命中であるボガエフスキー一派とクラスノフ一派、パンマトフ一派とチェルモーエフ一派よりも、はるかに多く政府とよばれるだけの理由がある……。

以上が南ロシアの神話的な「政府」の発生状況である。

ドン「政府」の「覚え書」とチェルモーエフの無線電報が言っているのは過去のこと、一九一七年の九月と十月のこと、および退職将軍の避難所としてのウラヂカフカズのことである。しかし、そのときから約一年すぎた。このあいだに、カザック人とよそもの〔カザック地方にいるがカザックに属しない農民〕、アブハジア人とロシア人、チェチェネツ人とイングーシ人、オセット人とカバルダ人、グルジア人とアルメニア人の何百万という住民をまわりに結集しているドン、クバニ＝黒海およびテレク各州の人民ソヴェトが形成された。これらの州の住民は、ずっと以前にすでにソヴェト権力を承認し、彼らにあたえられた自決権を広く行使している。一方、カラウーロフ一派とボガエフスキー一派、チェルモーエフ一派とパンマトフ一派が、以前に居をかまえていたウラヂカフカズがテレク人民ソヴェトの所在地として宣言してから、すでに久しくなる。時代おくれの将軍たちと一

九一七年夏の彼らの冒険主義的声明が、これら周知の事実にとって、はたしてどんな意義があるか、ききたいものである。九月と十月のロシアには、ケレンスキー政府がなお存在していて、げんざい権力をにぎっているが、地下においこまれていたボリシェヴィキ党にたいし、怒号をあびせかけていた。もし一九一七年の九月と十月の当時は二ヵ月が、ウクライナ代表団とドイツ政府にとって、そんなに神聖な意義があるのだったら、なぜ彼らは当時まだたっしゃであったケレンスキー政府の残党を、講和会議に招請しなかったのだろうか。一九一七年の九月と十月に、これまたたっしゃであったチェルモーエフとカラウーロフ一派の「政府」の残党を招請しているのとおなじように。

あるいはまた、ソヴェト権力と交渉するための代表団を準備中であったウクライナ・ラーダが、民族自決の原則のドイツ流の「解釈」を「理由として」、一瞬のうちに政治的に存在しないものにされた一九一八年四月よりも、一九一七年九月のほうをとりあげるのは、いったい、どうしたことなのか……。

あるいは最後に、カザック人によって放逐されたカザックの将軍クラスノフ――彼は一九一七年末にガッチナ付近でソヴェト軍の捕虜となり、のちに誓約のうえでソヴェト権力により釈放されたのだが、彼の声明が「非常に重要な政治的行為」と見なされているのに、たとえば、そのまわりに何十万というロシア人とタタール人の住民を結集し、クリミアとロシア連邦との不可分の結合を、三度まで無線電信を通じて宣言したクリミア人民委員会議の声明が、政治的意義をもたないものと見なされるのは、なぜか。

カザック人によって放逐された将軍クラスノフが、ウクライナとドイツの統治者の保護をうけているのに、住民から自由にえらばれたクリミア人民委員会議が、強盗のように銃殺されているのは、なぜか。

明らかに、ここでは「声明」の真実性や、この「声明」を支持する大衆が問題になっているのではない。いわんや問題は、公然たる強盗が「自決」をむざんにひきまげ、ゆがめて理解していることにあるのではない。ほかでもない、たんに「声明」がウクライナとドイツの帝国主義的陰謀愛好家たちに非常に有利だという点にある。なぜなら、それは新領土を略奪し、隷属させようという彼らの熱望をうまくおおいかくしているからである。

将軍クラスノフの代表とおなじくらいに「合法的な」、いわゆるドン政府の多くの代表団のうちから、ウクライナ人とドイツ人が、クラスノフの代表団をえらび出した――なぜなら、その他のすべての代表団は、ドイツとちがった「方向」をとったから――ということは特徴的である。そのさいクラスノフ―ボガエフスキー「政府」のこじつけと不自然さは、あまりにも明らかであったから、クラスノフに任命された多くの大臣（国民教育大臣パラモーノフ、農業大臣セミョーノフ）は、「自分らの大臣任命が将軍クラスノフにより自分らの不在中になされた」ということを、その拒否の理由にあげて、公式に任命を拒否したくらいである。だが、このことはウクライナとドイツの自決論者をすこしもこまらせないらしい。なぜならクラスノフはついたてとして、彼らに便利だからである。

これにおとらず特徴的なのは、一月にはもう永遠の眠りについていた、いわゆる東南同盟が、五月にウクライナのどこかで、あるいは、こともあろうにコンスタンチノープルで、とつぜん復活したことである。しかも北カフカーズの諸人民は、彼らがずっと以前にほうむった「政府」が非合法的にコンスタンチノープルともつかず、キーエフともつかずに「存在」しつづけ、そこから彼らのために法律を書こうとしている、ということをかならずしも知っていない。この簡単な陰謀も、ウクライナとドイツの自決論者をこまらせないらしい。なぜなら、そ

れはもうける可能性をあたえるからである。

一方では、南ロシアの権力を渇望する冒険屋たち、他方では、政治的陰謀の作者たち、——これが彼らの「仕事」である。

自決論者諸君は南ロシアの諸民族の名をかくれみのにつかっているが、その南ロシアの民族自身は、独立問題にたいして、どんな態度をとっているだろうか。

ドンからはじめよう。そのまわりに州の住民の大多数を結集しているドン・ソヴェト自治共和国が、すでに二月このかた存在している。七百人以上の代議員をあつめた四月の州大会では、ドン共和国がその自治的な一部分を構成している、ロシアとの不可分の結合が、声高く確認されたということは、だれにも秘密でない。ドン共和国中央執行委員会は、できたてのクラスノフ—ボガエフスキー「政府」の要求にかんして、五月二十八日付の決議で、つぎのように言っている、——

「ドン・ソヴェト共和国中央執行委員会は、人民委員会議とキーエフにある講和会議に、ドンには中央執行委員会とその幹部会のほかには、どんな権力もないということを通告する。名のり出た、あるいは名のり出ているどの政府もすべて国事犯であり、彼らは反逆罪で人民裁判に付されるであろう。いま講和会議にドン政府からの代表が出席しているという報道が、われわれのもとにとどいた。国家権力としてわれわれは、ドン共和国のソヴェト権力の身分証明書なしには、どんな代表にも講和交渉をゆるしてはならないこと、また、もしこのようなものがいるとすれば、それは不法かつ僭称であると宣言し、国事犯として裁判に付されるであろうということを、人民委員会議とキーエフの講和会議に声明する。中央執行委員会は『ドン政府』

の僣称代表を講和会議から排除することを要求する。なぜなら、この代表は不法であって、講和交渉をおこなうことをゆるしえないものだからである。

中央執行委員会議長　ヴェ・コヴァリヨフ
書記　ヴェ・プジレフ

（五月二十八日採択）　ツァリーツィンにて」

クバニにうつろう。この州の例外なくすべての部分と、管区の九〇％の住民をそのまわりに結集している、クバニ＝黒海地方自治ソヴェト共和国は、だれにも知られている。チェチェネツ人とイングーシ人も参加し、カザック人のヤ・ポルヤンを議長とした、今年の四月のクバニ＝黒海州の盛大な大会は、州とロシアの不可分の結合を厳粛に確認し、また、おなじように厳粛に、冒険愛好家、フィリモーノフやクラスノフのような、あらゆる連中を法律の保護外においた。さらにスフムからバタイスクまでのソヴェト・ロシアを身をもってまもっている、武装した数万のクバニ人は、クバニと黒海地方の感情と共鳴を十分に雄弁にかたっている。恩人のクラスノフ—フィリモーノフ一派が、その破滅を首をながくしてまっているところの海軍のことについては、いうまでもない……。

(112)最後に、テレク州。テレクには、そのまわりにすべての、あるいは、ほとんどすべての（九五％）、都市はいうまでもなく、アウル〔カフカーズ山地の山村〕スタニーツァ〔カザックの村落〕、村、小都市を統合しているテレク州人民ソヴェトがあることは、だれにも秘密ではない。すでに今年一月の第一回州大会では、すべての代議員がひとりももれなく、ソヴェト権力とロシアとの不可分の結合とに賛成した。第一回よりも広範で、盛大な四月

（119）

の第二回大会は、この州をロシア連邦の自治ソヴェト共和国と宣言し、ロシアとの結合を、厳粛に確認した。いまひらかれている第三回州大会は、一歩前進して言葉から実行にうつり、まねかれざる客の使害からテレクを（テレクだけではないが）まもるために市民に武器をとれと呼びかけている。いわゆるドン政府の、いわゆる覚え書は、あたかも「東南部の自由な民族」がロシアからの分離をのぞんでいるように言って、これらの民族について多弁をろうしている。事実は「声明」の最良の反論であると考えて、われわれは事実にものがたらせよう。

まず第一に、テレク人民ソヴェトの決議に耳をかたむけよう。

「コンスタンチノープルにいる北カフカーズの代表が北カフカーズの独立を宣言し、そして、これをトルコ帝国政府とその他の列強に通牒したなどということが、電報でテレク人民ソヴェトに明らかになった。チェチェネツ人、カバルダ人、オセット人、イングーシ人、カザック人および、よそものの諸部会からなるテレク人民ソヴェトは、テレク地方の諸民族はいちども、だれも、そして、どこにも前記の目的のために代表委員を派遣したことはないということ、もしげんざいコンスタンチノープルにいる特定の人々が自分をテレク地方の諸民族の代表だと称して、これらの諸民族の名で行動するとしても、それは彼らとしては僭称と冒険にほかならないということを確認する。

テレク人民ソヴェトは、ぺてん師たちがだますことのできたトルコ政府の政治的近視眼と単純さに、驚嘆の意をあらわすものである。

うえに列挙した部会からなるテレク人民ソヴェトは、テレク地方の諸民族がロシア連邦共和国のひきはなすことのできない部分を構成していることを声明する。

テレク人民ソヴェトは、外カフカーズ政府が北カフカーズを外カフカーズ独立宣言の挙にひきいれることに抗議する。」(テレク人民ソヴェト機関誌『ナロードナヤ・ヴラスチ』〔『人民の権力』〕を見よ。)

(決議は、五月九日、満場一致採択。)

こんどは、僭称者たちとその保護者たちから中傷されているチェチェネツ人とイングーシ人にかたらせよう。これはすべての、あるいは、ほとんどすべてと言ってよいイングーシ人とチェチェネツ人を結集している、彼らの部会の決議である。

「テレク人民ソヴェトのチェチェネツ=イングーシ部会の特別会議は、北カフカーズの独立宣言の報道を審議のうえ、満場一致でつぎの決議を採択した。すなわち北カフカーズの独立宣言は、非常に重大な行為であって、すべての関係住民の承諾と同意のうえで、おこなわれなければならない。

チェチェネツ=イングーシ部会はつぎのことを確認する。すなわちトラペズンドのトルコ代表団、あるいはコンスタンチノープルのトルコ政府とどんな交渉をするためであろうと、どんな代表をもチェチェネツ=イングーシ人民はおくらなかった、またチェチェネツ=イングーシ人民の意志を表現する、どんな機関でも会議でも、独立問題はいちども審議されたことがなかった。

それゆえ自分を選挙しなかった人民の名においてあえてかたる人々を、チェチェネツ=イングーシ部会は僭称者であり、人民の敵であると見なすものである。

チェチェネツ=イングーシ部会は、北カフカーズのすべての山地人と、革命によって獲得された自由との唯一の救いは、ロシアの革命的民主主義との緊密な一致団結にあることを声明する。

このことは、自由にたいする生まれながらの愛が命じていることであるばかりでなく、さいきん数十カ年間、北カフカーズと中央ロシアを、一つの不可分の全体に結合したところの経済的関係もまた命じていることである。」

（五月九日採択。テレク人民ソヴェト機関誌『ナロードナヤ・ヴラスチ』を見よ。）

つぎに、テレク人民ソヴェトの会議の席でのイングーシ人とチェチェネッツ人がわの演説者、同志シェリポフの熱弁の抜粋がある。それはダゲスタン人にたいする、あらゆる非難を阻止するにたりるくらい明確である。

「ロシア大革命のおかげで、われわれはすばらしい自由をえた。この自由をえようとしてわれわれの祖先は何世紀も努力をし、銃剣にとびかかってやぶれた。われわれが自決権の保障をえた現在、人民はこの権利をけっして、だれにもわたさないであろう。いま北カフカーズの独立を論じているのは、地主、公爵、挑発者とスパイであり、シャミールが五〇年のあいだ死にものぐるいに、それとたたかったものである。これら人民の敵は、カフカーズの独立を宣言し、管長（イマム）支配を布告しようと個々の企てをしている。だがシャミールは、これら公爵の祖先の頭をわったし、今もそうするであろうと私は断言する。イングーシ人とチェチェネツ人の人民を代表しているわれわれの部会は、特別会議で、北カフカーズの独立宣言問題にたいする、その見解を、周知の決議のなかで表明した。」（前記を見よ。『ナロードナヤ・ヴラスチ』からとる。）

以上が事実である。

すべてこのことをドイツ＝ウクライナ＝トルコの自決論者は知っているだろうか。もちろん知っている！　なぜなら南ロシアの州ソヴェトはまったく公然と、万人の面前で行動しており、一方、これらの紳士の手さきは十

(115) 分に注意して、われわれの新聞を読んでいるのだから、周知の事実を見うしなうわけはないからである。

それならば神話的な「政府」にかんするウクライナ代表の上述の声明、ドイツ人とトルコ人が言葉のうえでも行為のうえでも支持している声明は、いったいどういうことになるのか。

ただつぎの一事になる。すなわち見かけだおしの「政府」を、新しい土地を侵略し隷属させるために、ついたてとして利用することである。ウクライナ・ラーダにかくれて、「ブレスト条約にもとずいて」（おお、なるほど！）ドイツ軍は前進し、ウクライナを占領した。しかし今では、ついたてとしての、援護物としてのウクライナは、自分の力をつかいはたしてしまったように見える。ところがドイツ人は新しい前進を必要としている。そこで、新しい援護物、新しいついたての需要が生じた。しかし需要は供給を生むものであるから、クラスノフ、ボガエフスキー、チェルモーエフ、バンマトフのような連中が時をうつさずあらわれて、つかってくださいと申し出た。ドイツ人から指導と補給をうけるクラスノフやボガエフスキーのような連中が、ごく近いうちにドンを「解放」するために、ロシアをさして前進するだろうということは、ありそうもないなどとは、けっして言えない。そのさいドイツ人は、ブレスト条約にたいする忠実さを、もういちどちかおうとつとめるであろう。クバニ、テレク、その他についても、これとおなじことを言う必要がある。

ここに核心がある！

ソヴェト権力は、もし侵略者と圧制者に抵抗するために、その全力をことごとく動員しないならば、自分を生きながらほうむることになるだろう。

だがソヴェト権力は、これを動員するであろう。

人民委員　イ・スターリン

『プラウダ』第一〇八号
一九一八年六月一日

(116)

ヴェ・イ・レーニンへの電報

六日ツァリーツィン着。[(二二)] 経済生活の全分野の混乱にもかかわらず、秩序をたてることは、やはり可能である。ツァリーツィン、アストラハン、サラトフでは穀物専売と公定価格がソヴェトにより廃止され、ばか騒ぎと投機がおこなわれている。ツァリーツィンでは〔配給〕切符制と公定価格を実施できた。アストラハンとサラトフでも、これを達成する必要がある。さもなければ、この投機というヴァルヴをとおって、ありたけの穀物がながれさるであろう。中央執行委員会と人民委員会議のほうでも、これらのソヴェトにたいし、投機の取消しを要求していただきたい。

鉄道運輸は多くの協議会と革命委員会の努力で完全に崩壊している。私はよぎなく特別委員をもうけた。それは協議会の抗議にもかかわらず、すでに秩序をうちたてている。委員は、協議会があろうとは思いもかけなかった多くの機関車を諸方で発見している。調査により、一日にツァリーツィン—ポヴォーリノ—バラショーフ—コズロフ—リャザーニ—モスクワの線に八本以上の直通貨物列車を運転できることがわかった。いまツァリーツィンで列車をあつめている。一週間後に「穀物週間」を宣言し、約百万プードを鉄道従業員からなる特別護送班つきで、いちじにモスクワにおおくりする。このことを予告する。

(117)

水運では、たぶんチェコスロヴァキア軍と関連して、ニージニ・ノーヴゴロドが汽船をとおさないために生じた停滞がある。汽船をツァリーツィンへ即刻出航させる指令をあたえていただきたい。

報道によると、クバニのスターヴロポリには、南部で穀物仕入れに従事していた、じゅうぶん信頼できる買付代理業者がいる。キズリャルから海への線はすでに敷設されている。ハサヴ・ユルトーペトロフスク線は、まだ復旧していない。シリャプニコフ、建設技師、腕ききの職工、それから機関車作業班をおくっていただきたい。

バクーに特使をおくった。近日中に南方に出発。取引全権委員ザイツェフは国有財産の横流しと投機のかどできょう逮捕されるであろう。シュミットにこれ以上ぺてん師をおくらないようにおつたえをこう。ヴォローネジの五人協議会(二三)が、自分たちだけの利害のために私の全権委員に妨害しないようにと、コボーゼフに指示されたし。

入手した情報によると、バタイスクはドイツ軍に占領された。

人民委員　スターリン

ツァリーツィンにて
一九一八年六月七日

一九三六年、『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』〔『プロレタリア革命』〕誌、第七号にはじめて印刷

(118)

ヴェ・イ・レーニンへの手紙

同志レーニン。

戦線へいそいでいます。用件だけを書きます。

(一) ツァリーツィン以南の線はまだ復旧されていません。必要があればだれだろうとかりたて、どなりつけています。まもなく復旧させるつもりでいます。われわれがだれかれの(自分も他人も)容赦はしないこと、穀物をおくることは、確信なさってけっこうです。もしわれわれの軍事「専門家」(へぼ職人!)がねむっていなかったら、また、ぶらぶらしていなかったならば、線は遮断されなかったでしょう。また、もし線が復旧されるとしたら、それは軍人のおかげではなく、彼らにさからったからです。

(二) ツァリーツィン以南に多くの穀物が車ずみで集積されました。道路がかたずけられるやいなや、御地にむけて穀物を直通貨物列車でおくりましょう。

(三) あなたの連絡をうけとりました。(一二三) おこりうる不測のことを予防するために、あらゆることをやりましょう。われわれがためらわないことを確信してください。

(四) バクーには「バクー人民委員会議議長エス・ゲ・シャウミャンへの」手紙をもたせて特使をおくりまし

た。

（五）トゥルケスタンにかかわる事態は悪く、イギリスはアフガニスタンを通じて行動しています。手おくれにならないうちに緊急策をとるため、だれかに（あるいは私に）南ロシア地区における（軍事的な性格の）特別全権をあたえてください。

辺境地方と中央の結合が不良なので、適時に緊急措置をとるため現地に大きな全権をもつ人をおくことが必要です。もしその目的でだれかを（それがだれであろうとも）任命されるならば、直通電話で知らせてください。そして命令をおなじく直通電話でおつたえください。さもないとムルマンスクの二の舞をする危険があります。(二四)

トゥルケスタンについての情報をおおくりします。(119)

草々

あなたの　スターリン

ツァリーツィンにて

一九一八年七月七日

『プラウダ』第三〇一号に一部分印刷された

一九二九年十二月二十日

ヴェ・イ・レーニンへの手紙

同志レーニン。

すこしばかりのべます。

(一) もしトロツキーがトリフォーノフ(ドン州)、アフトノーモフ(クバニ州)コッパ(スターヴロポリ)、フランス公使館員(彼らは逮捕にあたいした)などに、よく考えもしないで、見さかいもなく信任状をあたえるならば、そのときには一カ月もたてば、わが北カフカーズでは万事はくずれ、この地方を決定的にうしなうであろうということを、確信をもって言うことができます。トロツキーの身のうえには、かつてのアントーノフとおなじことがおこっています。現地のものに知らせずに任命すべきでないこと、そうでないとソヴェト権力にとって騒動がもちあがるということを、彼におしえこんでください。

(二) もしわれわれに、操縦士つきの飛行機、装甲自動車、六インチ砲があたえられないと、ツァリーツィン戦線はもちこたえられず、長期にわたって鉄道をうしなうことになりましょう。

(三) 南部には穀物はたくさんあります。だが、それをえるためには、軍用列車、軍司令官などからの妨害にあわない、ととのった機関をもつことが必要です。そのうえ食糧調達員を軍人が援助することが必要です。食糧

（121）
問題は、とうぜん軍事問題とからみあっています。この仕事のためには私に軍事的全権が必要です。私はすでにこのことを書きましたが、返事をもらいませんでした。いや、けっこうです。それなら私は自身で、仕事をだめにする軍司令官とコミッサールを形式ぬきでやめさせましょう。仕事の利害は私にそうささやきます。そして、もちろんトロツキーからの紙きれがなくとも、そのことは私をひきとめはしないでしょう。

イ・スターリン

ツァリーツィンに
一九一八年七月十日

はじめて印刷

ヴェ・イ・レーニンへの手紙

南部の情勢は容易ならぬものがあります。最高軍事会議は、完全に乱脈になった遺産をうけとりました。それは、一部は以前の軍事指導者の不活発により、一部は軍事指導者により軍管区の各課にひきいれられた人々の陰謀によって乱脈にされたものです。すべてを初めからやりなおさなければなりませんでした。補給の仕事をととのえ、作戦課をおき、戦線のあらゆる地区と連絡し、古い――私は犯罪的なと言いたいのですが、――命令を撤回し、そして、こうしたことをしたのちに、やっとカラチにたいし、チホレツカヤ方面をめざして南部にたいし、攻撃をおこないました。ポヴォーリノ地区をふくむミローノフ、キクヴィッゼの北部地区が壊滅をまぬかれるのを期待して攻撃をおこなったのです。ところが、これらの地区はもっとも弱く、かつ安全ではないことがわかりました。ミローノフその他のものが東北方に退却したこと、リポークからアレクシコフまでの全鉄道線路のカザック人による占領、カザックの若手のパルチザン部隊のヴォルガ方面への移動、カムィシーとツァリーツィン間のヴォルガぞいの連絡を遮断しようとする後者の企ては、あなたのご承知のことです。

他方、ロストフ戦線と一般にカリーニン部隊は砲弾と弾薬筒の欠乏のために、堅固さをうしない、チホレツカヤ、トルゴヴァヤをあけわたし、見たところ決定的な崩壊過程をへています（カリーニン部隊についての正確な

情報をこれまでうけとることができませんでしたから、「見たところ」と言います)。

私は、キズリャル、ブリャンスコエ、バクーがおちいった危急の状態についてはもう言いません。親英的傾向は決定的に崩壊していますが、戦線では事態はまったく不安な状態にあります。キズリャル、プロフラドナヤ、ノヴォ・ゲオルギエフスコエ、スターヴロポリは蜂起したカザック人の手中にあります。ブリャンスコエ、ペトロフスク、ミネラリヌイエ・ヴォドゥイ、ウラヂカフカズ、ピャチゴルスク、それからたぶんエカテリノダールは、今のところ、まだもちこたえています。

こうして、南部との、その食糧地帯との運絡がたたれるという状態が生まれ、中央を北カフカーズと結ぶツァリーツィン地区そのもののほうは、中央からきりはなされ、あるいは、きりはなされたも同然になっています。

このために、われわれは防禦の体勢をとり、かつツァリーツィン戦線の諸地区から戦斗部隊を撤収してチホレツカヤ方面への攻撃行動を停止すること、それらの部隊から六千の兵士の北方突撃隊を編成すること、これをドンの左岸にそいホピョール河にいたるまで派遣することにきめました。この計画の目的は、ツァリーツィン—ポヴォーリノ線を掃蕩すること、および敵の後方に進出して、それを攪乱し、撃退することです。われわれには、ごく近いうちに、この計画の実現を期待する根拠がすっかりそろっています。

以上略述した不利な情勢は、つぎのことで説明すべきです。

(一)　十月にはソヴェト権力のためにたたかった第一線将兵、「自まえ農民」が、ソヴェト権力反対へと転換したこと(それは穀物専売、公定価格、徴発、闇取引撲滅を心からきらっています)。

(二)　ミローノフ部隊がカザック人からなっていること(ソヴェト部隊と自称するカザック軍は、カザック反

(124)

革命との決定的な斗争をおこなうことができないし、また、それを希望していません。カザック人が何連隊となくミローノフのがわについたのは、武器をうけとり、現地でわが軍の配置を研究し、それから何連隊もつれてクラスノフのがわにねがえるためです。ミローノフは三度もカザック軍に包囲されました。なぜなら彼らはミローノフの地区のことなら、なにからなにまで知りつくしていたからです。そして当然なことですが、彼を全敗させました)。

(三) 連絡と協同行動の可能性を排除するキクヴィッゼ諸部隊の部隊構成。

(四) すべてこうしたことのために、左翼方面で支点をうしなったシヴェールス諸部隊の孤立。

ツァリーツィン＝ガシューン戦線の積極的な面としてみとめるべきことは、部隊の混乱が完全に根絶されたこと、いわゆる専門家(一部はカザック軍を、一部はイギリス＝フランス軍を大いに支持している)を、適時に追放したことです。このことは、諸部隊のわれわれにたいする同情をたかめ、部隊内に鉄の規律を確立する可能性をあたえました。

北カフカーズとの連絡の中絶後、食糧状態は絶望的になりました。七百以上の車輛が北カフカーズで積荷をしたまま立往生しており、百五十万プード以上が調達されたのに、この積荷全部を搬出するのは、鉄道であれ海路であれ交通がとだえたために(キズリャル、ブリヤンスコエはわれわれの手中にありません)、すこしも可能性がありません。ツァリーツィン、コテーリニコヴォ、ガシューンの各地区では穀物はすくなくありませんが、それを収穫する必要があります。ところがチョクプロード〔南ロシア地方食糧非常委員会〕はこれに順応させられていなかったし、また、これまで順応できないでいます。収穫をとりいれ、乾草を圧搾して一カ所にあつめること

が必要ですが、チョクプロードには圧搾機がありませんでした。大規模に穀物の取入れを組織する必要がありますが、チョクプロードの組織者は役たたずでした。その結果調達の仕事はまったくまずいものになっています。

カラチの占領はわれわれに数万プードの穀物をあたえました。私はカラチに一二台の貨物自動車をおくりました。だから鉄道線路にうまくはこびうつすことができしだい、モスクワにさしむけましょう。穀物の収穫は、よかれあしかれ、いずれにしてもはかどっています。数万プードの穀物を手にいれて、これも御地におくれると信じています。ここでは家畜は必要以上に多いのに、乾草がきわめてすくなく、乾草なしには発送することができませんから、大規模に家畜をおくりだすことは不可能になっています。すくなくとも一つの罐詰工場を創設し、屠殺場その他をもうけるとよいかもしれません。だが遺憾ながら、今のところ経験のある、進取的な人が見あたりません。私はコテーリニコヴォの全権委員にたいし、大規模に肉の塩漬を組織するように指示しました。仕事はすでにはじめられ、成績をあげており、もし仕事が進展するならば、冬のあいだ肉は十分でしょう。（コテーリニコヴォ地区だけで四万頭の牛があつめられました。）アストラハンでは家畜はコテーリニコヴォよりもすくなくはありませんが、その地方の食糧人民委員部はなにもしていません。ザゴトセリ〔農産物調達機関〕の代表は永遠の眠りにふけっているので、彼らはけっして肉を調達しないだろうと確信します。私は肉と魚を調達するために全権委員ザルマーエフをそこに派遣しましたが、これまでのところ彼から情報をうけとっていません。

食糧という意味では、サラトフとサマラ県にはるかに大きな期待がかけられます。そこには穀物がたくさんあり、そこから私の予想では、ヤクーボフの遠征隊は五十万プード、あるいはそれ以上の穀物をとり出すことができるでしょう。

(126)

一般的にいって北カフカーズとの連絡が回復するまでは（食糧の点で）ツァリーツィン地区に（とくに）期待をかけてはなりません。

あなたの　イ・スターリン

ツァリーツィンにて
一九一八年八月四日

一九三一年、『レーニンスキー・ズボールニク』〔『レーニン文集』〕第十八巻にはじめて印刷

(127)

ヴェ・イ・レーニンへの手紙（二五）

親愛な同志レーニン！

南部とカスピ海のための斗争はかどっています。この地区全体をわれわれの手に確保するには（それを確保することは**できます！**）若干の軽水雷艇と二隻の潜水艦を所有する必要があります（くわしいことはアルチョームにきいてください）。すべての障害を粉砕し、そして、それにより必要とされるものを即刻獲得することを容易にし、進捗させるように切願します。バクー、トゥルケスタン、北カフカーズは、もし即座に諸要求がみたされたら、われわれのものとなるでしょう。（無条件に！）

戦線におけるわれわれの仕事は順調にすすんでいます。これからもいっそう順調にすすむことをうたがいません（カザック軍は決定的に瓦解しました）。

私のたいせつな、親愛なイリイッチの手をにぎります。

あなたの　**イ・スターリン**

一九一八年八月三十一日

一九三八年、『ボリシェヴィク』誌第二号にはじめて印刷

(128)

全ロシア中央執行委員会議長スヴェルドロフへの電報

世界でもっとも偉大な革命家、プロレタリアートの試錬をへた指導者である教師、同志レーニンにたいする、ブルジョアジーの雇い人たちの兇悪な暗殺未遂行爲をきき、北カフカーズ軍管区軍事会議は、この卑劣な暗殺未遂行爲に、ブルジョアジーとその手さきにたいする公然たる、大衆的、系統的なテロルを組織することによってむくいるものである。

スターリン
ヴォロシーロフ

ツァリーツィンにて
一九一八年八月三十一日

『ソルダート・レヴォリューツィー』（ツァリーツィン）第二一号
一九一八年九月一日

(129)

人民委員会議への電報

ツァリーツィン地区のソヴェト軍の攻撃は成功をおさめた。北ではイロヴリヤ駅、西ではカラチ、リヤピチェフ、ドン河の橋、南ではラシキ、ネムコフスキー、デムキンを占領した。敵は全敗し、ドン河のかなたにおいやられた。ツァリーツィンの状況は堅固である。攻撃続行中。

人民委員　スターリン

ツァリーツィンにて
一九一八年九月六日

一九三九年、『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』誌、第一号に印刷

(130)

ツァリーツィン戦線司令官ヴォロシーロフへの電報

労仂者・農民の権力を強化するために、献身的にたたかうツァリーツィン戦線の英雄的な部隊と革命軍全部隊に、われわれの兄弟的なあいさつをつたえられたい。ソヴェト・ロシアは、ハルチェンコ、コルパコーフの共産主義的革命連隊、ブラートキン騎兵隊、アリャービエフ装甲列車部隊、ヴォルガ河艦隊の英雄的な偉勲を、歓喜の念をもって銘記すると、彼らにつたえられたい。

赤旗を高くかかげよ。憶することなく、赤旗をおしすすめよ。地主・将軍および富農の反革命を容赦なく撲滅せよ。そして社会主義ロシアが不敗であることを全世界にしめせ。

人民委員会議長
ヴェ・ウリヤノフ・レーニン

人民委員兼南部戦線軍事革命会議議長
イ・スターリン

モスクワにて

一九一八年九月十九日

『イズヴェスチヤ』第二〇五号
一九一八年九月二十一日

南部戦線にて

『イズヴェスチヤ』記者との会談

民族問題人民委員同志**スターリン**は、南部戦線への帰巡をまえにして、本紙記者にツァリーツィン戦線の状況についての印象をつぎのようにかたった。

同志**スターリン**はこうのべた、——なによりもまず二つのよろこぶべき現象を指摘しなければならない。その第一は、ソヴェト権力の政策の正しさを納得させることができるだけでなく、新しい共産主義的諸原則のうえに国家を建設することもできる労働者出身の行政官が、戦線の背後に生まれたことである。第二は、帝国主義戦争で実戦の経験をもち赤軍兵士の完全な信頼をえている、兵士出身の新しい将校幹部があらわれたことである。

住民の気分に急激な変化がおこり、彼らが反革命家どもの集団にむかって武器をとる必要を理解したため、動員はすばらしくすすんでいる。

わが軍の全部隊にわたって、堅い規律がうちたてられている。赤軍兵士と幹部との関係については、これ以上のぞむところはない。

(132)

――軍の食糧問題はどうか。

――もともと、わが軍にはそのような問題は存在しない。戦斗部隊自身が配置する基地の体系が整備されているために、戦線は食糧不足を感じていない。げんざい赤軍兵士一日分の口糧は、各二フントのパン、肉、馬鈴薯およびキャベツからなっている。

戦線でのいっさいの食糧補給をひきうけているのは、共和国最高革命軍事会議付属の軍食糧委員会で、これが前線諸部隊への規則的な補給を組織したのである。

同志**スターリン**の言葉によれば、戦線での煽動は『ソルダート・レヴォリューツィー』[二六]紙と『ボリバー』[二七]紙、パンフレット、ビラ等々の配布を通じておこなわれている。軍隊内の士気は、はつらつとして確信にみちている。

わが軍の被服給与面での大きな欠陥は、兵士用の制服がきまっていないことである。兵士用の新しい制服をできるだけ早くつくって、それをすぐに戦線で採用することを希望する。

個々の赤軍兵士と全部隊の英雄的行為を鼓舞するために、前者には特別勲功章を、後者には特別勲功旗をあたえるという中央執行委員会の最近の布告は、同志**スターリン**の言葉によれば、きわめて大きな意義をもっている。

この布告が出されるまえ、すでに革命旗をうけていた諸部隊は、その後は獅子のようにたたかった。

われわれに対抗する敵部隊の状態についていえば、彼らの九割は、いわゆる非カザック系農民兵からなっており、その大部分はウクライナ人と志願将校である。カザック人は一割をこえない。敵のすぐれた点は、機動性に

(133)

富む騎兵隊をもっていることだが、この騎兵隊はわれわれのほうでは、今のところ萌芽的な状態にある。

終りにあたって、言わねばならないのは、われわれのほうでは戦斗諸部隊の結束がすすんでいるのに、敵のほうでは完全な分解がはじまっていることである。

『イズヴェスチヤ』第二〇五号
一九一八年九月二十一日

事物の論理

（メンシェヴィキ中央委員会の『テーゼ』について）

メンシェヴィキ党の『中央委員会のテーゼと決議』（一九一八年十二月十七―二十一日）という名まえの文書が、われわれのところへおくられてきた。この文書は、一九一七年十月以降のソヴェト権力の活動を概括し、かつメンシェヴィキ党の発展にとって重大な意義をもつとおもわれる若干の見通しをたてている。しかし、この文書のうちでもっとも貴重なのは、革命の一年間のメンシェヴィズムの全実践をくつがえすような諸結論である。われわれは『テーゼと決議』の分析はべつの機会にゆずって、今はわれわれの若干の印象を読者につたえることを必要であると考える。

一　十月の変革について

ちょうど一年まえのことである。わが国は、帝国主義戦争と経済的崩壊の重荷のもとによわりきっていた。つかれはて苦しみぬいた戦線は、もはやたたかう力をもっていなかった。ところがイギリスの帝国主義者ども（ビ

コカナン！）は、ますますわが国をまきぞえにし、あらゆる手をうってわが国を帝国主義戦争のわくのうちにつなぎとめておこうとつとめていた。リガはあけわたされ〔八月二十一日〕(135)、ペテルブルグをあけわたす準備がすすめられていたが、それはただ戦争と軍部独裁の必要を証明するためにすぎなかった。ブルジョアジーは、こうしたことをみな理解して、公然と軍部独裁に、革命の粉砕にすすんでいた。

当時ボリシェヴィキはなにをしていたか。

ボリシェヴィキは変革の準備をすすめていた。彼らは、プロレタリアートによる権力の奪取こそ、戦争と経済的崩壊の行きずまりから抜け出す、ただ一つの道であると考えていた。彼らは、このような変革がおこらないかぎり、帝国主義との絶縁も、帝国主義の毒牙からロシアを解放することも、思いもよらないと考えていた。彼らは、国内におけるただ一つの権力継承者としてのソヴェト大会を召集した。

まず革命、つぎに平和を！

当時メンシェヴィキは、なにをしていたか。

彼らは、ボリシェヴィキの「思いつき」は「反革命的冒険主義」であると宣言した。彼らは、ソヴェト大会をよけいなものと考え、これにブレーキをかけ、さらにソヴェトそのものをばとりこわされる運命にある「老朽したバラック」だと宣言した。彼らは、ソヴェトという「バラック」のかわりに「ヨーロッパ」式の「堅固な建物」、つまり予備議会(二八)を提唱し、その場でミリュ－コフと結んで「急進的な農業改革と経済改革」の計画をつくろうとした。彼らは、帝国主義と手をきるかわりに、戦争からの可能な抜け道としてパリにおける同盟国の会議を提唱した。彼らは、この会議へメンシェヴィキのスコーベレフが参加することを、またメンシェヴィキのアクセリロー

ドがシャイデマン、ルノーデルおよびハインドマンのやからの会議を召集しようとする、うたがわしい仂きかけを、「徹底的な平和政策」だと考えた。

(136)

そのときから一年がすぎさった。「ボリシェヴィキの変革」は内外の帝国主義者どもの精巧な機構を一掃することができた。かつての帝国主義戦争はロシアにとっては思い出の領域にさった。ロシアは帝国主義のくびきから解放された。ロシアは、独自の対外政策をおこない、また、それをおこなおうとのぞんでいる。いまやだれにも明らかなように、十月の変革がおこらなかったなら、ロシアは帝国主義戦争の行きずまりから抜け出さなかったであろうし、農民は土地をうけとらなかったであろうし、また労仂者は工場を管理しなかったであろう。

ところでメンシェヴィキと彼らの中央委員会は、いまわれわれになんと言っているか。きいてみたまえ。——

「一九一七年十月に遂行されたボリシェヴィキの変革は、歴史的に必然なものである、——それが勤労大衆と資本家階級との結びつきをうちくだくことによって、革命の方向をまったく自分の利益にしたがわせようとする(それなしには同盟国帝国主義の圧迫からのロシアの解放、徹底的な平和政策の実行、農業改革の急進的な実施および人民大衆の利益を目的とした、全経済生活の国家管理は思いもよらなかったであろう)勤労大衆の意向を表現していたかぎりでは——。また革命のこの段階が、世界の事件の進行にたいしてロシア革命のあたえた影響の規模をも増大させる傾向をもっていたかぎりでは。」(『テーゼと決議』を見よ。)

いまメンシェヴィキ中央委員会はこう言っている。

信じがたいことであるが、これは事実である。「ボリシェヴィキの変革は」「歴史的に必然なものである。」「それなしには同盟国帝国主義の圧迫からのロシアの解放」「徹底的な平和政策の実行」「農業改革の急進的な実施」、

「および人民大衆の利益を目的とした、全経済生活の国家管理は思いもよらなかった」らしいのだ。ところで以上は、すでに一年まえにボリシェヴィキがいくどもくりかえしてのべ、またメンシェヴィキ中央委員会があれほど強硬に反対していたのと、おなじことではないか！(137)

そうだ、おなじことなのだ。

生活は教訓をあたえ、どんなおしがたいものをも、なおすのではあるまいか。それは全能であって、どんなことがおころうとも、つねに勝つのである……。

二　プロレタリアートの独裁について

十ヵ月ほどまえのことである、憲法制定議会が召集された。完全な敗北をこうむっていたブルジョア反革命家どもは、ふたたび力を結集して、もみ手をしながらソヴェト権力の「破滅」を期待していた。外国の帝国主義者（同盟国）の新聞は、憲法制定議会に歓迎の意をあらわした。メンシェヴィキとエス・エルは「私的」会合をひらいて、権力をソヴェトの手から憲法制定議会に、すなわち「ロシアの主人」の手に移譲する計画をつくっていた。「光栄ある運合」を復活し、ボリシェヴィキの「誤り」を清算しようという幻影が空中にただよっていた。

当時ボリシェヴィキは、なにをしていたか。

彼らはすでに着手していた、プロレタリアートの権力を強化する仕事をつづけた。彼らは、「光栄ある運合」とその機関、つまりブルジョア民主主義的憲法制定議会をば、歴史によって破滅の運命をおったものと考えた。な

(138)

ぜなら彼らは、新しい力すなわちプロレタリアートの権力と、新しい政治形態すなわちソヴェト共和国が、この世に誕生したことを知っていたからである。一九一七年のはじめには、憲法制定議会というスローガンは進歩的であった。そしてボリシェヴィキはこれを支持した。一九一七年の終り、十月の変革ののちには、憲法制定議会というスローガンは反動的なものとなった。なぜなら、それは、国内で斗争しつつある政治的諸勢力の新しい相互関係に合致しなくなったからである。ボリシェヴィキはこう考えた、――ヨーロッパで帝国主義戦争がおこなわれ、ロシアでプロレタリア革命が勝利しつつある情勢のもとで考えうるのは、ただ二つの権力だけである。すなわちソヴェト共和国の形態をとったプロレタリアートの独裁か、あるいは軍部独裁の形態におけるブルジョアジーの独裁であって、その中間を見いだし、憲法制定議会を復活しようというといういっさいの企ては、古いものへの、反動への、十月の諸成果の清算への遂行をもたらさずにはおかないと。ボリシェヴィキはブルジョア議会主義とブルジョア民主共和国とが、革命のすでにすぎさった段階であるということを、信じてうたがわなかった……。

そのときから十カ月たった。ソヴェトの権力を清算しようとした憲法制定議会は解散された。国内の農民は解散に気ずきもしなかったが、労仂者は、歓声をあげて解散をむかえた。「憲法制定議会」の支持者の一部は、ウクライナへたちさり、ソヴェトと斗争するためにドイツ帝国主義者の援助をもとめた。「憲法制定議会」の支持者の他の一部は、カフカーズへたちさり、トルコ＝ドイツの帝国主義者に抱擁されて安心した。「憲法制定議会」の支持者の第三の部分は、サマラへたちさり、イギリス＝フランスの帝国主義者と結んでロシアの労仂者・農民との戦争をはじめた。憲法制定議会というスローガンは、こうして政治的俗物の策謀手段に、またソヴェトと斗争する内外反革命家どもを援護する旗になってしまった。

(139)

この時期を通じて、メンシェヴィキはどんな行動をとったか。

彼らは、すでに反革命的なものとなった憲法制定議会召集のスローガンを、しゅうし支持しながらソヴェト権力と斗争した。

ところでメンシェヴィキとその中央委員会は、いまわれわれになんと言っているか。きいてみたまえ。——

「中央委員会は『民主主義』に敵意をいだく諸階級とのいっさいの政治的協力を排斥し、民主主義と資本主義的ブルジョアジーとの『全国民的』連合に基礎をおくところの、あるいは外国帝国主義と軍国主義とへの従属に基礎をおくところの、いっさいの連立政府——たとえ、それが民主主義の旗でつつまれていようとも——への参加を拒否する。」(『テーゼ』を見よ。)

さらに、——

「都市の非プロレタリア大衆と農村の勤労大衆とに立脚する革命的民主主義が、ソヴェト政府および、これを支持する大衆と武装斗争をおこないながら、民主共和国を復活させようとするすべての企ては、国際情勢の動きとロシアの民主主義的小ブルジョアジーの政治的未成熟とのために、社会的諸勢力の編成替えをともなったし、また、ともないつつある。しかも、この編成替えは民主主義体制の復活をめざす斗争の革命的意義そのものをくつがえし、革命の基本的な社会主義的成果に直接の脅威をもたらしつつある。権力斗争のためにぜひとも資本家諸階級と協定し、かつ外国の武器を利用しようという傾向は、革命的民主主義の政策からいっさいの自主性をうばい、この政策をこれら諸階級と帝国主義的連合との道具にかえている。」(『テーゼと決議』を見よ。)

簡単にいえば、連合は断固かつ無条件に「排斥され」、民主共和国と憲法制定議会のための斗争は反革命的だとみとめられているわけである、なぜなら、その斗争は「革命の基本的な社会主義的成果に直接の脅威をもたらす」からである。

結論は一つ、ソヴェトの権力、プロレタリアートの独裁が、ロシアにおける、ただ一つの考えうる革命的権力だということである。

ところで、これは、あれほどまえからボリシェヴィキがいくどもくりかえしてのべ、またメンシェヴィキがついきのうまで反対していたのと、まったくおなじことではないか！(140)

そうだ、おなじことなのだ。

事物の論理は、メンシェヴィキの論理をふくめて、他のいっさいの論理よりも強力ではないか……。

三　小ブルジョア的混乱

そこで、——

メンシェヴィキ中央委員会が、ボリシェヴィキの「冒険主義」と斗争した一年ののちに、一九一七年十月における「ボリシェヴィキ的変革の」「歴史的必然」をみとめないわけにいかなかったのは事実である。

メンシェヴィキ中央委員会が、憲法制定議会と「光栄ある連合」とのためにながいあいだ斗争したのちに「全国民的」連合の不適当なこと、「民主主義体制の復活」のための斗争と憲法制定議会とが反革命的性質をもつこ

とを、みとめないわけにいかなかったのは事実である。

もっとも、この承認は、一年間だけおそかった。すなわち憲法制定議会というスローガンの反革命的性質と、十月の変革の歴史的必然性についての真実が、周知の陳腐なものとなってしまったのちのことであり、革命における指導的役割をねらうメンシェヴィキ中央委員会としては、まったく似つかわしくない立ちおくれのもとにおこなわれた。しかし、こういうのがまさしくメンシェヴィキの運命なのである。彼らが事件の進行から立ちおくれるのは、なにもこれが最初ではない。そして、われわれは彼らがボリシェヴィキの古いズボンをはいてみせびらかそうとするのも、これが最後ではないだろうとおもっている……。

メンシェヴィキ中央委員会のがわから、このような承認がなされた以上、もはや重大な性質の意見の相違がおこる余地はありえないと、考えることができるかもしれない。もしわれわれの相手がメンシェヴィキ中央委員会ではなく、ものごとを最後まで考え、また事のつじつまをあわせることのできる徹底的な革命家であるなら、あるいは、そういうことになるかもしれない。しかし、こまったことに、このばあい、われわれが相手にしているのはプロレタリアートとブルジョアジーとのあいだを、革命と反革命とのあいだを、はてしなく動揺する小ブルジョア的インテリゲンツィアの党である。このことからさけがたい言行の不一致、はてしない疑惑と思想の動揺が生まれるのである。

試みに以下の文章をあじわってみよ。メンシェヴィキ中央委員会は、どうだろう、――

「従来どおり、民主政治すなわち、なにものにも制限されない民主主義を、プロレタリアートの社会的解放がそこではじめて準備され、また実現されうる唯一の政治形態と考えている。自由に選挙され、かつ全権

(142)

をもつ憲法制定議会によって組織される民主共和国のうちに、また普通かつ平等の選挙等々のうちに、それ〔メンシェヴィキ中央委員会〕は、これら大衆を政治的に教育し、自分自身の利益という旗のもとに、プロレタリアートを階級的に結集するための、なにものにもかえがたい手段を見いだすだけでなく、社会主義的プロレタリアートが自己の社会的創造力を、発展させることのできる唯一の地盤をも見いだすのである。」(『テーゼと決議』を見よ。)

信じがたいことだが、これは事実である。一方で「民主主義体制の復活をめざす斗争は」「革命の基本的な社会主義的成果に直接の脅威を」「もたらす」といわれ、だからこそ、それは反革命的だと説明されるのであるが、他方ではメンシェヴィキ中央委員会は「従来どおり」、すでにほうむられた「全権をもつ憲法制定議会」にたいし賛意を表明するのだ！　あるいはひょっとすると、メンシェヴィキ中央委員会は「武装斗争」をおこなわないで「憲法制定議会」をかちとろうと考えているのだろうか。では、そのばあい「絶対権をもつ憲法制定議会」をほうり出してしまった「ボリシェヴィキ的変革の歴史的必然」はいったいどうなるのか。

またメンシェヴィキ中央委員会が要求しているのは、ほかでもない、つぎのことである。——

「警察的弾圧の特別機関および特別裁判所の廃止」と「政治的経済的テロルの絶滅」(『テーゼと決議』を見よ。)

一方では、ブルジョアジーの抵抗を弾圧するという任務をおびたプロレタリアートの独裁の「歴史的必然性」がみとめられ、他方では、それなしにはこの弾圧など思いもよらない、若干のきわめて重要な権力手段の廃止が要求されているのだ！　ではそうすると、ブルジョアジーがテロ行為と強盗的陰謀にまでいたる、いっさいの力

をあげて、それにたいしてたたかっているところの十月革命の成果は、いったいどうなるのか。——十月の変革から不可避的に生まれる結果と影響とをみとめないで、どうしてその「歴史的必然性」をみとめることができるのか?!

メンシェヴィキ中央委員会は、このごたごたした小ブルジョア的混乱から、どこへ抜け出そうとするのだろうか。

四　そこで結論は？

しかしメンシェヴィキ中央委員会は、この混乱から抜け出そうとこころみている。ききたまえ。——

「革命の成果にもとずき、民主主義本来の力によって、ロシアの統一と独立を回復する任務を固守しつつ、また、まさにそのことによってロシアの国内問題にたいする外国資本家のいっさいの干渉を排斥しつつ」メンシェヴィキ党は「ソヴェト政府が、ロシアの領土の解放、とりわけ外国の占領からの解放を固守し、また、この占領を拡大もしくは維持しようとする非プロレタリア的民主主義のこれらの企てに反対するかぎり、これと政治的に連携する。しかし帝国主義的干渉の問題におけるこの政治的連帯性が、ロシアの被占領地域の解放をめざすソヴェト政府の軍事行動にたいする直接の援助をもたらしうるのは、この政府が辺境地方における非ボリシェヴィキ的民主主義にたいする自分の態度を鎮圧とテロルではなく相互協定にもとずいて、うちたてる決意を事実によって表明するようなばあいにかぎるであろう。」(『テーゼと決議』を見よ。)

つまり、ソヴェト権力との斗争から、これとの「協定」へというわけである。

「ソヴェト政府との政治的連帯性」……。われわれは、この連帯性がどのていど完全なものか知らないが、ボリシェヴィキがメンシェヴィキ中央委員会とソヴェト権力との連帯性にたいし反対しないだろうということは、いまさらのべるまでもあるまい。われわれは、ソヴェト政府との連帯性と、たとえばサマラにおける「憲法制定議会」の議員との連帯性の相違を、じゅうぶん理解しているのだ。

「ソヴェト政府の軍事行動にたいする直接の援助」……。われわれは、メンシェヴィキ中央委員会がどれほどの軍隊をソヴェト権力の指揮下にゆだねることができ、また、どのような軍事力をソヴェト軍隊におくることができるのか知らないが、ボリシェヴィキが、ソヴェト権力にたいする軍事的援助を歓迎するにきまっていることは、いまさら証明するまでもあるまい。われわれは、ソヴェト政府にたいする軍事的援助と、たとえばケレンスキー治下における帝国主義戦争当時の「防衛会議」(二九)にたいするメンシェヴィキの参加とが、まったくちがうことを、じゅうぶん理解しているのだ。

すべて、そのとおりである。しかし経験はわれわれに、人を言葉で信じてはならないとおしえており、また、われわれは党派やグループをその決議によって判断するだけでなく、なによりもまず、その行為によって判断することをまなんでいる。

(144)

では、メンシェヴィキの行為は、いったいどうか。

ウクライナにいるメンシェヴィキは、いまだにスコロパッキーの反革命政府と関係をたっておらず、あらゆる手段をつくしてウクライナのソヴェト分子とたたかい、また、まさにそのことによって南部における内外帝国主

義者の支配に協力している。

カフカーズにいるメンシェヴィキは、久しいまえから地主・資本家と同盟を結び、また十月の変革の支持者にたいして聖戦を宣言したうえ、ドイツ帝国主義者の援助をよびもとめた。

ウラルとシベリアにいるメンシェヴィキは、イギリス＝フランスの帝国主義者と結び、事実上、十月革命の諸成果を清算することに協力したし、また協力しつづけている。

クラスノヴォトスクのメンシェヴィキは、イギリス帝国主義者にカスピ海以東地方の門戸をひらき、彼らがトゥルケスタンのソヴェト権力を壊滅させるのをたすけている。

最後にヨーロッパ・ロシアの一部のメンシェヴィキは、ソヴェト権力との「積極的な」「斗争」の必要を宣言し、ロシアの解放のための戦争で血をながしているわが軍の背後で、反革命的ストライキを組織し、まさにそのことによってメンシェヴィキ中央委員会の説教する「ソヴェト政府の軍事行動にたいする援助」を実現しがたいものにしている。

ロシアの中央と辺境地方にいる、これらのメンシェヴィズムの反社会主義的、反革命的分子はすべて、これまで依然として自分をメンシェヴィキ党のメンバーだと考えているのだが、しかもその中央委員会は、げんざいソヴェト権力との「政治的連帯性」をもったいぶって声明しているのである。

われわれは質問する、——

（一） うえにあげたメンシェヴィズムの反革命的分子にたいするメンシェヴィキ中央委員会の関係はどうか。

（二） メンシェヴィキ中央委員会は、断固かつ決定的に彼らと関係をたとうと考えているか。

(145)

（三）この方向にむかって最初の一歩でもふみ出されているか。

これらはみな、メンシェヴィキ中央委員会の「決議」のうちにも、またメンシェヴィキの実践のうちにも解答を見いだすことのできない質問である。

ともあれ、メンシェヴィズムの反革命的分子とのきっぱりした絶縁だけが、げんざいメンシェヴィキ中央委員会によって宣言されている「相互協定」の実現を前進させうるものであることは、うたがいがない。

『プラウダ』第二三四号
一九一八年十月二十九日
署名――イ・スターリン

南部戦線の状況についてのモスクワ労・兵・農代表ソヴェト総会における演説

一九一八年十月二十九日
（新聞に出た報告）

同志**スターリン**はこうのべている、——ソヴェト・ロシアの力が増大しつつあることは証明するまでもない。そのかずかずの成功がじゅうぶんそれをしめしている。しかしソヴェト・ロシアの敵どもが、現在ほどがんきょうに、われわれを破滅させようとくわだてたことは、いまだかつてなかった。ソヴェト・ロシアの敵どもの計画はソヴェト・ロシアからもっとも豊かな穀物地帯をうばいとり、たたかわないでこれを屈伏させることである。五、六カ月まえにこの計画を実行するため、サマラとシベリアがえらばれた。最近の二カ月は、われわれの敵どもに、彼らのこの計画が実行できないことを証明した。げんざい彼らは、この冒険を南部でふたたびくりかえそうとしている。南部は大きな魅力をもっている。そこにはすくなくとも一億五千万プードの手がついていない穀物がある。そこには数十万プードの石炭がある。戦略的観点から見た南部ロシアはさらに重要な意義をもってい

る。そこは新しい国際的な結び目が結ばれつつある地方である。このことは、その地方でおこなわれつつある活動から明らかである。エカテリノダールでは、クラスノフを首班とする新しい政府が組織された。そこでは三つの軍隊が合同した。反革命家どもは南部の掌握をめざして、その主要な打撃をツァリーツィンへむけている。八月にクラスノフはツァリーツィン占領の命令を出した。命令ははたされず、クラスノフの軍隊は敗走せざるをえなかった。十月にクラスノフは、ぜひとも十月十五日までにツァリーツィンを占領して、チェコスロヴァキア軍と合流せよという新しい命令を出した。多くの将軍たちの配属された、すくなくとも四〇個連隊の連合軍が、戦斗につぎこまれた。それにもかかわらず将軍たちは敗走をやむなくされ、彼らのうちのひとりは長靴をなくしたほどだった。（笑い声）

そのときになってやっと将軍たちは、わが軍が彼らの手におえない、ますます増大しつつある現実的な力であることを知った。

では、いったいわが軍の力はなににあるか。なぜわが軍は、こんなに確実に敵をうちやぶるのか。わが軍の力はその自覚と規律とにある。自覚とプロレタリア的規律とは、南部戦線におけるわれわれの成功の原因の一つである。

第二の原因は新しい赤軍将校団の出現である。彼らの大部分は兵士の出身である。彼らは多くの戦斗で戦いの洗礼をうけ、作戦の実情に通じている。彼らはわが軍を勝利へみちびいている。

これが、わが軍の成功を規定する主要な要素である。私の考えるところでは、悪党どもが南部でわが軍にいちども勝つことのできないのは、まさにこのためである。

『イズヴェスチヤ』第二三七号
一九一八年十月三十日

(148)

南部ロシアについて

『プラウダ』記者との会談

さいきん派遣さきから到着した人民委員**スターリン**は、本紙記者に南部戦線の状況についての印象をつぎのようにかたった。

南部戦線の重要性

ドンの反革命軍とアストラハン＝ウラル方面のチェコスロヴァキア軍の徒党とのあいだの**戦略的位置だけを見ても**南部戦線の重要性がわかる。イギリスの勢力範囲（エンゼリ、クラスノヴォーツク）が近いことは、この重要性をつよめるだけである。南部ロシアの富（穀物、石油、石炭、家畜、魚類）そのものが、ロシアからこの重要な土地をうばいとろうとしている帝国主義的略奪者どもの、あくことのない食欲をそそっている。そのうえ秋がきてサマラの冒険がなくなれば、軍事行動の中心が南部へうつっていくことは、うたがいない。南部の反革命家どもが、ツァーリの召使い――シポフ、サゾーノフ、ルコムスキーを閣僚とする新しい（まったく新しい！）

「全ロシア政府」を大急ぎででっちあげ、クラスノフ、デニキンおよびスコロパッキーの徒党を単一の軍隊に合同させ、イギリスその他の援助をもとめながら、げんざいくりひろげている、あの「熱狂的な」活動もまた本来このことによって説明される。

攻撃の中心ツァリーツィン

敵がわの最大の射撃目標になっているのは、ツァリーツィンである。それも当然のことである。なぜならツァリーツィンが占領され、南部との連絡がたたれれば、敵のいっさいの任務の達成は保障されるだろうから。すなわちドンの反革命軍とアストラハンとウラルにいる軍隊のカザック上層部とが結びついて、ドンからチェコスロヴァキア軍にいたる反革命の統一戦線が形成されるだろうし、内外反革命家どもの手に南部とカスピ海が確保されるだろうし、また北カフカーズのソヴェト軍隊が孤立無援の状態におちいるだろうから……。

南部の白衛軍がツァリーツィンを占領しようとつとめているさいの、あのしつこさも、主として、このことによって説明される。

すでに八月、クラスノフは「ツァリーツィン占領」の命令を出している。クラスノフ一派は狂気のようにわれわれの戦線におそいかかり、これをうちくだこうとしたが、わが赤軍によって撃退され、ドンのかなたへおいはらわれた。

十月のはじめに、こんどはロストフの反革命的なカザック団によってツァリーツィン占領の新しい命令が出された。敵は、ドンとキーエフ（スコロパッキーの将校連隊！）とクバニ（アレクセーエフの「志願兵」！）で募

(150)
集した、すくなくとも四個連隊を集結した。しかし、わが赤軍の鉄腕によってクラスノフの徒党は、こんどもまた撃退され、そのうえ敵の多くの連隊がわが軍に包囲され、われわれの手に大砲、機関銃、小銃をのこして全滅された。マモントフ、アントーノフ、ポポフ、トルクーシキン等の将軍と、一群の連隊長は敗走せざるをえなかった。

わが軍の力はなににあるか

わが軍の成功は、なによりもまず、その自覚と規律によって説明される。クラスノフの兵士にはおどろくべき鈍感と無知と外界からまったく切りはなされていることが特徴的である。彼らはなんのためにたたかっているかを知らない。「われわれは命令されました。それでやむなくたたかっているのです。」――彼らは、捕虜になったとき尋問にこたえて、こう言っている。

わが赤軍兵士にはこのようなことはない。彼は堂々と自分は革命の兵士だと名のりをあげる。彼は、自分が資本家の利益のためにたたかっているのではなく、ロシアの解放のためにたたかっていることを知っている。彼はこのことを知っていて、任務を自覚して勇敢に戦いに出ていく。赤軍兵士のあいだでは秩序と規律にたいする熱意がきわめて強く、彼らが「不従順」で無規律な同志をみずから処罰するのもめずらしくないほどである。

これにおとらず重要な意義をもつのは、多くの戦斗で戦いの洗礼をうけた、かつての兵士出身の赤軍将校幹部がたくさんあらわれたことである。これらの赤軍将校はわが軍の基本的な接合剤となり、軍を統一と規律のある有機体にきたえあげている。

ところで軍の力は、それ自身の素質だけでつきるものではない。軍は強固な後方なしには、ながくもちこたえることができない。戦線をかためるためには、軍は後方から補充、武器弾薬、食糧を規則的にうけとらねばならない。この点で大きな役割を演じたのは、後方に熟練した有能な行政官が出現したことである。彼らは主として先進的な労仂者の出身で、誠実かつ熱心に動員と補給の仕事にあたっている。このような行政官がいなかったなら、ツァリーツィンはすくい出されなかっただろう、ということは確信をもって言える。(151)

すべて以上のことが、わが軍を、敵のどんな抵抗をもうちくだきうる、おそるべき力にかえているのである。

万事は南部で新しい国際的な結び目が、結ばれる方向にすすんでいる。イギリスの手さきからなるエカテリノダールの「新しい」「全ロシア政府」の出現、すでにいちどツァリーツィン付近で、わが軍にうちやぶられた三つの(アレクセーエフ、スコロパッキー、クラスノフの)反革命軍の合同、きたるべきイギリス干渉のうわさ、エンゼリとクラスノヴォーツクのテレク反革命家どもにたいするイギリスの補給――こうしたことはみな偶然ではない。サマラで失敗した冒険をいま南部でくりかえそうとしているのである。だが彼らには、それがなければ勝利など思いもよらないもの、つまり反革命の悪事にたいする確信をもち、最後までたたかうことのできる軍隊がないであろう、――しかも、ぜったいにないであろう。強襲をいちどうけさえすれば、反革命的冒険家どものカルタの家はふきとんでしまうであろう。このことを保障するものは、わが軍の英雄的精神、クラスノフ=アレクセーエフの各「軍隊」における腐敗、ウクライナにおける動揺の激化、ソヴェト・ロシアの勢力の増大、最後に、西ヨーロッパでますます激しくなっている革命運動である。南部の冒険はサマラの冒険とおなじ結末におわるであろう。

『プラウダ』第二三五号
一九一八年十月三十日

(152)

十月の変革

（ペトログラードの一九一七年十月二十四・二十五日）

十月蜂起をうながしたもっとも重要な諸事件は（リガの明渡しののち）、ペトログラードをあけわたそうとした臨時政府の意図、ケレンスキー政府のモスクワへの移転準備、首都を無防備のままにしておいて、ペトログラードの全守備隊を戦線へ移動させようとした旧軍指揮官の決定、最後に、モスクワにおけるロジャンコを議長とする黒色大会(三〇)の熱狂的な活動、すなわち反革命組織の活動であった。すべてこれらは、増大しつつある経済的崩壊と戦線の戦争継続にたいする嫌悪と結びついて、既成の状態からの唯一の活路としての、急速で厳密に組織された蜂起をさけがたいものにしたのである。

(153)

すでに九月の終り以来、ボリシェヴィキ党中央委員会は、成功する蜂起を組織するために、党の全勢力を動員することを決定していた。この目的のために、中央委員会は、ピーテル〔ペテルブルグ〕に軍事革命委員会を組織し、ペトログラードの守備隊を首都に残留させ、また全ロシア・ソヴェト大会を召集することを決定した。このような大会が唯一の権力継承者となることができたのである。後方および戦線でもっとも勢力のあったモスクワとペトログラードの代表ソヴェトをあらかじめ獲得することが、蜂起を組織する一般計画のうちに無条件にく

みこまれた。

党中央機関紙『ラボーチー・プーチ』(三二)は、中央委員会の指示にしたがって、労仂者と農民に決定的な斗争の準備をさせながら、公然と蜂起を呼びかけはじめた。

臨時政府との最初の公然たる衝突は、ボリシェヴィキの新聞『ラボーチー・プーチ』の発行禁止からおこった。この新聞は、臨時政府の指令によって禁止されたのである。しかし軍事革命委員会の指令によって、それは革命的方法で再刊された。封印は破棄され、臨時政府のコミッサールは免職された。これは十月二十四日のことであった。

十月二十四日には、多くのきわめて重要な国家機関で、軍事革命委員会の委員が強制的に臨時政府の代表者を追放した。その結果、これら機関は軍事革命委員会の手中に帰し、臨時政府の全機構は解体された。この日（十月二十四日）のうちに、ペトログラードの全守備隊、全連隊が決定的に軍事革命委員会の方へうつった。その例外はいくつかの士官学校と装甲中隊にすぎなかった。臨時政府の行動には優柔不断がみとめられた。夕方になってやっと臨時政府は突撃大隊をもって橋を占領し、そのいくつかをとりこわすことに成功した。これにこたえて軍事革命委員会は、水兵とヴィボルグ地区の赤衛軍兵士を出動させた、彼らは突撃大隊を武装解除し、おいちらして、みずから橋を占領した。このときから公然たる蜂起がはじまった。味方の多くの連隊が、司令部と冬宮のある地区全体を包囲する任務をおびて出動させられた。冬宮では臨時政府が閣議をひらいていた。装甲中隊が軍事革命委員会のほうにうつった(154)（十月二十四日夜おそく）ことが、蜂起の有利な結末をうながした。

十月二十五日に〔第二回全ロシア・〕ソヴェト大会がひらかれ、軍事革命委員会は獲得した権力をこれに移譲

した。

十月二十六日の早朝、「オーロラ」号から冬宮と司令部とにたいして砲撃がおこなわれたのち、また冬宮まえでソヴェト軍隊と士官学校生徒とのあいだに撃ち合いがあったのち、臨時政府は降伏した。

しゅうし変革を鼓舞したものは、同志レーニンを先頭とする党中央委員会であった。ウラヂーミル・イリイッチは当時ペトログラードのヴィボルグがわの秘密会合所にすんでいた。十月二十四日の夕方、彼は運動を指導するためにスモーリヌイへ呼びよせられた。

十月蜂起に抜群の役割を演じたのは、バルチック艦隊の水兵とヴィボルグ方面からきた赤衛軍兵士であった。これらの人々が非常な勇敢さをしめしたため、ペトログラードの守備隊の役割は主として、これらの先頭にたつ斗士を精神的に、また、ある程度は軍事的に援助することにとどまった。

『プラウダ』第二四一号
一九一八年十一月六日
署名――イ・ヴィ・スターリン

(155)

十月変革と民族問題

民族問題を、なにか自足的な、いちどあたえられたら、それきりのものと考えてはならない。民族問題は、現存の制度の改革という一般的な問題の一部にすぎないので、社会情勢の諸条件、国内権力の性格、一般に社会的発展の全過程によって完全に規定される。このことは、ロシアの革命期、すなわちロシアの辺境地方の民族問題と民族運動とが、革命の過程と結果に応じて急速に、かつ、だれの目にも明らかにその内容をかえていった時期に、とくにはっきりとあらわれている。

一　二月革命と民族問題

(156)

ロシアにおけるブルジョア革命期(一九一七年二月)には、辺境地方の民族運動はブルジョア解放運動の性格をおびていた。数世紀にわたって「旧制度」に抑圧され搾取されてきた、ロシアの諸民族は、はじめて彼ら自身の力を自覚し、抑圧者との戦いに突入した。「民族的抑圧の一掃」――これが運動のスローガンであった。ロシアの辺境地方は、一瞬で「全民族的」機関におおわれた。運動の先頭にたったのは、ブルジョア民主主義的民族

インテリゲンツィアであった。ラトヴィア、エストニア地方、リトワニア、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャン、北カフカーズ、キルギジア、および中部ヴォルガ流域の「民族ソヴェト」、ウクライナと白ロシアの「ラーダ」、ベッサラビアの「スファトル＝ツェリー」、クリミアとバシキリアの「クルルタイ」、トゥルケスタンの「自治政府」、――これらは、そのまわりに民族ブルジョアジーの諸勢力が結集した「全民族的」機関であった。問題は、民族的抑圧の「基本的原因」としてのツァーリズムからの解放であり、民族的ブルジョア国家の形成であった。民族自決権は、辺境地方における民族ブルジョアジーが権力を自分の手中におさめ、二月革命を「自分の」民族国家の形成のために利用する権利として理解された。革命をさらに発展させることは、うえにあげたブルジョア諸機関の考慮にはいらなかったし、また、はいることもできなかった。そのさいツァーリズムにかわって、仮面をぬいだ赤裸々な帝国主義がたちあらわれたこと、この帝国主義のほうが諸民族の、より強力なより危険な敵であること、それは新しい民族的抑圧の基礎となるものであることが見のがされていた。

しかしツァーリズムの廃止とブルジョアジーの権力獲得は、民族的抑圧の絶滅をもたらさなかった。民族的抑圧の古い粗野な形態が、新しい洗練された、だがそのかわり、いっそう危険な抑圧の形態にかわったのである。

(157)

リヴォーフ＝ミリューコフ＝ケレンスキー政府は、民族的抑圧の政策と手をきらなかったばかりでなく、さらに新しい進撃をフィンランドにたいして（一九一七年夏の議会の解散）、またウクライナにたいして（ウクライナの文化的諸機関の破壊）組織した。それどころか、ほんらい帝国主義的なこの政府は、新しい領土、新しい植民地および新しい民族の征服のために、戦争の継続を国民に呼びかけた。政府をこれにおしやったものは、帝国主義の内的本質だけでなく、新しい領土と民族とを隷属させようという無制限の欲求をいだいて、この政府の勢力

(158)

範囲を縮小させようと、これをおびやかしていた、古い帝国主義諸国が、西欧に存在しているという事情である。帝国主義諸国の存立条件としての、弱小民族隷属化のための戦い、――これが帝国主義戦争の過程でばくろされた光景である。ツァーリズムの絶滅と、これにかわるミリューコフ＝ケレンスキー政府の出現は、このみにくい光景にまったくなんの改善ももたらさなかった。辺境地方における「全民族的」諸機関は、それが国家的独立への傾向をしめしたかぎりでは、とうぜんロシアの帝国主義的政府のがわから断固たる反撃をこうむった。また、これらの諸機関は、民族ブルジョアジーの権力を是認して、「自分の」労仂者・農民の根本的な利益に耳をかさなかったために、後者のあいだに不平と不満をひきおこすことになった。いわゆる「民族軍隊」は火に油をそそぐだけであった。それらは、上からの脅威にたいしては無力で、下からの脅威にたいしては、ただこれを激化し深刻化するばかりであったからである。「全民族的」諸機関は外からの打撃にたいしても、内からの爆発にたいしても無防備であった。芽ばえたばかりのブルジョア的民族国家は、花をひらかずにしぼみはじめた。

こうして民族自決の原則の古いブルジョア民主主義的解釈は、架空のものとなり、その革命的意義をうしなってしまった。このような諸条件のもとで、民族的抑圧の絶滅と弱小民族国家の独立確保とが、問題になりえなかったことは、明らかであった。被圧迫民族の勤労大衆の解放と、民族的抑圧の絶滅とは、帝国主義と手をきり、「自国の民族ブルジョアジーをたおし、勤労大衆自身が権力を奪取することなしには考えられない、ということが明らかになった。

このことは十月の変革ののちに、とくに明確にあらわれた。

二　十月革命と民族問題

二月革命は、和解しがたい内部的諸矛盾をふくんでいた。革命は労仂者・農民（兵士）の努力によって遂行されたにもかかわらず、革命の結果、権力は労仂者・農民にうつらずに、ブルジョアジーにうつった。革命を遂行することによって労仂者・農民は、戦争をおわらせ、平和をかちえることをのぞんだ。ところが権力にありついたブルジョアジーは、大衆の革命的興奮を戦争の継続と平和の阻止のために利用しようとした。国内における経済的荒廃と食糧危機は、労仂者のために資本と工業企業との収奪を、また農民のために地主の土地の没収を必要とした。ところがミリューコフ＝ケレンスキーのブルジョア政府は、地主と資本家の番人となって、労仂者・農民のがわからの攻撃にたいして、地主と資本家を断固として擁護したのである。これは労仂者・農民の手によっておこなわれながら、搾取者の利益に帰したブルジョア革命であった。

ところで国は、帝国主義戦争と経済的崩壊と食糧危機の重荷のもとに、なお疲弊の過程をたどっていた。戦線は崩壊し分断されていた。工場は停止していた。国内では飢餓が増大した。さまざまな内部的矛盾をふくむ二月革命は「国の救済」にとって明らかに不十分であった。ミリューコフ＝ケレンスキー政府は、明らかに革命の根本問題を解決する能力がなかった。

国を帝国主義戦争と経済的崩壊の窮地からすくい出すためには、新しい、**社会主義的な**革命が必要であった。この革命は十月の変革の結果として、やってきた。

地主とブルジョアジーの権力をたおし、労仂者・農民の政府をこれにおきかえた十月の変革は、二月革命の諸矛盾を一挙に解決した。地主・富農の独裁を廃止して、土地を農村勤労大衆の利用にまかせ、工場を収奪してそれを労仂者管理へうつし、帝国主義と手をきり、略奪戦争を清算し、秘密条約を公表し、他国の領土を侵略する政策をぼくろし、最後に、被圧迫諸民族の勤労大衆の民族自決を宣言し、フィンランド独立を承認すること、——これらが、ソヴェト革命の初期に、ソヴェト権力が実施した基本的な措置であった。(160)

これは真に**社会主義的な**革命であった。

中央にはじまった革命は、中央の狭い地域のわくのなかに、ながくとどまってはおられなかった。中央で勝利をえたのち、それは不可避的に辺境地方へとひろがらねばならなかった。そして、じじつ革命の波は変革の最初の日いらい、北から全ロシアにながれ出て、辺境地方から辺境地方へと波及していった。しかし辺境地方では、この波は、すでに十月以前に成立していた「民族ソヴェト」および地方「政府」（ドン、クバニ、シベリア）という防波堤につきあたった。問題は、この「民族政府」が社会主義革命については、耳にすることさえのぞまなかった点にある。その本質からしてブルジョア的な民族政府は、古いブルジョア的秩序を破壊することをぜんぜんのぞまないで、反対に、全力をあげてこれを擁護し強化することを彼らの義務と考えた。その本質からして帝国主義的な民族政府は、けっして帝国主義と手をきろうとせず、反対に、機会さえあれば、「他」民族の領土のひとかけらでも奪取し従属させるのを、すこしもいとわなかった。辺境地方の「民族政府」が中央の社会主義政府に宣戦を布告したのは、おどろくにあたらない。宣戦を布告することによって、民族政府はとうぜん反動の基地となり、ロシアにおけるすべての反革命的なものを、自分のまわりに集結することになった。ロシアからた

(161)

たき出されたすべての反革命家どもが、そこへ、つまり、これらの基地へ集結したこと、また彼らがそこで、すなわち、これらの基地の周囲に、白衛軍の「民族」軍隊として編成されたことは、周知のことである。

しかし「民族政府」のほかに、辺境地方にはなお諸民族の労仂者・農民がいる。十月の変革以前、すでにロシアの中央における〔労・農・兵〕代表ソヴェトにならって、みずからの革命的な代表ソヴェトを組織していた彼らは、北方における仲間との連絡をけっしてたたなかった。彼らもまたブルジョアジーにたいする勝利をもとめ、彼らもまた社会主義の勝利のために斗争していた。「自分の」民族政府との彼らの紛争が日一日と激しくなっていったのは、おどろくにあたらない。十月の変革は辺境地方の労仂者・農民とロシアの労仂者・農民との同盟を強固にし、社会主義の勝利にたいする彼らの信念を鼓舞するばかりであった。「民族政府」とソヴェト権力との戦いは、諸民族大衆とこれら「政府」との紛争へ、後者との完全な断絶へ、また後者にたいする公然たる蜂起へとみちびいた。

こうして、ロシアの辺境地方の民族ブルジョア諸政府間の反革命的同盟に対抗する全ロシアの労仂者・農民の社会主義的同盟ができあがった。

一部の人々は、辺境諸「政府」の斗争をソヴェト権力の「過酷な中央集権主義」にたいする民族解放斗争であるかのように言っている。だが、これはまったくあやまっている。世界中で、ロシアのソヴェト権力ほど広範な地方分権主義をゆるした権力はないし、世界中で諸民族にたいしてこれほど完全な民族的自由をあたえた政府はない。辺境諸「政府」の斗争は社会主義にたいするブルジョア反革命の斗争であったし、現在もそうである。民族の旗は、民族ブルジョアジーの反革命的企図をおおいかくすのに便利な人気取りの旗として、もっぱら大衆を

(162)

だますために縫いつけられているにすぎない。
ところで「民族的」な地方「政府」の斗争は、勝ち目のない斗争であった。両方から、つまり外からはロシアのソヴェト権力に、内からは「自国の」労仂者・農民に攻撃された「民族政府」は、最初の戦斗ののち早くも退却せねばならなかった。フィンランドの労仂者と小作農の蜂起とブルジョア的「元老院」の敗走、ウクライナの労仂者・農民の蜂起とブルジョア的「ラーダ」の敗走、ドン、クバニ、シベリアの労仂者・農民の蜂起とカレーヂン、コルニーロフおよびシベリア「政府」の没落、トゥルケスタンの貧民の蜂起と「自治政府」の敗走、カフカーズの農業革命とグルジア、アルメニアおよびアゼルバイジャンの「民族ソヴェト」の完全な孤立無援、——これらは、辺境諸「政府」が「自国の」勤労大衆から完全に遊離していることをしめした周知の事実である。徹底的にうちのめされた「民族政府」は「自国の」労仂者・農民に対抗するため、西欧の帝国主義者に、全世界の諸民族の数世紀にわたる抑圧者と搾取者に援助をもとめることを「よぎなくされた。」
こうして外国の干渉と辺境地方の占領の時期が、すなわち「民族的」な地方「政府」の反革命的性質をもういちどばくろした時期がはじまった。
民族ブルジョアジーのもとめているものは、民族的抑圧からの「自民族」の解放ではなく、自民族からもうけをしぼりとる自由であり、自分の特権と資本を保持する自由であるということが、いまや、はじめて万人の目に明らかになった。
被圧迫諸民族の解放は、帝国主義と手をきらないかぎり、また被圧迫諸民族のブルジョアジーをうちたおさないかぎり、さらに権力をこれら諸民族の勤労大衆の手にうつさないかぎり考えられないということが、いまやは

じめて明らかとなった。

こうして「全権力を民族ブルジョアジーへ」というスローガンをかかげる、民族自決の原則の古いブルジョア的理解が、革命の過程そのものによってばくろされ、なげすてられることになった。「全権力を被圧迫民族の勤労大衆へ」というスローガンをかかげる、民族自決の原則の社会主義的理解が全面的に承認され、適用の可能性をえることになった。

こうして十月の変革は、古いブルジョア的民族解放運動にとどめをさし、あらゆる種類の抑圧――したがって民族的抑圧をもふくめた――にたいする、「自国」および他国のブルジョアジーの権力にたいする、帝国主義一般にたいする、被圧迫諸民族の労働者・農民の新しい社会主義運動の時期をひらいたのである。

三　十月革命の世界的意義

ロシアの中央で勝利し、一連の辺境地方を確保した十月革命は、ロシアの領土のわくのなかにとじこもっていることはできなかった。帝国主義世界戦争と大衆のなかの全般的な不満という空気のなかでは、それは隣接する国々へ波及せずにはおかなかった。帝国主義と手をきり、略奪戦争からロシアを解放し、秘密条約を公表し、他国の領土を侵略する政策を厳粛に破棄し、民族的自由を宣言し、フィンランドの独立を承認し、ロシアを「各民族のソヴェト共和国連邦」と宣言し、またソヴェト権力が帝国主義との決戦をうったえる雄たけびを世界へなげつけたこと、――すべてこれらは奴隷化された東洋と、出血のために衰弱しつつある西欧とにむかって、深刻な

(164)

影響をあたえずにはおかなかった。

そして、じじつ十月革命は、東洋の被圧迫諸民族の勤労大衆の数世紀にわたる眠りをやぶり、そして彼らを世界帝国主義との斗争にひきいれた。世界最初の革命である。ペルシア、中国、インドで、ロシアのソヴェトにならった労仂者・農民のソヴェトが結成された事実は、このことを十分に確証している。

十月革命は、西欧の労仂者と兵士に救済の実例をしめし、彼らを戦争と帝国主義の抑圧からの真の解放の道へおしやった、世界最初の革命である。オーストリア＝ハンガリアとドイツにおける労仂者・兵士の蜂起、労仂者・兵士代表ソヴェトの結成、オーストリア＝ハンガリアの完全な権利をもたない諸民族の民族的抑圧にたいする革命的斗争は、このことをじゅうぶん雄弁にものがたっている。

問題は、東洋さらには西欧における斗争が、まだブルジョア民族主義の性格を脱しきれずにいるという点にあるのでは、けっしてない、問題は、むしろ帝国主義との斗争がはじまったこと、それがつづけられていて不可避的にその論理的帰結にたっしないわけにはいかないことにある。

(165)

外国の干渉と「外国」帝国主義者の侵略政策は、新しい諸民族を斗争にひきいれ、帝国主義との革命的抗争の領域をひろげて、革命的危機を尖鋭化させるばかりである。

このように十月革命は、おくれた東洋の諸民族と、すすんだ西ヨーロッパの諸民族との結びつきをつくり、彼らを帝国主義との斗争という共同の陣営にひきいれている。

このように民族問題は、民族的抑圧との斗争という部分的な問題から、民族、植民地および半植民地を、帝国主義から解放するという全般的な問題にまで成長しつつある。

第二インタナショナルとその首領カウツキーとの大罪は、とりわけ彼らがつねに民族自決の問題のブルジョア的理解にまどわされて、その革命的意義を理解せず、民族問題を帝国主義との公然たる斗争という革命的基礎のうえに提起することができなかったか、または、それをのぞまなかったこと、民族問題を植民地解放の問題と結びつけることができなかったか、または、それをのぞまなかったことにある。

バウェルおよびレンナー型のオーストリア社会民主主義者の愚劣さは、じつは彼らが民族問題と権力の問題との不可分の結びつきを理解しなかったことにある。彼らは民族問題を政治からきりはなして、それを文化的＝啓発的諸問題のわくのうちにとじこめようとつとめ、帝国主義と帝国主義によって奴隷化された植民地という「小さい事がら」のあることをわすれてしまったのである。

民族自決の原則と「祖国擁護」の原則とは、たかまりつつある社会主義革命の情勢のもとでの諸事件の進行そのものによってとりけされたと言われている。しかし実際は、とりけされたのは民族自決の原則と「祖国擁護」の原則ではなくて、それらのブルジョア的解釈である。帝国主義の抑圧のもとに疲弊し、解放にむかってつきすすんでいる被占領地域を一見するだけで十分であり、帝国主義の略奪者から社会主義諸国をまもるために革命戦争をおこなっているロシアを一見するだけで十分である。また、げんざいオーストリア＝ハンガリアにおこっている諸事件を考えてみるだけで十分であり、すでに自国にソヴェトを組織している奴隷的な植民地・半植民地（インド、ペルシア、中国）を一見するだけで十分である、――社会主義的に解釈された民族自決の原則のいっさいの革命的意義を理解するには、以上すべてを一見するだけで十分である。

十月の変革の大きな世界的意義は、主としてつぎの諸点にある。すなわち十月の変革が、

（一）民族問題のわくをひろげ、これを、ヨーロッパにおける民族的抑圧にたいする斗争という部分的な問題から、被圧迫諸民族と植民地・半植民地の帝国主義からの解放という全般的な問題に転化したこと。

（二）西欧と東洋の被圧迫民族を、帝国主義との斗争という共通の軌道にのせて、彼らの解放のための広範な可能性と現実的な道をひらき、それによって彼らの解放事業をいちじるしく容易にしたこと。

（三）**まさにこのことによって社会主義的西欧と奴隷的東洋とのあいだに橋をかけ、世界帝国主義にたいする**西欧のプロレタリアからロシア革命をへて、東洋の被圧迫諸民族にいたる新しい革命戦線をうちたてたこと。

東洋と西欧の被搾取勤労大衆が、げんざいロシアのプロレタリアートによせている、あの筆舌につくしがたい熱狂的感激もまた、ほんらい、これによって説明される。

全世界の帝国主義的略奪者どもが、こんにちソヴェト・ロシアにおそいかかるときにしめす、あの狂暴さも、主としてこれによるのである。

『プラウダ』第二四一号、二五〇号
一九一八年十一月六日、十九日
署名――イ・スターリン

(167)

(168)

仕切壁

社会主義的ロシアと革命的西方とのあいだに、被占領地域という形で仕切壁ができあがった。

ロシアでは、すでに一年以上も赤旗がひるがえり、西方すなわちドイツとオーストリア＝ハンガリアでは、プロレタリア蜂起の爆発が、毎日どころか時々刻々とひろがっていくのに、被占領地域、すなわちフィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトワニア、白ロシア、ポーランド、ベッサラビア、ウクライナ、クリミアでは、ブルジョア民族主義的「政府」が、死にかけた西方の帝国主義者どもの引立てで、やっと存在をたもちつづけている。

東方と西方では、「偉大な」国王と「強大な」帝国主義者たちが、すでに地獄へおちてしまっているのにたいし、被占領地域では、小さな国王と、こびとのような略奪者たちが主人顔にふるまい、労仂者・農民に暴虐と迫害をくわえ、彼らを逮捕したり、銃殺したりしている。

(169)

それどころか、彼ら、すでに一生をおえつつある「政府」は、その「民族的」な白衛「軍隊」を熱狂的に組織して「攻撃」を準備しつつあり、そして、今のところまだ絶滅されていない帝国主義的諸政府と、ひそひそと密談をかわしながら、「自分の」領土を「ひろげる」計画をたてている。

彼ら、つまり、すでに退位させられた「偉大な」国王のこれらの生きぐされの幻影、これらのこびとのような「民族的」「政府」は、東方と西方との革命という二つの巨大な焚火のあいだで、運命の意志にもてあそばれながら、いまヨーロッパにおける全般的な革命の火をけしとめ、自己の奇妙な存在をたもち、歴史の歯車を逆転させようと夢見ている！……

「偉大な」ドイツとオーストリア＝ハンガリアの「強大な」国王にもできなかったことを、これらの小「国王」たちは、瓦解した二、三の白衛「軍隊」の助けをかりて「一挙に」やってのけようと夢見ている。

われわれは、ロシアと西方における革命の力ずよい波が、被占領地域の反革命的夢想家を無慈悲にはきすててしまうであろう、ということをうたがわない。われわれは、これらの地域の「小国王」たちが、ロシアとドイツにおける、かつての「強力な」保護者たちとおなじ運命をたどる日の近いことをうたがわない。

われわれは、革命的西方と社会主義的ロシアとのあいだの反革命の仕切壁が、最後には一掃されてしまうであろうということを、信じない根拠はない。

被占領地域では、早くも革命の最初の兆候があらわれた。エストニアにおけるストライキ、ラトヴィアにおけるデモンストレーション、ウクライナにおけるゼネスト、フィンランド、ポーランド、ラトヴィアにおける全般的な革命的動揺、すべてこれらは最初のつばめのたよりである。これらの地域における革命とソヴェト政府とがきわめて近い将来の事がらであることは、言うまでもない。

プロレタリア革命は恐ろしい勢いで力ずよく全地球上を行進している。東方と西方におけるかつての世界「統治者」たちは、恐怖と不安のあまりプロレタリア革命のまえに頭をたれて、古い王冠をおとそうとしている。被

占領地域と、その小「国王」たちも、例外であるはずがない。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第二号
一九一八年十一月十七日
主張
署名――イ・ヴェ・スターリン

(171)

東洋をわすれるな

ヨーロッパで革命運動がたかまりつつあるこのとき、古い王座と王冠がくずれおちて労仂者・兵士の革命的ソヴェトに席をゆずり、被占領地域が帝国主義の手さきどもを、その領土からほうり出しつつあるこのとき、万人の目は、とうぜん西欧にそそがれている。そこ西欧では、なによりもまずヨーロッパできたえられ、全世界をしめつけている帝国主義の鎖が、うちくだかれなければならない。そこ西欧では、なによりもまず新しい社会主義的生活が泉のようにわき出てこなければならない。このようなときには、帝国主義によって奴隷化された数億の住民のいる遠い東洋は、なんとなく「ひとりでに」視野からきえて、わすれられるものである。

ところが東洋は、世界帝国主義にとって「つきることのない」予備であり、また「もっともたよりになる」背後であることからだけでも、この東洋を一瞬もわすれてはならないのである。

帝国主義者たちは、つねに東洋を彼らの幸福の基礎とみなしてきた。東洋諸国のはかりしれない天然富源（棉(172)花、石油、金、石炭、鉱石）は、あらゆる国の帝国主義者にとって「争いの種」であったではないか。帝国主義者たちがヨーロッパ内部で戦争をやり、西欧について**しゃべりたて**ながらも、けっして中国、インド、ペルシア、エジプト、モロッコのことを考えるのをやめなかったのも、もともとこれによるのである。なぜなら問題は

実のところ、つねに東洋にあったからである。また彼らが東洋諸国における「秩序と法律」をあれほど熱心に支持しているのも、主としてこれによる。これがなければ帝国主義の奥行のある背後は確保されないであろう。

しかし帝国主義者にとって必要なのは、東洋の富ばかりでない。彼らには、東洋の植民地および半植民地に豊富にある、あの「従順な」「人的資源」もまた必要なのである。彼らには東洋諸民族の「すなお」で安価な「労仂力」が必要なのである。そのうえ彼らには、東洋諸国の「従順な」「若者たち」が必要なのであって、彼らはその若者たちのなかから、いわゆる「有色」軍隊を募集し、これを「自国の」革命的労仂者に対抗させてつかうのを辞さない。だからこそ彼らは、東洋諸国を自分たちの「無尽蔵な」予備となずけているのである。

共産主義の任務は、圧迫された東洋諸民族の幾世紀の眠りをうちやぶり、これら諸国の労仂者・農民に革命の解放的精神をゆきわたらせ、彼らを帝国主義との斗争に立ちあがらせ、こうして世界帝国主義からその「もっともたよりになる」背後、その「無尽蔵な」予備をうばいとることである。

このことがなされなければ、社会主義の最後的勝利とか、帝国主義にたいする完全な勝利とかいうことは、思いもよらない。

ロシアの革命は、東洋の被圧迫諸民族を帝国主義との斗争に立ちあがらせた最初のものであった。ペルシア、インド、中国における代表ソヴェトは、東洋の労仂者・農民の幾世紀もの眠りが、過去のものとなりつつある明白な兆候である。

西欧の革命は、うたがいもなく東洋の革命運動に新しいショックをあたえ、その運動のなかに勇猛心と勝利への確信をふきこむであろう。

東洋の革命化の事業にすくなからぬ支持をあたえているのは、新しい領土併合をおこなっている帝国主義者自身であって、この領土併合は、新しい国々を帝国主義との斗争にひきいれ、世界革命の基礎をひろげつつある。共産主義者の任務は、東洋で成長しつつある自然成長的な運動の事業に介入し、その事業を、帝国主義との自覚した斗争にまで発展させることである。

この意味で、さいきんひらかれた回教徒共産主義者会議(三二)の、東洋諸国すなわちペルシア、インド、中国での宣伝を強化しようという決議は、うたがいもなく大きな革命的意義をもっている。

われわれは、回教徒の同志諸君が、自分のきわめて重要な決定を実行にうつすことを期待する。

なぜなら社会主義の勝利をねがうものは、東洋をわすれてはならないという真理を、いまここで、はっきりと会得しなければならないからである。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第三号
一九一八年十一月二十四日
主張

ウクライナは解放されつつある（三）

ウクライナとその富とは、すでにずっと以前から帝国主義的搾取の対象になっている。革命前には、西欧の帝国主義者たちは、いわばひそかに、つまり「軍事行動」なしにウクライナを搾取していた。フランス、ベルギーおよびイギリスの帝国主義者は、ウクライナで大企業（石炭、金属等々の）を設立し、大多数の株式をその手におさめることによって、法律にしたがい、「合法的に」、静かにウクライナ人民の血と汗をしぼっていた。

だが十月革命ののち、光景は一変した。十月革命は帝国主義の糸をひきちぎり、土地と企業がウクライナ人民の財産であると宣言し、「ありふれた」、「静かな」搾取の可能性を帝国主義者からうばいとってしまった。そして、まさにそのことによって帝国主義は、ウクライナからおい出されるにいたった。

しかし帝国主義は屈伏することをのぞまなかった。帝国主義はどうあっても新しい状態と妥協することをのぞまなかった。ここからウクライナを強制的に奴隷化する「必要」と、それを占領する「必要」とが生じた。

オーストリア＝ドイツ帝国主義者は、ウクライナ占領に手をつけた最初のものであった。「ラーダ」と「ゲットマン」および彼らの「独立運動」は、この占領を適当におおいかくし、オーストリア＝ドイツ帝国主義者によ

るウクライナの搾取をおもてむき「認証する」おもちゃであり、ついたてであるにすぎなかった。

オーストリア＝ドイツの占領期間中にウクライナが経験した、はかりしれない屈従と災厄、労仂者・農民の組織の破壊、工業と鉄道業との完全な乱脈、絞首刑と銃殺、——オーストリア＝ドイツ帝国主義者に保護されるウクライナの「独立運動」の、これらのありふれた光景を知らないものがいるだろうか。

しかし、オーストリア＝ドイツ帝国主義の崩壊とドイツ革命の勝利とは、ウクライナの状態を根本から一変した。帝国主義のくびきからの勤労ウクライナの解放の道がひらかれた。ウクライナの荒廃と奴隷化は終りにちかずきつつある。ウクライナにもえあがっている革命の火は、帝国主義の最後の残存物とその「民族的な」下げ飾りとを一掃してしまうであろう。そして革命の波のうえに生まれた「ウクライナ臨時労農政府」[三四]は、ウクライナの労仂者・農民の支配という原則のうえに、新しい生活をうちたてるであろう。農民には地主の土地を、労仂者には工場を、全勤労者と被搾取者には完全な自由を返還する、ウクライナ・ソヴェト政府の「宣言」——この歴史的宣言は、ウクライナの敵にとって恐ろしいことには、雷のようにウクライナ全土にひろがり、また、ウクライナの圧迫されたむすこたちには喜びと慰めとなって、幸福の鐘の音のようにひびきわたるであろう。

しかし斗争はまだおわっていないし、勝利はまだ確保されていない。ウクライナにおける本格的な斗争は、はじまったばかりである。

ドイツ帝国主義が最後の日をおえ、また「ゲットマン」が最後のあがきをしているのに、イギリス＝フランス帝国主義は、ウクライナを占領するために軍隊を集中し、クリミアへの上陸を準備している。彼らイギリス＝フランスの帝国主義者は、いまやウクライナのドイツ占領者の空席をしめようとのぞんでいる。それと同時に、冒

険主義者ペトリューラを首班とし、「新しい」調子になおした昔からの「政治的独立」というスローガンをかかげている「ウクライナ執政内閣」(三五)が、――つまりイギリス＝フランスの新たなウクライナ占領にとっては「ゲットマン」よりももっと適当な、新しいついたてが、――表面に出てきている！

ウクライナにおける本格的な斗争は、まだ将来のことである。

われわれは、ウクライナ・ソヴェト政府が、新しいまねかれざる客――イギリスおよびフランスからきた征服者にたいして、しかるべき反撃をあたえうるだろう、ということをうたがわない。

われわれは、ウクライナ・ソヴェト政府が、イギリス＝フランスの征服者の到来を、意識的にせよ無意識的にせよ、準備しているヴィンニチェンコーペトリューラの陣営の冒険屋どもの反動的役割をあばき出しうるであろう、ということをうたがわない。

われわれはまたウクライナ・ソヴェト政府が、自分のまわりにウクライナの労仂者・農民を結集し、りっぱに彼らを斗争と勝利にみちびきうるであろう、ということをうたがわない。

われわれは、ソヴェト・ウクライナのあらゆる忠実なむすこたちが、若いウクライナ・ソヴェト政府の救援におもむき、ウクライナを絞殺しようとするものどもとの、ウクライナの名誉ある斗争をたすけるように呼びかける。

ウクライナは解放されつつある、――いそいでその救援におもむけ！

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第四号

一九一八年十二月一日

主張

署名——イ・スターリン

(177)

光は東方から（三六）

ゆるやかに、だが、おさえがたい勢いで、解放運動の波が東から西にむかって被占領地方をすすんでいる。ゆるやかに、だが、おなじくおさえがたい勢いで、エストニア、ラトヴィア、リトワニア、白ロシアの「新しい」ブルジョア共和国「政府」は、実在のかなたにしりぞいていき、労仂者・農民の権力に席をゆずりつつある。ロシアとドイツとのあいだの仕切壁はくずれおちつつある。「全権力を民族ブルジョアジーへ」というブルジョア民族主義のスローガンは、「全権力を被圧迫諸民族の勤労大衆へ」というプロレタリア社会主義のスローガンにとりかえられつつある。

一年まえ、十月変革のあと、解放運動はこれとおなじ方向へむかって、これとおなじスローガンのもとにすすんでいた。当時、辺境諸地方で樹立されたブルジョア民族主義的「政府」は、ロシアからくる社会主義運動の波をせきとめようとして、ソヴェト権力にたいして戦いを宣言した。彼らは、民族ブルジョアジーの手に権力と特権とをとどめておくために、辺境地方に個々別々のブルジョア国家を建設しようとした。読者諸君は、この反革命的な計画が失敗におわったことをおぼえていられるだろう。つまり、これら「政府」は「自国の」労仂者・農民によって内部から攻撃されて譲歩をよぎなくされたのであった。その後ドイツ帝国主義がはじめた占領は、辺境

(178)

地方の解放過程を中断し、ブルジョア民族主義的「政府」に有利な情勢をつくり出した。だが、ドイツ帝国主義が崩壊し、占領軍が辺境地方からおい出されてしまった今日、解放斗争の過程は新しい力で、また新しい、よりいっそう明らかな形をとってよみがえってきた。

最初に蜂起の旗をかかげたのはエストニアの労仂者であった。エストニアの勤労者コンミューン(三七)は、エストニアのブルジョア共和国「政府」の基礎を破壊し、エストニアの都市と農村の勤労大衆を斗争に立ちあがらせて、勝利のうちに前進している。そしてエストニア・ソヴェト政府の要請にこたえて、ロシア・ソヴェト政府はエストニア・社会主義共和国の独立を厳粛に承認した。この行為が、ロシア・ソヴェト政府の義務であり、責任であることを、証明する必要があるだろうか。ソヴェト・ロシアが西部地方を自国の領土とみなしたことは、まだいちどもない。ソヴェト・ロシアはつねに、これらの地域がそこにすむ諸民族の勤労大衆の譲渡できない領土をなすものであって、これらの勤労大衆が自分の政治的運命を自由に決定する権利をもっていると考えてきた。もちろん、このことは、ブルジョアジーのくびきから勤労者のエストニアを解放するために斗争する、わがエストニアの同志たちを、ソヴェト・ロシアが手段をつくして援助することを排除するものではなく、むしろ、それを前提とするものである。(179)

ラトヴィアの労仂者もまた、ずたずたにされた祖国の解放の事業に着手した。ヴェロ、ヴァルク、リガ、リバヴァ、その他のラトヴィアの諸地における代表ソヴェトの復活、欠くことのできない政治的自由を革命的方法によって獲得しようとするリガの労仂者のかずかずの企て、リガ方面へのラトヴィア人狙撃兵の急速な進出、——こうしたことはみな、ラトヴィアのブルジョア共和国「政府」にも、エストニアにおけると同様の運命がまちう

けていることをものがたっている。われわれのところへとどいた情報によれば、数日中にラトヴィア臨時ソヴェト政府の公式宣言[三八]がおこなわれるということである。いうまでもなく、この行為が実行にうつされるならば、それは帝国主義からのラトヴィアの解放の事業を促進し、完成させるであろう。

ラトヴィア人労働者のあとにつづいて、リトワニアの労働者・農民がすすんでいる。ヴィルナ、シャヴリヤ、コヴノ、その他のリトワニアの諸地での代表ソヴェトの結成（もっとも、まだ半合法的であるが）、大経営を地主による略奪からまもる事業でリトワニアの農業労働者が発揮した、比類のない革命的積極性、リトワニアの奥へのリトワニア人狙撃兵の急速な進出、最後に、われわれの情報によれば、起草中といわれるリトワニア臨時ソヴェト政府の宣言、――すべてこれらのことは、悪名高いリトワニア・タリバ[三九]がラトヴィアとエストニアの前例とおなじ運命をまぬかれないだろう、ということをものがたっている。

彼占領地方の民族「政府」が短命であることは、それらの政府が労働者・農民の利益には縁のないブルジョア的性格をもっているためばかりでなく、なによりもそれらの政府が、占領軍のたんなる付属物で広範な住民層の目には、いっさいの威厳をうしなわずにいられなかった、という事情のためでもある。この意味では、占領期間は辺境の地方の発展において、うたがいもなく積極的な役割を演じ、民族ブルジョアジーの腐敗と裏切りとを底の底までばくろしたのである。

(180)

明らかに、事態はこれまで帝国主義者のぺてん的陰謀の対象物であった西部地方とその勤労大衆とが、ついに自分自身の足で立ちあがり、きょうでなければ、あすにも自由をめざしてふるいたつという方向をとっている……。

北のフィンランドでは、今のところまだ「平穏」である。だが、この平穏のしたには、うたがいもなく一方では、解放を熱望している労仂者と小作農（トルバーリ）の深い内部的活動が、他方では、なぜか不穏なことにはしばしば閣僚を更迭し、イギリス帝国主義の手さきたちと、はてしなくひそひそと密談をかわしているスヴィンフヴード政府の深い内部的活動がひそんでいる。フィンランドからの占領軍の撤退は、うたがいもなくスヴィンフヴードの略奪者一味を一掃する仕事を促進するにちがいない。彼らは、まったく当然にもフィンランドの広範な住民層からきわめて強い軽べつをうけていた。

南のウクライナでは、フィンランドのように平穏ではない。——それどころではない！　反乱軍は南へ移動して、強化され組織されつつある。ハリコフは、典型的に組織された三日間のストライキ(四〇)ののち、労仂者・農民代表ソヴェトの手にうつった。ペトリューラ一派、ドイツ占領軍およびスコロパツキーの手さきどもは、労仂者の意志を尊重することをよぎなくされている。エカテリノスラフでは労仂者・農民代表ソヴェトが公然と活動している。ウクライナ臨時労農政府の有名な宣言は、合法的に印刷され、エカテリノスラフの街頭にはられている。(181)「当局」はこのような「無礼」をさしとめる力がなかった。ウクライナ・ソヴェト政府の宣言を福音書のようにうけとっている、ウクライナ農民の力ずよい蜂起運動については、のべるまでもない。

ところで、ずっと南の北カフカーズでは、イングーシ人とチェチェン人、オセット人とカバルダ人までもが、全集団をあげてソヴェト権力のがわへうつり、武器を手にして、彼らの祖国からイギリス帝国主義の雇い人の徒党を清掃している。

すべてこうしたことが、西欧の被圧迫民族にとって、また、なによりも、さしあたってはまだブルジョア民族

解放運動の時期をとおっているが、それでもすでに、いきおい帝国主義との斗争段階にはいりこんだオーストリア＝ハンガリアの諸民族にとって、むだにはおわらないだろうということは、いまさらのべるまでもないであろう。

すべてこれらの大きな諸事件の中心にあるのは、世界革命の旗手、すなわち被圧迫諸民族の労仂者・農民に勝利への信念をふきこみ、世界社会主義のための彼らの解放斗争を支持している、ソヴェト・ロシアである。

もちろん他方の陣営、すなわち帝国主義者の陣営もいねむりしてはいない。その手さきどもは、フィンランドからカフカーズにいたる、シベリアからトゥルケスタンにいたる全国をかけめぐって、反革命軍に補給をし、略奪の陰謀をめぐらし、ソヴェト・ロシアにたいする進撃を組織し、西欧諸民族をしばるための鎖をきたえている。しかし帝国主義者の一味が被圧迫諸民族の目には、もはやいっさいの威厳をうしなってしまっていること、また彼らが「文明」と「ヒューマニズム」の旗手としての、かつての栄光を永遠にうしない、買収とやとわれた徒党とによって、アフリカからつれてきた、いわゆる「有色人種」の奴隷状態と無知とによって、略奪者としての存在をたもっていることは、もはや明らかではないであろうか……。

光は東方から！

帝国主義的人食いのすむ西欧は、暗黒と奴隷状態のるつぼと化してしまっている。われわれの任務は、そのつぼをうちくだき、万国の勤労者に喜びと慰めをもたらすことにある。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第六号

一九一八年十二月十五日

主張

署名——イ・スターリン

(183)

事ははかどっている

西部諸地方の解放過程ははかどっている。革命の波は、行くてのあらゆる障害をうちやぶりながら、たかまりつづけている。エストニア、ラトヴィア、リトワニアの旧世界の手さきと極右反動どもは、悪魔が香煙からにげるように、にげまわっている。

エストニアの狙撃兵は、すでに重要な交叉点タプスを包囲している。わが艦隊は人民委員会議の指令にしたがい、海上からの万一の奇襲にそなえて、ソヴェト・エストニアを警備している。社会主義の赤い旗はエストニアの空にひるがえっている。エストニアの勤労大衆は歓呼の声をあげている。レーヴェリ〔タリン〕解放の日も遠くはない。いうまでもないが、イギリスの軍隊がエストニア占領のためにやってきても、エストニア全人民の総反抗に出あうであろう。

(184)

リトワニアの革命の火はますます激しくもえさかっている。ヴィルナは、すでに労働者と土地をもたない農民との代表ソヴェトの手中にある。数日まえにヴィルナでおこなわれた大デモンストレーション(四一)は、カイゼルの手になるタリバを完全に粉砕した。人民委員会議と赤軍にたいするヴィルナ・ソヴェトの熱烈なあいさつ(四二)は、リトワニアの解放運動の性格を、このうえなくはっきりしめしている。コヴノ、シャヴリヤその他の諸都市のソヴェ

ト、絞刑吏ホフマン将軍の鼻さきにある諸村落のソヴェト、――それらはすべてソヴェト革命の要撃の力強さを証明している。ヴィレイカに樹立されたリトワニア労仂者政府(四三)と、その炎のような宣言とは、うたがいもなくリトワニアの革命的諸勢力の確実な結集点をつくり出すであろう。リトワニアの赤色狙撃兵は、祖国に解放をもたらすであろう。ロシア・ソヴェト政府によるリトワニア労仂者政府の承認は、最後の勝利にたいする彼らの確信をつよめるであろう。

ラトヴィアでは、革命がおさえきれないほど激しく成長している。すでにヴァルクを奪取したラトヴィアのすばらしい赤色狙撃兵は、優勢のうちにリガを包囲している。数日前に樹立されたラトヴィア・ソヴェト政府は、ラトヴィアの労仂者と土地をもたない農民とを確実に勝利へみちびいている。この政府は、ベルリン政府とドイツ占領軍当局とのふたまた政策をばくろして、その宣言のなかで卒直につぎのように声明している、――

「たとえ社会主義政府を自称する政府が干渉するといって、われわれをおどかそうとも、われわれは封建的・ブルジョア的な敵どもを利するような、あらゆる干渉を断固として排斥する」と。

ラトヴィアのソヴェト政府は、万国の革命的プロレタリアートの、なによりもまずロシアの革命的プロレタリアートの援助だけを期待している。この政府はこうのべている、――

「われわれは全世界の真に革命的なプロレタリアートの、とりわけロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の援助を、請し、かつ期待する」と。

ロシア・ソヴェト政府が、解放されつつあるラトヴィアとその英雄的な狙撃兵を、あらゆる手段で支持することを、証明する必要があるだろうか。

北のフィンランドでは、まだあいかわらず「平穏」である。だが平穏と平静との薄皮のしたでは、反革命はいねむりすることなく、新しい戦斗にそなえている。スヴィンフヴードが辞任してマンネルハイムが任命されたことは、国内での「改革」を拒否して、イギリスがくわだてているように、フィンランドをとおってペトログラードに進撃することを意味する。ところで、このことは、フィンランドにおける革命的危機の成熟を激化させずにはおかない。

ウクライナでは楽譜にしたがって演奏されたスコロパッキーの逃亡と、連合国によるヴィンニチェンコの執政内閣の承認とは、連合国の外交の新しい「活動」の新しい光景を明るみに出している。きのうはまだ「政治的独立」の剣をがちゃがちゃならしていたペトリューラ氏も、どうやらきょうでは、彼をたすけに「やってきた」連合国の軍隊、つまりクラスノフとデニキンの軍隊のためをはかるつもりでいるようである。ウクライナの主要な敵は反乱軍とソヴェトであると明言されている。そして、その主要な友は連合国という「のぞましい客」とその親友、つまり、すでにドネッ流域地方を占領したクラスノフ＝デニキンの白衛軍だというのである。かつてウクライナをドイツ人にうりわたしたペトリューラ氏は、こんどはウクライナをあらたにイギリス帝国主義にうりわたそうとしている。いうまでもなくウクライナの労仂者・農民は、ヴィンニチェンコ—ペトリューラの、この新しい裏切行為を考慮にいれるであろう。ウクライナで刻々に成長しつつある革命運動と、ペトリューラの軍隊の隊列内ですでにはじまっている分解過程とは、このことを十分に確証している。

事ははかどっている……。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第七号
一九一八年十二月二十二日
主張

東部戦線からのヴェ・イ・レーニンへの手紙(四四)

(186)

国防会議議長同志レーニンへ

調査をはじめました。調査の進行状況については、ついでのときに報告します。ここではただ一刻の猶予もならない、第三軍の困難についてのべる必要があると考えます。問題は、第三軍(三万人以上)のうちのこっているのが、つかれはて消耗して、やっと敵の攻撃をささえているわずか約一万一千の兵士だけだということです。司令官によって派遣された部隊は信頼できず、一部のものはわれわれに敵意さえいだいているので、このさいおもいきったふるい分けを必要とします。第三軍ののこった兵士を救援し、敵のヴィヤトカへの急進撃(前線の指揮官と第三軍から入手したすべての資料によれば、この危険はまったく現実的です)を阻止するためには、すくなくとも完全に信頼できる三個連隊を、至急ロシアから移動させて、軍司令官の指揮下におくことが絶対に必要です。この方向にむかって担当軍機関に圧力をくわえられることを、せつにおねがいします。くりかえしますが、このような措置をとらなければ、ヴィヤトカもペルミとおなじ運命におちいる恐れがあるというのが、事にあたっている同志全部の見解であり、われわれも手もとのいっさいの資料にもとづいて、この見解に同意しています。

(189)

スターリン

Председателю Совета Обороны
т-щу Ленину.

Расследованіе начато. О ходе расследованія будем сообщать попутно. Пока считаем нужным заявить Вам об одной, не терпящей отлагательства, нуждѣ III-ей арміи. Дело в том, что от III-ей арміи (более 30 тысяч) осталось лишь около 11 тысяч усталых, истрепанных солдат, еле сдерживающих напор противника. Присланныя главкомом части ненадежны, частью даже враждебны к нам и нуждаются в серьезной фильтровке. Для спасенія остатков III-ей арміи и предотвращенія быстраго продвиженія противника до Вятки (по всем данным, полученным от командного состава фронта и III-ей арміи, эта опасность совершенно реальна) абсолютно необходимо срочно перекинуть из Россіи в распоряженіе командарма по крайней мере 3 совершенно надежных полка. Настоятельно просим сделать в этом направленіи нажим на соответствующія военучрежденія. Повторяем: без такой меры Вятке угрожает участь Перми, таково общее мненіе причастных к делу товарищей, к которому мы присоединяемся на основаніи всех имеющихся у нас данных.

Сталин

Ф. Дзержинскій

5/I 1919. Вятка
8 часов вечера.

1919年1月5日付，レーニンあての
スターリンとジェルジンスキーの手紙

一九一九年一月五日　ヴィヤトカ
午後八時

エフ・ジェルジンスキー

『プラウダ』第三〇一号にはじめて印刷
一九二九年十二月二十一日

(190)

ヴェ・イ・レーニンへの報告

同志レーニンへ

あなたの暗号電報をうけとりました。破局の原因については、調査資料にもとずいてすでに報告しました。(四五)〔第三〕軍はつかれはてた部隊をもつだけで、予備隊も、しっかりした司令部もなく、そのうえ側面は北方から迂回される危険があるという状態にありました。——このような軍隊は、敵の優勢な新手に強く急襲されれば、ひとたまりもなかったわけです。われわれの考えるところでは、問題は、第三軍および後方の諸機関の弱さにあるばかりでなく、つぎの機関にもあります、——

(一) 信頼できないことがあらかじめわかっていた諸部隊を編成して戦線へ派遣した、参謀本部と管区軍事委員会、

(二) 後方で編成された諸部隊にたいして、コミッサールを配属せずに若干を配属した、コミッサール全ロシア・ビューロー、

(三) いわゆる指令や命令で戦線と軍との指揮の仕事をみだした共和国革命軍事会議。軍中枢部でしかるべき改変がおこなわれなければ、戦線で成功をおさめる保障はありません。

(191)

軍事問題にたいするわれわれの回答は、つぎのとおりです。

一　**二個連隊について。**二個連隊、つまり第一ソヴェト連隊とピーテル出の海兵連隊が投降しました。もっともこれらの連隊は、われわれにたいして敵対行動はとりませんでした。われわれにたいして敵対行動をとったのは、ウラル管区軍事委員会の編成した、イリイーン村に駐在していた第十師団第十騎兵連隊です。そのほかにォチェルスク工場に駐在していた、おなじく管区軍事委員会の編成した第十工兵連隊の反乱が防止されました。**寝返り**の原因は、敵対行動の原因とおなじく、各連隊の反革命性にありますが、この反革命性は、徴集兵をまえもって粛清しておかず、また連隊内での最小限の政治活動すらやっていなかった、旧式の動員方法と編成方法のためです。

二　**モトヴィリハ。**工場の機械部品と電気職場の部品は、全備品目録とともに適当な時期に撤去されて貨車につみこまれていましたが、しかし、それらはつみ出されてもいなければ、破壊されてもいませんでした。この責任は、中央協議会〔全ロシア撤退委員会の地方機関〕、軍事輸送司令官、および、かつてなかったほどの指揮の不十分さをしめした〔第三〕軍革命軍事会議にあります。モトヴィリハの労仂者の六分の五、工場の技術者全員および原料の全部がペルミにのこりました。いっさいの資料によれば、工場はほぼ一ヵ月半ののちには操業できるようになります。ペルミの陥落の直前にモトヴィリハの労仂者が蜂起したといううわさは、たしかな根拠がありません。ただ食糧不安にもとずく激しい動揺があっただけです。

三　**橋と重要施設の爆破について。**橋その他は、革命軍事会議が指揮不十分であったため、また後退諸部隊と軍司令部との連絡が欠けていたために、爆破されませんでした。橋の爆破を命じられた同志が任務をはたせなか

(192)

ったのは、爆破の数分まえに白衛軍にころされたためだとつたえられています。このうわさをたしかめることは、橋の警備兵が逃亡し、多くの「ソヴェトの」活動家が「どことも知れず」いなくなったために、さしあたってはできませんでした。

四　**ペルミの予備軍について。**予備軍は、しっかりしていない、信頼できない「ソヴェト」一個連隊からなっていましたが、それは戦線へ出たとたんに敵にねがえりました。そのほかには予備軍はありませんでした。

五　**資材と人員の損害。**損害の**完全な**状況を明らかにすることは、多くの書類が紛失し、また事にあたっている多数の「ソヴェト」専門活動家が敵にねがえったために、さしあたってはできません。

手もとにあるとぼしい資料によれば、われわれの損害はつぎのとおりです。すなわち機関車二九七輛（うち故障車八六輛）、車輛約三千（おそらくそれ以上）、石油と燈油九十万プード、苛性ソーダ数十万プード、塩二百万プード、医薬品五百万ルーブリ、ぼう大な資材をいれたモトヴィリハ工場とペルミ鉄道工場の資材倉庫、モトヴィリハ工場の機械設備と部品、カマー河艦隊の船舶設備、皮革六五輛分、軍補給部の食糧一五〇輛分、綿・織物・オレオナフトその他をいれた河川運輸地方管理部の大倉庫、負傷兵を収容している車輛一〇、大量のアメリカ製車軸を貯蔵した車輛倉庫、火砲二九門、砲弾一万発、小銃二千挺、弾薬八百万発、十二月二十二日から二十九日までのあいだの死傷および行くえ不明の兵士八千以上であります。鉄道専門技師全員とおなじく補給従業員のほとんど全員が、ペルミにのこりました。損害の計算はつずけられています。

(193)

六　**現在数で見た軍の戦斗編成。**第三軍は、げんざい銃剣一万四千本、サーベル三千本、機関銃三二三挺、火砲七八門をもつ、二個師団（第二十九師団および第三十師団）からなっています。予備軍は、ロシアから派遣さ

れてきた第七師団の一旅団ですが、それは、まだ信頼できないのとおもいきった粛清を必要とするため、まだ出動させていません。ヴァッェチスの約束した三個連隊はまだ到着しません(それにきのうナルヴァで新しい命令をうけたということですから、到着しないでしょう)(四六)。行動中の部隊は消耗し、つかれはて、やっと戦線をささえているだけです。

八　**第三軍の指揮系統。**指揮系統は見たところ普通で、「規則どおり」やられていますが、実際には、――まったく規律に欠け、ぜんぜんだらしがなく、戦斗諸部隊から遊離し、事実上、師団の自律にまかされています。

七　**後退を中止させるためにとられた措置は十分であったか。**これはうたがいもなく、第三軍にとって大きな援助になっています。(一)第二軍がクングール方面へ前進したこと。とられた措置のうち重要とみとめられるものは(二)スターリン―ジェルジンスキーの努力によって、完全に信頼のできる新手の兵士九〇〇名が、第三軍のおとろえた士気をたたきなおす使命をおびて戦線へおくられてきたこと。二日後には、われわれは騎兵二個中隊と第三旅団第六十二連隊(ふるい分けずみ)とを戦線へおくります。十日後には、さらに一個連隊が出ていくでしょう。第三軍の戦線はこのことを知り、後方の配慮がわかって、士気がたかまっています。現在の状態が二週間まえよりもよいことは、うたがいありません。ところによれば、軍は攻勢にうつってさえおり、しかも成功をおさめています。もし敵がなお二週間ほどの息つぎをあたえてくれるなら、つまりもし敵が元気のいい新手の兵力を戦線になげこむことがなければ、第三軍の地区に安定した状態の生まれることが期待できます。

げんざい、われわれは敵の数部隊がカイゴーロド経由の国道をとおって、ヴィャトカめざして北方を迂回してやってくるのを撃滅する任務についています。われわれがヴィャトカへやってきたのは、とりわけカイゴーロド

(194)

へスキー部隊を派遣するためであって、事実また、そのようにします。その他の（後方強化の）措置についていえば、われわれは軍および民間の活動家を動員して、彼らを後方の軍諸部隊へ派遣し、グラゾフおよびヴィャトカの代表ソヴェトを粛清しています。もっともこの仕事の結果は、当然のことですが、すぐにはあらわれません。とった措置はこれですべてです。これで十分だとは、どうしても考えられません。というのは、せめて一部の部隊交替でもおこなわなければ、第三軍のつかれはてた諸部隊はながくもちこたえることができないからです。ですから、すくなくとも二個連隊をこちらへ派遣していただくことが必要です。そのばあいに、はじめて戦線の安定が保障されると考えることができます。そのほかに必要なのは、退却した活動家たちの動員を促進するために、

（一）軍司令官を更迭し、

（二）三人の有能な政治活動家を派遣し、

（三）州委員会、州ソヴェト等々を、至急解散することです。

イ・スターリン
エフ・ジェルジンスキー

一九一九年一月十九日　ヴィャトカ

二伸　われわれは調査を完了するために、グラゾフへひきかえします。

一九四二年、『レーニンスキー・ズボールニク』〔『レーニン文集』〕第三十四巻にはじめて印刷

ヴィヤトカにおける党機関とソヴェト機関との合同会議での演説

一九一九年一月十九日

(議事録)

一般的状況についていえば、近い将来、戦線のある程度の安定が確保されるので、ヴィヤトカ県の軍事革命委員会の創設は、いままさに必要であると言わねばならない。もし敵が前進するならば、国内の反革命的蜂起は敵の救援におもむくであろう、そのさい、これとたたかって成功をおさめうるものは、軍事革命委員会のような小さい、敏活な機関だけである。

げんざい必要なのは新しい中心部の組織で、それには、つぎの諸機関から代表者が参加するであろう。

(一)　県執行委員会

(二)　州ソヴェト

(三)　党県委員会

(196)

〔四〕〔反革命抑圧〕非常委員会

〔五〕管区軍事委員部

ヴィヤトカの軍事革命委員会の手中には、とうぜん、すべての勢力といっさいの手段とが集中されねばならないが、ソヴェト機関の当面の活動は中止されずに、むしろ強化されなければならない。

県の中心機関にならって、おなじような機関が各郡に創設されねばならない。

革命委員会のこのような網の目によって、諸地方との連絡が実現されるであろう。

このような方法によってのみ、われわれは新しい攻撃を準備することができるであろう。

同志**スターリン**は、その提案をつぎのように要約している。

後方基地の強化と確保、ならびにヴィヤトカ県のソヴェトと党との全機関の活動の統一を達成するために、ヴィヤトカ軍事革命委員会を創設する。また上記の諸機関は、県におけるソヴェト権力の最高機関である、この委員会の諸決定にしたがう。

『ゴリコフスカヤ・コンムーナ』紙
第二九〇号にはじめて印刷
一九三四年十二月十八日

（197）

一九一八年十二月のペルミ陥落の原因についての党中央委員会および国防会議の調査委員会の同志レーニンへの報告

破局の一般的状況

破局の不可避性は、十一月の末ごろ、敵が第三軍を、ナヂェジンスキー—ヴェルホトゥーリエ—バランチンスキー—クウィンー—イルギンスキー—ロジェストヴェンスキーの線にそって、カ・マー河左岸にいたるまでを半月形に包囲し、その右翼によってしきりに陽動作戦をおこないながら、クシヴァにたいして狂気じみた攻撃をくわえてきたとき、すでに決定された。

とうじ第三軍は、第三師団、第五師団、特別旅団、特別枝隊および第二十九師団からなっていて、総数約三万五千の将兵、機関銃五七一艇、火砲一一五門をもっていた（『軍・営舎一覧表』を見よ）。

軍の士気は、無交替のまま六ヵ月にわたった戦斗による部隊の疲労のために、悲観的なものであった。予備軍はすこしもなかった。後方はまったく確保されていなかった(軍の後方では鉄道線路の一連の爆破があった)。軍への給与は偶然的で、確保されていなかった(第二十九師団にたいする急襲のもっとも困難な瞬間に、この師団の部隊は、五昼夜、文字どおりパンその他の給与品なしに敵の攻撃をしりぞけていた)。

それにもかかわらず、第三軍は〔最左〕翼の位置にあったので、北方から迂回される危険があった(迂回をふせぐために、軍の最左翼に特別な部隊集団を配置する処置はとられなかった)。最右翼についていえば、隣りの第二軍は、陸軍総司令官の要領をえない指令(イジェフスクとヴォトキンスクの占領後は、第二軍は新しい任務をうけているのだから、戦斗に参加させてはならぬという)に束縛されて、その位置に十日間くぎずけになり、クシヴァ撤退前のもっとも危急な瞬間に(十一月末)進撃して、適時に第三軍を救援することができなかった。

こうして、敵の迂回作戦にたいして(南部では)無抵抗で、(北部では)無防備であった第三軍、つかれはて消耗し、予備軍もなく、また多少でも安全な後方基地をもっていなかった第三軍、零下三五度の酷寒のもとで給与も悪く(第二十九師団)、ぼろぼろの靴をはいていた(第三十師団)第三軍、弱体で経験のすくない軍司令部のもとに、ナヂェジンスキーからオサ以南のカマー河岸にいたる広大な領域(四百ヴェルスタ以上)にひろがっている第三軍は、いうまでもなく、新手の優勢な(五個師団)、しかも経験をつんだ司令部をもつ敵の攻撃に対抗することができなかった。

十一月三十日、敵はヴィア駅を占領してわが軍の左翼と中央部とを切断し、第二十九師団、第三旅団をほとんど全滅させせた(旅団長、参謀長およびコミッサールがたすかっただけで、装甲車第九号は敵の手におちた)。十二

月一日、ルィシヴァ方面の敵はクルトイ・ローグ駅を占領し、わが装甲車第二号を奪取した。十二月三日、敵はクシヴァ工場を占領した（中央部から切断されたヴェルホトゥーリエおよび全北方地域はわが部隊により放棄された）。十二月七日、敵はビセルを占領、十二月九日、〔敵は〕ルィシヴァを占領。十二月十二―十五日、ソヴェト第一補充大隊が敵がわへねがえったさいに、〔敵は〕チュソフスキー、カリノ、セリャンカ各駅を占領。十二月二十日、敵はヴァレジナヤ駅を占領。十二月二十一日、ソヴェト第一狙撃連隊が敵がわへねがえったさいに、〔敵は〕ゴーリ、モストヴァヤを占領。わが軍の総撤退にさいし、敵はモトヴィリハに接近。二十四日から二十五日にかけて、敵は戦斗をまじえることなくペルミを占領。〔ペルミ〕市のいわゆる火砲防禦はから計画に帰し、火砲二九門を敵にゆだねた。

こうして、ヴェルホトゥーリエからペルミにいたる三百ヴェルスタをこえる混乱した退却で、わが軍は二十日間のあいだに、一万八千人の兵員と数十の火砲、数百の機関銃をうしなった。（ペルミ陥落後は、すでに第三軍の組成は三万五千のかわりに一万七千の兵員、五七一挺のかわりに三二三挺の機関銃、一一五門のかわりに七八門の火砲をもつ二個師団であった。『軍・営舎一覧表』を見よ。）

これは、厳密にいって、撤退ではなかった。ましてこれを陣地への部隊の組織的避退ということはできない。――それは、発生しつつある事態を理解しえず、また、あらかじめ不可避的な破局を読みとる能力を欠いた司令部、また、たとえ地域をうしなっても、あらかじめ準備された陣地へ避退させることで、軍隊を温存する手段を適時にとりえない司令部をもち、完全にうちやぶられ、完全に士気沮喪した軍隊の本格的な、無秩序な敗走であった。破局が「意外」だという革命軍事会議と第三軍司令部の泣き言は、これらの機関が軍隊から遊離していて

クシヴァとルイシヴァとでおきた不吉な事件を理解せず、彼らが軍事行動を指導する能力をもっていないことをしめしているにすぎない。

すべてこれらの事情は、第三軍地域の一連の都市と地点からの完全に無秩序な撤退、橋梁を爆破し、放棄された資材を破壊する仕事の恥ずべきやりかた、最後に〔ペルミ〕市の守備と、市のいわゆる火砲防禦の仕事を特徴ずけている、いまだかつてない亡然自失と、だらしなさとの基礎となったのである。

すでに八月いらい、撤退にかんする論議がはじめられていたにもかかわらず、撤退そのものの実際的組織のためにはなに一つ、あるいは、ほとんどなに一つなされていなかった。だれも、ただの一つの機関も、機関の足にまといつく中央協議会を、正常な秩序にもどそうとこころみたものはなく、ただ撤退計画について、はてしない討議をおこなっていたにすぎず、撤退の仕事のためにはなに一つ、まったくなに一つなされなかった（「自分自身の荷物」の品目表さえつくられていなかった）。

鉄道従業員のたくみに組織されたサボタージュとの斗争において信頼できず、たよりにならなかったウラル輸送管区にたいする実際的監督は、だれも、また、ただ一つの機関も、これを組織しようとこころみなかった。

十二月十二日におこなわれた、軍事輸送司令官ストゴフの撤退司令官への任命は、撤退の仕事を一歩も前進させなかった。というのは、早急にペルミから撤退するというストゴフの厳粛な保障（「余は生命にかけて保障する、――余はいっさいを撤退させるであろう。」）にもかかわらず、彼には撤退計画も撤退機関も、それから無秩序に、かつ、かって気ままに「撤退」しようとする個々の機関や解体した部隊の試みを、抑制するための軍事的な力（機関車・車輌等の把握）もないことがわかった。つまり、その結果、撤収されたのはあらゆるがらくた品、

こわれたいすやその他の家具で、一方、モトヴィリハ工場やカマー河艦隊の機械や部品と熟練工員、戦傷兵員、めずらしいアメリカ製の車軸の貯蔵品、数百台の完全な機関車その他の資材は撤収されずにのこされた。州委員会、州ソヴェト、革命軍事会議および軍司令部は、これらいっさいの事情を知らないわけにはいかなかった。しかし彼らはこのことに「干渉しなかった」ようである。というのは調査の結果は、これらの機関が撤退諸機関の活動の、組織的な点検をおこなわなかったことを、ものがたっているからである。

すでに十月にはじめられた、ペルミの火砲防禦にかんする軍司令部の会議は、まったく会議だけにおわってしまった。なぜなら二六門の火砲（プラスまったく完全とはいえぬ三門）は完全な馬具とともに、一発もうたないで敵の手におちたからである。調査がしめしているところでは、もし司令部が火砲の配置にかんする旅団長の活動を点検する時間があったならば、司令部は、ペルミ陥落の前夜に（十二月二十三日）、部隊が無秩序に移動し、組織は全般的に解体し、――旅団長が命令を遂行せずに、火砲の配置を十二月二十四日に延期した（この旅団長は十二月二十四日敵方に脱走した）という事情のもとでは、問題になりえたのは火砲を搬出するか、あるいは、すくなくとも破壊することによって、火砲そのものをすくい出すことだけであって、火砲防禦などではけっしてない、ということを知ったはずである。そのいずれもがなされなかったことは、司令部のだらしなさと創意の欠如とによってしか説明されない。

(202)

おなじだらしなさと無創意とは、カマー橋の爆破およびペルミにのこされた資材の破壊の問題にあらわれている。橋にはペルミ陥落の数カ月以前に、地雷が敷設されていた、しかし、それはだれの点検もうけていなかった（地雷敷設が予定の爆破直前に完全に整備されていたことを、だれも責任をもって断言していない）。爆破その

ものは「まったく信頼のできる」同志（メドヴェーヂェフ）に委任されたが、しかし橋の警備兵がまったく信頼のできるものたちであったか、彼ら（警備兵）が予定の爆破前の最後の瞬間までメドヴェーヂェフをおきざりにしなかったか、メドヴェーヂェフの安全が警備兵によって白衛軍の手さきたちの手から完全にまもられていたかを、だれも責任をもって断言するものはない。

だから、

（一）橋の警備兵たちが「どことも知れず」逃走してしまった爆破の直前に、メドヴェーヂェフが白衛軍の手さきによってころされた（あるものたちはそう考えている）というのが真実であるか、

（二）メドヴェーヂェフ自身、橋を爆破することをのぞまないで逃走したのであるか、

（三）あるいは、おそらくメドヴェーヂェフは橋の爆破のために全力をつくしたのであるが、橋を砲撃した敵の砲火によるか、——または砲撃前からそうであったかもしれないが——電線の不備と地雷の破損とのために橋は爆破されず、しかもメドヴェーヂェフは、あるいは、その後かけつけてきた敵兵によってころされたのであるかもしれぬ、ということをはっきりたしかめることは不可能である。

さらに革命軍事会議と軍司令部は、未撤収資材の破壊にたいする責任を、いずれかの機関あるいは一定の人間に、はっきりと決定的におわせる努力をしなかった。それればかりでなく、これらの機関では、遺棄された築造物や資材をかならず爆破あるいは破壊せよという正式の（文書による）命令がしめされなかった。また、このことは多くは、価値のすくない資材（たとえば車輛）が個人的イニシアティヴによって破壊（焼却）されながら、きわめて重要な資材（工場、被服その他）がそのままに放置され、しかもそのさい、ある責任者たちは「混乱防止」

のため、撤収されないものを焼却、爆破することを許可しなかった、ということにもとずく（これらの責任者は喚問されていない）。

軍隊および後方の全般的崩壊と解体、軍、党およびソヴェト諸機関のだらしなさと無責任の状況のうえに、多くの責任ある地位にあったものの敵がわへのいまだかつてない、ほとんど全般的な寝返りがつけくわえられる。すなわち防禦築造の指導者たる技師バーニンとそのすべての協同者、土木技師アドリアノフスキーと輸送管区の専門家の全員、軍事輸送課主任スホルスキーとその協同者たち、管区軍事委員部の動員課主任ブーキンと彼の協同者たち、哨戒大隊長ウフィムツェフ、砲兵旅団長ヴァリュジェーニッチ、特別編成課長エスキン、工兵大隊長とその副官、ペルミ第一および第二停車場司令官、軍補給部計理課全部と中央協議会の半数、――彼らのすべておよびその他多くのものが、ペルミに残留して、敵がわへ脱走したのである。

すべてこうしたことは、撤退しつつあった部隊だけでなく、ペルミ陥落の前夜につくられ、しかも市の革命的秩序を維持しえなかった革命委員会や、また市の諸部隊とのあいだの連絡をうしなった、県軍事委員部をもおそった、全般的ろうばいをつよめずにはおかなかった。その結果、哨戒大隊の二個中隊はペルミから撤退することができないで、のちに白軍に全滅させられ、また、おなじく白軍によって全滅させられたスキー大隊をうしなうことになったのである。市の各所で白軍の手さきによってたくみに組織された挑発的射撃（十二月二十三日―二十四日）は、全般的ろうばいをおぎない、つよめた。(204)

**

第三軍と予備軍

第三軍の疲労（六カ月間にわたる無交替のたえまない戦斗）と多少とも信頼できる予備軍の欠如とが、敗北の直接的原因となった。四〇〇ヴェルスタにわたって細い糸のように散開し、また北方から迂回されていたので、さらに北方へ遠くのびることをよぎなくさせられた第三軍は、敵にとっては、任意な地点で突破するのにかっこうな目標であった。すべて以上の事情や予備軍がないことは、東部戦線革命軍事会議と共和国革命軍事会議にはすでに十月からよくわかっていたのであるが（『付録』にいれた、「交替部隊」と「予備軍」を要求し、第三軍諸部隊の疲労を報告している第三軍首脳部の電報その他を見よ）、作戦本部は予備軍をおくらず、また、おくってもそれは役にたたないわずかな兵力にすぎなかった。十二月の初め、クシヴァをうしなったのち、交替部隊の要求と軍の疲労の訴えとは、とくにたびたびくりかえされた。十二月六日、ラシェーヴィチ（軍司令官）は情勢の悲観的なことを理由に東部戦線にたいし予備軍を要求したが、スミルガ（東部戦線）は「遺憾ながら、増援隊はおくれないだろう」と返事したのであった。十二月十一日、第三軍の革命軍事会議委員トリフォーノフはスミルガ(205)に直通電話でつぎのようにのべた、「われわれは、たぶん近日中にペルミを放棄せざるをえないだろう。強力な二、三個連隊で十分である。ヴィヤトカ、あるいは、もっとも近い地点からひきぬくようこころみられたし。」スミルガ（東部戦線）の回答、――「増援隊はおくれないだろう。総司令官は、援助することを拒絶した。」（『付録』を見よ。）八月から十二月にいたるまでの期間に、第三軍の補充として、中央からの命令によって、全員一三、

一五三人と銃剣三、三八八、機関銃一三四、火砲二二、軍馬九七七が到着した。そのうちクロンシュタット第一海兵連隊（一、二四八人）は敵がわへ投降し、海軍歩兵第十一独立大隊（八三四人）は潰走し、クロンシュタット要塞の第五野戦砲兵中隊は隊長虐殺のかどで逮捕され、フィンランド兵とエストニア兵（一、二一四人）は西部へ召還された。中央が約束した二二個中隊にかんする命令についていえば、中央はそれをぜんぜんはたさなかった。中央が約束した第七師団第三旅団（三個連隊）は、すでにペルミが陥落したのちの一月上旬にはじめてグラゾフに到着した。しかも、その旅団に接してみると、それが赤軍とは似ても似つかぬ部隊であることが明らかとなった（ろこつな反革命的気分、ソヴェト権力にたいする反感、旅団内に富農的要素の団結したグループがあること、「ヴィヤトカをあけわたす」というおどかし、その他等々）。そのほか旅団は戦斗のばあいの備えができていないし（射撃する術を知らず、彼らの行李は夏季用のものである）、指揮官たちは自分の連隊のことを知らず、政治的活動はなっていなかった。三、四週間にわたって旅団の粛清と綿密なふるい分けをおこない、旅団内へ赤軍兵士たる共産党員を増強し、きわめて激しい政治的活動をおこなったのち、はじめて一月末ごろそれを能力ある戦斗単位にかえることに成功した（旅団を構成した三個連隊のうち一個連隊は一月二十日戦線に出動し、他の連隊は一月三十日以後、残りの連隊は二月十日以後に出動することができるはずである）。わが軍の編成制度における同様の欠陥を証明するものは、オチェルスキー工場に駐屯していた第十騎兵連隊と第十工兵連隊との事件である（両連隊はウラル管区軍事委員部によって編成）。そのうち前者はわが部隊の背後を襲撃し、後者もまたおなじことをしようとこころみたが、予防策がとられたために不成功におわった。

(206)

編成制度の欠陥はつぎの事情によるものである。五月末まで赤軍の編成は（全ロシア編成協議会の管轄のもと

に）志願制度を原則として、労仂者と、他人の労仂を**搾取しない**農民とを入隊させることによっておこなわれていた（全ロシア編成協議会のつくった「証明カード」と「個人カード」を見よ）。志願兵制度期間の編成がしっかりしていたことは、とりわけ、このことによるとおもう。五月末、全ロシア協議会の解散と全ロシア参謀本部への編成業務の移譲後には、状況は悪化した。全ロシア参謀本部はツァーリズム時代の編成制度を全面的に踏襲し、**財産状態**を区別せずに動員された全員を赤軍の勤務につけたが、そのさい全ロシア編成協議会の「個人カード」にのっていた被動員者の財産状態にかんする事項は、全ロシア参謀本部のつくった「個人登録カード」からは削除された（全ロシア参謀本部の「個人登録カード」を見よ）。なるほど、一九一八年六月十二日、労仂者と(201)**他人の労仂を搾取しない**農民の動員にかんする人民委員会議の最初の布告がつづいて出されたが、それは明らかに全ロシア参謀本部の実践にも、その命令にも、「個人登録カード」にも反映されていなかった。わが編成機関の仕事の結果として、赤軍というよりむしろ「国民軍」がえられたのは、主としてこれによるものである。国防会議調査委員会がウラル管区軍事委員部に圧力をくわえ、編成方法にかんする参謀本部のすべての材料と命令書の提出を要求した一月中旬にはじめて、――それ以後にはじめて、全ロシア参謀本部は編成制度について真剣に考えるようになり、全管区軍事委員部につぎのような電信命令を発したのである。「党籍にかんする資料、また（被召集者が）他人の労仂を搾取しているかどうか、普通教育課程を修了しているかどうかを個人登録カードの第十四、第十五、第十六項に記入すること。」（参謀本部のこの電信命令は、一九一九年一月十八日に出されている。『付録』を見よ。）これは一一個師団がすでに十二月一日ごろ編成をおわったとされた、そののちのことである。一方すでに戦線に出動していたその一部は、白衛軍の編成のすべての特徴をあらわした。

編成制度の欠陥は、編成された部隊にたいする管区軍事委員部の配慮のおどろくべきいたらなさ（粗末な食糧、粗末な被服、浴場のないこと、その他。『ヴィャトカ委員会の党審査委員会の証言』を見よ）と、しばしば敵がわへ部隊を寝返りさせた審査不十分の将校たちを、十ぱ一からげに指揮官に採用したことによって倍化した。

最後に、参謀本部は、ある場所で動員されたものが、編成上、他の場所（他の管区）へうつされるような処置、——それは大量的脱走をいちじるしく阻止することができたであろうに——をとらなかった。部隊において多少とも満足におこなわれた政治活動が欠けていたこと（全ロシア・コミッサール・ビューローの弱点、仕事にたいする非適応性）については、いまさらのべるまでもない。

このような半ば白衛軍的な予備軍は、それが中央によって派遣されたままでは（通常その半数は途中で逃走してしまったが）、第三軍の本質的な支柱となりえなかったことは、まったく明らかである。また、じじつ第三軍諸部隊の疲労と消耗は、退却にあたって兵士が集団をなして雪のうえにたおれ、「立っていることもできないし、あるくことはなおさらできない、くたくたなんだ、同志よ、おれたちを見すててくれ」と言って、コミッサールに自分たちを射殺するようにねがう、というところにまでいたっていたのであった。（『師団付コミッサールのムラチコフスキーの証言』を見よ。）

結論

予備軍なしの戦争はやめなければならない、常設予備軍制を実行にうつさなければならない、このことなしには現在の陣地を維持することも、成功をくりひろげることも考えられない。このことなしには、破局は不可避的

である。

しかし予備軍は、参謀本部が身につけている古い動員と編成の制度を根本的に改革し、参謀本部自体の成員を一新したばあいに、はじめて役だちうる。

まず第一に、被動員者を、財産をもつもの（あてにならないもの）と財産のすくないもの（赤軍の勤務にとって役にたつ唯一のもの）とに厳密に区別することが必要である。

第二に、ある場所で動員されたものを編成上他の場所へおくることが必要である。そのさい戦線への派遣は、「故郷の県から遠ければ遠いほどよい」という規則によっておこなわれねばならない（地域主義の放棄）。

第三に、国内戦の諸条件に不適当な、移動に不便な、大きい単位（師団）の編成をやめて、旅団を最大の戦斗単位としなければならない。

第四に、編成部隊の宿舎、給与、被服の問題にたいする犯罪的に投げやりな態度によって、赤軍兵士のあいだに怒り（最悪のばあいには大量的脱走）をよびおこしている管区軍事委員部にたいする厳重な不断の監督を確立しなければならない（その成員をあらかじめ一新しておいて）。

最後に、多少とも満足すべき政治的活動をおこなうにまったく無能な青二才の「コミッサール」を戦斗部隊に供給している、全ロシア・コミッサール・ビューローの成員を一新しなければならない。

これらの諸条件をまもらなければ、わが編成機関は戦線に赤軍よりむしろ「国民軍」をおくることになり、そのうえ「コミッサール」という語は、ののしりの呼び名になってしまうであろう。

とくに第三軍の戦斗力を維持するためには、すくなくとも信頼しうる三個連隊分の予備軍をただちに供給する

(209)

ことが絶対に必要である。

(210)

**

軍の指揮系統と中央の指令

第三軍の革命軍事会議はふたりの人物から構成されている。そのうちのひとり（ラシェヴィチ）は指揮をとっているが、他のひとり（トリフォーノフ）はといえば、彼の最低の機能も役割もまったく明らかにすることができなかった。すなわち彼は補給の監督もせず、軍隊の政治的教育機関の監督もおこなわず、また一般になにごともしなかったようである。革命軍事会議は、事実上なんら存在しない。

軍司令部は自分の戦場と遊離している。軍司令部は、司令部に情報を提供し、師団長や旅団長による軍司令官の命令の正確な遂行を監視する特別な代表者を師団や旅団のなかにもっていない軍司令部は、師団長や旅団長の公式報告（しばしば不正確な）に満足している。軍司令部は完全に師団長や旅団長の手中にある。（師団長や旅団長は自分を封建諸侯のように考えている）。ここから軍司令部の自分の戦場からの遊離（軍司令部は戦場の実状についてはなにも知らない）、軍の内部における中央集権の欠如（軍の戦斗単位間の接触点が弱いという軍司令部の永久の嘆き）が生ずる。中央集権は軍の内部だけでなく、（東部）戦線における軍と軍とのあいだにも欠けている。これは事実であって、第三軍が敵との劣勢な戦いで血まみれになっていた十一月十日から月末までの期

間に、第三軍に隣接していた第二軍はまる二週間、足踏みしていた。ところが十一月十日にはすでにイジェフスク＝ヴォトキンスク作戦から解放されていた第二軍が、もしも前進していたとすれば（しかも、それは自由に前進することができた、というのは当時、第二軍の敵はいなかったか、あるいは、ほとんどいなかったから）、敵はペルミにたいする重大な作戦をはじめることさえできなかったであろうし（第二軍が敵の背後を脅威している(211)ような事情のもとでは）、第三軍は救出されたであろう。

調査の結果、第二軍と第三軍とのあいだに一致が欠けていたのは、共和国革命軍事会議の戦線からの遊離と、陸軍総司令官の指令の軽卒さとによって、ひきおこされたものであることが明らかになっている。われわれが審問した戦線司令官カーメネフは、この原因についてつぎのように報告した、——

「まだイジェフスクとヴォトキンスクの占領前、十一月の上旬、十日より以前に、第二軍はこれらの地点の占領後、他の地点へ転送することが予定されているという指令をうけとったが、とくにどこへという指示はなかった。こういう指令があったあとでは、軍を十分に利用することも、また軍を敵と接触させることもできなかった、——そうしなければ、のちに軍を戦斗からひきぬくことができなかったであろう、——情勢は重大であったのに、軍はその地方から白衛軍の徒党を清掃するにとどまった。指令が撤回されるために、シュテルンベルグとソコーリニコフとの配慮と、彼らのセールプホフへの旅行とが要請された。だが、このことに十日間ぐらいがついやされた。こうして軍は十日間をうしない、一つの場所に足ぶみすることをよぎなくされた。そののち第三軍司令官ショーリンのセールプホフへの突然の召喚は、ショーリン個人に結びついていた第二軍をまひさせ、さらに五日間、軍に足踏みすることをよぎなくさせた。セールプホフでコスチ

ャエフはショーリンにあって、彼が参謀本部員かどうかをたずね、そして、そうでないことを知ると、われわれは南部戦線司令官の補佐に任命したい意向であったが『思いなおした』と言って彼を放免した。」（『東部戦線司令官通報』を見よ。）

一般に総司令官から指令を発するさいの、ゆるしがたい軽卒さを強調せねばならない。東部戦線の革命軍事会議員グーセフの通報（十二月二十六日）によれば、「さいきん東部戦線は五日間につぎの三つの電報をうけとった、（一）主要方向オレンブルグ、（二）主要方向エカテリンブルグ、（三）第三軍を救援せよ。」（グーセフのロシア共産党中央委員会への手紙を見よ。）それぞれの新しい指令の実施には一定の期間が必要であるということを考慮にいれるならば、共和国革命軍事会議と陸軍総司令官の自分自身の指令にたいする態度が、どれほどふまじめであったか、ということは容易に理解することができる。

(212)

第三の東部戦線革命軍事会議員スミルガは、おなじ革命軍事会議の残りのふたり――カーメネフとグーセフ――の供述に完全に同意した、ということを指摘しておかねばならない。（一月五日の『スミルガの証言』を見よ。）

結論

軍は、強力な革命軍事会議なしにはすませない。軍の革命軍事会議はすくなくとも三人から構成されなければならない。そのひとりは軍の補給機関を監視し、他のひとりは軍の政治的教育機関を監視し、もうひとりは指揮をとる。こうして、はじめて軍の正しい機能を保障することができる。

軍司令部は、師団長や旅団長の公式の報告（しばしば不正確な）にとどまっていてはならない、軍司令部は、軍司令部に規則的に通報し、総司令官の命令の正確な遂行を注意ぶかく見まもる自分の代表者、代理者をもっていなければならない。こうしてはじめて、司令部と軍との連絡を確保し、師団と旅団の事実上の自由行動を一掃し、軍の実際的な中央集権を解決することができる。

軍は自足的な、完全に自治的な単位として行動することはできないし、また、その行動にあたっては、それに隣接する軍に、そして、なによりもまず共和国革命軍事会議の指令に完全に依存している、すなわち、もっとも戦斗力ある軍隊でも、他の条件がおなじであるばあい、中央の指令が正しくなく、隣接する軍隊との実際上の連絡を欠くときには、破綻せざるをえないのである。戦線、まず第一に東部戦線に、真剣に計画された一定の戦略的指令の実行を中心として、個々の軍の行動の厳重な中央集権制度を確立しなければならない。指令を決定するにあたって、あらゆる資料をまじめに考量することのない、かって気ままと軽卒さ、そこから生じる指令の急激な取り替え、ならびに指令そのもののあいまいさ、共和国革命軍事会議はこれをゆるしているが、こうしたことは軍指導の可能性を排除し、力と時間の浪費をもたらし、戦線を瓦解させる。共和国革命軍事会議を、戦線と緊密に結合している小さいグループに、――軍を指揮する仕事における、かって気ままと軽卒さとをゆるさないように、たとえば、じゅうぶん熟達した五人からなるものに（そのうち、ふたりは専門家、ひとりは中央補給部を監視し、他のひとりは参謀本部を監視し、もうひとりは全ロシア・コミッサール・ビューローを監視する）――改造しなければならない。

＊
＊＊

後方の不安定性と党＝ソヴェト機関の活動

調査の結果、第三軍の後方が完全に崩壊していることを確認しなければならない。軍は二つの戦線で、すなわち軍がつねに見、かつ知っていた敵と、そしてまた白衛軍の手さきの指導のもとに鉄道を爆破したり、あらゆる妨害をおこなったりした、後方のとらえがたい住民とたたかわねばならなかった。後者のばあいには軍の後方で特別装甲列車によって鉄道を警備しなければならなかった。すべての党機関とソヴェト機関は、ペルミ県とヴィャトカ県の住民の「全面的反革命性」を異口同音に確認している。州委員会と州ソヴェト、それからペルミ県執行委員会と県委員会もまた、この地方の村落が「全面的に富農的」であると断言している。全面的に富農的な村落というものは、ふつう存在しない。富農はだれかを搾取しなければならないのであるから、被搾取者なしに富農が存在することは考えられないというわれわれの注意にたいして、上記の諸機関は両手をひろげておどろくだけで、なにか別の説明をあたえようとはしなかった。さらに、いっそうくわしい調査はつぎのことを明らかにした。すなわち代表ソヴェトには信頼しがたい人物がいて、貧農委員会は富農の手中にあり、党の機関は弱体で信頼しがたく、かつ中央から遊離しており、党活動は放棄されており、しかも地方の活動家は党＝ソヴェト機関の一般的弱体を、反革命抑圧非常委員会（それは党＝ソヴェトの活動の崩壊を一般的背景としてソヴェト権力の唯

(214)

一の地方代表者となった）の活動強化によって相殺しようとつとめているのである。中央執行委員会（あるいは内務人民委員部）と党中央委員会からの最小限の指導をうしなった、党＝ソヴェト機関の活動の貧困さによってしか、つぎのようなおどろくべき事実は説明することができない。すなわち農村にくさびをうちこんで貧農をソヴェト権力のために立ちあがらせることを使命とした、非常税にかんする革命的布告、(四七)――この布告が、農村をソヴェト権力反対に結束させるための、富農の手中におけるもっとも危険な武器になってしまったのである（通常、貧農委員会にいる富農のイニシアティヴによって、税の割当は財産上の標識によらずに頭割りでおこなわれたが、このことは貧農を憤怒させ、税とソヴェト権力とに反対する富農の煽動を容易にした）。ところが例外なくすべての活動家が、非常税にたいする「誤解」は、農村の反革命化の唯一の主要な原因ではないとしても、主要な原因の一つとなっていた、ということをみとめている。内務人民委員部、あるいは中央執行委員会のがわから、ソヴェト機関の当面の活動について指導しているようなことは、なに一つない（ペルミ県およびヴィヤトカ県の貧農委員会の改選が、一月二十六日にまだはじまっていなかったことは特徴的である）。中央委員会のがわから、党機関の当面の活動について指導しているようなことは、なに一つない。戦線に滞在していた全期間に、われわれは、ノヴゴロッツェワという姓の「書記」の署名のある、同志コロボフキンのペルミからペンザへの転任にかんする、党中央委員会の文書を一通手にいれることができただけである。（この指令は、明らかに目的にかなっていなかったので実行されなかった。）

すべてこれらの事情は、党＝ソヴェト機関が農村における支柱をうしない、貧農との結びつきをうしない、非常委員会に、弾圧手段に（農村はなき悲しんでいる）もたれかかるという事態にみちびいた。非常委員会そのも

のも、その活動が党＝ソヴェト機関のそれに並行する積極的な煽動や建設の活動によっておぎなわれなかったかぎりでは、ソヴェト権力の威信を傷つける、まったく排他的・孤立的な状態におちいってしまった。たくみにつくられた党＝ソヴェトの新聞ならば、われわれの機関の病弊を適時に明らかにすることができたであろうが、ペルミとヴィヤトカの党＝ソヴェトの新聞は、仕事をたくみにおこなうことも、ソヴェト権力の当面の任務を理解することも、わきまえていない。(「世界的社会」革命という空虚な文句以外のなにものをも、そのなかに見いだされないであろう。農村におけるソヴェト権力の具体的な任務、郷ソヴェトの改選、非常税にかんする問題、コルチャックおよびその他の白衛軍との戦争の目的、――これらの「低級な」テーマは、すべて偉大に新聞によって無視されている。)(216) たとえばヴィヤトカ市のソヴェト機関の四、七六六人の活動家と官吏のうち、四、四六七人はツァーリズムのもとでは、県自治体でおなじ地位をしめていた。すなわち卒直にいえば、古いツァーリズムの地方自治機関がたんにソヴェト機関に改称されたにすぎない、という事実は、どういうことになるか。(これらの「ソヴェト活動家」がヴィヤトカ県のわれわれのすべての製革地方を手中ににぎっている、ということをわすれてはならぬ。) このおどろくべき現象は、一月中旬のわれわれの調査によって明らかにされた。州委員会や州ソヴェト、地方の新聞や党活動家は、この現象を知っていたであろうか。もちろん知らなかった。党中央委員会、中央執行委員会、内務人民委員部は、このことを知っていたであろうか。もちろん知らなかった。しかし地方一般の病弊だけでなく、わがソヴェト地方機関の根本的な病弊についてなにも知らないで、どうして中央から指導することができるだろうか。

結論

わが軍の弱点は、後方の不安定なことであるが、これは主として党の仕事のなげやり、代表ソヴェトに中央の指令を実行する能力がないこと、地方の非常委員会の排他的な（ほとんど孤立的な）状態によるものである。

後方を強固にするためには、つぎのことが必要である。

一。中央委員会にたいする地方党機関の厳格な、規則的な報告の義務を確立すること、中央委員会から地方党機関に規則的に回章を出すこと。中央機関紙編集局に地方党新聞の指導のための新聞部を組織すること。党活動家（主として労働者出身の）の学校を設置し、活動家の正しい配分を組織すること。すべてこれらのことは、党中央委員会書記局を中央委員会の組織から分離したうえで、書記局の責任にすること。

二。代表ソヴェトの当面の活動の指導面での、中央執行委員会と内務人民委員部との権限の範囲を厳密に区別すること。全ロシア非常委員会を内務人民委員部と合同させること。中央権力の布告や指令を代表ソヴェトが正しく、かつ適時に遂行するのを監視する義務を内務人民委員部におわせること。県ソヴェトに、内務人民委員部に報告する義務をおわせること。内務人民委員部に、代表ソヴェトに必要な指示を規則的にあたえる義務をおわせること、『イズヴェスチヤ・ヴェ・ツェ・イー・カー』(四八)編集局に地方ソヴェト新聞指導のための新聞部を組織すること。

三。国防会議に付属して、人民委員部および現地（戦線ならびに後方の）のそれぞれの課の「機構の欠陥」を調査するための監督＝審査委員会を組織すること。

(217)

＊ 全ロシア非常委員会の内務人民委員部との合同の問題については、同志ジェルジンスキーが特別の意見をもっている。

＊＊
＊

補給機関と撤退機関

補給の業務における基本的病弊は、補給機関が信じがたいほど交錯し、それらのあいだに一致がないことである。

(218)

軍およびペルミ住民は、「ウラル補給部」、「県補給部」、「市補給部」、「郡補給部」および「第三軍補給部」から食糧品の供給をうけていた。そのさい補給は多くの欠陥をもっていた、というのは軍(第二十九師団)は、うえていたし、ペルミの住民とモトヴィリハの労働者は、飢餓的な量(四分の一フント)になるほど、パンの配給量が系統的にへらされたため、半ば飢餓状態で生活していた。

上記の補給諸機関の不一致によって説明されるところの、軍の補給業務の混乱は、食糧人民委員部がペルミ県の喪失を重視せず、第三軍のための補給命令を今にいたるもペルミ県およびその他の遠隔な諸県からヴィャトカ県へうつしていないことによって倍加されている。食糧人民委員部が諸港への穀物の輸送にまだ着手せず、また河川司令部が汽船の修理にまだ着手しなかったこと――それはうたがいもなく将来、補給業務におけるいっそう

大きい混乱をもたらす恐れがあるが——にとくに注意すべきである。

軍隊への兵器の補給は、機関の交錯と事務の遅延とにいっそうなやまされている。「中央補給部」、「砲兵補給本部」、「非常補給委員会」、「第三軍砲兵補給部」はたえず互にもつれあい、活発な補給業務をさまたげ、かつ、よわめている。事態を特徴ずけるために、われわれがペルミ陥落以前の一九一八年十二月十七日の、第三軍総司令官の戦線司令官への電報からの抜粋（トロッキーにわたした写し）を引用することは無用ではないとおもう。

「電報第三二四九号によって東部戦線補給部長は、ヤロスラーヴリ管区に六千挺の日本製小銃の補給命令が出されたと通告した。そのさい共和国最高軍事会議参謀長コスチャエフの電報第四九三号に徴して明らかなように、総司令官はこの命令を確認した。一カ月以前第三軍司令部から、上記の小銃の受取人が派遣された。ヤロスラーヴリ管区砲兵補給部に到着した受取人は、そこでは砲兵補給本部の命令がなかったので、命令についてはなにも知られていないことを打電してきた。受取人はモスクワの砲兵本部へいき、また、そこから小銃は陸軍総司令官の命令がなければ交付されないことを打電してきた。昨日、砲兵本部は小銃の交付をはっきりと拒否したという、受取人からの電報をうけとった、そして彼はかえってきた。電報第二〇八号によって革命軍事会議補給部長は、第二軍から六千挺の小銃をたんに発送する指令が発せられていると打電し、また電報第一五六〇号によって第二軍司令官は、これらの小銃をうけとるために受取人をイジェフスクへ至急派遣するよう打電した。受取人は派遣されたが、イジェフスクでは命令が発せられていないという口実で小銃は彼に交付されなかった。第二軍司令官は電報第六五四二号によって、東部戦線補給部長は電報第六五四一号によって、上記の小銃を交付せよというイジェフスク工場への指令を発することを要請した。十

六日までには工場で小銃を交付せよという指令はあたえられていない。手もとにある受取人からの報告によれば、すべての小銃は月曜日にイジェフスクから中央へ発送されねばならないのである。こうして軍は二つの命令によって小銃一万挺をうしなってしまった。軍の状態はよく知られているとおりである。小銃がなくては戦線に補充をあたえることはできないが、補充がなくては戦線は崩壊し、諸君がご承知の結果をもたらす。ヤロスラーヴリ管区砲兵本部にたいする小銃の補給命令は、総司令官の同意をえてあたえられているのである。これが第三軍司令部が砲兵本部のサボタージュを公式に非難し、この件の調査を主張しているゆえんである。」

この電報の内容は、戦線司令官カーメネフが完全に確認している(『戦線司令官通報』を見よ)。

(220)

おなじような機関の混乱と交錯は、撤退業務の分野でも支配していた。輸送管区司令官は巧妙に組織された鉄道従業員のサボタージュを鎮圧するのに完全な無能力をしめした。続発する転覆、輸送の停滞、軍隊に必要な貨物のなぞのような紛失が、もっとも困難な撤退の瞬間に、不意に管区をおそった。そのさい管区は、損害を予防するための真剣な手段をとらなかったか、あるいは、とることができなかった。中央協議会は「活動していた」、つまり討議をかさねていたのであるが、しかし貨物の計画的撤収のためのどんな手段も、まったくどんな手段もとらなかった。第三軍の軍事輸送司令官——彼はまた撤退司令官でもあるが——は、もっとも高価な貨物(モトヴィリハ工場の機械、部品その他)の搬出のため、まったくどんな手段もとらなかった。あらゆる家具が搬出され、例外なくすべての機関が撤退業務にまきこまれた、そのために撤退の過程そのものが混乱し、収拾のつかない状態におちいってしまったのである。

結論

軍の補給業務の改善のためには、つぎのことが必要である。

一、中央軍補給諸機関の交錯（中央補給部、非常補給委員会、砲兵本部、これらがそれぞれ自分かってに命令を出している）を根絶して、それらを命令の急速な遂行にたいして厳重な責任をもつ一機関に合同させること。

二、軍補給部に、各師団が二週間分の戦斗用食糧品を貯蔵することを責任をもっておこなわせること。

三、食糧人民委員部に、軍の補給命令を軍にもっとも近い県に、とくに第三軍のための命令は（至急）ヴィャトカ県に、うつす義務をおわせること。

四、食糧人民委員部には、さっそく穀物を諸港に輸送することに着手し、河川司令部には汽船の修理に着手する義務をおわせること。

撤退業務の整備のためには、つぎのことが必要である。

一、地方的な中央協議会を廃止すること。

二、最高国民経済会議のもとに、撤収された資材の正しい配分権をもつ、単一の撤退機関を創設すること。

(221)

三、この機関にたいして、必要なばあいには、あれこれの地区に、撤退のための特別な代理人――そのなかには軍官庁およびその地区の輸送管区の代表者をかならず参加させて――を派遣する義務をおわせること。

四、適当な輸送管区、まず第一にウラル管区に（その構成員がおもしろくないことを考慮して）、鉄道専門家を服従させ、鉄道従業員のサボタージュを打破する能力のある、交通人民委員部の責任ある代理人を任命するこ

と。

五、交通人民委員部にたいして、機関車と車輛をそれが豊富にある地区から穀倉地区へ移転することに、おなじくまた故障した機関車を修理することに、いそいで着手する義務をおわせること。

＊＊＊

物的ならびに人的全損失

損害の状況をあますところなく再現することは、一連の書類が「紛失」し、事件に関係した多くのソヴェトの活動家と専門家が敵がわへうつったために、可能だとはおもえない。手もとにある資料によると、われわれのうしなったものは、つぎのようである。四一万九千サージェン立方の薪と二三八万三千プードの木炭、無煙炭、泥炭。鉱石およびその他の原料――六六八〇万プード。主要材料と製品（鋳鉄、アルミニューム、錫、亜鉛その他）――五〇〇万プード。鋳塊、鉄塊、マルチン銑鉄、ベッセマー鋼鉄――六〇〇万プード。鉄と鋼（鉄条、屋根板鉄、針金、レールその他）――八〇〇万プード。食塩――四〇〇万プード。苛性ソーダと石灰ソーダ――二五万五千プード。石油と燈油――九〇万プード・医薬品――五〇〇万ルーブリ。モトヴィリハ工場とペルミ鉄道工場の倉庫。大量のアメリカ製の車両を貯蔵した車輛、倉庫。綿、織物、オレォナフト、釘、四輪馬車その他をもった河川運輸地方管理部の倉庫。皮革六五輛分。軍補給部の食糧一五〇輛分。機関車二九七（そのうち八六輛は

(222)

故障）。車輛三千以上。約二万の戦死、捕虜、行くえ不明者。負傷兵をのせた車輛一〇。火砲三七門、機関銃二五〇挺、小銃二万以上、薬包一千万以上、弾丸一万発以上。

われわれは、うしなった全鉄道網、高価な建造物等は計算にいれていない。

＊＊＊

戦線強化のためにとられた措置

一月十五日までに、千二百人の信頼しうる将兵が戦線におくられた。一日後には騎兵二個中隊が、二十日には第三旅団第六十二連隊（あらかじめ綿密にふるいわけられた）が派遣された。これらの諸部隊は敵の攻撃を阻止する可能性をあたえ、第三軍のもつ気分を打破し、ペルミにたいするわが軍の攻撃を開始させ、現在のところ、それは成功している。一月三十日、第三旅団第六十三連隊が（一カ月の粛清ののち）戦線に派遣されている。第六十一連隊はおそらく二月十日以後に派遣されるであろう（とくに綿密な粛清が必要である）。敵がわの迂回にたいして明けはなしの最左翼の弱点のために、ヴィャトカのスキー大隊は志願軍（全部で一千人）で補充され、速射砲をあたえられ、一月二十八日、第三軍の最左翼と連合してヴィャトカからチェルドィニ方面へ派遣された。第三軍の状態を実際に強化し、それに成功の可能性をあたえるためには、第三軍の支援として、ロシアからなお信頼しうる三個連隊の派遣が必要である。

(223)

軍の後方では、ソヴェト機関および党機関の真剣な粛清がおこなわれている。ヴィヤトカと郡ソヴェト所在地には、革命委員会が組織されている。農村における強固な革命的機関の設置がはじめられ、目下つずけられている。党およびソヴェトのすべての活動は、新しい基調のうえに再建されている。軍事的監督は浄化され、改革されている。県非常委員会は新しい党活動家によって浄化され、補充されている。ヴィヤトカ鉄道の混雑は緩和されつつある。第三軍の後方を根本的に強化するためには、経験ある党活動家の派遣と長期の社会主義的活動とが必要である。

(224)

報告をおわるにあたり、調査委員会は、国防会議のもとに、諸人民委員部とその現地の支部、すなわち後方および戦線の諜のいわゆる「機構の欠陥」を調査するために、監督＝審査委員会を組織することが絶対に必要であることを、もういちど強調しなければならないとおもう。

中央ならびに地方の活動における欠陥の改善のためには、ソヴェト権力は通常、過失をおかした活動家を処罰し、その責任をとうという方法をもちいる。この方法が絶対に必要であり、かつ完全に目的にかなったものであることを承認するが、しかし、それだけでは不十分であると考える。活動における欠陥は、たんに一部の活動家の弛緩、怠慢、責任感の欠如にもとずくだけでなく、活動家の他の部分の未経験にもとずいている。調査委員会は地方機関において、絶対に誠実で不屈で忠実だが、経験がたりないために自分の活動における一連の失敗に気ずかなかった多くの活動家を見いだしている。もしもソヴェト権力が、社会主義国家建設の経験

をたくわえ、そして、この経験をすでに生まれた、若々しいプロレタリアートを援助する希望にもえた活動家にあたえるような特別な機関をもっていたならば、社会主義ロシアの建設はずっと急速に、かつ欠陥なく進展したであろう。上記の、国防会議のもとにおける監督＝審査委員会は、このような機関とならねばならない。この委員会の活動は、活動家の綱紀粛清にかんする中央の仕事を補足することができるであろう。

調査委員会　イ・スターリン
エフ・ジェルジンスキー

一九一九年一月三十一日
モスクワ

『プラウダ』第一六号
一九三五年一月十六日
はじめて印刷

(225)

民族問題にかんする政府の政策

一年まえ、十月革命までは、ロシアは国家としては解体状況をしめしていた。すなわち古い「広大なロシア大強国」と、それとならんで、いろいろの方向にひかれていた、たくさんの新しい小「国家」がある、――というような状況であった。

十月革命とブレスト講和は、この分解過程をさらにふかめ、発展させるばかりであった。人々はすでにロシアについてではなく、大ロシア(四九)についてかたりはじめた。しかも辺境諸地方に樹立されたブルジョア政府は、中央の社会主義ソヴェト政府にたいする敵意にみちていて、ソヴェト政府にたいして宣戦を布告した。うたがいもなく、これとならんで辺境地方には、中央との統一をのぞむ労仂者・農民のソヴェトの強い志向があった。しかし、この志向は、国内問題に干渉した外国帝国主義者の反対の傾向によって阻止され、のちには抑圧された。

(226)

当時、主導的役割を演じたオーストリア＝ドイツ帝国主義者は、旧ロシアの崩壊を抜け目なく利用して、辺境政府にたいして中央との斗争に必要なあらゆるものを豊富に供給し、辺境地方をところどころ占領し、総じてロシアの最後的な崩壊をはやめた。連合国がわの帝国主義者もオーストリア＝ドイツ軍におくれをとるものかと、

おなじ道をすすんだ。

ボリシェヴィキ党の反対者たちは、この崩壊の責任をもちろん（もちろんだ！）ソヴェト権力におわせた。だがソヴェト権力が一時的な崩壊という、さけえない過程を阻止することはできなかったし、また、それをのぞまなかったことは、容易に理解できることである。ソヴェト権力は、帝国主義的な銃剣によってささえられているロシアの強制的統一が、ロシア帝国主義の転覆とともに、どうしても崩壊をさけえないことを理解していた。すなわちソヴェト権力は、みずからの本性を裏ぎることなしには、ロシア帝国主義の方法による統一を支持することはできなかったのである。ソヴェト権力は、社会主義にとって必要なのはあらゆる統一なのではなくて、兄弟としての統一であること、また、このような統一は、ロシアの諸民族の勤労諸階級の自由意志による同盟としてのみ達成できるのであって、さもなければ、まったく達成できないであろうということを認識していた。

オーストリア＝ドイツ帝国主義の壊滅によって、新しい局面がひらかれた。一方では、占領のあらゆる恐怖をあじわった辺境地方には、ロシアのプロレタリアートとその国家建設の諸形態とにたいする、非常に強力なあこがれが生まれ、このあこがれをまえにしては、辺境政府の分離主義的な苦しい努力も役にはたたない。他方では、被占領地域の勤労大衆が自分自身の政治的な姿を明らかにすることをさまたげていた外国の軍事力（オーストリア＝ドイツ帝国主義）が、もはや存在しなくなった。その後にあらわれた被占領地域における力ずよい革命的高揚と、いくつかの民族の労仂者・農民共和国の形成とは、被占領地域の政治的志向について疑いの余地をのこさなかった。諸民族のソヴェト政府の承認を要求したのにこたえて、ロシア・ソヴェト権力は、成立したソヴェト共和国の完全な独立を無条件に承認した。ソヴェト権力のこのような行動は、諸民族にたいするあらゆる圧迫を

(228)

自己の旧来の経験ずみの政策にしたがったものであった。ソヴェト権力は、相互信頼にもとずいてはじめて相互理解にもとずいてはじめて、諸民族の勤労大衆の完全な自由を要求する、また相互理解も生じうること、はじめて、諸民族の堅固な破壊しがたい同盟が建設されうることを理解していた。

ソヴェト権力の反対者たちは、ロシアを分裂させる「新しい企て」をやっているという非難を、もういちどソヴェト権力になげつけることをわすれなかった。彼らのうちのもっとも反動的なものは、辺境地方が中央へひきつけられているのをかぎつけて、「偉大なロシア」を復活させる――もちろん砲火と銃剣によって、ソヴェト権力の転覆によって――という「新しい」スローガンを宣言した。きのうまでは、まだロシアをいくつかの独立した反革命の基地に分割しようとこころみていたクラスノフやデニキンの一味、コルチャックやチャイコフスキーの一味がきょうは、とつぜん「全ロシア的国家」という「思想」にとりつかれてしまった。たしかに政治的直覚をそなえているイギリス＝フランス資本の手さきたちは、きのうまではまだロシアの分裂に賭けていたのだが、今ではいちじに二つの完全な「全ロシア的」政府を（シベリアと南部とに）樹立するというところまで、にわかに賭けの向きをかえてしまった。こうしたことはみな、うたがいもなく辺境地方の中央にたいするあこがれの、うちかちがたい強さをものがたるものであって、内外の反革命家どもは、いまこのあこがれを利用しようとつとめているのである。

「旧ロシア」（もちろん旧制度をもった）の復活者の反革命的な熱望が、ロシアの諸民族の勤労大衆の一年半の革命的活動ののちには破産する運命にあることは、言うまでもない。しかし、わが反革命家どもの計画が空想的なものであればあるほど、ロシアの諸民族の相互の兄弟としての信頼に完全に立脚しているソヴェト権力の政

策は、ますます現実的なものとして、くっきりとあらわれてくる。そのうえ、この政策は最近の国際的環境のもとでは、唯一の現実的な、唯一の革命的な政策なのである。

このことについては、白ロシア共和国のソヴェト大会のおこなった、ロシア・ソヴェト共和国との連邦関係の樹立にかんする、最近の宣言一つをとって見ても、これを雄弁に証明している。重要な点は、さいきん独立を承認された白ロシア・ソヴェト共和国が、いまやそのソヴェト大会で、自由意志によってロシア共和国との同盟を宣言しているということにある。(五〇)白ロシア・ソヴェト大会は、二月三日の宣言で、「いまやすべての独立したソヴェト共和国の勤労者の自由な、自由意志による同盟だけが、残余の全資本主義世界との戦いで労仂者・農民の勝利を保障する」と声明している。

「すべての独立したソヴェト共和国の勤労者の自由意志による同盟」……これこそまさに、ソヴェト権力がたえずくりかえしのべてきたところの、そして、いま好結果をもたらしているところの、諸民族の統合の道である。

白ロシア・ソヴェト大会は、そのほかにリトワニア共和国と統合することを決定し、かつ両共和国とロシア・ソヴェト共和国との連邦関係の必要を承認した。電信のもたらした報道によれば、リトワニアのソヴェト政府も同様の見地にたっている。しかもリトワニアの全政党のうち、もっとも有力なリトワニア共産党の協議会は、リトワニア・ソヴェト政府の見地を確認しているようである。いま召集されているリトワニア・ソヴェト大会も(五一)おなじ道をすすむであろうと期待できる、あらゆる根拠がある。(229)

これは、民族問題にかんするソヴェト権力の政策の正しいことをしめす、もう一つの確証である。

こうして古い帝国主義的統一の崩壊**から**、独立のソヴェト共和国を**へて**、ロシアの諸民族は、自由意志による新しい兄弟としての統一**へ**到着しつつある。

この道は、うたがいもなく、けっしてやさしい道ではないが、しかし、それはロシアの諸民族の勤労大衆の、堅固な、やぶりがたい社会主義的同盟へとみちびく、ただ一つの道なのである。

『イズヴェスチヤ』第三〇号
一九一九年二月九日
署名――イ・スターリン

(230)

トゥルケスタンの代表ソヴェトと党機関に

東部辺境地方の解放にともなって、党＝ソヴェト活動家のまえには、これらの辺境地方の諸民族の勤労大衆を社会主義国家建設の共同の事業にひきいれるという任務が提起されている。必要なことは、勤労者諸層の文化水準をひきあげ、彼らを社会主義的に教育し、地方語による文学を発展させ、プロレタリアートにもっとも近いその土地の民衆をソヴェト組織にみちびきいれ、彼らを地方の管理の事業にくわえることである。

このようにしてはじめてソヴェト権力を、トゥルケスタンの勤労者にとって身近な、親しいものにすることができるであろう。

トゥルケスタンは、その地理的位置からして、社会主義的ロシアと東洋の被圧迫諸国とを結合する橋であること、また、そのためにトゥルケスタンにおけるソヴェト権力の強化は、全東洋を革命化するうえで最大の意義をもつことができることを、はっきりと知るべきである。だからこそ上記の任務は、トゥルケスタンにとってきわめて重要な意義をもつにいたるのである。

(231)

民族問題人民委員部は、提出されている回章とおなじ主旨の党中央委員会、全ロシア・ソヴェト中央執行委員会ならびに人民委員会議の諸決定にたいする注意を喚起して、トゥルケスタンの党＝ソヴェト活動家が、たれよ

りもまずソヴェトの民族部門が、彼らにおわされた任務をりっぱに遂行することができるであろうという、完全な確信を表明するものである。

党中央委員会政治局員
人民委員　イ・スターリン

モスクワ
一九一九年二月十二日

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第七号
一九一九年三月二日

(232)

二つの陣営

世界は、決定的、かつ最後的に二つの陣営に分裂した、すなわち帝国主義の陣営と社会主義の陣営とに。

彼らの陣営にはアメリカとイギリス、フランスと日本があり、資本と武器と、試験ずみの手さきと熟練した行政官とがある。

われわれの陣営には、ソヴェト・ロシアと若いソヴェト諸共和国、ヨーロッパの国々で成長しつつあるプロレタリア革命とがある。それは資本も試験ずみの手さきも、練達した行政官ももっていない。しかし、そのかわりに、それは勤労者の胸に解放の炎をもえあがらせうる練達した煽動家をもっている。

これら二つの陣営の戦いは、現代の全生活の中軸をなし、新旧両世界の政治家が、げんざいとっている内外政策の全内容をみたしている。

エストニアとリトワニア、ウクライナとクリミア、トゥルケスタンとシベリア、ポーランドとカフカーズ、最後にロシアそのものさえ、自己目的ではなくて、二つの力の——奴隷制のくびきを強化しようとつとめている帝国主義と、奴隷制からの解放をめざしてたたかっている社会主義との——必死の戦いの舞台にすぎない。

帝国主義の力は、自分の主人を富ませ、自分で抑圧の鎖をきたえている人民大衆の無知にある。しかし大衆の

(233)無知は、一時的なものであって、時がたつにしたがい、大衆の不満の増大と革命運動の拡大とともに、必然的にきえさる傾向をもつ。帝国主義者の資本は……だが資本は必然的なものにたいしては無力であるということを知らないものがあるだろうか。だからこそ帝国主義の支配は、短命で、もろいのである。

帝国主義の弱さは、破局をきたすことなしには、大衆的失業を増加することなしには、自国の労仂者・農民をあらたに強奪することなしには、また外国の領土をあらたに侵略することなしには、戦争をおわらせることができないという点にある。問題は、戦争の終結にあるのでも、いわんやドイツにたいする勝利にあるのでもなく、数十億の戦費をだれにおわせるかにある。ロシアは一新されて帝国主義戦争からぬけ出てきた。なぜならロシアは、内外の帝国主義者の犠牲で戦争をおわらせたからであり、ロシアは戦争の真の責任者を収奪することによって、彼らに戦費をおわせたからである。帝国主義者はこのように行動することはできない。彼らは自分で自分を収奪することはできない。もしできるなら、彼らは帝国主義者ではなくなるであろう。戦争を帝国主義的なやりかたでおわらせるためには、帝国主義者は労仂者を飢餓の運命においやることを「よぎなくさせられる」(「不利な」企業の閉鎖にもとずく大衆的失業、新しい間接税および生産物価格の暴騰)。彼らはまたドイツ、オーストリア＝ハンガリア、ルーマニア、ブルガリア、ウクライナ、カフカーズ、トゥルケスタン、シベリアを強奪することを「よぎなくさせられる。」

すべてこうしたことが、革命の基盤をひろげ、帝国主義の基礎を動揺させ、さけえない破局をはやめる、ということをのべる必要があるだろうか。

三カ月まえには、勝利によった帝国主義は、武器をがちゃつかせて、ロシアを自分たちの大軍であふれさせよ

うとしていた。「みじめな」「やばんな」ソヴェト・ロシア、——それがはたして、評判の高い技術をもったドイツ人「さえ」うちまかした、イギリス＝フランスの「規律ある」軍隊に対抗することができるだろうか。帝国主義者はこう考えていた。だが彼らは「小さな事がら」を見おとしてしまった。彼らは、平和はそれがたとえ「恥しらずな」ものであっても、不可避的に軍隊の「規律」をそこない、軍隊を、新しい戦争に反対して立ちあがらせ、失業と日常必要品の物価騰貴とは、不可避的に帝国主義者にたいする労働者の革命運動をつよめる、ということを考えにいれなかったのである。

それで、どうだったか。「訓練された」軍隊が干渉に役だたないことがわかったのだ。それは腐敗というさけることのできない病気にかかったのだ。賛美された「国内平和」と「秩序」とは、その反対物である国内戦争に転化した。ロシアの辺境地方のにわかずくりのブルジョア「政府」はシャボン玉のようなもので、もちろん（もちろんだ！）「ヒューマニズム」と「文明」という目的を追う干渉をおおいかくすには役だたないことがわかった。ところがソヴェト・ロシアについていえば、このソヴェト・ロシアをやすやすやっつけてしまうことができなかったばかりでなく、すこしばかり退却して、それをプリンセス島の「会議」(五二)に招請することが必要だとさえ考えられるにいたったのである。その理由は、赤軍の成功、近隣の国々に革命の気分を感染させる新しい民族ソヴェト諸共和国の出現、西欧における革命の成長、および連合国における労働者・兵士ソヴェトの出現が、まったく説得的な影響をおよぼさずにはいなかったからである。それればかりではない。事態はつぎのようにさえなるにいたった。すなわち、きのうまではまだベルン会議(五三)への旅券を拒絶して、「無政府主義的」ロシアをのみこんでしまおうと準備していた「非妥協的な」クレマンソーが、今では革命によってもみくちゃにされて、尊敬すべき

(235)「マルクス主義的」ブローカー・老カウツキーの奉仕をうけることを拒否せず、交渉のために……ええと……「調査」のために、彼をロシアに派遣しようとしているのである。

「大言壮語や大見得や
王者の勇気、いまいずこ……」〔ア・ヴェ・コリツォフ『森』から〕

というのは、ほんとうではないか。

これらすべての変化は、この三ヵ月ほどのあいだに生じたのである。

われわれは、こんごの発展がおなじ方向にむかってすすむであろうということを主張する、あらゆる根拠をもっている。というのは、つぎのことをみとめねばならないからである。すなわち現在の「あらしと非運」の時機に、ロシアは、社会＝経済生活が「正常に」、すなわちストライキや政府に敵対するデモンストレーションなしにいとなまれている唯一の国であり、またソヴェト政府は、げんざいヨーロッパに存在している、すべての政府のなかで、**もっとも堅固な**政府であり、またソヴェト・ロシアの力と威信とは、対内的にも対外的にも、帝国主義的諸政府の力と威信の没落に比例して、日一日と増大しているということである。

世界は、和解しがたい二つの陣営に、帝国主義の陣営と社会主義の陣営とに分裂した。死にかけている帝国主義は最後の手段たる「国際連盟」にとりすがって、あらゆる国の強盗どもを一つの同盟に団結させるという方法で、窮状をすくおうと努力している。しかし、その努力はむだである。なぜなら情勢と時代とは、帝国主義には不利に、社会主義には有利にうごいているからである。社会主義革命の波はとどめがたくたかまり、帝国主義のとりでをとりかこんでいる。社会主義革命のとどろきは、抑圧された東洋の国々になりわたっている。帝国主義

の足もとはもえはじめている。帝国主義は、さけられない破滅の運命をおわされているのである。

『イズヴェスチヤ』第四一号
一九一九年二月二十二日
署名――イ・スターリン

(236)

東部におけるわれわれの任務

東部へ前進して、トゥルケスタンへの道がひらかれたのにともなって、われわれのまえには多くの新しい任務が提起されている。

ロシアの東部の住民は、中央諸県に見られるような、社会主義建設の事業を容易にする一様性も、また西部および南部辺境地方に見られるような、急速に、かつ支障なくソヴェト権力に適当な民族的形態をあたえることを可能にした文化的成熟もしめしていない。ロシアのこれらの辺境地方や中央部とは反対に、東部辺境地方、すなわちタタール人やバシキール人、キルギーズ人やウズベック人、トゥルクメン人やタジック人、最後に、その他かずかずの人種誌学的形成物(人口約三千万)は、まだ中世からぬけ出していないか、あるいは、さいきんやっと資本主義的発展の領域にはいりこんだばかりの、文化の点でおくれた多種多様な諸民族をしめしている。

この事情は、うたがいもなく東部におけるソヴェト権力の任務を複雑にし、また、いくらか困難にしている。

(237)

純内部的な生活様式上の障害にくわえて、いわば外部からもちこまれた「歴史的」性格の障害がある。われわれが念頭においているのは、東部の諸民族の息の根をとめることをめざしているツァーリ政府の帝国主義的政策と、みずからを東部辺境地方の主人公とおもっているロシアの商人たちの貪欲と強欲、最後に、あらゆる真理

と虚偽とをもちいて、回教徒諸民族をギリシア正教のふところにひきずりこもうと努力してきた、ロシアの坊主のよこしまな政策などのことであって、――これらの事情は東部の諸民族のなかに、全ロシア人全体にたいする不信と恨みの感情をつくり出したのである。

なるほどロシアにおけるプロレタリア革命の勝利と、被圧迫民族にたいするソヴェト権力の解放的政策とは、うたがいもなく民族的敵意の空気をきよめ、ロシアのプロレタリアートにたいして東部の諸民族の信頼と尊敬とをかちとりはした。それればかりではない。東部の諸民族、その自覚した代表者たちが、ロシアを帝国主義の鎖からの自己の解放の支柱であり、旗じるしであるとみなしはじめている、と主張するあらゆる根拠がある。だが文化的な狭さと生活上の後進性は、一挙には絶滅されえないものであって、東部におけるソヴェト権力建設の事業において、それらを感じさせている(こんごもなお感じさせるであろう)。

ロシア共産党綱領草案起草委員会も、(五四) ほかならぬこれらの困難を考慮して、草案のなかでこう言明している。すなわち民族的自由の問題では「ロシア共産党は歴史的＝階級的観点にたち、ある民族がどのような歴史的発展段階にたっているか、すなわち中世からブルジョア民主主義への途上にあるか、あるいはブルジョア民主主義からソヴェト民主主義への途上にあるか、ということを重要視するものであり」、また「圧迫民族であったプロレタリアートのがわからすれば、被圧迫民族あるいは完全な権利をもたない民族の、勤労大衆のなかにある民族的感情の残存物にたいしては、特別の慎重さと特別の注意が必要である」と。

(238) われわれの任務は、つぎのことにある、――

(一) 全力をあげて、おくれた諸民族の文化水準をひきあげ、学校網と教育機関網とを十分に組織し、周囲の

勤労者に理解しやすい、親しみある言葉で、口頭および文書によるソヴェト的アジテーショヲを展開すること。

（二）東部の勤労大衆をソヴェト国家の建設にひきいれ、彼らが、ソヴェト権力に賛成し、かつ、その地方の住民と親しい人々によって、自己の郷、郡その他の代表ソヴェトを創設することを、あらゆる方法でたすけること。

（三）旧制度からうけつがれたか、国内戦争という空気のなかでえられたかをとわず、形式上および事実上のありとあらゆる制限をとりのぞくこと。これらの制限は、中世と、すでに破壊された民族的抑圧との残存物から解放される途上で、東部の諸民族が最大限の自主的活動を発展させるのをさまたげている。

こうしてはじめて、ソヴェト権力を広大な東部の奴隷化された諸民族にとって近しい、親しみのあるものにすることができるであろう。

こうしてはじめて、西方のプロレタリア革命と東方の反帝国主義運動とのあいだに橋をかけ、そうすることによって、死にかけている帝国主義のまわりに完全な包囲網をつくりあげることができるであろう。

東部におけるソヴェト権力のとりでを建設すること、苦しみにみちた東部の諸民族の解放への道をてらす社会主義の燈台をカザンやウファーに、サマルカンドやタシュケントに建造すること、――これが任務である。

うたがいもなく、帝国主義にたいする戦争とプロレタリア革命とのすべての重荷を、自分の肩にになっているわが献身的な党＝ソヴェト活動家たちは、歴史によって課せられているこの任務をも、りっぱにはたすことができるであろう。

(239)

『プラウダ』第四八号
一九一九年三月二日
署名——イ・ヽ・ヽ・ヽ・スターリン

二年間

一九一七年二月―三月

ロシアにおけるブルジョア革命。ミリューコフ―ケレンスキーの政府。ソヴェト内の支配的な政党――メンシェヴィキとエス・エル。ペトログラード・ソヴェトの代議員四〇〇―五〇〇人のうち、ボリシェヴィキはかろうじて四〇―五〇人をかぞえるにすぎない。ロシア代表ソヴェト第一回会議で、(五五)ボリシェヴィキはやっとのことでかろうじて一五―二〇%の票をあつめた。ボリシェヴィキ党は、この時期にはロシアのすべての社会主義政党のうちでもっとも弱かった。その機関紙『プラウダ』(五六)は、「無政府主義的」だとして、どこでも相手にされなかった。帝国主義戦争との斗争を呼びかけた党の発言者たちは、兵士や労仂者によって演壇からひきずりおろされたりした。ソヴェト権力にかんする同志レーニンの有名な〔四月〕テーゼは、代表ソヴェトによってうけいれられなかった。社会愛国主義的意見の祖国防衛派の諸政党――メンシェヴィキとエス・エル――は、完全な勝利の時期をすごしていた。

他方、やめることなくつずけられている帝国主義戦争は、その殺人行為をつずけて、産業を崩壊させ、農業を

破壊し、食糧と交通とを混乱させ、何十万という新しい犠牲をのみこんでいた。

***

一九一八年二月—三月

(241) ロシアにおけるプロレタリア革命。ケレンスキー—コノヴァーロフのブルジョア政府は打倒された。中央および地方におけるソヴェト権力。帝国主義戦争の一掃。土地は人民の所有へひきわたされた。労働者管理の組織。赤衛軍の組織。ペトログラードにおける憲法制定議会へ「全権力」をひきわたそうとしたメンシェヴィキとエス・エルの企ての失敗。憲法制定議会の解散とブルジョア的再興の破産。南部とウラルとシベリアにおける赤衛軍の成功。完敗したメンシェヴィキとエス・エルは辺境地方へにげだし、そこで反革命勢力と合同し、帝国主義と同盟を結び、ソヴェト・ロシアに宣戦を布告した。

この時期には、ボリシェヴィキ党はロシアのすべての政党のうちで、もっとも強力で、団結した政党である。すでに一九一七年十月の第二回全ロシア・ソヴェト大会で、ボリシェヴィキ党は絶対多数の票（六五—七〇%）をもった。その後、ソヴェトの発展は不断にボリシェヴィキにとって有利になっている。われわれが念頭においているのは、ボリシェヴィキが全体で九〇%を代表している労働者ソヴェトや、六〇—七〇%のボリシェヴィキの代表者をもつ兵士ソヴェトばかりでなく、ボリシェヴィキが多数をたたかいとった農民ソヴェトをも念頭においている。

(242)

しかしボリシェヴィキ党は、この時期にはロシアにおけるもっとも強力な政党であるばかりでなく、唯一の社会主義政党である。なぜなら、とうじチェコスロヴァキア軍やドゥートフ一味、クラスノフ一味やアレクセーエフ一味、オーストリア＝ドイツの帝国主義者や、イギリス＝フランスの帝国主義者などとキスしたメンシェヴィキとエス・エルとは、ロシアのプロレタリア的諸層のなかで、あらゆる精神的影響力をのこらずうしなってしまったからである。

だが国内におけるこのきわめて有利な状態は、ロシアがまだ国外の同盟者をもっていないで、社会主義ロシアは好戦的な帝国主義の海にとりかこまれた島のようになっているという事情によって、よわめられ、まひさせられていた。ヨーロッパの労働者はつかれはて、傷ついていた、……しかし彼らは戦争中で、ロシアにおける社会主義制度や戦争からの救いの道などの問題について考えてみるひまがなかった。ヨーロッパの「社会主義」政党についていえば、帝国主義者に剣をうりわたした彼ら、――その彼らがどうしてボリシェヴィキを、すなわち自己の「高価な」「危険な実験によって」労働者を「混乱させている」これらの「不穏な」連中を、悪くいわずにいることができただろうか。

だから、この時期にはボリシェヴィキ党内に、プロレタリア革命の基地をひろげ、帝国主義に反対する革命運動に西欧（ならびに東洋）の労働者をひきいれ、万国の革命的労働者との不断のつながりをうちたてようという傾向がとくに増大したのも、また、あやしむにたりない。

＊＊

一九一九年二月—三月

ロシアにおけるソヴェト権力のよりいっそうの強化。その領域の拡大。赤軍の組織。南部、北部、西部、東部での赤軍の成功。エストニア、ラトヴィア、リトワニア、白ロシアおよびウクライナにおけるソヴェト共和国の出現。オーストリア＝ドイツ帝国主義の粉砕と、ドイツ、オーストリア、ハンガリアにおけるプロレタリア革命。(五七)シャイデマン—エーベルトの政府とドイツの憲法制定議会。バイエルンにおけるソヴェト共和国。(243)「全権力をソヴェトへ」、「エーベルト—シャイデマンをたおせ！」のスローガンをかかげた、ドイツ全土にわたる政治的ストライキ。イギリス、フランス、イタリアにおけるストライキと労仂者ソヴェト。連合国がわの諸国における旧軍隊の解体や陸海軍兵士ソヴェトの発生。ソヴェト制度はプロレタリア独裁の一般的形態へ転化した。ヨーロッパ諸国で左翼の共産主義的要素が強大となり、ドイツ、オーストリア、ハンガリア、スイスでは共産党が誕生した。それらのあいだの連絡と行動の調整。第二インタナショナルの崩壊。モスクワにおける革命的社会主義諸政党の国際会議(五八)と、すべての国の戦斗的労仂者の共同の斗争機関たる第三共産主義インタナショナルの創立。ロシアにおけるプロレタリア革命の孤立化はおわった。すなわちロシアはいまや同盟者をもっている。パリにある帝国主義的な「国際連盟」と、それをたすけてヨーロッパの労仂者を「ボリシェヴィズムの伝染病」からまもろうと努力しているベルンの社会愛国主義的協議会(五九)とは、その目的をたっしなかった。すなわちソヴェト・ロシアはかならず世界プロレタリア革命の旗手に、西欧と東洋の先進的な革命勢力の結合の中心に転化しなければならなかったし、また実際に転化した。ボリシェヴィズムは、「純ロシア的産物」から、世界帝国主義の基礎その

ものをぐらつかせる、おそるべき国際的勢力に転化した。

このことは、いまやメンシェヴィキですらみとめていることであって、彼らは憲法制定議会の「世話をほうりだし」(244)、自己の「軍隊」をうしなって、徐々にソヴェト共和国の陣営にテントをうつしつつある。

このことは、いまや右翼エス・エルですら否定できないことであって、彼らはコルチャック一味やドゥートフ一味のために憲法制定議会をうしなったので、ソヴェトの国に救いをもとめることをよぎなくされている。

***

総括

プロレタリアートの二年間の斗争の諸経験は、帝国主義の崩壊と世界プロレタリア革命の不可避性とにかんする、右翼「社会主義」諸政党の腐敗と第二インタナショナルの解体とにかんする、ソヴェト制度の国際的意義と憲法制定議会のスローガンの反革命性とにかんする、ボリシェヴィズムの世界的意義と戦斗的第三インタナショナルの創立の不可避性とにかんする、ボリシェヴィキの予見を完全に確認した。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第八号
一九一九年三月九日
署名――イ・スターリン

帝国主義の予備軍

(245) 帝国主義と社会主義との戦争はつづけられている。民族的「自由主義」と「弱小」民族の「保護」、連合国の「平和愛好心」と干渉の「拒否」、「軍備縮小」の要求と交渉の「用意」、「ロシア国民」についての「配慮」と、彼らをあらゆる「可能な手段によって」「援助する」という「希望」、――こうしたことやこれに類した多くのことは、社会主義の敵へ戦車や軍需品をもっともっと供給するのをおおいかくすついたてであり、また社会主義の息の根をとめ、弱小民族や植民地や半植民地の息の根をとめる仕事を、「世論」の「みとめうる」ような新しい形で「探求」するのを世界からかくすという使命をもった、ありふれた外交的陰謀であるにすぎない。

ほぼ四カ月まえ、オーストリア＝ドイツという競争者に勝利した連合国の帝国主義は、「ロシア問題」への武力介入（干渉！）という問題を、鋭く、かつ、はっきりと提起した。「無政府主義的」ロシアとはどんな交渉もしない！　「自由になった」軍隊の一部をロシアの領土に急派し、それを**スコロパッキー**や**クラスノフ**一味、**デニキン**や**ビチェラホフ**一味、**コルチャック**や**チャイコフスキー**一味の白衛軍部隊へ注入し、革命の中心たる(246)ソヴェト・ロシアを「鉄の環」のなかにしめつける、――これが帝国主義者の計画であった。しかし、この計画は、革命の波にあたって粉砕された。革命運動にひきいれられたヨーロッパの労働者は、武力干渉にたいして怒りにみ

ちた軍隊(カンパニヤ)を開始した。「自由になった軍隊」は革命との武力斗争には役だたないことが、はっきりとわかった。そればかりでなく、立ちあがった労仂者と接触することによって、彼ら自身がボリシェヴィズムに「感染」した。ヘルソンとニコラーエフで連合国の軍隊が労仂者との戦争を拒絶し、ソヴェトの軍隊がこの両市を占領したことは、とくに雄弁にこのことを証明している。予定されていた「鉄の環」についていえば、それは「致命的」でないことがわかったばかりでなく、ほうぼうに亀裂さえ生じた。こうして直接の、公然たる干渉の計画は、明らかに「目的に適しない」ことがわかった。ボリシェヴィキとの交渉を「みとめ」(六〇)、ロシアの国内問題へ「干渉しない」というロイド・ジョージとウィルソンの最近の声明や、ベルン委員会のロシアへの派遣や、最後に、ロシアにあるすべての「事実上の」政府を「平和」会議(六一)へ招請しようという計画(二度めの!)などは、まさに、この理由による。

しかし**公然の**干渉の放棄を命じたのは、これらの事情だけではなかった。それはなお斗争の進行中に新しい術策が、すなわち、なるほど公然の干渉よりは複雑ではあるが、そのかわり「文明的」で「人道的」な連合国にとっては、より「適当な」新しい**かくされた**形の武力干渉が樹立されたからという理由にもよる。われわれが念頭においているのは、帝国主義が急ごしらえした、ルーマニア、ガリチア、ポーランド、ドイツおよびフィンランドのブルジョア諸政府の、ソヴェト・ロシアに対抗する同盟のことである。なるほど、これらの政府は、ついきのうまでは「民族の」利益と民族の「自由」とのために、たがいにのどをかみあっていた。なるほど、ついきのうまでは、ルーマニアのガリチアにたいする、ガリチアのポーランドにたいする、ポーランドのドイツにたいする「祖国戦争」について、さけびたてていた。しかし「内戦」を中止することを命じた連合国の財布と比較すれ

(247)

ば、「祖国」になんの意味があるだろうか。連合国がソヴェト・ロシアにたいする統一戦線をつくることを命令したのである、——帝国主義の雇い人である彼らとしては、「戦線に」整列せずにいられたであろうか。連合国につばをはきかけられ、どろのなかにふみにじられたドイツ政府でさえ、最低の自尊心すらうしなって、社会主義にたいする十字軍に参加する権利を……まさに、かの連合国の利益のために懇請したのである！　連合国が手をこずりながらロシア問題への「不干渉」や、ボリシェヴィキとの「平和条約」について空論しているのにも、十分な根拠があるということは、明らかではないだろうか。すでに民族的な旗によってかくされた、「まったく危険のない」干渉を、他人の犠牲で、「弱小」民族の犠牲で組織する可能性がある以上、さらに多くの犠牲を必要とするような、帝国主義にとって「危険な」公然の干渉が、いったいなんのために必要なのか。ルーマニア、ガリチア、ポーランドおよびドイツのロシアとの戦争？　だが、これはボリシェヴィキの「帝国主義」にたいする「民族の生存」のための、「東部国境の防衛」のための戦争であり、ルーマニア人やガリチア人、ポーランド人やドイツ人「自身」によっておこなわれる戦争ではないか、——そうとすれば連合国はなんの関係があるか。なるほど連合国は資金や武器を彼らに供給しはする。しかし、それは「文明」世界の国際法によってみとめられた、たんなる金融上の活動ではないか。連合国がハトのように純真なこと、連合国が干渉に「反対」であること……は、明らかではないだろうか。

こうして帝国主義は、武器をがちゃつかせて威嚇する政策、公然たる干渉の政策から、仮面をつけた干渉の政策、大小の従属諸民族を社会主義との斗争にひきこむ政策へと、うつることをよぎなくされている。

公然たる干渉の政策は、ヨーロッパにおける革命運動の成長と、すべての国の労仂者のソヴェト・ロシアにた

いする共鳴とのために、敗北をこうむった。その政策は、革命的社会主義によって帝国主義をばくろするために完全に利用された。

最後の予備軍である、いわゆる「弱小」民族にうったえる政策、「弱小」民族を社会主義との戦争にひきこむ政策も、結局は、おなじような敗北におわるであろう。それは、西欧の革命の成長が、どんなこともものともせず、帝国主義の基礎をほりくずしているということによるばかりでなく、また、その「弱小」民族自体の内部に革命運動がたゆみなく成長しているということによるばかりでもなく、これらの民族の「武装力」が、ロシアの革命的労仂者と接触すると、彼らはどうしてもボリシェヴィズムという病菌に「感染」しないではいられないということにもよるのである。社会主義は、帝国主義の「慈愛ある配慮」の強盗的な性格について、これらの民族の労仂者・農民の目をひらくために、あらゆる機会を利用するであろう。

「弱小」民族を革命の圏内へひきいれ、社会主義の基礎をひろげること、――これが、仮面をつけた干渉という帝国主義的政策のさけえない帰結なのである。

『イズヴェスチヤ』第五八号
一九一九年三月十六日
署名――イ・スターリン

(249)

ロシア共産党（ボ）第八回大会〔六二〕における軍事問題についての演説から

一九一九年三月二十一日

ここでふれられたすべての問題は、ロシアには厳格な規律をもった正規軍が存在すべきか、あるいは、すべきでないか、という一点に帰着する。

半年まえには、われわれはツァーリの旧軍隊の崩壊ののちに、新しい軍隊をもっていた。――それは組織の悪い志願軍であって、集団的指揮下にあり、かならずしも命令にしたがうとはかぎらないものであった。当時は、連合国がわからの攻撃があらわれた時期であった。軍隊の成員は、労働者だけではなかったとしても、主として労働者であった。この志願軍には規律がかけていたために、また命令がつねに遂行されるとはかぎらなかったために、そしてまた軍隊の指揮がみだれていたために、われわれはしばしば敗北をこうむり、敵にカザンをあけわたし、クラスノフに南方からの攻撃をゆるしたりした……。志願軍が批判にたええないこと、また、もしわれわれがべつの軍を、すなわち規律の精神につらぬかれ、りっぱにつくられた政治部をもち、命令があるやいなや立

(250)

ちあがって敵に立ちむかうことのできる正規軍を創設しないならば、われわれがわが共和国を防衛することはできないであろうということは、事実がものがたるとおりである。

わが軍の大多数をしめている非労仂者的分子、すなわち農民は、自発的には社会主義をめざしてたたかわないであろう、と私は言わなければならない。多くの事実がこのことをしめしている。後方や戦線での一連の反乱、戦線での一連の暴行は、わが軍の大多数をしめている非プロレタリア的分子が、自発的には共産主義をめざしてたたかうことを欲していない、ということをしめしている。だから、われわれの任務は、これらの分子を鉄の規律の精神で教育しなおし、彼らを後方だけでなく戦線でも、プロレタリアートのあとにしたがわせ、われわれの共同の社会主義的事業のためにたたかわせ、戦争の過程で、国土を防衛する力のある唯一の真の正規軍の建設を完成する、ということである。

問題はこうである。

……厳格な規律をもつ労仂者・農民の真の正規軍を創設して共和国を防衛するか、それとも、これをやらないかである。後者のばあいには、事は失敗するであろう。

……スミルノフの提案した草案は、うけいれがたい。なぜなら、それは軍隊内の規律をそこないうるだけであり、かつ正規軍創設の可能性を排除するからである。

イ・スターリン『反対派について、一九二一―一九二七年の論文と演説』、モスクワーレニングラード、一九二八年にはじめて印刷

国家統制人民委員部の改組について

全ロシア中央執行委員会会議における報告
一九一九年四月九日
(新聞に出た報告)

同志スターリンが指摘するところによれば、国家統制人民委員部は、他のすべての機関がうけたような粛清と変革を今までうけたことのない、唯一の官庁である。紙のうえの統制ではなく、真の実際上の統制を達成するためには、報告者の意見によれば、国家統制人民委員部の現在の機構を、新鮮な、若々しい勢力の補充によって改組しなければならない。労仂者管理の現在の諸機関を一つのまとまったものに統合し、統制に従事しているすべての勢力を、共通の国家統制人民委員部にながしいれることが必要である。国家統制人民委員部改組の根本的な考え方は、したがって、その民主主義化と労仂者・農民大衆への接近とである。

報告者の提出した法案(六三)は、満場一致で採択された。

『イズヴェスチヤ』第七七号
一九一九年四月十日

(252)

イギリス帝国主義の手さきによる二十六人のバクーの同志の銃殺について

われわれは、つぎの二つの文書(六四)について読者の注意をうながす。それは、昨秋のバクーのソヴェト権力の責任活動家たちにたいする、イギリス帝国主義者の残忍な制裁を証明しているものである。これらの文書の出所は、バクーのエス・エルの新聞『ズナーミャ・トゥルダー』(六五)とバクーの新聞『エヂーナヤ・ロシーア』(六六)である、すなわち、ついきのうまではボリシェヴィキを裏ぎってイギリス軍に助けをもとめていたが、きょうは事件のなりゆきのために、きのうの自分の同盟者をばくろしなければならなくされた、当のグループである。

第一の文書は、一九一八年九月二十日の夜、クラスノヴォーツクからアシハバートにむけて捕虜としておくられる途中、イギリス陸軍大尉ティグ・ジョーンズによって裁判も審問もなしにおこなわれた、バクー市の二十六人のソヴェト活動家(シャウミャン、ジャパリッゼ、フィオレートフ、マルイギンその他)にたいする、やばんな銃殺のことをものがたっている。ティグ・ジョーンズとエス・エル＝メンシェヴィキの同僚とは、バクーのボリシェヴィキが監獄あるいは病院で「自然に」死んだというにせ証明書を発行するつもりでいて、事件をもみけすことができると考えかけていた。だが、この計画は明らかに失敗した。というのは、だまっていることをの

(253)

ぞまず、イギリスの野蛮人を徹底的にぼくろする覚悟をしている数人の証人がのこっていたらしいからである。この文書には、エス・エルのチャイキンが署名している。

第二の文書は、一九一九年三月末におこなわれたイギリスの将軍トムソンと第一の文書の筆者チャイキンとの談話をえがいている。トムソン将軍はチャイキンにたいして、イギリスの陸軍大尉ティグ・ジョーンズが二十六人のバクーのボリシェヴィキに残忍な制裁をしたという証人をよび出すことを要求している。チャイキンは、イギリスの司令部とバクーの住民とトゥルケスタンのボリシェヴィキとからなる審査委員会をつくることを条件として文書を提出し、証人をよび出す用意があった。なお、そのさいチャイキンは、トゥルケスタンの証人がイギリス人の手さきによってころされるようなことはないという保障を要求した。トムソンが審査委員会にかんする提案を承認せず、証人の一身上の安全の保障をあたえなかったので、会談は決裂し、チャイキンはおいはらわれた。この文書が興味のあるのは、それがイギリス帝国主義者の蛮行を間接に確認するとともに、イギリスの手さきは中央アフリカの黒人をかたずけるのとおなじように、バクーとカスピ海東岸地方の「土着人」をかたずけているのに、処罰もされないで、やばんな底抜け騒ぎをかたるどころか、さけびたてているという点にある。

二十六人のバクーのボリシェヴィキの事件は、つぎのようである。一九一八年八月、トルコ軍はバクーのすぐそばまでちかずき、バクー・ソヴェトのエス・エル＝メンシェヴィキ代議員は、ボリシェヴィキに反対して、ソヴェトの多数者をひきつれて、イギリス帝国主義者に助けをもとめていたが、そのとき少数派であったシャウミャンとジャパリッゼを先頭とするバクーのボリシェヴィキは自分の権利を放棄して、政敵に活動舞台をあけわたしてしまった。ボリシェヴィキは、とうじバクーにふたたび樹立されたイギリス＝エス・エル＝メンシェヴィキ

の権力の同意をえて、ソヴェト権力にもっとも近い地点であるペトロフスクへ撤退することに決定した。しかしペトロフスクへの途中で、バクーのボリシェヴィキとその家族をのせた汽船は、それを追跡していたイギリス船に砲撃されて、クラスノヴォーツクへつれていかれた。これは八月のことであった。

ロシア・バクー・ソヴェト政府は、その事件のあと数回にわたって、イギリス司令部にむかってイギリス人の捕虜と交換で、バクーの同志とその家族を解放することを要求したが、イギリス司令部はいつも沈黙をまもっていた。すでに十二月いらい、個人や機関から、バクーの同志が銃殺されたという報道がはいりはじめた。一九一九年三月五日、アストラハンはチフリスからの無線電信をうけとったが、それは、「ジャパリッゼとシャウミャンはイギリス司令部の管理下にはおらず、地方の報道によれば、彼らは九月にキズィル＝アルヴァートの付近で労働者の群によって私刑されたといわれる」というものであった。明らかに、これはイギリス殺人者が、自分の蛮行の罪を、シャウミャンをもジャパリッゼをも限りなく愛していた労働者に転嫁しようとする最初の公式の企てであった。げんざい上述の文書が公刊されたあとでは、政治的舞台から自発的に立ちさり、撤退という形でペトロフスクへむかったわがバクーの同志たちが、「文明的」かつ「人道的」なイギリスの人食いどもによって、裁判も審問もなしに実際に銃殺されたということは、証明ずみと考えなければならない。

「文明」諸国では、ボリシェヴィキのテロルと恐怖についてかたるのが、つねである。そのさいイギリス＝フランスの帝国主義者は、通常テロルと銃殺との敵としてえがかれている。しかしソヴェト権力は「文明的」かつ「人道的」なイギリス人のように卑劣に、その敵をかたずけることはけっしてなかったこと、ただ骨のずいまでくさりはて、あらゆる道徳的性格をもうしなってしまった帝国主義的人食いどもだけが、反対陣営の武器をもた

(255)

ない政治活動家にたいする暗殺と強盗的攻撃とを必要としうるのだということは、明らかではないか。もしもこのことをうたがう人がなおいるならば、つぎにかかげる文書を読んでから、ありのままに言うがよい。

イギリス軍をバクーへまねいて、ボリシェヴィキを裏ぎった、バクーのメンシェヴィキとエス・エルは、イギリス軍の「客」を兵力として「利用」するつもりであった。そのさい、国の主人公としてとどまるのはメンシェヴィキとエス・エルであって、「客」はいずれ自宅へ立ちさるであろうと予想されていた。しかし実際には反対の結果になった。すなわち「客」は無制限の主人公となり、エス・エルとメンシェヴィキは、二十六人のボリシェヴィキのコミッサールの凶悪、かつ卑劣な殺害への決定的な参加者になってしまったのである。しかも、そのさいエス・エルは、新しくあらわれた主人公を用心ぶかくばくろしながら、反対者の立場に移行しなければならなくなり、またメンシェヴィキはバクーで出している自分の新聞『イスクラ』[六七]で、きのうの「このましい客」に対抗して、ボリシェヴィキとブロックをつくることを説教しなければならなくなったのである。

エス・エル＝メンシェヴィキとイギリス帝国主義との同盟が、奴隷や下僕とその主人との「同盟」であるということは、明らかではないか。もしもそのことをうたがう人がいるならば、つぎにあげられているトムソン将軍とチャイキン氏との「会談」を読んでから、チャイキン氏が主人らしいかどうか、またトムソン将軍が「このましい客」らしいかどうか、ということを良心にしたがって言うがよい。

『イズヴェスチヤ』第八五号
一九一九年四月二十三日
署名――イ・スターリン

(256)

シチーグルィの国家統制特別審査官への電報

郡の農民大衆全体の政治的気分を調査するほかに、農地の無秩序の発生する原因を調査するばあいには、つぎの点に注意するようおねがいする。

(一) ソフホーズを組織するばあい、土地部やソフホーズ管理部の政策に注意すること。すなわちソフホーズを組織するために、農民が土地を使用するのを不当にとりけすということはなかったか。ソフホーズを組織するとき、それにともなって農民経営の状態に物質的に影響するような、その他の強制的な行動はなかったか。

(二) 集団農業を組織するばあいは、土地部の政策に注意すること。すなわち農業コンミューン、アルテリ、共同耕作などを組織するうえで、強制の諸要素はなかったか。集団農業を組織するとき、それにともなって地方の農民の本質的な利益をそこなうようなことはなかったか。

(257)

(三) 甜菜農場の土地の国有化では、糖業管理局の政策に注意すること。すなわち国有化が、農民の根本的な利益をそこなってはいないか。国有化された土地が、農民の土地使用に、いろいろの困難をひきおこしてはいないか。農民の怒りをまねくかもしれない、その他の行動(たとえば実際の必要よりも、明らかに大きな土地を製糖工場にとっておくとか、今まで甜菜を栽培していなかった土地を国有化するとかいうこと)はないか。

（四）さらに、つぎのような問題にも注意すること。すなわち、その地区には土地がすくないために、土地問題にかんする動揺があらわれてはいないか。農民の土地使用のなかに不労分子ははいりこまなかったか、また、はいったとすれば、どのような条件でか。一般に、郡の土地部あるいは、その個々の代表者の活動のなかには、あるいはまた郷の土地部の活動のなかには、中央の指令に合致せず、かつ適切でないために、農民の怒りをまねく恐れのあるようなふるまいがありはしないか、また、おなじように当局の無為無策や、仕事のうえでの職権乱用はないか、ということである。

電報をうけとったということ、どのような措置をとったかということを、国家統制人民委員部まで打電されたい。

国家統制人民委員　イ・スターリン

一九一九年五月七日

はじめて印刷

ペトログラードからの、直通電話による ヴェ・イ・レーニンへの報告（六八）

部隊輸送の状態が、今では三ヵ月まえよりもよくなっていることは、うたがいありません。だが司令官もその参謀長も、ピーテルにおくられる諸部隊について知っていないということも、また私にははっきりしています。このことから、思いがけないこともあるのです。すなわち第二旅団あるいは騎兵旅団の連隊という名目で、ほとんど中身のない部隊がカザンからおくられてくる、といったものです。すくなくとも今のところでは、ピーテルは、わずか六〇〇人の実際に戦斗能力をもった召集学生をうけとっています。

しかし問題は、いうまでもなく部隊の量にあるのではなく、質にあります。悪党どもをぜんぶナルヴァの向こうにおいやってしまうためには、われわれには、全部で三個連隊の、もちろん戦斗能力のある歩兵と、すくなくとも一個連隊の騎兵とが必要です。もしこの小さなお願いを、適時にかなえてくださることができていたら、エストニア軍はすでにきのうにもおいはらわれていたでしょう。

だが心配しないでもよいのです、というのは戦線の状況は、おちついてきて、戦線はかたまったし、ところによっては、わが軍がすでに前進しているからです。

(259)

きょう、わが軍のカレリア地方の堡塁を見ましたが、全体としてまあまあといった状態であることがわかりました。フィンランド軍は、がんきょうに沈黙していて、不思議にも好機に乗じなかったのです、だが、この不思議さも、フィンランド軍の内状がますます不安定なものになっている、――それは事情を知っているフィンランドの同志たちが、われわれにうけあっています――ということによって説明されます。

燃料危機のために艦隊を縮小するという司令官の提案が、きょう私にしめされました。私は、このことについて、わが艦隊の活動家全部と会議をもちましたが、司令官の提案は、まったくまちがっているという確信をえました。理由はつぎのとおりです。第一に、――大艦隊も、それがただよういかだになってしまうようなばあいには、大砲をはたらかせることができなくなるでしょう、つまり大砲は実際に発射されないでしょう。というのは軍艦の運動と大砲の行動とのあいだには、ちょくせつ関係があるからです。第二に、――われわれのところに大きな砲弾がないというのは正しくありません、近日中に砲弾をつんだ一二の伝馬船が「荷をおろし」します。第三に、――燃料危機はおわりつつあります、というのは、われわれはすでに重油を計算にいれなくても、四十二万プードの石炭をたくわえることができたからです、なおそのうえに、毎日一列車ずつ石炭をうけとっています。第四に、――わが艦隊は、訓練された水兵が全力をあげてペトログラードを防禦しようとそなえている、実際の艦隊にかわりつつある、ということを私は確信しました。

私はここで、すでに準備のととのった戦斗単位の数量をかぞえあげたくはありません。しかし海からするどのような侵害にたいしても、われわれはペトログラードを現存の海軍力によって、りっぱに防禦できるだろうと申しあげることは、私の義務だと考えます。

このために私は、ピーテルの全同志とおなじように、司令官の提案をどこまでも拒否します。

(260) それから三、四週間のあいだは、毎日二列車ぐらいの石炭をおくることが絶対に必要だと考えます。これは、わが艦隊の活動家の確信するところでは、わが潜水艦隊と水上艦隊とが決定的に立ちあがるのをまったく可能にするでしょう。

スターリン

一九一九年五月二十五日執筆

『一九一九年のペトログラードの英雄的防衛にかんする文献』（一九四一年、モスクワ）にはじめて印刷

〔261〕

ヴェ・イ・レーニンへの電報

クラースナヤ・ゴールカにつづいて、セーラヤ・ローシャヂが一掃された。彼らにむけられた大砲は完全に整備されている。すべての堡塁と要塞の急速な点検がおこなわれている。

海軍の専門家たちは、海上からするクラースナヤ・ゴールカの占領は、海軍の学問をくつがえすものと助言している。私は、いわゆる学問なるものをいたむより仕方がない。ゴールカのすみやかな占領は、私のほうから、また一般には文官のほうから、作戦上の問題にたいしてきわめて乱暴な干渉がおこなわれたことによる。彼らは陸海の命令をとりけし、自分の命令をおしつけまでした。

私は、科学を尊重しているが、それにもかかわらず、これからさきも、こうした行動をとるだろうと言明することは、自分の義務だと考える。

スターリン

一九一九年六月十六日

『プラウダ』、一九二九年十二月二十一日、第三〇一号にはじめて印刷

(262)

ペトログラードからの、直通電話による
ヴェ・イ・レーニンへの報告

つぎの諸問題に注意していただく必要があると考えます。

第一。コルチャックはもっとも ゆゆしい敵です。なぜなら彼は、退却するために十分な広い土地をもち、軍隊のための人的資材にはじゅうぶんめぐまれ、また穀物の豊富な後方をもっているからです。コルチャックとくらべると、ロジャンコ将軍ははえのようなものです。というのは穀物も、退却のための広大な土地も、十分な人的資材も後方にもっていないからです。二〇才にたっしたものの動員、——彼は人的資材が不足しているために、いま自分の二、三の郡で、それをよぎなくされていますが、——それは、彼の墓穴となる運命をもっています。なぜなら農民たちは、そのような動員にがまんしないでしょうし、また、かならずロジャンコにそっぽをむけるでしょうから。だから東部戦線における攻撃をやめなくてはならないほどの部隊数を、ペトログラード戦線のために東部戦線からさしむけるようなことは、**どんなことがあっても**、してはなりません。ロジャンコをエストニア国境までおいつめてしまう（それ以上行く必要はありません）ためには、一個師団で十分です。その一個師団をとっても、東部戦線での攻撃をやめることにはなりません。このことにとくに注意されるようねがいます。

(263)

第二。クロンシュタット地区では、大きな陰謀があばかれました。クロンシュタットの全要塞地区のすべての堡塁の砲台司令官がこれにまきこまれています。陰謀の目的は、要塞を自分の手にいれ、海軍を支配下におき、わが軍の背後に砲火をあびせ、ロジャンコのためにピーテルへの道をはききよめようというのです。われわれはてごろな書類を手にいれております。

ロジャンコが比較的わずかの兵力でピーテルにむかってきた、そのあつかましさは、いま私には、はっきりしています。フィンランド人の図々しさもわかります。わが軍の隊付将校たちのなかに、広く見られる脱走もわかります。クラースナヤ・ゴールカの裏切りの瞬間に、イギリスの艦船が、どこかにきえてなくなったという不思議なできごともわかります。つまりイギリス人が事件にちょくせつ口をいれること（干渉）を「有利」だと考えなかったことは明らかで、彼らは、要塞や海軍が白軍の手にうつったのちに、「ロシアの人民が」新しい「民主主義制度を組織」するのを「援助する」ために、あらわれるほうがよいと、おもったのです。

明らかに、ロジャンコとユデーニッチ（彼のところには、イギリスがイタリア＝スイス＝デンマークの大使館を通じて資金を出している陰謀の、あらゆる糸があつまっています）との企図は、すべて陰謀がうまくいくものということを基礎にしていたのですが、その陰謀は、未然にわれわれが息の根をとめてしまうものと期待していますへ事件に関係したものはすべてとらえられ、審理がつずけられています）。

私のお願い。逮捕された大使館員たちを、けっして大目に見ないこと。審理によって新しい多くの糸があばき出されますが、この審理がおわるまでは、彼らを厳重な制度のもとにおくこと。

もし御異存がなければ、私は二、三日して一日モスクワに行こうとおもっていますが、そのときに、よりくわ

しくはなしましょう。

地図をおくります。今までおくることができなかったのは、いつも戦線の仕事のために不在で、戦線にいることが、いちばん多かったからにすぎません。

一九一九年六月十八日午前三時

スターリン

『プラウダ』、一九四一年二月二十三日、第五三号にはじめて印刷

(265)

ペトログラード戦線について

『プラウダ』記者との会談

同志**スターリン**は、ペトログラード戦線から、さいきんかえってきたが、そのとき、わが記者と戦線の状況についての印象を、つぎのようにかたりあった。

一　ペトログラード近接地

ペトログラード近接地――それは、敵がそこから出発して、うまくいけばペトログラードを包囲することができ、これをロシアからきりはなすことができ、また最後には、これを占領することもできる地点である。そういう地点は、つぎのとおりである。（イ）ズヴァンカへ通じるペトロザヴォーツク地区。目的は、東からペトログラードを包囲すること。（ロ）ロヂェイノエ・ポーレへ通じるオローネッツ地区、目的は、わがペトロザヴォーックの部隊の背後にまわること。（ハ）ペトログラードへちょくせつ通じるカレリア地区、目的は、北からペトログラードを占領すること。（ニ）ガッチナとクラースノエ・セローへ通じるナルヴァ地区、目的は、西南から

ペトログラードを手にいれるか、あるいは、すくなくともガッチナートスノの線を手にいれて、南からペトログラードを包囲すること。（ホ）ドゥノーーボロゴーエに通じるプスコフ地区、目的は、ペトログラードをモスクワからきりはなすこと。（ヘ）最後に、フィンランド湾とラドガ湖、そこはペトログラードの西と東から、敵が上陸する可能性をひらいている。

(266)

二　敵の勢力

これらの地区における敵の勢力は雑多で、まちまちである。ペトロザヴォーツク地区では、セルビア人、ポーランド人、イギリス人、カナダ人、ロシアの白衛軍将校のグループが行動している。彼らはみな、いわゆる同盟国資金によってまかなわれている。オローネッツ地区には、白系フィンランド人がいるが、彼らは二、三カ月の契約でフィンランド政府にやとわれている。白系フィンランド人の先頭にたっているのは、ドイツの占領のあとにいのこったドイツ人将校である。カレリア地区には、フィンランドの、いわゆる正規兵部隊がいる。ナルヴァ地区は、ロシア人の捕虜のなかから募集されたロシア人部隊と、地方の住民から募集されたインゲルマンランドの部隊である。これら部隊の首長は、陸軍少将のロジャンコである。プスコフ地区にもまた捕虜と地方住民からなるロシア人部隊があり、バラホーヴィチを首長としている。フィンランド湾では、すべての資料によれば、イギリス＝フィンランドの水雷艇（五隻から一二隻）と潜水艦（二隻から八隻）が行動している。

すべての資料は、ペトログラード戦線における敵の勢力が大きなものではないということを、ものがたっている。もっとも活発な敵地区――ナルヴァ地区――は、戦斗的な「人的資材」の不足になやまされている。そして

ここにおとらず重要であるが、ここほど活発でないその他の地区も、おなじくこの不足になやまされている。

「二、三日すれば」ペトログラードは陥落すると、すでに二カ月もまえに『タイムス』が勝ちほこってさけんだにもかかわらず、敵が、その共通の目標——ペトログラードの包囲——をたっしていないばかりでなく、このあいだに、どれか一つの決定的な地点を占領するという意味での、部分的な、地区的な任務の一つさえ実現できなかったということは、もともと、これによるものである。

(267)

フィンランドに腰をすえているユデーニッチ将軍が首長となっている、悪名高い「西北軍」(古狐のグチコーフは、デニキンへの報告のなかで、この軍隊に望みをかけている)は、今のところ、まだ醸造されてはいないようだ。

三　敵のおもわく

すべての資料によると、敵は、自分自身の力をあてにしていただけでなく、もっと正確にいえば、自分自身の力よりも、むしろ、その味方——わが軍の背後や、ペトログラードや、戦線にいる白衛軍——の力をあてにしていた。まず第一には、ピーテル駐在の、いわゆるブルジョア国家(フランス、スイス、ギリシア、イタリア、オランダ、デンマーク、ルーマニア、その他)の大使館であり、それは、白衛軍に資金をあたえたり、ユデーニッチやイギリス＝フランス＝フィンランド＝エストニアのブルジョアジーのためのスパイをはたらいていた。これらの諸氏は右や左に金をまきちらし、わが軍の背後で買収できるものは、すべて買収してしまった。つぎには、ロシア将校団のうちの買収されやすい部分であり、彼らはロシアをわすれ、誠実さをうしなって、労農ロシアの

敵のがわに投降する用意をしている。最後に、ペトログラードのプロレタリアートにはずかしめられた、零落した人たち、ブルジョアと地主であり、彼らはあとでわかったように、武器をたくわえ、わが軍に背後から一撃するための好機をねらっていた。敵はペトログラードを攻撃するとき、これらの勢力をあてにしていた。クラースナヤ・ゴールカ、すなわちクロンシュタットのこのかぎを占領すること、これによって要塞地帯を無力にすること、戦線で暴動をおこすこと、ペトログラードを砲撃すること、こうして全般的な騒擾の瞬間に、戦線での総攻撃をペトログラードでの暴動と結びつけて、革命の中心を包囲し、占領すること、――こういうことが敵のおもわくであった。

(268)

四 戦線の状況

だが敵のおもわくは実現しなかった。クラースナヤ・ゴールカは、左翼エス・エルの内部的な裏切りのために一昼夜のあいだ敵に占領されたが、それはバルチック艦隊の水兵による海陸からの強力な一撃によって、すぐにソヴェト・ロシアの手にとりかえされた。クロンシュタットの要塞地帯は、右翼エス・エル、メンシェヴィキの祖国防衛派、および買収されやすい将校団の一部の裏切りによって一時動揺していたが、バルチック艦隊の軍事革命委員会の鉄のような手によって、ただちに秩序を回復された。いわゆる大使館とそのスパイどもは逮捕されて、もっと平穏な場所につれていかれたが、なおそのほかに、いくつかの大使館では、機関銃、小銃(ルーマニアの大使館では火砲一門さえ)、秘密無線電信機、その他のものが発見された。ペトログラードのブルジョアジーどもの住宅地は、しらみつぶしに家宅捜索されたが、そのさい四千の小銃と数百の爆弾が発見された。

敵の総攻撃についていえば、それは、『タイムス』がわめきたてたように、成功しなかったばかりでなく、攻撃をはじめることさえできなかった。オローネッツ付近の白系フィンランド人は、ロヂェイノエ・ポーレを占領しようとうかがっていたが、撃退されて、フィンランドの国境のなかにおいかえされた。ペトロザヴォーック部隊は、現在のところ、敵の背後にまわったわが部隊の急襲にあって、一目散に退却している。敵のプスコーフ部隊は、あるところではきえてなくなり、また、ところによっては退却さえして、主導性をとりおとしてしまった。もっとも活発な敵のナルヴァ部隊についていえば、その目的をたっしなかったばかりか、反対に、わが部隊の急襲にあって、退却に退却をかさね、ヤンブルグへの途上で赤軍の襲撃にあってくずれさり、きえさろうとしている。連合国のかちほこった叫び声は、こんなぐあいで、時機尚早なものであった。グチコーフやユデーニッチの期待は実現しなかった。カレリア地区はあいかわらず受動的な立場をとっているが、この地区については、今のところ、なにもいうことができない。というのはフィンランド政府は、ヴィドリッツァ工場で失敗したのちは、目に見えてその調子をさげ、ロシア政府にたいして下品なののしりをあびせることを、やめてしまったからである。それればかりでなくカレリア戦線では、いわゆる事件というものが、ほとんどなくなった。(269)(七〇)

これが、あらしのまえの静けさかどうか、それは、フィンランド政府だけが知っていることだ。ともかくペトログラードは、おこりそうなあらゆる不意打ちにそなえている、ということができる。

五　艦　隊

艦隊のことについて、すこしばかり言わなければならない。全滅したとおもわれていたバルチック艦隊が、きわめて有力なものとして復活しつつあることは、よろこばずにはいられない。このことは、味方だけではなく、敵もまたみとめている。おなじく愉快なことに、ロシア将校団の一部の病弊、──買収されやすいこと──も、艦隊の指揮官をあまりいらだたせなかった。というのは彼らの名誉になることには、ロシアの威厳と独立を、イギリスの金より高く評価する人々も、やはりいたからである。さらに愉快なことには、バルチック艦隊の水兵たちが、その功績のなかで、ロシアの革命的艦隊のよりよい伝統をよみがえらせて、ふたたび自分自身を発見したことである。このような条件がなかったら、ペトログラードは、海上からのきわめて危険な不意打ちをふせぐことはできなかっただろう。わが艦隊の復活を特徴ずけるものとして、もっとも典型的なものは、六月におこなわれたわがほうの二隻の水雷艇と、敵の四隻の水雷艇および三隻の潜水艦との互角といえない戦斗であった、すなわち、わが水雷艇は水兵たちの献身的な働きと、戦斗部隊の指揮官のすぐれた指導のおかげで、敵の潜水艦をしずめ、その戦斗での勝利者となったのである。

六　結　論

ソヴェト・ロシアにとって脅威であるという意味で、ロジャンコとコルチャックとを、しばしば比較し、しかもロジャンコをコルチャックよりも危険だと考えるものがいる。この比較は正しくない。コルチャックは実際に危険である。というのは、彼には退却するための広大な土地があり、そして軍隊を建てなおすための人的資材も、軍隊をやしなうための穀物ももっているからである。ロジャンコとユデーニッチの不幸は、広大な土地も、

人的資材も穀物も、もっていないという点にある。いうまでもなくフィンランドやエストニアも、ロシア人の捕虜から白衛軍部隊を編成するための、ある基地ではある。しかし第一に、捕虜は、白衛軍部隊にとって十分な、そして完全に信頼のおける資材ではありえない。第二に、フィンランドとエストニアにおける情勢そのものが、――そこでは革命的な動揺が発展しているために――、白衛軍部隊を編成するための有利な条件となっていない。第三に、ロジャンコやバラホーヴィチが占領した地域（わずかおよそ二つの郡）は、しだいに、かつ、たえずへってきているし、ロジャンコ゠バラホーヴィチ=ユデーニッチに、すくなくとも自分自身の領土を、ロジャンコ゠バラホーヴィチ゠ユデーニッチに、提供しないあいだは、そうみとめなければならないからである。後方をもたない軍隊、――「西北軍」は、そういうものである。いうまでもなく、このような「軍隊」は、もちろん、なんらかの新しい、重大な、敵にとって有利な、国際的な性格をもった事態が、一連の諸事件のなかにはいってこなければ、ながく生きのびえないし、また、すべての資料によれば、敵がそういうことをあてにするだけの根拠は、なにもない。

赤軍はペトログラード付近で勝つにちがいない。

(271)

『プラウダ』第一四七号
一九一九年七月八日

西部戦線の状況についてのヴェ・イ・レーニンへの手紙(七二)

同志レーニンへ

西部戦線の状態は、ますます危険なものとなっています。

第十三軍部隊には、西部戦線におけるもっとも活発な敵であるポーランド軍が肉迫していますが、この古い、消耗した、つかれはてた部隊は襲撃をもちこたえ、まもりとおすことができないばかりでなく、退却する砲兵中隊――むろん、それは敵の手におちようとしていますが――を援護する力さえうしなってしまいました。私がおそれるのは、諸部隊がこのようなありさまでは、第十六軍はベレジナへ退却するみちすがら、武器や輜重なしになってしまうかもしれないということです。さらにまた大多数の連隊の、消耗して、まったく昔日のおもかげをうしなってしまった幹部たちは、まもなく補充兵を感化する能力もなくなるだろうという恐れもあります。――そして、そのうえこの補充兵はおそろしくおくれてやってくる、ということも言わなければなりません。

敵は、二つの基本線、すなわちボリソフへの線とスルーツクーボブルーイスクへの線とにそって、ベレジナのほうへうちこんできています。うまくうちこんできています。というのは敵は、すでに三〇ヴェルスタほどボリ

(273)

ソフにむかって前進したし、また南部ではスルーックを手にいれて、ボブルーイスクのかぎ――その地区のただ一つのみごとな街道を占領したからです。

ボリソフがうばわれ、そのために第十六軍のまったく消耗した第十七師団が、くずれさるようなことでもあれば、第十五軍は打撃をこうむることになるでしょうし、ポーロックとドヴィンスクは直接の脅威にさらされるでしょう。ボブルーイスクがうばわれてレチッツァに打撃がくわえられるばあいには(敵は直接にこの目的をおっていますが)――第十六軍のプリピャーチ部隊全部は、すなわち第十八師団は、自動的に崩壊してしまうでしょう。そのうえゴーメリは、直接の打撃のもとにおかれ、第十二軍の側面は敵にさらされることになります。

簡単にいえばこうです、もし敵にわが第十六軍を粉砕するようなことをゆるすなら、――しかも敵はこの第十六軍をすでに粉砕しつつあるのですが、――われわれはそのことによって、第十五軍と第十二軍を窮地におといれることになり、そして、もはや第十六軍だけでなく、戦線全体を建てなおさなければならなくなり、しかもはるかに高価な代価をはらわなければならないでしょう。

明らかにわれわれは、昨年東部戦線であったのと、ほとんどおなじ状態にあります。昨年はヴァッェチスとコスチャーエフは、コルチャックに、まず第三軍を、それから第二軍を、さらに第五軍を粉砕することをゆるし、こうして必要もなく全戦線の事態を、まる半年のあいだに台なしにしてしまいました。

この見通しが、どうも西部戦線でも現実となりそうです。

私がすでにまえに書いたように、西部戦線はぼろ屋敷で、準備のととのった予備軍なしには、それの建直しは不可能であり、また全戦線がぐらつきはじめるためには、もっと正確にいえば、――かたむきはじめるためには、

重要な拠点の一つにでも敵の一大打撃があれば、それで十分なのです。
現在は、残念ながら、私のこの心配がすでに的中しはじめています。
ところが単一の指揮のもとに統一された西部の敵は、リガ、ワルシャワおよびキシニョフにおいて、すでに準備をととのえた、あるいは、ほとんど準備をととのえたロシア軍団を、まだ行動させていないのです。
三週間ほどまえには、攻撃を展開してモローデチノ―バラノヴィチの分岐点を奪取するためには、一個師団あれば十分だと、私は考えていました。今では、ボリソフ―ボブルーイスク―モズィリの線でもちこたえるためにも、一個師団では不十分かもしれません。
うまく成功するような攻撃を夢見ても、むだです。というのは、そのためには現在（八月十一日）のところ、最小限二、三個師団がいるからです。
では、ご自分で決定してください。すなわち、こちらに一個師団を、せめて旅団ごとにでも、さしむけていただけるか、あるいは、これほどまでくずれかかった第十六軍を敵に粉砕させるかということを。だが遅滞なく決定してください。というのは一時間、一時間が貴重だからです。

あなたの　イ・スターリン

追伸。この手紙は、西部司令官をもふくめた西部戦線の軍事革命委員会の全員が一読して、確認したものです。同様の声明が近日中に共和国軍事革命委員会にも送付されるはずです。

イ・スタ

スモーレンスク

一九一九年八月十一日

はじめて印刷

(275)

南部戦線からのヴェ・イ・レーニンへの手紙（七二）

同志レーニン！

二ヵ月ほどまえには、総司令官は、基本的な打撃として、ドネツ炭田地方をへて西から東へ打撃をくわえることにたいして、原則的には反対していませんでした。彼がそれにもかかわらず、この攻撃に出ていないとすれば、それは夏に南部の軍隊が退却した結果として、うけとった「遺産」を口実にしているからです。すなわち現在の東南部戦線地区で自然発生的につくりだされた軍隊の配置を口実にしているのです。それ（配置）を再編成することは、時間の大きな浪費となり、デニキンの利益となるだろうというのです。だからこそ私は、公式にとりあげられた攻撃方向には反対しませんでした。しかし今は、情勢も、また、それと関連した兵力の配置も、根本的にかわりました。つまり第八軍（旧南部戦線における主力軍）が、南部戦線地区に移動して、ドネツ炭田地方をちょくせつうかがっています。ブヂョンヌィ軍団（もう一つの主力軍）もまた南部戦線地区に移動しました。新兵力――ラトヴィア師団もくわわりました。この師団も、一ヵ月のちには新しく建てなおされて、ふたたびデニキンにとって恐ろしい勢力となるでしょう。

古い配置（「遺産」）はなくなったわけです。ところで、なにが総司令官（総司令部）に古い計画を固執させて

(276)

いるのでしょうか。明らかにそれは、ただがんこさだけであり、そう言ってよければ――分派活動、つまり、もっとも愚かな、また共和国にとってもっとも危険な分派活動であって、それは「戦略上」のあばれものグーセフによって、総司令部のなかに培養されているのです。さいきん総司令官は、ツァリーツィン地区からドンの草原地帯をへて、ノヴォロシースクにむけて攻撃せよとの指令を、ショーリンにあたえました。しかし、この線は、わが軍の航空兵にとっては飛行につごうよいのかもしれませんが、わが歩兵と砲兵がその線をそってとぼとぼあるいていくということは、まったくできないことでしょう。われわれに敵意をもった環境のなかでの、まったく道もないような条件のなかでの、この気ちがいじみた（予定されている）遠征が、われわれにとって完全な失敗となる恐れがあることは、証明するまでもありません。カザック村落へのこの遠征は、つい最近の実践がしめしたように、自分たちの村々をまもるため、われわれに反対してカザックを、デニキンのまわりに結集させるだけであり、デニキンをドンの救世主としてまつりあげるだけであり、デニキンのためのカザック軍をつくるだけです。つまりデニキンを強くするだけです。それは、わかりきったことです。

だからこそ、いますぐ必要なことは、すでに実践によって破棄された古い計画を、時をうしなわず変更して、ヴォローネジ地区からハリコフ―ドネツ炭田地方をへてロストフにむけて主要攻撃をくわえるという計画に、それをとりかえることです。第一に、ここでは、われわれに敵意をもたない、むしろ反対に――われわれに同情する環境がえられて、それが、われわれの前進を容易にするでしょう。第二に、もっとも重要な鉄道網（ドネツ鉄道網）と、デニキン軍に補給している主要幹線、――ヴォローネジ―ロストフ線とがえられます（この鉄道線がなければ、カザック軍は冬には補給をたたれてしまいます。というのはドンの軍隊が、それによって補給をうけ

ているドン河は凍結するでしょう、リハーヤーツァリーツィン間の東部ドネッ道路は切断されるでしょうから)。(277)第三に、この前進によって、われわれはデンキン軍を二つにひきさき、そのうちの志願軍のほうは、これをマフノのえじきにのこしておき、カザック軍のほうは、背後にまわってそれをおびやかすことになるでしょう。第四には、カザックたちをデニキンとあらそわすこともできるようになります。すなわち、われわれの前進が成功すれば、デニキンはカザック部隊を西に移動させようとするでしょうが、カザックの大部分は、それに応じないでしょう。それはいうまでもなく、そのときまでに講和の問題、講和交渉やその他の問題をカザックに出しておけば、のことですが。第五に、われわれは石炭を手にいれるが、デニキンは石炭をうばわれるでしょう。

この計画は、ぐずぐずせずに採用しなければなりません。なぜなら連隊の輸送と配置にかんする総司令官の計画は、南部戦線におけるわれわれの最後の勝利を無にしてしまう恐れがあるからです。中央委員会と政府の最近の決定――「すべてをあげて南部戦線に」――が、総司令部によって無視され、事実上すでに破棄されている、ということについては、あらためて言いません。

要約すれば、――すでに破棄された古い計画は、どういうことがあっても、とりあげてはなりません。――それは共和国にとって危険であるし、それはまちがいなくデニキンの立場を改善するでしょう。それを他の計画にとりかえなければなりません。このために熟しているばかりでなく、断固としてこのような変更を命じています。そうすれば連隊の配置も、新しいやりかたでやることになるでしょう。

こうしなければ南部戦線における私の仕事は、無意味な、犯罪的な、不必要なものとなるでしょう。それは私に、どこでもすきなところに、悪魔のところにでもいく権利を、あるいは、もっと正しくいえば、そうする義務

を、ただ南部戦線にとどまってはならないという義務をあたえます。

セールプホフ
一九一九年十月十五日

あなたの　スターリン

『プラウダ』第三〇一号にはじめて印刷
一九二九年十二月二十一日

ヴェ・イ・レーニンへの電報

反革命の主要な防壁として、連合国とデ̇ニキンのながいあいだの努力によってつくられたシクローとマモントフの騎兵軍団は、ヴォローネジ付近の戦斗で、同志ブヂョンヌィの騎兵軍団によって全敗させられた。ヴォローネジは赤軍の英雄たちに占領された。山なす戦利品がろかくされて、その計算がおこなわれている。さしあたって明らかになったことは、シクロー将軍の名まえをつけた装甲列車をはじめとして、敵のいろいろの名をつけた装甲列車が、ぜんぶろかくされたことである。うちのめされた敵にたいする追撃はつづけられている。マモントフ将軍やシクロー将軍の名のまわりにつくられた無敵という声望も、同志ブヂョンヌィの騎兵軍団の赤軍英雄たちの勇敢な行為によって、まったく地におとされた。

南部戦線軍事革命委員会　スターリン

一九一九年十月二十五日

『ペトログラーツカヤ・プラウダ』第二四四号
一九一九年十月二十六日

東部諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会の開会の辞

一九一九年十一月二十二日

同志諸君！
私は、共産党中央委員会の名において、東部回教徒の共産主義組織第二回大会(七三)をひらくことを委任された。
第一回大会のときから、一年たった。このあいだに社会主義の歴史には、二つの重要な事件がおこった。第一の事件――それは、西ヨーロッパとアメリカが革命化したこと、また、そこに、すなわち西欧に共産党が生まれたことである。第二の事件は、東洋諸民族がめざめたこと、東洋に、すなわち東洋の被圧迫諸民族のあいだに革命運動が成長したことである。西欧では、プロレタリアは今にも帝国主義諸列強の前衛を粉砕して、その手に権力をにぎろうとしている。東洋では、プロレタリアは帝国主義の背後を、すなわち富の源泉としての東洋を、――というのは東洋は、帝国主義がそのうえに自分の富をきずきあげている土台であり、そこから帝国主義が力をくみとっている源であり、しかも西ヨーロッパで粉砕されたときには、そこに退却しようとのぞんでいるところ

である——その東洋を破壊しようとしている。

一年まえには、西欧で、全世界の帝国主義が、ソヴェト・ロシアを狭い環のなかにとじこめようとした。今で(280)は、帝国主義自体が包囲されているようになった。というのは側面からも背後からも、うちこまれているからである。東部諸民族の第一回回教徒大会の代議員たちは、一年まえに散会するとき、東洋諸民族を眠りからさますために、西欧の革命と東洋の被圧迫諸民族とのあいだに橋をかけわたすために、自分たちにかかっているすべての義務をはたすことをちかった。いま、この仕事を概観してみると、この革命的な仕事がむだにおわらなかったということ、すべての被圧迫諸民族の自由を絞殺しようとするものに対抗して、橋がかけられたということを、満足して確認することができる。

最後に、わが軍隊、わが赤軍が、東部にむかってこんなにもすみやかに前進したとしても、もちろん代議員諸君、諸君の仕事は、その最後の役割をはたしてしまったのではない。いまや東部への道がひらけているとしても、革命がこれをえたのは、これまた、今までこの仕事をやってきたわが代議員諸君の、きわめて大きな仕事のおかげなのである。

東部諸民族の、まず第一にタタール人、バシキール人、キルギーズ人、トゥルケスタン諸民族の、回教徒共産主義組織の団結によってのみ、——それらのものの団結によってのみ、われわれが東部で見ているような、諸事件の急速な発展を説明することができる。

同志諸君、この大会、すなわち量の点でも質の点でも、第一回大会より豊かなこの第二回大会は、東部諸民族をよびさまし、西欧と東洋とのあいだにかけわたされた橋を強化するという、すでに着手された仕事を、一世紀

にもわたる帝国主義の抑圧から勤労者大衆を解放するという仕事を、つずけることができるだろう。私は、それをうたがわない。

第一回大会によってかかげられた旗、東部の勤労者大衆を解放するという旗、帝国主義を粉砕するという旗は、共産主義的回教徒組織の仂き手によって、りっぱに最後までもちつずけられるだろうことを、期待してやまない。（拍手）

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第四六号
一九一九年十二月七日

南部戦線からのペトログラードへのあいさつ

南部戦線軍事革命委員会は、あいさつの言葉と諸君が南部戦線の連隊に約束された赤旗とにたいして、同志的な感謝の意をあらわす。

南部戦線軍事革命委員会は、ペトログラードが最初に南部戦線の援助にのりだして、戦斗できたえられた数千の先進的労仂者を、勝利にたいするその確信で、わが師団を元気ずけ、わが戦線をすっかり建てなおした先進的労仂者をおくってくれたことを、わすれないであろう。

南部戦線における最近の成功は、なによりもまず、これらの労仂者の、赤色ペトログラードのりっぱなむすこたちの、おかげである。

同志諸君、南部戦線の軍隊が、ロシアのプロレタリアートの期待にそって、完全に勝利するまで、そのおくられた旗を、名誉にかけてもちつずけるだろうということを、信じられたい。

キーエフとクピャンスクは、すでにわれわれが占領した。——赤旗がロストフやノヴォチェルカスクのうえにかかげられる日も遠くはない。

ペトログラードの労仂者にあいさつをおくる。バルチック艦隊のはえある水兵たちにあいさつをおくる！

スターリン

『ペトログラーツカヤ・プラウダ』第二八九号
一九一九年十二月十八日

南部の戦況について

一　不成功におわった連合国の計画

一九一九年の春、ソヴェト・ロシアにたいしてコルチャック―デニキン―ユデーニッチの連合した軍事行動がくわだてられた。主要な攻撃はコルチャックがやることになっていて、デニキンは、モスクワを東から協同して攻撃するために、サラトフでそれに合流するつもりであった。ユデーニッチはペトログラードを援護攻撃することになっていた。

軍事行動の目的は、デニキンにあてたグチコーフの報告のなかで、はっきりさせられていた。すなわち「ボリシェヴィズムのもっとも重要な中心部――モスクワとペトログラード――をうばいとって、一撃のもとにボリシェヴィズムの息の根をとめること」というのである。

軍事行動の計画そのものは、コルチャックにあてたデニキンの手紙のなかに書かれていたが、その手紙は一九一九年の春、グリーシン＝アルマーゾフの参謀部といっしょに、わが軍によってとりおさえられた。デニキンは

ニルチャックにあててこう書いている。「もっとも重要なことは、ヴォルガでたちどまることではなくて、さらにボリシェヴィズムの心臓、すなわちモスクワにうちこむことである。私は貴下とサラトフでおめにかかれるものと期待している……。ポーランド軍は自分の仕事をやるだろうし、またユデーニッチについていえば、彼はすでに準備をおえていて、おくれることなくペトログラードに一撃をくわえるだろう……」と。

ヴォルガにたいするコルチャックの攻撃がまさにたけなわであった春に、デニキンはこう書いた。

しかし、この計画は成功しなかった。コルチャックはウラルのむこうにおいやられた。デニキンはセイム河ーリスキーバラショフの線で阻止された。ユデーニッチはヤンブルグのむこうにおしかえされた。

(283)

ソヴェト・ロシアは完全無傷のままであった。

だが連合国の人食いどもは、気をおとすようなことをしなかった。一九一九年の秋までには、大出兵の新しい計画がくわだてられた。当然のことながら、コルチャックは計算からはずされた。重心は東部から南部にうつされ、そこからデニキンがおもな打撃をくわえることになっていた。ユデーニッチは、春とおなじように、援護攻撃——ペトログラードへの新たな軍事行動——をやることになっていた。前志願軍司令官マイ＝マエフスキー将軍は、オリョール占領の翌日の演説で、自分は「十二月末までに、すなわち一九年のクリスマスまでには」その軍隊といっしょにモスクワにいることになるだろうと言った。

デニキン一派の自己過信は非常なものであったので、ドネツの資本家どもは、早くも十月には志願軍の連隊のうちで、モスクワに一番乗りしたものには、百万にのぼる賞金（ニコライ貨幣で）をあたえると、声明したほどであった……。

だが、この計画も失敗する運命にあった。デニキンの軍隊は、ポルタワークピャンスクーチェルトコヴォのむこうにしりぞけられた。ユデーニッチはうちやぶられ、ナルヴァのむこうにおいやられた。コルチャックについていえば、ノヴォ・ニコラエフスク付近で撃破されたのち、その軍隊はあとかたもなくなった。

ロシアは、こんども完全無傷のままであった。

こんどの反革命の崩壊は、まったくおもいがけず、また突然でもあったために、帝国主義ドイツの勝利者、連合国の古おおかみどももも、「武力ではボリシェヴィズムを征服できない」と、公然と声明せざるをえなかったほどである。また帝国主義の托鉢僧どもの当惑も非常なもので、彼らは反革命の敗北の真の原因を明らかにするだけの能力をうしなってしまい、ロシアを「どんなすぐれた司令官」もかならず失敗せねばならない「ざくざくした砂地」とか、「どんなすぐれた軍隊」にとっても、かならず死がまちもうけているような「はてしない沙漠」にたとえはじめたほどである。

(284)

二　反革命の敗北の原因について

反革命の敗北、まず第一にデニキンの敗北の原因は、どういうものか。

（イ）反革命軍の**後方が弱体であること**。強固な後方をもたないで勝利できるような軍隊は、世界に一つもない。そうだ、デニキンの後方は（またコルチャックの後方もおなじく）まったく弱体である。反革命軍の後方が弱体だというこの事実は、これらの軍隊をつくりだしたデニキン—コルチャック政府の社会的性格によって説明

される。デニキンやコルチャックは、地主と資本家のくびきをはこんでいるばかりでなく、イギリス＝フランスの資本家のくびきをもはこんでいる。デニキン—コルチャックの勝利は、ロシアの独立性をうしなうことであり、ロシアがイギリス＝フランスの財布の金穴になることである。こういう意味で、デニキン—コルチャックの政府は、もっとも反人民的な、もっとも反民族的な政府である。こういう意味でソヴェト政府は、もっともよい意味での、ただ一つの人民的な、ただ一つの民族的な政府である。なぜなら、それは勤労者を資本から解放するばかりでなく、全ロシアを世界帝国主義のくびきから解放し、ロシアを植民地から独立した、自由な国にかえるからである。

デニキン—コルチャックの政府とその軍隊が、ロシアの住民の広範な層の尊敬も支持もえられないのは、明らかではないか。

デニキン—コルチャックの軍隊にうちかとうという、あの熱烈な希望や意気——それがなくては一般に勝利は不可能なのだが——がないことは、明らかではないか。

デニキン—コルチャックの後方は、前線の基礎をゆすぶり、ほりくずしている。というのはデニキン—コルチャックの政府は、ロシア人民を借金奴隷とする政府であり、広範な住民層の最大の不信をよびおこしている政府だからである。

ソヴェト軍隊の後方は、自分の養分で赤軍の前線をやしないながら、強くなっている。なぜならソヴェト政府は、ロシア人民を解放する政府であり、住民の広範な層から最大の信頼をうけている政府だからである。

（ロ）反革命の辺境地方の状況。すでに十月の変革のはじめに、革命と反革命のあいだには、いくらかの地理

的な境界がつけられていた。国内戦のその後の発展につれて、革命と反革命との地域は最終的にきまってしまった。工業上の、また文化上＝政治上の中心地――モスクワとペトログラード――をもち、民族的には同種の住民をもつ内部ロシアが、革命の根拠地となった。ロシアの辺境地方、主として南部および東部辺境地方は、重要な工業上の、また文化上＝政治上の中心地をもたず、また民族的には、一方では特権的なカザック植民者と、他方では無権利のタタール人、バシキール人、キルギーズ人（東部では）、ウクライナ人、チェチェン人、イングーシ人および、その他の回教諸民族とからなる、きわめて種々さまざまな住民をもっているが、この辺境地方は、反革命の根拠地となった。

たがいにたたかっているロシアの諸勢力のこのような地理的分布が、すこしも不自然なものではないことは、理解しがたいことではない。実際に、ソヴェト政府の基礎は、ペトログラード＝モスクワのプロレタリアートでなくて、いったいだれであろうか。特権をもち、カザック団という軍人身分に組織された、ロシア帝国主義の昔からの道具――それはずっとまえから辺境地方の非ロシア民族を搾取しているが――以外に、いったい他のだれが、デニキン―コルチャックの反革命の防塞となりうるだろうか。

これ以外のどのような「地理的分布」もありえないことは、明らかではないか。

だが、この事情は、反革命にとって多くの不吉な、さけることのできないマイナスを、また革命にとっては、それだけの不可避的なプラスを、その結果としてもっていた（また、もちつづけている）。

激しい国内戦の時代に行動する軍隊が勝利するためには、生きた人的環境――これらの軍隊は、その要素をくい、その養分によって自分を維持していく――の統一と団結とが絶対に必要である。しかも、この統一は、民族

的な統一（とくに国内戦のはじめには）のばあいもあれば、階級的な統一（とくに国内戦が発展したときには）のばあいもある。このような統一がなくては、長期にわたる軍事上の勝利は不可能である。しかしロシアの辺境地方（東部および南部地方）が、デニキンやコルチャックの軍隊にとっては、民族的にも階級的にも、生きた環境の最小限の統一――それがなくては（私がさきに言ったように）重大な勝利は不可能である――すらしめしていないし、また、しめすことができない点が、重要である。

実際に、一方では、タタール人、バシキール人（東部では）、カルムィク人、チェチェン人、イングーシ人、ウクライナ人（南部では）の民族的な欲求と、他方では、コルチャック―デニキンの真にロシア的な専制支配とのあいだに、どのような民族的統一がありうるだろうか。

あるいはまた一方では、ウラル、オレンブルグ、ドン、クバニの特権的なカザック団と、辺境地方のその他の全住民――となりあったカザックにずっとまえから圧迫され、搾取されているロシアの「よそもの」も、その例外ではない――とのあいだに、どんな階級的統一がありうるだろうか。

このような種々雑多な要素からなっている軍隊が、ソヴェト軍がわの大きな一撃にあうやいなや、かならずくずれさってしまうはずであることは、明らかではないか。また、このような打撃がくわえられるごとに、ロシアの辺境地方の非カザック分子が、強大国としての欲望を根本から否定し、彼らの民族的な欲求によろこんで応じるソヴェト政府にたいして、あこがれを強めるということも、明らかではないか。

辺境地方とは反対に、内部ロシアはまったくちがった光景を展開している。第一に、民族的に見て、それは単一で、結合されている。というのは、その住民の十分の九は大ロシア人だからである。第二に、ソヴェト軍の戦

線と直接の後方とをやしなっている、生きた環境の階級的統一の達成は、ソヴェト政府のまわりに固く団結し、農民のあいだに信望のあるペトログラード＝モスクワのプロレタリアートが、この環境のなかにいることによって、容易になっている。

(288)
ソヴェト・ロシアの後方と戦線とのこのすばらしい結合――コルチャック―デニキンの政府は、これまでそのような結合によって異彩をはなったことはない――は、とりわけこのことによって説明される。というのは、ソヴェト政府が、戦線を援助せよと叫びさえすれば、ロシアは一瞬のうちに、新しい連隊の完全に一致した行動をしめすからである。

ソヴェト・ロシアが危急をつげる瞬間にいつも発揮する、あのすばらしい力とたぐいない弾力性との源泉は、このなかにこそ、さがしもとめなければならない。

連合国の教養あるシャーマン僧にはわからない事実、「反革命は、一定限度まで（内部ロシアの境界まで！）たっしながらも、かならず破局をこうむる……」という、あの事実の説明は、ここにこそ、さがしもとめなければならない。

だが、さきに指摘したような、反革命の、まず第一にデニキンの敗北の素因のほかに、なお、その他の近因もある（われわれは主として南部戦線のことを念頭においている）。

それは、つぎのようなものである。

（一）ソヴェト南部戦線における予備軍や補充兵の状態の改善。

（二）補給の改善。

（三）ピーテル、モスクワ、トヴェーリ、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスクから共産党員の労仂者が戦線に殺到して、わが南部の連隊にはいり、それをまったくつくりかえてしまったこと。

（四）さきにマモントフの襲来によってまったくめちゃめちゃにされた指揮機構をうまく建てなおしたこと。

（五）南部戦線の司令部が、攻撃のさいに側面攻撃の方式をたくみに適用したこと。

（六）攻撃そのものが整然としていたこと。

三　南部戦線の現状

デニキンの全部隊のうちで、もっとも重要な兵力と見ねばならないのは、連隊付幹部将校をたくさん予備にもち、しかも、もっともよく訓練された軍隊であるところの志願軍（歩兵）と、シクローーマモントフの騎兵軍団（騎兵隊）である。志願軍はモスクワを占領するという自分の任務をもっていたし、シクローとマモントフの騎兵隊は、わが南方軍の背後を突破して破壊するということを、その任務としていた。

わが歩兵の最初の決定的な勝利は、オリョール付近、クローム―ドミトロフスク地区の戦斗でおさめられた。ここでは志願軍の第一軍団（もっともすぐれた軍団）、すなわちコルニーロフ師団、ドロズドフ師団、マルコフ師団、およびアレクセーエフ師団からなるクチェポフ将軍の軍団が、わが歩兵によってうちやぶられた。

わが騎兵隊の最初の決定的な勝利は、ヴォローネジ付近、イコレツ河、ウスマーニ河、ヴォローネジ河、およびドン河の地区における戦斗でおさめられた。ここでは同志ブヂョンヌイのわが騎兵部隊は、シクローーマモン

トフの連合騎兵旅団とはじめて正面衝突した。そして彼らと衝突して、彼らをひっくりかえしてしまった。
オリョールとヴォローネジ付近のわが方の成功によって、わが軍がその後、南方へ進撃する基礎がおかれた。
キーエフ、ハリコフ、クピャンスク、それにリスキ付近の成功は、オリョールとヴォローネジ付近の基本的な成功の結果であり、発展である。げんざい志願軍は、わが部隊のまえで数をみだして退却しており、連絡や指揮をうしない、そのもとの編成人員の半分以上を、戦死傷者や捕虜としてうしなった。後方へひきさがって相当の建直しをしないかぎり、それが、まもなくあらゆる戦斗能力をうしなってしまうだろうということは、断言できる。

シクローーマモントフの騎兵部隊についていえば、二つの新しいクバニ軍団（ウラガイ—ナウメンコ将軍の軍団）とチェスノコフ将軍の混成槍騎兵師団とによって補強されたにもかかわらず、それは、わが騎兵隊にとって重大な脅威とはなりえない。それを証明するものとしては、リシチャンスク付近でおこなわれた最近の戦斗がある。そこではシクローーマモントフの増強された部隊が、わが騎兵隊によって全敗させられ、火砲一七門、機関銃八〇挺および千名以上の戦死者を、その場にのこしていったのである。

もちろんデニキン軍は、もうすでに粉砕されてしまった、などということはできない。デニキン軍の解体は、コルチャック軍の解体の程度には、まだたっしていない。デニキンはいましばらくは、若干の戦術上の妨害を、また、おそらくは戦略上の妨害をするだけの能力がある。一〇週間のあいだにデニキンから、全部でおよそ火砲一五〇門、機関銃六〇〇挺、装甲列車一四本、機関車一五〇輛、客貨車一万輛、捕虜約一万六千人を捕獲したということもまた、わすれてはならない。だが一つのことだけは、やはりうたがいない。すなわちデニキン軍は、**コルチャック軍にならって下り坂をころげているが**、これに反して、**わが軍は日一日と質的にも量的にも強化さ**

れているのである。

ここに、デニキンを最後的に撃滅する保障がある。

セールプホフ

一九一九年十二月二十六日

『プラウダ』第二九三号
一九一九年十二月二十八日
署名――イ・スターリン

(291)

あとがき。〔七四〕この論文は、タガンローグ付近のデニキンの戦線が、わが軍によって突破されるまえに書かれたものである。この論文の慎重な性格は、もともと、このことによる。だがデニキンの戦線が突破されて志願軍師団が、デニキンのドン軍およびカフカーズ軍からきりはなされている現在、タガンローグ近接地の二日間にわたる戦斗（一月一日―二日）で、わが軍が敵から大砲二〇〇門以上、装甲列車七本、タンク四台、その他多くの戦利品を捕獲した現在、わが軍がタガンローグを解放して反革命の中心地――ノヴォチェルカスクとロストフ――を包囲している現在、このような現在、デニキン軍の崩壊は全速力ですすんでいると、確信をもって言うことができる。

さらに一撃を、――そうすれば、完全な勝利が保障されるであろう。

クールスク
一九二〇年一月七日

『レヴォリュツィオンヌイ・フロント』（『革命戦線』）誌第一号
一九二〇年二月十五日
署名――イ・ヽヽヽヽ・スターリン

(292)

ウクライナ労仂軍にかんする命令

一九二〇年三月七日

ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の全軍総司令官の訓令シャー第一二三号、オブ第一二四七号、および西南部戦線軍事革命委員会の命令第二七一号によって、第四十二師団は、三月七日からウクライナ労仂軍に編入される。(七五)

戦線の他の諸師団とならんで、ロシアの敵と英雄的にたたかい、彼らとともにデニキンの志願軍を全敗させた勇敢な第四十二師団は、いまや武器を手からはなして、経済的な崩壊との戦いをはじめ、国に石炭を保障しなければならない。

第四十二師団の指揮官諸君！　デニキンとの戦斗では、諸君は赤軍兵士を勝利から勝利にみちびくことができた。——石炭危機との斗争においても、諸君はより以上の勝利をかちとる能力のあることをしめされたい。

第四十二師団のコミッサール諸君！　戦場において諸君は赤軍兵士のあいだに模範的な秩序と規律を維持することができた。——石炭獲得の斗争においても、労仂規律という聖なる旗をけがさない能力のあることを、しめ

(293)されたい。

第四十二師団の赤軍兵士諸君！　諸君は労農ロシアの敵と誠実に、また献身的にたたかうことができた。——諸君は、駅まで石炭をはこび、それを貨車につみこみ、石炭貨車を指定の場所まで護送するために、おなじように誠実に、また献身的にはたらく能力のあることをしめされたい。

石炭は、デニキンにたいする勝利とおなじように、ロシアにとって重要なものであることを、理解せよ。ウラルにおける第三軍の諸連隊は、薪炭燃料の採取と運搬の仕事で、すでにすぐれた業績をあげた。ヴォルガ沿岸地方の予備軍の諸連隊は、機関車や貨車を修理する仕事で名声をかちえた。第四十二師団は、国にたいして石炭の運搬、積込、護送を保障し、他人におくれをとらないことをしめさなければならない。

労農ロシアは、諸君にこのことを期待している。

ウクライナ労仂軍評議会議長

イ・スターリン

一九四〇年『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』誌、第三号にはじめて印刷

ウクライナ共産党（ボ）第四回協議会での演説[七六]

一九二〇年三月十七―二十三日

一　協議会の開会の辞

三月十七日

同志諸君！　これまで諸君、ウクライナの後方と戦線の共産党員のまえには、一つの基本的任務があった。それはせめてくるポーランド軍をおしとどめ、ペトリューラをうちやぶり、デニキンをおっぱらうことであった。この任務が、首尾よく遂行されていることは、今では味方ばかりではなく、敵でさえもみとめているとおりである。

ウクライナが残忍きわまる革命の敵、デニキン軍から解放された今、諸君のまえには、これまでのものにおとらず重要、かつ複雑な他の任務がある。それはウクライナの破壊された経済を復興するという任務である。デニキンをかたずけてしまった諸君が、〔経済の〕崩壊をもかたずけ、諸君が崩壊の度をよわめ、北部の同志たちをたすけるために、いっさいの力――他の政党とくらべて共産党員の特色である、このいっさいのエネルギー――

を発揮できることには、なんのうたがいもない。

北部では、この任務が遂行されはじめている兆候がある。労仂軍の活動報告は、機関車や車輛の修理が増加し、燃料の採取高が増大しているとのべている。ウラルの工業もまた発展し、盛んになっている。私は北部の同志たちの模範にならって、諸君がおなじことをなしとげることをうたがわない。

(295)

この任務を解決するにあたって、共産主義者は無条件に勝利をえるだろう。というのは、わが党には一致、団結、事業への献身、それに、これらすべてのもののうえに、「やりはじめたことは死んでも終りまでやりぬく」という、われわれのスローガンがあるからである。ただ規律と一致のおかげで、党はすべての地区、すべての州で、数千の労仂者を動員するのに成功しているのである。この規律と一致団結は、帝国主義にたいする勝利をかちとる可能性をあたえたが、それはまた、われわれが第二の敵——崩壊——にも勝利するであろうという希望をあたえている。

三月十九日

二　経済政策にかんする報告

われわれは、経済建設という当面の任務について報告しなければならない。

一年まえ、わが連邦が、国際帝国主義によって金をみつがれていた軍隊の、せまい環でとりかこまれていたとき、国防会議は「すべてを戦線のために」というスローガンをかかげた。これは、われわれのあらゆる建設活動

が、補給の軌道に、すなわち戦線強化の軌道にのせられたことを意味している。この一年間の政策は、国防会議が正しかったことを証明した、というのは、この一年間に、われわれの狂暴な敵はしりぞけられ、――ユデーニッチ、コルチャック、デニキンは基本的には撃破されたからである。こうして実現された「すべてを戦線のために」というスローガンは、積極的な結果をもたらした。

二カ月まえに、国防会議は「すべてを国民経済のために」という、もう一つのスローガンをかかげた。これはわれわれのあらゆる創造活動を、新しい経済的基調のうえに建てなおす必要があり、すべての生きた勢力を経済の祭壇にどしどしそなえる必要があることを意味している。しかし、このことは、軍事上の任務がもう大きなものでなくなったということではない。ソヴェト連邦ロシアをたたきつぶそうとする連合国の二つのたくらみ――第一はコルチャックの援助によって東部からと、第二はデニキンの援助によって南部からと――は、失敗した。いま見たところ、西からの新しい攻撃が予定されているようである。連合国は、せめてわが連邦が新しい建設活動をおこなうのを妨害するためにでも、ポーランド貴族の力をつかわないほどばかではない。さらにまたドイツのクーデター(296)(七七)と結びついて、近い将来どんな見通しがひらかれるかは、まだわれわれにはわからない。ご覧のとおり、西部は新しい、しかも、まったく複雑な若干の問題をはらんでいる。だから、われわれはあらゆる活動を国民経済の復興にふりむけ、そのことによって軍事上の任務から手をひく、ということはできない。それにもかかわらず基本的なスローガンは、依然として基本的でなければならない。

では国防会議とわが党の中央委員会とによってかかげられた、新しいスローガンは、どうしてうちだされたのか。同志諸君、それがうちだされたのは、われわれが外敵をうちくだいたのち、まわりを見まわしてみて、自分

のまえに国民経済の完全な破壊という光景を見たからである。

戦争によって破壊された国民経済を復興するという任務と関連して、われわれのまえには、どんな問題があらわれているか。

国民経済を復興するうえで基本的な問題——それは燃料問題である。あらゆる帝国主義戦争は、燃料のためにおこなわれた。連合国のあらゆる策謀は、われわれから燃料をうばいとることにあった。

燃料には三つの種類がある、すなわち石炭、石油、薪である。

石炭問題からはじめよう。

一九一六年、すなわち革命前に、われわれは一ヵ月に一億四千万から一億五千万プードの石炭を採掘し、一億二千万プード以上の石炭を他の地方に移出していた。ところが、げんざいわれわれは石炭と無煙炭を一千八百万プードしか採掘していないし、移出は四—五百万プードにもおよばない。事態は、はっきりしている。

燃料の第二の種類は石油である。石油の主要地区はバクー地区である。一般にいってバクーは、一九一六年に約五億プードの石油を供給していた。グローズヌィはおおよそ一億プード、ウラル（エンバ）は千五百万プードほどであった。周知のように、石油の主要資源地はバクーであるが、われわれはそれをもっていない。グローズヌィについては、問題にならない。どんな状態でこれを手にいれるようになるか、われわれは知らない。燃料資源地という意味では、そこにはもっとも豊富な石油床がある。去年そこでは産額が二億プードにたっした。だが、どんな状態でそれをわれわれが手にいれるようになるのかわからない。ただ一つわかっていることは、白軍がそれを根こそぎ破壊しさったことだけである。

燃料の第三の種類は薪である。一般にいって、薪を石炭に換算すれば、以前は一年におよそ五億プードに相当するものがえられていた。現在は、林業中央委員会の資料によると、薪の産額は五〇%をこえていない。燃料の点では、われわれの状態は、ご覧のとおり、危急をつげている。

第二の問題、――それは冶金業である。わが国の鉄鉱、銑鉄、および完製品のほとんど唯一の資源地であったし、現にそうであるのは、ドネツ―クリヴォイローグ鉱山地帯である。一九一六年には一ヵ月に銑鉄一千六百万プード以上の生産があった。ドネツ炭田地区では当時六五以上の熔鉱炉がうごいていた。現在は六五のうち一つとしてうごいているものはない。一九一六年には、わが冶金工場から一ヵ月に一千四百万プードほどの半製品がつくられていた。今は五%以下である。一九一六年には一ヵ月に約一千二百万プードの完製品がつくられていた。今は二―三%である。冶金業でも、事態は非常に悪いわけである。

(298)

第三の問題、――それは穀物である。工業を復興するためには、労働者をたべさせなければならない。穀物不足、――これは主要な欠陥であり、わが工業がまひしている主要な原因である。戦前には連邦の領域内で、われわれは約五十億プードの穀粒をあつめた。そのうち五億プードを外国に輸出していた。残りはすべて国内需要にふりむけられた。一九一四年、すなわち戦争がはじまったときでさえ、国境閉鎖の状態のもとで十ヵ月間に約三億プードの穀物を輸出することができた。そののち輸出は三千万プードに低下した。

こうしたことはみな余分があり、また余分がなければならないことをものがたっている。工業の高揚のためになくてはならない穀物を手にいれ、穀物予備をつくり出す客観的な可能性があるかどうかという問題を提起するなら、それは無条件にあるとこたえることができるのは明らかである。わが同志たちが声高くさけんでいる三億

プードの穀物予備をあつめるということは、われわれにとって、客観的に見て、まったく可能なことである。すべての問題は、事態に即応できる機構をつくり、農民の気持を考慮し、忍耐と熟練で武装し、言葉を実行にかえる、経済的能力をもった、必要な勢力をこの仕事につぎこむことにある。この問題については、ウクライナでのわれわれの実例を引用させてもらいたい。ウクライナでは去年の収穫でほぼ六億プードの穀物がたくわえられたと算定されたのは、それほどまえのことではない。いくらかの努力をはらえば、この六億は獲得しえたにちがいない。だが、わが食糧諸機関は、一億六千プード以下の割当徴発を告示することをきめ、そのさい三月までに約四千万プードをあつめるのに成功することがきめられた。だが、これを遂行することに失敗した。たがのゆるんだ、わが諸機関のもとで、マフノ軍が文字どおり食糧関係の仂き手狩りをやっている状況のもとで、二、三の地方で富農の暴動がおこっている状況のもとで、われわれは四千万プードではなく、全部で約二百万プードをあつめることに成功した。

つぎの問題は砂糖の問題である。一九一六年には一億千五百万プードの砂糖が生産された。需要は一億プードであった。だが、げんざいわれわれは、わずか約三百万プードしかもっていない。

戦争によって破壊された、わが国民経済の状態は、げんざい以上のようである。

連邦のこのような経済状態は、当然に、「すべてを国民経済のために」というスローガンをかかげることを、われわれによぎなくさせている。

このスローガンはなにを意味しているか。それは要するに、いっさいのわが煽動活動と建設活動は、新しい経済的な基調で再建されるということである。いまわれわれは、労仂者のなかから、国民に崩壊と斗争することを

おしえて、新しい経済を建設する経済上の下士官と将校とを登用しなければならない。崩壊と斗争する過程で、はじめて新しい建設が可能となる、だが、そのためには労仂の将校を育成しなければならない。去年われわれが部隊のあいだの競争を組織したとすれば、今は企業、工場、鉄道、炭鉱の勤労者たちも、いっしょになっておなじことをしなければならない。労仂者だけでなく農民その他の勤労者をも、この仕事にひきいれなければならないことは、明らかである。

(300)

さらに、以上のべたことは別としても、地方経済諸機関、とくに州および地区の機関にたいして、工業の復興事業において、今までそうであったよりも、より大きな権利と独自性をあたえることも、強調しなければならない。今までは「中枢部」(七八)が、しかも「中枢部」だけが仕事を指導していた。今はイニシアティヴを——それなしには経済を修復することはむずかしい——発揮する可能性を地方にあたえ、地方に特別の注意をむけなければならない。

最後に、国防会議が、軍事活動の軌道から経済の発展という軌道にうつした諸機関を支持することに注意をはらわなければならない。私は労仂軍評議会のことを言っているのである。経験のしめすところでは、軍の全部隊を機械的に経済活動にうつしてしまうのは、かならずしも目的にかなったことではない。このばあいには、後方の労仂者の活動と予備部隊の活動との、ある組合せを組織しなければならない。

ウクライナの労仂軍のことにうつると、私は、多くの理由から、労仂軍が仕事に手をつけたのは、つい最近のことだということを強調しなければならない。第一の任務は、現状を明らかにすること、そして、そのあとで実際的な措置をとる必要がある、という問題を提起することであった。明らかにしえたことは、——まずい状況を

しめしている。とくに困難な状態にあるのは、鉄道運輸である。西ウクライナの四つの鉄道——西南部線、南部線、ドネツ線、それにエカテリナ線——では機関車の数はすくなくない、だが、そのうち七〇％が故障していることを強調しなければならない。これは、ハリコフ—モスクワ間をまいにち発着していた四五列車のかわりに、今ではわずか四—五列車、最大のばあいでも八列車しか発着さすことができないだろうということを意味する。(301)

ウクライナの状態にかんする、以上すべての報道をうけとった労仂軍評議会は、一連の実際的な措置をとったが、そのうち、つぎのものをあげなければならない。

第一に、石炭工業では、石炭の運搬と輸送のために農村の住民をも労仂軍として動員し、労仂の軍隊化をおこなうこと。

第二に、労仂者のうちの新しい勢力を工業にひきいれること、というのは革命前にはたらいていた二五万の労仂者のうち、八万がのこっていることを、われわれは知っているからである。そして、この新しい勢力をひきいれるためには、食糧をととのえることが必要である。この方向にむかって、われわれは一連の措置をとっている。

第三に、石炭工業の指導部として中央管理局をつくり、それに付属した衛生局、連絡部、供給部、軍事裁判所、政治部をつくること。

こうしたことは、みなウクライナの工業と運輸を正しくたすけおこし、人、食糧、医療、政治的仂き手の供給を規則ただしくするために、また、がりがり亡者や労仂をのがれようとするものがをドネツ炭田から他へ逃亡するのをこらしめるために、また工業と運輸における労仂規律をうえつけるために必要である。こんご共産党ドネツ県委員会の議長は、ロシア共産党中央委員会とウクライナ中央委員会との同意によって、石炭工業の政治部長

を兼任する。党の勢力を配分するいっさいの仕事、これらの労仂者を一地区から他の地区へうつす仕事、石炭工業に課せられたことについての仕事は、政治部の管理となるであろう。

だいたい以上が、戦争によって破壊された連邦の国民経済の復興をはじめるために、また最大限の発展の道にそって、国民経済をおしすすめるために実行しなければならない方策である。

報告をおわるにあたって、私はロシア共産党中央委員会の経済建設にかんするテーゼ(七九)に、諸君の注意をうながそう。

三　経済政策にかんする報告の結語

三月二十日

代議員のうちのだれも、中央委員会のテーゼに他のなんらかの決議を対置させようとしたものはなかったことを確認しなければならない。ハリコフ協議会の諸決議は、第七回ソヴェト大会(八〇)の決議の補足にすぎないもので、経済建設の当面の諸任務にかんする、中央委員会のテーゼのなかでふれられている、多くの問題には言及してはいない。

私がすでにのべたように、基本的な任務は、げんざい石炭工業の復興である。このことを考慮してウクライナ労仂軍評議会は、石炭工業における規律正しい供給をととのえ、かつ規律をうえつける能力のある管理組織に、主要な注意をはらっている。

諸君のご存知のように、連邦を通じてわが工業はいま、一年半まえに赤軍が経験した、あのゆるみとパルチザン主義の時期を経験している。とうじ党中央部は、緊張せよ、規律をうえつけよ、パルチザン部隊を正規部隊にせよ、という叫びをなげつけた。われわれはいまおなじことをやらなければならない。この崩壊した工業を整備し、かつ組織しなければならない、でなければ、われわれは崩壊からぬけ出ることはできない。

ある同志はここで、労仂者は軍隊化をおそれない、なぜなら秩序のないことは、すぐれた労仂者をうんざりさせたからだと言った。これはまったく正しい。だらしなさは労仂者をうんざりさせているから、彼らは工業に秩序をもたらして、労仂規律をうえつける力のある指導をよろこんでうけいれるであろう。

四　協議会の閉会の辞

三月二十三日

同志**スターリン**は、その結語のなかで、全ウクライナ協議会の活動を総決算している。彼は、いろいろの問題について採択された諸決定に評価をくだし、農村活動と経済建設活動との問題にかんして採択された諸決議を、くわしくのべている。あとのほうの問題は、ロシア共産党第九回大会において最後的に解決されるであろう。(八二)

――われわれの政策のもっとも重要な問題――農村活動の問題は、私の考えでは正しく解決されている。私の考えるところでは、ここウクライナで、われわれは一年半ほどまえ、ヴォルガ沿岸地方やロシアの中央の多くの

場所が連続する蜂起のなかにあったとき、ロシアが経験したのとおなじ農村の発展段階を経験している。この時期は、ロシアでそうであったように、諸君のもとでも過去のものとなるであろう。
われわれの農村活動では貧農に立脚しなければならない。中農は、ソヴェト政権が強力であることを確信したときに、はじめて、われわれのほうにうつってくるであろう。このあとで、はじめて中農はわれわれのほうにうつってくるであろう。
この命題から出発すれば、諸君が採択した決議は、無条件に正しいということができる。
協議会によって決定された、もう一つの重要な問題がある、――それはボロチビスト(304)のわが党への合同の問題である。ボロチビスト――これは農村の養分でやしなわれた党である。いまボロチビストが、わが党と合同したのちには、われわれはプロレタリアートと貧農との同盟を完全に実現することができるであろう。諸君自身がご存じのように、この同盟は、わが連邦共和国の威力と勢力の基礎である。
協議会の成果の多い活動をいわわせていただきたい。
これで協議会を閉会とする。（拍手）

ウクライナ労仂軍本部書記局の覚え書およびハリコフの新聞『コムニスト』一九二〇年三月十八、二十一、二十三、二十四日付、第六二、六四、六五、六六号の紙上報告によって印刷

ロシア共産党の組織者および指導者としてのレーニン

マルクス主義者には二つのグループがある。二つともマルクス主義の旗のもとに活動していて、自分のことを「真に」マルクス主義的だと考えている。しかし、それにもかかわらず、それらはけっしておなじものではない。それどころか、それらのあいだにはきわめて深い淵がある。なぜなら彼らの活動方法は正反対だからである。

第一のグループは、ふつうマルクス主義の本質を外面的に承認して、それをおごそかに宣言するにとどまっている。このグループは、マルクス主義の本質を探究することができないか、あるいは、それをのぞまないで、またマルクス主義の本質を実現することができないか、あるいは、それをのぞまないで、マルクス主義のいきいきとした、革命的な命題を、生気のない、なにごともかたらない定式にかえてしまっている。このグループが自分の行動の基礎とするものは、経験でも実践的活動の考慮でもなく、マルクスからの引用文である。このグループは指示や指令を、生きた現実の分析からくみとるのではなく、類推と歴史的対比からくみとる。言葉と行動の分離――これが、このグループの根本的な病弊である。ここからして、つねにこのグループをだまし、ばかにする運命にたいする永遠の不満と幻滅があらわれる。このグループの名まえは――(ロシアでは)メンシェヴィズムであり、

(306)

（ヨーロッパでは）日和見主義である。同志トィシュー（ヨギヘス）はロンドン大会の席上でつぎのように言って、このグループをきわめて鋭く特徴ずけた。このグループは、マルクス主義の見地にたっているのではなくて、そのうえに**ねそべって**いるのだ、と。

第二のグループは、これに反して、問題の重心を、マルクス主義の外面的承認から、その実行へ、その実現へとうつす。情勢に適合したマルクス主義実現の手段や方法を樹立し、情勢がかわると、これらの手段や方法をかえること――まさにそういうことに、このグループは主として自分の注意をむける。このグループは指令や指示を、歴史的類推や対比からくみとるのではなく、周囲の諸条件の研究からくみとる。このグループは活動するにあたって、引用文や格言に立脚せずに実践的経験に立脚し、自分の一つ一つの行動を経験にもとずいて点検し、自分のおかした誤りにまなび、新しい生活をきずきあげることを他の人たちにおしえる。このグループの活動のなかでは言葉が行動と分離せず、またマルクスの学説が、そのいきいきとした革命的な力を完全に保持しているのは、まさにこのことによるのである。マルクス主義者は世界を説明するだけにとどまることはできず、さらにすすんで世界を変革しなければならないというマルクスの言葉は、このグループにあてはまる。このグループの名まえは――ボリシェヴィズムであり、共産主義である。

このグループの組織者であり指導者であるものこそ、ヴェ・イ・レーニンである。

一　ロシア共産党の組織者としてのレーニン

(307)ロシアにおけるプロレタリア党の結成は、西欧に労仂者党が組織されたときの条件とはちがった、特殊の条件のもとでおこなわれた。西欧では、すなわちフランスやドイツでは、労仂者党は、労仂組合と党が合法的に存在するという条件のもとで、ブルジョア革命後の情勢のなかで、ブルジョア議会が存在していて、しかも権力にありついたブルジョアジーが、プロレタリアートと面とむかって対立しているときに、労仂組合のなかから発達したのに、——ロシアでは反対に、プロレタリア党の結成は、きわめて過酷な絶対主義のもとで、ブルジョア民主主義革命が予期されているときにおこなわれた。当時は、一方では、党組織は、労仂者階級をブルジョア革命のために利用しようと熱望していたブルジョア的な「合法マルクス主義」(八三)分子でみちみちており、他方では、優秀な党の仂き手がツァーリの憲兵隊によって党の隊列からひきさかれており、しかも自然成長的な革命運動の成長が、運動を専制政治の廃止へとみちびくことのできる革命家たちの、堅固な、結束した、かつ十分に秘密な戦斗部隊の存在を必要としていたときであった。

羊とやぎとを区別し、縁のない分子と一線を画して、経験ある革命家のカードルを各所に組織し、彼らに明確な綱領としっかりした戦術とをあたえ、最後に、これらのカードルを職業的革命家の単一の戦斗的な組織に、憲兵隊の襲撃をもちこたえるにたるほど秘密で、しかも、それと同時に必要なばあいには、大衆を斗争へみちびくにたるほど、大衆と結びついた組織に結集すること、ここに任務があった。

(308)マルクス主義の見地のうえに「ねそべっている」当のメンシェヴィキは、問題を簡単に解決した。すなわち西欧では、労仂者党は、労仂者階級の経済的状態の改善のためにたたかう、不偏不党の労仂組合から発生してきたのだから、ロシアでも、できるだけおなじことをしなければならない。つまり、さしあたっては、その場その場

での「雇い主と政府にたいする労仂者の経済斗争」にかぎるべきであって、全ロシア的な戦斗的組織をつくりだすべきではない。そして、それから……それから、もしもそのときまで労仂組合があらわれてこなければ、不偏不党の労仂者大会を召集して、それを党と宣言すべきである、というのである。

メンシェヴィキのこの「マルクス主義的」「計画」は、ロシアの諸条件にとっては空想的なものであったが、それにもかかわらず、それは党派性の思想を減退させ、党のカードルを壊滅させ、プロレタリアートにその党をあたえず、労仂者階級を自由主義者のえじきにするための、広範な煽動活動を予想するものであるということ、――そのことについては、メンシェヴィキは、おそらくはボリシェヴィキの多くのものも、当時はほとんど気がつかなかった。

ロシアのプロレタリアートとその党とにたいする、レーニンのきわめて偉大な功績は、彼が、メンシェヴィキ的な組織「計画」のいっさいの危険性を、その「計画」がようやく着手されたばかりのときに、また「計画」の立案者自身が、その輪郭をはっきりえがきだすのに苦心していたときにばくろし、そして、これをばくろしてメンシェヴィキの組織上の放漫にたいする激しい攻撃を開始し、実際活動のすべての注意をこの問題に集中したという点にある。なぜなら問題は、党の生存にかんすることであり、党の死活にかんすることであったからである。

党の勢力を結集する中心としての全ロシア的な政治新聞を組織すること、党の「正規部隊」としての確固たる党のカードルを各所に組織すること、これらのカードルを新聞を通じて一つのものにまとめ、かつ彼らをはっきりしきられた境界、明確な綱領、しっかりした戦術、統一された意志をもった、全ロシア的な戦斗的な党に結合すること、――まさにこのような計画を、レーニンはその有名な小册子『なにをなすべきか』、『一歩前進、二歩

(309)

後退』」のなかで展開したのである。この計画の真価は、それがロシアの現実に完全に適応し、かつ、すぐれた実際活動家たちの組織上の経験を、たくみに一般化したというところにあった。ロシアの実際活動家の大部分は、この計画の実現をめざす斗争のなかで、分裂にたじろぐことなく、決然としてレーニンのあとにしたがった。この計画の勝利は、世界にその比を見ないところの、団結し、きたえあげられた共産党の礎石をおいたのである。

しばしばわれわれの同志たちは（メンシェヴィキばかりではない！）、レーニンがあまりにも論争と分裂とをこのみ、妥協主義者やその他と非妥協的な戦いをしたといって、彼を非難した。うたがいもなく、そのころは論争や分裂がおこっていた。しかし、もしわが党が、そのなかから非プロレタリア的な日和見主義分子を追放しなかったなら、わが党は内面的な弱さとあいまいさとをまぬかれえなかったであろうし、また党は、党がいまもっている力と強さとをかちえることができなかったであろう、ということは理解するのに困難でない。ブルジョアジーの支配の時代には、プロレタリア党は、自分の陣列と労働者階級との内にいる日和見主義的、反革命的、反党的分子とたたかう度合に応じてのみ成長し、強固になりうる。「党は自分をきよめることによって強化される」（八四）と言ったラッサールは、正しかった。

非難者たちは、そのとうじ「統一」をほこっていたドイツの党を引合いに出すのをつねとした。しかし第一に、統一ならなんでも力の徴表であるわけではないし、第二に、シャイデマンおよびノスケとリープクネヒトおよびルクセンブルグとの「統一」（八五）が、まったく偽りで、仮装のものであることを理解するためには、三つの党に分裂した、かつてのドイツの党を、いま一見するだけで十分である。もしドイツの党の革命的分子が、その反革命的分子と適時にたもとをわかったならば、ドイツのプロレタリアートにとっては、そのほうがよかったのではは

なかろうか……。そうだ、党を反党的な反革命的分子との非妥協的な斗争の道にみちびいたレーニンは、千倍も正しかったのである。なぜなら、このような組織政策の結果としてはじめて、わが党は、自分のなかに内部的統一と、おどろくべき結束とをつくりだすことができたからである。そして、それらのものを持つことによって、わが党は、ケレンスキー下の七月危機からぶじにぬけ出し、十月蜂起をその双肩ににない、動揺することなくブレストの時期の危機にたえ、連合国にたいする勝利を組織し、最後に、かつて見られなかったような即応力をかちえ、そして、この即応力のおかげで、党はいつなんどきでも自分の隊列を建てなおし、また自分の陣列に混乱をひきおこすことなしに、何十万という党員をどんな大事業にも集結することができているのである。

二　ロシア共産党の指導者としてのレーニン

しかしロシア共産党の組織上の真価は、問題の一面をしめすものにすぎない。もし党の活動の政治的内容が、また党の綱領と戦術が、ロシアの現実に適応していなかったならば、また、もしそのスローガンが労仂者大衆をもえたたせず、革命運動を前進させなかったならば、党はこれほど早く成長し、強くなることはできなかったであろう。問題のこの側面へうつろう。

(311)　ロシアのブルジョア民主主義革命（一九〇五年）は、革命的変革の時代の西欧——たとえばフランスやドイツ——における条件とは、ちがった条件のもとで経過した。西欧における革命は、資本主義のマニュファクチュア時代と未発展の階級斗争という条件のもとで突発したが、当時プロレタリアートは力も弱く、数もすくなく、そ

の要求を組織することのできる自分自身の党をもたなかったのに、ブルジョアジーは、労仂者と農民に、自己にたいする信頼をおこさせ、彼らを貴族階級との戦いへみちびくのにたるほど革命的であった。これにたいして、——ロシアでは反対に、革命は、資本主義の機械制時代と発展した階級斗争という条件のもとではじまり（一九〇五年）、当時は、資本主義が結合させた、比較的数の多いロシアのプロレタリアートが、ブルジョアジーとすでにいくたびか戦いをやっていて、ブルジョアジーの党よりも結束した、自分の党をもっていたのに、ロシアのブルジョアジーは、おまけに政府の注文によって生活していたので、彼らはプロレタリアートの革命性にすっかりおどろいて、労仂者と農民に対抗して、政府および地主との同盟をさがしもとめていた。ロシア革命が満州の戦場での軍事的失敗の結果として爆発したという事実、——この事実は事件をおしすすめただけであって、問題の本質においては、なにもかえるものではなかった。

情勢は、プロレタリアートが革命の先頭にたち、自分のまわりに革命的農民を結集し、国の完全な民主主義化と自己の階級的利益の確保のために、ツァーリズムとブルジョアジーとにたいして、同時に決定的な戦いをおこなうことを要求していた。

しかしマルクス主義の見地のうえに「ねそべっている」あのメンシェヴィキは、問題を自己流に解決した。すなわちロシア革命はブルジョア革命であり、ブルジョア革命ではブルジョアジーの代表者が指導する（フランスおよびドイツの革命の「歴史」を見よ）のであるから、プロレタリアートはロシア革命の指導者であることはできず、指導権は（革命を裏ぎるであろう当の）ロシアのブルジョアジーにゆだねられなければならず、農民もまたブルジョアジーの監督にゆだねられなければならず、またプロレタリアートは最左翼の反対派の立場にとどま

るべきであるというのである。

そして悪質な自由主義者どもの、これらの月なみな繰返しが、「真の」マルクス主義の最後の言葉として、メンシェヴィキたちによって、ならべたてられていたのである！

ロシア革命にたいするレーニンのもっとも偉大な功績は、彼が、メンシェヴィキがやっている歴史的対比の無内容と、労仂者の事業をブルジョアジーのえじきにするところのメンシェヴィキ的な「革命の図式」のあらゆる危険性とを、根底までばくろしたことにある。ブルジョアジーの独裁ではなくて、プロレタリアートと農民との革命的＝民主主義的独裁、国会参加ならびに国会における組織活動ではなくて、ブルィギン国会のボイコットと武装蜂起、しかもなお国会が成立したあとでは「左翼ブロック」をつくるという構想、そしてカデット内閣と国会の反動的な「保護」とではなくて、国会外の斗争のために(八六)する国会壇上の利用、カデットとのブロックではなくて、反革命的勢力としてのカデット党にたいする斗争、――レーニンはその有名な小冊子、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』、『カデットの勝利と労仂者党の任務』のなかで、このような戦術的計画を展開したのである。

(313)

この計画の真価は、それが、ロシアにおける**ブルジョア民主主義革命**の時代のプロレタリアートの階級的要求をちょくせつ、かつ決定的に定式化することによって、社会主義革命への移行を容易にし、**プロレタリアートの**独裁の思想の萌芽を、そのなかにもっていたことにあった。ロシアの実際活動家の大多数は、この戦術的計画の実現をめざす斗争において、決然とためらわずにレーニンのあとにしたがった。この計画の勝利は、そのおかげで、わが党がいま世界帝国主義の土台をゆるがしている、あの革命的戦術の基礎をきずいたものである。諸事件

のその後の発展、四年間の帝国主義戦争と国民経済全体の動揺、二月革命とあの有名な二重権力、ブルジョア反革命の基地としての臨時政府と、生まれつつあるプロレタリア独裁の形態としてのペテルブルグ代表ソヴェト、十月革命と憲法制定議会の解散、ブルジョア議会制度の廃止とソヴェト共和国の宣言、帝国主義戦争の内乱への転化、口さきだけの「マルクス主義者」と共同した世界帝国主義のプロレタリア革命にたいする進撃、最後に、憲法制定議会にしがみつき、プロレタリアートによって海中にほうりこまれ、革命の波によって資本主義の岸にうちよせられたメンシェヴィキどものあわれな状態、――こうしたことは、みなレーニンが『二つの戦術』のなかで定式化した、革命的戦術の基礎の正しさを裏書きするものであった。このような遺産をその手にもっている党は、暗礁をおそれることなく、大胆に前方へこぎ出すことができた。

党の一つ一つのスローガンや指導者の一つ一つの言葉が、実際にてらして点検される、プロレタリア革命の現代には、プロレタリアートは自分の指導者に特別の要求をもち出す。歴史は、献身的で大胆ではあるが、理論においては弱いプロレタリアの指導者、あらしの時代の指導者、実際活動家的指導者を知っている。大衆はこのような指導者たちの名まえを、そんなに早くわすれはしない。たとえばドイツのラッサール、フランスのブランキが、それである。しかし全体としての運動は思い出だけで生きていくことはできない。運動には、はっきりした目的（綱領）と、しっかりした方針（戦術）が必要である。

また、べつの種類の指導者、すなわち理論においては強いが、組織や実践活動の仕事では弱い、平和時の指導

者というものもいる。そのような指導者たちは、プロレタリアートの上層だけで、それも、ただある時期まで人気があるにすぎない。指導者に革命的＝実践的スローガンが要求されるような革命時代がやってくるとともに、これらの理論家たちは、新しい人たちに場所をゆずって舞台から退場する。たとえばロシアのプレハーノフ、ドイツのカウツキーなどが、それである。

プロレタリア革命とプロレタリア党との指導者としての地位を堅持するためには、理論的な力と、プロレタリア運動の実践的＝組織的経験とを、一身のなかで結びつけることが必要である。ペ・アクセリロードは、彼がまだマルクス主義者であったころ、レーニンについて、レーニンは「しあわせにも、自分のなかにみごとな実践の経験と理論的教養と広い政治的視野とを統一している」と書いた（レーニンの小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』に書いたペ・アクセリロードの序文、(八七)を見よ）。「文化的」資本主義のイデオローグであるアクセリロード氏が、レーニンについてげんざいなにを言おうとするかは、推察に困難でない。しかしレーニンをまじかに知っていて、実際を客観的に見ることのできるわれわれは、この尊い資質がレーニンのなかに完全にたもたれていたことをうたがわない。とりわけこのことのなかに、レーニンが、しかも、まさに彼こそが、げんざい世界でもっとも力強い、もっともきたえられたプロレタリア党の指導者であるという事実の説明をさがしもとめなければならない。

『プラウダ』第八六号
一九二〇年四月二十三日
署名――イ・スターリン

ロシア共産党（ボ）モスクワ委員会のヴェ・イ・レーニン生誕五〇年記念集会での演説

一九二〇年四月二十三日

いろいろな演説や思い出がのべられたので、私にはお話することがあまりのこってない。私はまだだれもはなさなかった一つの特徴だけをのべてみたいとおもう。それは——同志レーニンの謙虚さと自分の誤りをみとめる彼の勇気のことである。

レーニンが、この巨人が、自分のおかした失敗を二度告白したことが、私にはおもいだされる。

第一のエピソードは、ヴィッテ国会のボイコットにかんする決定である。この決定はフィンランドのタンメルフォルスで、一九〇五年の十二月にひらかれたボリシェヴィキの全ロシア協議会でおこなわれた。〔八八〕そのとき、ヴィッテ国会をボイコットする問題が出されていた。同志レーニンと親密な人たち、——われわれ地方代議員がいろいろなあだ名をつけていた七人組は、イリイッチがボイコットに反対で、国会選挙に賛成していると断言していた。あとで明らかになったように、実際にもそうであった。だが討論がはじまり、ボイコット論者の地方代表、

ピーテル代表、モスクワ代表、シベリア代表、カフカーズ代表が攻撃をおこなった。そして、われわれの演説のおわりに、レーニンが演説をして、自分は選挙参加の支持者であったが、今では自分がまちがっていたことがわかるので、地方代議員に賛成するとのべたとき、われわれの驚きはどんなだったろう。われわれは深い感動をうけた。それは、電撃のような印象をあたえた。われわれは彼に拍手かっさいした。(317)

もう一つおなじようなエピソードがある。一九一七年の九月、ケレンスキーのもとであったが、民主主義会議が召集され、メンシェヴィキとエス・エルが新しい機関を——すなわちソヴェトから憲法制定議会への移行を準備するはずであった予備議会をつくったとき、このときに、われわれペトログラードの中央委員会では、民主主義会議を解散させないで、ソヴェトを強固にする道を前進し、ソヴェト大会を召集し、蜂起をはじめ、ソヴェト大会を国家権力機関と宣言することが決定された。当時ペトログラードのそとで地下にいたイリイッチは、中央委員会に同意しないで、この悪党（民主主義会議）は即刻解散させて、逮捕しなければならないと書いてよこした。

事はそう簡単ではないと、われわれにはおもわれた。なぜなら民主主義会議の二分の一、すくなくともその三分の一は、戦線の代議員からなっていること、逮捕と解散によってはわれわれは事を台なしにし、戦線との関係を悪化させるだけであることを知っていたからである。われわれの途上にある小さな谷や穴やくぼみは、みなわれわれ実際活動家には、いっそうよくわかっているように、われわれにはおもわれた。だが、イリイッチは偉大で、自分の途上にある穴も、くぼみも谷間も、おそれない、彼は危険をおそれないで、「立ちあがれ、目標に直進せよ」と言う。だが、われわれ実際活動家は、その当時そういう行動をとることは不利で、この障害物をさけ

てとおって、あとですすんで難局にあたる必要があると考えていた。だからイリイッチのあらゆる要求にもかかわらず、われわれは彼の言うことをきかずに、ソヴェトを強化する道をひきつづきすすんでいって、十月二十五日のソヴェト大会まで、成功をおさめた蜂起まで事態をもっていったのである。イリイッチはすでにその当時ペトログラードにいた。微笑しながら、われわれをずるそうに見ながら、彼は言った。「そうだ、君たちが、たぶん正しかったのだろう」と。(318)

このことは、ふたたび、われわれに深い感動をあたえた。

同志レーニンは、自分の誤りをみとめることをおそれなかった。

この謙虚と勇気とが、とくにわれわれの心をとらえたのである。(拍手)

論文集『ヴラヂーミル・イリイッチ・ウィリヤノフ＝レーニンの五〇年』にはじめて印刷

（319）

連合国の新たなロシア出兵

労農ロシアにたいする貴族的ポーランドの出兵が、本質からいって連合国の出兵であることは、うたがう余地がない。連合国が指導者であり、ポーランドが一員となっている国際連盟が、ポーランドのロシア出兵を明らかにみとめたという点だけが、問題なのではない。なによりも問題は、連合国の支持なしには、ポーランドはロシアにたいする攻撃を組織することはできなかったであろうという点、最初にフランスが、つづいてイギリスとアメリカも武器、被服、金銭、教官などで、手をつくしてポーランドの攻撃を支持しているという点にある。ポーランド問題にかんする連合国内部の意見の相違は、事態をかえるものではない。なぜなら意見の相違は、ポーランドをどのような形で支持するかということについてであって、一般に支持そのものについての意見の相違ではないからである。カーゾンと同志チチェリンとの外交文書のやりとりと、（八九）イギリスの新聞のおおげさな干渉反対論文もまた事態をかえるものではない。なぜなら、これらすべての大騒ぎは、ただ一つの目的、つまり、単純な政治家の目をくらまし、ロシアとの講和という文句で、連合国の組織した現実の武力干渉という悪事をおおいかくす、という目的をめざしているものだからである。

一　概　況

こんどの連合国の出兵は三回めの出兵である。

第一次出兵は、一九一九年春にくわだてられた。この出兵は共同出兵であった。つまりコルチャック、デニキン、ポーランド、ユデーニッチ、それにトゥルケスタンとアルハンゲリスタのイギリス＝ロシア混成部隊の共同攻撃を予定し、ここで出兵の重心は、コルチャックの地区にあった。

この時期には、一致団結した連合国は、公然の干渉という見地にたっていた。西欧の労仂運動が弱く、ソヴェト・ロシアの敵が多かったために、またロシアに勝利するという完全な確信から、連合国の親分どもは、むきだしで干渉するという、あつかましい政策を実行した。

この時期にはロシアは危機にひんしていた。なぜならロシアは穀物地方（シベリア、ウクライナ、北カフカーズ）や燃料（ドネツ炭田地方、グローズヌイ、バクー）からきりはなされ、六つの戦線でたたかうことをよぎなくされていたからである。連合国はこれを見て、勝利の前祝いをしていた。『タイムス』は太鼓をうちならしていた。

それにもかかわらず、ロシアはこの危機をきりぬけ、もっとも強力な敵コルチャックは落伍させられた。問題はロシアの後方、したがってまたロシアの軍隊も、敵の後方と軍隊よりも強固で、即応力に富んでいたという点にある。

(321) 連合国の第二次出兵は、一九一九年の秋にくわだてられた、この出兵もまた共同出兵であった。つまりデニキン、ポーランド、ユデーニッチ（コルチャックは計算外であった）の共同攻撃を予定していた。出兵の重心は、こんどは南方のデニキン地区にあった。

この時期に、連合国ははじめて内部的に対立しだして、そのあつかましい態度をやわらげはじめ、公然の干渉に反対しようとし、ロシアとの交渉をゆるすと宣言して、北部からの撤兵に手をつけた。西ヨーロッパにおける労仂運動の成長とコルチャックの敗北とは、明らかに連合国にたいして、今までの公然たる干渉政策を危険なものとしたのである。

ロシアは、この時期に、コルチャックにたいして勝利をえ、穀物地方の一つ（シベリア）をとりもどしたにもかかわらず、ふたたび危機にひんしていた。なぜなら重要な敵デニキンは、わが軍の弾薬、小銃、機関銃の主要補給地であるトゥーラの鼻さきにあったからである。それにもかかわらず、ふたたびロシアはぶじに危機を脱した。この原因はまえとおなじように、わが後方が、したがってまた、わが軍隊が強固さと即応力でまさっていた点にある。

連合国の第三次出兵は、まったく新たな情勢のもとにくりひろげられた。まずはじめに、これまでの出兵とちがって、この出兵は共同出兵ということはできない。なぜなら連合国の古い同盟者（コルチャック、デニキン、ユデーニッチ）が脱落しただけでなく、こっけいなペトリューラとそのこっけいな「軍隊」をべつとすれば、新しい同盟者（こういうものがあるなら）は、まだくわわっていなかったからである。ポーランドは、とうぶん重要な戦斗的同盟者もなく、ただひとりでロシアに対抗していた。

さらに評判だおれの封鎖は精神的に、また実際にうちやぶられていただけでなく、形式的にもうちやぶられていた。連合国はロシアとの外交関係が必要だという事実に妥協し、西欧におけるロシアの公式代表者をうけいれざるをえなくなった。第三インタナショナルのスローガンをかかげたヨーロッパ諸国の大衆的革命運動と東方におけるソヴェト軍の新たな成功は、連合国内部の分裂をつよめ、中立国や辺境地方におけるロシアの威信をたかめ、ロシアを孤立させようとする連合国の政策を空想的なものとした。ポーランドの「生まれつきの」同盟者であるエストニアは中立化された。ポーランドのきのうまでの戦斗的同盟者であったラトヴィアとリトワニアは、きょうはロシアと講和交渉をやっている。フィンランドについても、おなじことが言える。

最後に、連合国の第三次出兵のときまでに、ロシアの国内情勢が根本的に好転したことを、あげなければならない。ロシアは穀物地方と燃料地方（シベリア、ウクライナ、北カフカーズ、ドネツ炭田地方、グローズヌィ、バクー）に通ずる道をひらいただけでなく、六つの戦線を二つにへらし、こうして軍隊を西部に集中することができるようになった。

以上のべたことに、つぎのきわめて重要な事実、すなわちポーランドは、ロシアの講和申入れを拒否した攻撃するがわであり、ロシアは防衛するがわであるということ、このことからしてロシアがわに、はかりしれないほど大きな精神的プラスが生まれている、ということをつけくわえなければならない。

これらいっさいの事情は、新たな情勢、つまり連合国がやった、これまでの第一次および第二次ロシア出兵の時期には生じたことのなかった、ロシアが勝利するための新しい機会をつくりだしている。

ポーランドの成功を評価するにあたって、西欧の帝国主義新聞がしめしている、悲観的＝懐疑的な調子は、主

として、このことによって説明されなければならない。

二　後方。攻撃地区

しっかりした後方をもたないで勝利（いうまでもなく長期、かつ堅固な勝利のことであるが）をかちとることのできる軍隊は、世界に一つもない。後方は戦線にとっては第一の問題である。なぜなら後方、しかも、ただ後方基地だけがあらゆる種類の食糧だけではなく、人間——戦斗要員、士気、それに思想——を戦線に補給するものだからである。不安定な後方は、まして敵意をもっている後方は、どんなにすぐれた、どんなに団結した軍隊をも弱くて、もろい集合体にかえてしまう。コルチャックやデニキンの弱点は、彼らが「自分」の後方をもっていなかったこと、真正ロシア的な、大強国的欲求にみちみちていた彼らは、そのような欲求に敵意をもっていた非ロシア的な分子を、いちじるしく犠牲にして戦線をつくりあげ、これに補給し、補充することをよぎなくされ、彼らの軍隊にとって縁が薄いとわかっている諸地区で、作戦することをよぎなくされたという点であった。内部的結合、民族的結合のない、まして階級的結合のない軍隊が、ソヴェト軍からの強い一撃をうけてくずれさったのは、当然である。

この点でポーランド軍の後方は、コルチャックやデニキンの後方とはかなりちがい、ポーランドにとってもっと有利である。コルチャックやデニキンの後方とはちがって、ポーランド軍の後方は、一様で民族的に結合している。ここからその統一と強固さが生まれる。その支配的な気分——「祖国感」——は、無数の糸でポーランド

(324)

戦線につたわり、部隊のなかに民族的結合と不屈さをつくりだしている。ここからポーランド軍の堅忍不抜が生まれる。もちろんポーランドの後方は、階級的に一様ではない（また一様ではありえない！）が、階級衝突は、民族的統一感情をやぶり、階級的に異種の戦線にたいして矛盾を伝染さすほどの力には、まだたっしていなかった。もしポーランド軍隊が、とくにポーランド本土地区で行動するならば、うたがいもなく、それとたたかうのは困難であろう。

だがポーランドは、自国内の地区だけに限定することをこのまず、軍隊をさらに前進させ、リトワニアや白ロシアを征服し、ロシアやウクライナの心臓部に侵入している。このような情勢は事態を根本的にかえ、ポーランド軍の堅固さに非常な不利をもたらしている。

ポーランドの国境をこえて前進し、ポーランドに接した諸地区にふかく侵入したポーランド軍は、その民族的な後方から遠ざかり、これとのつながりをよわめ、自分らにとって無縁な、しかも大部分は敵意をいだいている民族的環境のなかにおちこんでいる。さらに悪いことがある。ポーランドに接している諸地区（白ロシア、リトワニア、ロシア、ウクライナ）の住民の大部分が、ポーランドの地主たちの抑圧をうけている非ポーランド人の農民で、これらの農民はポーランド軍の攻撃を、ポーランド貴族（パン）の権力獲得のための戦争、抑圧された非ポーランド人農民にむけられた戦争だと考えているという事情のために、この敵意はいっそう根ぶかいものとなっている。「ポーランド貴族をたおせ！」というソヴェト軍のスローガンが、以上の諸地区の住民の大多数のあいだで強烈な反響をよび、これらの地区の農民がソヴェト軍を地主のきずなからの解放者としてむかえ、彼らがソヴェト軍に期待をかけ、好機がくるやいなや蜂起し、ポーランド軍に後方から一撃をくわえていることは、もともと

(325)

このことによるのである。われわれの軍事上や政治上のあらゆる仂き手によって確認された、ソヴェト軍のなかの、比類のない士気の高揚は、このことによって説明しなければならない。
すべてこうしたことは、ポーランド軍の内部に不信と動揺の空気をつくり出さずにはおかないし、軍隊の堅忍不抜の精神、自分の事業は正しいという確信、勝利への確信をうちやぶらずにはおかないし、ポーランド軍の民族的結合を、肯定的な要因から否定的な要因にかえずにはおかない。
そこで、ポーランド軍が前進すればするほど（一般に、前進するとして）、ポーランド軍出兵のこうした否定的な面は、ますます強く出てくるであろう。
ポーランドは、このような条件のもとで、強力な、長期にわたる勝利を約束する大攻撃を展開することができるだろうか。
ポーランド軍はこのような条件のもとでは、みずからの後方からきりはなされたドイツの軍隊が、一九一八年にウクライナでおちいったとおなじような状態に、おちこみはしないだろうか。
ここで、われわれは攻撃地区の問題をとりあげよう。戦争一般、とくに国内戦では、成功は、決定的勝利は、攻撃地区をうまくえらぶこと、敵に主要打撃をあたえ、これをさらに展開しようとする地区をうまくえらぶことに、かかっているばあいがすくなくない。デニキンの重大な誤りの一つは、彼がドネツ炭田地方―ハリコフ―ヴォローネジ―クールスクの線、すなわちデニキンにとっては、たよりにならないとわかっている地区、デニキンに敵意をもっており、デニキンが強固な後方も、軍隊を前進させるための有利な状態も、つくりだすことができなかった地区を、主要な攻撃地区としてえらんだという点にある。デニキン戦線におけるソヴェト軍の成功は、

(326)

とりわけソヴェト軍司令部が、主要攻撃を、ツァリーツィン地区（不利な地区）から、ドネッ炭田地区（大いに有利な地区）すなわち住民がソヴェト軍を熱狂してむかえ、もっとも容易にデニキン戦線をうちやぶり、これを二分し、さらにそこからロストフまで前進することができた地区へ、適時にうつしたことによって説明される。

古い軍人が見のがしやすいこの要因は、国内戦においては、しばしば決定的意義をもつものである。

ポーランドのやりくちはこの点、つまり主要攻撃地区の点では、まるでなっていないと言わざるをえない。さきにのべた理由から、ポーランドに接した地区は一つも、攻撃地区という意味でも、この攻撃をいっそう展開させるという意味でも、ポーランド軍にとって有利とはみとめられない、という点に問題がある。つまりポーランド軍がどこへむかって前進しようとも、いたるところで、ソヴェト軍がポーランドの地主から解放してくれるのをまちのぞんでいるウクライナ、ロシア、白ロシアの農夫たちの反抗に出あうであろう、という点である。

これに反してソヴェト軍の状態は、この点ではまったく有利である。つまりソヴェト軍にとっては、すべての地区が、いわば「しっくりして」いる。というのはソヴェト軍は、前進することによってポーランド貴族の権力を強化せずに、これを廃止し、農民を借金奴隷から解放しているからである。

三　見　通　し

ポーランドは今のところ一国でロシアとたたかっている。だがポーランドがひとりぼっちでいるだろうと考えるのは、子供じみたことであろう。われわれがここで念頭においているのは、うたがいもなく連合国がポーラン

ドにあたえている全面的支持だけでなく、ポーランドの戦斗的な同盟者のことである。そして、この同盟者は一部は、すでに連合国によって見つけ出されている（たとえばデニキン軍の生き残り）か、あるいは一部は、十中八、九まで確実に、ヨーロッパ「文明」のために見つけ出されるであろう。ポーランドの攻撃が、ロシア代表がはいるのをゆるされなかったサン・レモ会議(九〇)のときにはじまったのも偶然ではない。またルーマニアが、ロシアとの講和条約の問題をにぎりつぶしたのも偶然でない……。そのうえ一見したところ、冒険ともおもわれるポーランドの攻撃は、おそらく実際には、しだいに実現されつつある、大きくしくまれた共同出兵計画を予定するものであろう。

それでもなお連合国が、ロシアにたいする第三次出兵を組織して、これに勝利することを期待しているなら、彼らはあてがはずれるだろうと言わなければならない。なぜなら一九二〇年には、ロシアの敗北する機会は、一九一九年よりもすくない、しかも、ずっとすくないからである。

われわれはさきに、ロシアが勝利をうる機会についてのべ、これらの機会は多くなっているし、また、ますます多くなるだろうとのべた。だが、このことはもちろん、われわれがそれによって、すでにポケットのなかに勝利をいれているということではない。さきにあげた勝利の機会は、他の条件がおなじばあいに、はじめて現実的意義をもちうる、すなわちわれわれが、デニキンの攻撃にさいして以前のように、今もまた全力をあげ、わが軍が確実に規則正しく補給をうけ、補充され、わが煽動家たちが赤軍兵士や、それをとりまいている住民を三倍ものエネルギーをもって啓発し、われわれの後方が、全力をあげ、あらゆる手段をつくして汚物から身をきよめ、強化するという条件のもとで、はじめて現実的意義をもちうるのである。

(328)

このような条件のあるばあいに、はじめて勝利は保障されたものと考えられる。

『プラウダ』第一一一号および一一二号
一九二〇年五月二十五日および二十六日
署名——イ・スターリン

西南戦線の状況について

ウクライナ・ロスタ通信記者との会談

共和国革命軍事委員、同志**イ・ヴェ・スターリン**は三日ハリコフにかえってきた。

同志**スターリン**は、約三週間戦線に滞在していた。そのさい赤軍騎兵隊の赫々たるポーランド戦線突破で開始された赤軍の攻撃作戦がはじまり、しだいに展開された。ウクライナ・ロスタ通信記者との会談で、同志**スターリン**はつぎのようにつたえた。

突　破

――六月はじめのポーランド戦線における同志ブヂョンヌィ騎兵隊の作戦についてかたるとき、多くのものはそれを――この敵戦線の突破を――、昨年のマモントフの騎兵隊の挺進と比較する。だが、この類比は完全にまちがっている。マモントフの作戦は、デニキン軍の総攻撃作戦とは無関係な、挿話的な、いわばパルチザン的な性格のもので

ある。

ところがブヂョンヌィ騎兵隊の突破は、赤軍の攻撃作戦の全体の鎖のなかの一環である。

わが騎兵隊の突破は六月五日に開始された。この日の朝、赤軍騎兵隊は一団となって第二ポーランド軍に打撃(330)をあたえ、敵戦線を突破し、挺進してベルヂチェフ地区を通過し、六月七日の朝にはジトーミルを占領した。

ジトーミルの占領と戦利品の詳細については、すでに新聞で報道ずみであるから、これについてはのべないで、ただ二、三の特徴を指摘しよう。騎兵隊の革命軍事委員会は、戦線司令部につぎのことを報告した。「ポーランド軍は、わが隊をまったく軽視している。われわれは、騎兵隊は尊重すべきものだということをポーランド軍に証明することが自分の義務だと考える。」また突破のあとで、同志ブヂョンヌィは、われわれにつぎのように書いている。「貴族(ペン)どもは、わが騎兵隊を尊敬するようになった。われわれのまえにある道をはききよめ、ひっくりかえしあいながら、にげている」と。

突破の成果

突破の成果は、つぎのとおりである。

わが騎兵隊に突破されたポーランド第二軍は、戦列からおとされてしまった。――それは捕虜千人以上、死傷者約八千という損害をこうむった。

私は後者の数字を二、三の典拠によって検討した、それは真実に近い数字である。そのうえポーランド軍は、降伏することを絶対に拒否し、わが騎兵隊は文字どおり自分の進路をきりひらかなければならなかったから、な

(331)

おさそうである。

これが第一の成果である。

第二の成果。ポーランド第三軍（キーエフ地区）は、自分の後方からきりはなされ、包囲の危険にひんしていることに気がついた。このためにキーエフ―コロステニ方面への総退却がはじまった。

第三の成果。ポーランド第六軍（カーメネツ・ポドリスク地区）は、その左翼の支柱をうしない、恐怖のあまりドニェストル河においつめられて、全員後退をはじめた。

第四の成果。突破の瞬間から、全戦線にわたる、わがほうの猛烈な総攻撃がはじめられた。

ポーランド第三軍の運命

ポーランド第三軍の運命の問題は、まだだれにでも明らかになっているというわけではないから、私はこの問題をさらにくわしく見てみよう。

基地からきりはなされ、連絡をうしなったポーランド第三軍は、ひとりのこらず捕虜になるという危険におちいっていることに気がついた。このために、彼らは輜重行李をやき、弾薬庫を爆破し、武器を破壊しだした。はじめ整然と退却しようとこころみて失敗してからは、第三軍は逃走（算をみだしての逃走）せざるをえなくなった。

軍隊の三分の一（第三軍は全部で約二万の戦斗員をもっていた）は、捕虜になり、あるいは殺された。残りの三分の一は（それ以上ではないとしても）、武器をなげだし、沼沢地や森林ににげこみ、――四散した。その残

りの三分の一だけが、さらには、もっと少数のものだけが、コロステニをとおってのがれ出ることができた。このさいポーランド軍が、シェペトフカーサルヌィをへて、適時に新鋭部隊の援助をあたえるのがまにあわなかったならば、第三軍のこの部隊もまた捕虜になるか、森林に四散したであろうということは、うたがいない。いずれにせよポーランド第三軍は、存在しないと考えるべきである。生きのびたその残りの者も、大補修を必要としている。

ポーランド第三軍の粉砕を特徴ずけるためには、つぎのこと、すなわちジトーミル街道はいたるところで、半焼けの各種行李、自動車のためにふさがれ、その数は、通信隊長の報告によれば四千にたっしている、ということを言わなければならない。火砲七〇門、機関銃二五〇挺以上、総数不明の大量の小銃弾薬が、われわれの捕獲するところとなった。

わが戦利品は、以上のとおりである。

戦線の状況

戦線の現状は、つぎのようにえがくことができる。すなわちポーランド第六軍は退却しており、第二軍は姿をかえてしまい、第三軍は事実上存在せず、西部戦線や遠くの後方からもってきた新しいポーランド部隊が、それにかわっている。

赤軍は、オーヴルチーコロステニージトーミルーベルヂチェフーカザチンーカリーノフカーヴィンニツァージメーリンカの線をこえ、全戦線にわたって攻撃中である。

結論

だが、わが戦線で、ポーランド軍をもうかたずけてしまったと考えるとすれば、それは誤りであろう。われわれはポーランド軍だけとではなく、ドイツ、オーストリア、ハンガリア、ルーマニアのいっさいの反動勢力を動員し、あらゆる種類の品々をポーランド軍に補給している全連合国とたたかっているのである。そのほかポーランド軍には、もうノヴォグラードーヴォルィンスクへひっぱってきている予備軍があり、その行動が、うたがいもなく、この数日のうちにあらわれるだろう、ということをわすれてはならない。

また大規模な分解はまだポーランド軍にはおよんでいないことも、記憶しておかなければならない。こんごもまだ戦斗、しかも激しい戦斗があるだろう、ということはうたがいない。

だから私は、二、三の同志に見られた自慢や、事業にとって有害なうぬぼれは、よくないとおもう。彼らのなかのあるものは、戦線での勝利に満足しないで、「ワルシャワへの進軍」をさけび、また他のものは、敵の攻撃からわが共和国を防衛することに満足しないで、「赤いソヴェト・ワルシャワ」ではじめて和解できると、得々として宣言している。

私は、このような自慢やうぬぼれは、ソヴェト政府の政策にも、戦線における敵勢力の状態にも、まったくふさわしくないものだ、ということを証明はしないであろう。

後方と戦線で全力をふるうことなしには、われわれは勝利者とはなりえないことを、私はきっぱりと宣言しなければならない。これなしには、われわれは西欧からの敵にうちかつことはできない。

「青天の霹靂」のようにあらわれ、おそるべき規模のものとなったヴランゲリ軍の攻撃が、このことをとくに強調している。

クリミア戦線

ヴランゲリの攻撃が、ポーランド軍の困難な状態を緩和する目的で、連合国によって命じられたものであることは、うたがいをいれない。同志チチェリンとカーゾンとのあいだにとりかわされた文書が、ヴランゲリと連合国のクリミアからの攻撃準備活動を、平和という文句でおおいかくそうとする以外の、他の意味をももちうると信じることができるのは、単純な政治家だけである。

ヴランゲリはまだ準備がととのっていなかった。そこで、このために（ただこのためにのみ！）「情けぶかい」カーゾンは、ヴランゲリ部隊をあわれみ、その生命をつなぐことを、ソヴェト・ロシアに要請したのである。

連合国は明らかに、赤軍がポーランド軍をやっつけて前進するときに、ヴランゲリがわが軍の背後に出て、ソヴェト・ロシアのあらゆる計画をうちやぶることを、あてにしていた。

ヴランゲリの攻撃が、ポーランド軍の状態を非常に楽なものにしたことはうたがいないが、ヴランゲリが、わが西部軍の背後を突破することに成功するだろう、と考える根拠はほとんどない。

いずれにしても、ヴランゲリの攻撃力とその影響力は、近い将来にしめされるであろう。

『コムニスト』（ハリコフ）第一四〇号
一九二〇年六月二十四日

(335)

ヴェ・イ・レーニンへの電報

六月十日、クリミア戦線でわが軍の捕虜となった、戦斗的なレヴィーシン将軍は、私のまえでつぎのように供述した。（イ）ヴランゲリ軍は被服、火砲、小銃、タンク、軍刀を、おもにイギリス軍から、ついでフランス軍から入手している。（ロ）イギリスの大型艦隊とフランスの小型艦隊は、海上からヴランゲリを援助している。（ハ）ヴランゲリは燃料（液体燃料）をバッームから入手している（つまりバクーは、バッームに燃料を売るかもしれないチフリスに、燃料をひきわたすべきではない）。（ニ）グルジアによって抑留され、われわれにひきわたされるはずのエルデリ将軍は、五月にはすでにクリミアにいた（つまりグルジアは、われわれをわなにかけ、ごまかそうとしている）。

イギリスとフランスがヴランゲリを援助しているということについてのレヴィーシンの供述は、チチェリンのための資料として、速記のうえ、彼の署名をつけてあなたに送付されるであろう。

スターリン

一九二〇年六月二十五日

『プラウダ』第三一三号にはじめて印刷
一九三五年十一月十四日

ポーランド戦線の状況について

『プラウダ』記者との会談

さいきん南西部戦線地区から到着した同志**スターリン**は、本紙記者との会談で、つぎのようにかたった。

一　五月―六月

最近の二ヵ月、五月と六月とは、二つのまったくことなった戦線の状況をしめしている。

五月は、もっぱらポーランド軍が成功をおさめた月である。ポーランド軍は、その右翼で、キーエフ―ジメーリンカの線をこえて進出するのに成功し、オデッサをおびやかした。左翼では、モローデチノ―ミンスクをめざすわが軍の攻撃作戦を打破するのに成功した。中央ではポーランド軍は、モズィリを確保し、レチッツァを占領して、ゴーメリをおびやかした。

これに反して六月は、ポーランド軍の五月の成功が、急速に、決定的に一掃された月である。ポーランド軍のウクライナ進出はすでに打破された。ポーランドは、キーエフからおいはらわれただけでなく、ロヴノ―プロス

クーロフーモギリョーフの線の向こうに撃退されたからである。ポーランド軍のゴーメリ方面への進出もまた打破された。ポーランド軍はモズィリの向こうに撃退されたからである。ポーランド新聞の反響から見て、もっとも手ごわいポーランド軍の左翼についていえば、さいきん数日間にこの地区でしめされた、モローデチノをめざすわが軍の強烈な打撃は、この地区でもポーランド軍が後退するであろうということに、疑問の余地をのこさないものと言わねばならない。

七月は、戦線でロシアに有利な決定的転換がおこなわれ、ソヴェト軍のほうが明らかに優勢となる光景を展開している。

二　ジトーミルの突破

わが騎兵のジトーミル地区突破が、戦線における転換に決定的役割を演じたことは、うたがいをいれない。多くのものは、この突破をマモントフの突破および挺進と比較し、両者をおなじものと見ている。だが、それは正しくない。マモントフの突破は、デニキンの攻撃作成とちょくせつ関係のない挿話的な性格をもっていた。これに反して、同志ブヂョンヌィの突破は、わが攻撃作戦の鎖のうちの欠くことのできない一環をなしていて、敵の後方を破壊するだけでなく、一定の戦略的任務をちょくせつ遂行するという目的をもっている。

この突破は、六月五日の未明にはじまった。この日、わが騎兵部隊は、一団に密集し、この密集部隊の中心に車輛をあつめて、ポペーリニャーカザチン地区の敵の配備を突破し、挺進してベルヂチェフ地区を通過し、六月七日ジトーミルを占領した。ポーランド軍の死にものぐるいの抵抗にあったため、わが騎兵隊は、文字どおり血

(338)

路をきりひらいてすすまねばならなかったが、その結果ポーランド軍は、騎兵隊革命軍事会議の証言によれば、銃弾とサーベルによる死傷者、すくなくも八千をのこして敗退したのであった。

三　突破の成果

ジトーミルの突破まで、ポーランド軍は、デニキンとちがって、戦線の重要拠点をざんごうと鉄条網で一面におおい、機動戦とざんごう戦をたくみにくみあわせていた。そうすることによって、彼らはわが軍の進出をいちじるしく困難にしていた。ジトーミルの突破は、ポーランド軍の予測をくつがえし、〔機動戦とざんごう戦との〕複合戦の価値を最小限におしさげてしまった。

この点に、この突破の第一の積極的成果がある。

つぎに突破は、敵の後方、通信、連絡を直接の脅威にさらした。その結果、

（イ）ポーランド第三軍（キーエフ地区）は、急速な後退をはじめ、やがてなだれをうって潰走するにいたった。

（ロ）騎兵隊の本攻撃をうけたポーランド第二軍（ベルヂチェフ地区）は、いそいで退却にうつった。

（ハ）左翼の支柱をうしなったポーランド第六軍（ジメーリンカ地区）は、西にむかい当然の後退をはじめた。

（ニ）わが軍は、全戦線にわたって猛進撃をはじめた。

これがジトーミル突破の第二の積極的成果である。

最後に、この突破は、ポーランド軍の高慢をくじき、自分の力にたいする彼らの信念をほりくずし、士気の堅

固さを動揺させた。この突破以前は、ポーランド部隊は、わが軍、とくに騎兵隊にたいして、まったく軽視する態度をとり、おもいきった戦斗をやり、投降するものもなかった。突破ののちはじめて、ポーランド軍のなかから集団的な投降と大量逃亡がはじまった。これはポーランド部隊の堅忍不抜さがくずれた第一の兆候である。同志ブヂョンヌィは、戦線の革命軍事会議にあてて、つぎのように書きおくっている。「貴族(パン)どもは、わが騎兵隊を尊敬するようになった」と。

四　南方からの危険

対ポーランド戦線におけるわれわれの成功は、うたがいない。この成功が将来発展していくことも、また、うたがいない。だがポーランド軍は、だいたいかたずいた、われわれは、これからただ「ワルシャワ進撃」をやるだけだ、と考えるならば、それはつまらないからいばりである。

わが活動家たちのエネルギーをそこない、仕事に有害なうぬぼれを助長させる、このからいばりは、好ましくないものである。なぜならポーランドには予備軍があって、ポーランドはこれをかならず戦線に投ずるであろうし、またポーランドはひとりでなく、またポーランドのうしろには、ロシアに対抗させるために、全面的にこれを支持している連合国がいるというだけでなく、なによりもまずポーランド軍にたいする、われわれの勝利の果実を、背後からもぎとる恐れのある、ポーランドの新しい同盟者ヴランゲリが、わが軍の後方にあらわれたからである。

ヴランゲリはポーランド軍に同調することはあるまい、というような希望で、いい気になってはいけない。ヴ

ランゲリは、すでに彼らに同調しているし、彼らと一体になって行動している。
ヴランゲリ軍の鼓舞者――セヴァストーポリで発行されているシュールギンの新聞『ヴェリーカヤ・ロシア』〔『偉大なロシア』〕は、六月のある号で、つぎのように書いている、――
「われわれは、ポーランド戦線にふりむけられるボリシェヴィキ勢力の一部を、われわれのほうにひきよせているのだから、われわれが攻勢によってポーランド軍を支援していることは、うたがいない。またポーランド軍が、その作戦によって本質的にわれわれを支援していることも、うたがいない。ポーランド軍には同情する必要もなければ、反感をもつ必要もない。われわれはただ冷静な政治的打算にしたがってうごかなければならない。きょうは共通の敵にたいしポーランド軍と同盟することがわれわれに有利である。だが、あすは……あすになればわかるだろう。」(340)
ヴランゲリ戦線は明らかにポーランド戦線の延長である。ただヴランゲリは、ポーランド軍とたたかっているわが軍の後方で、すなわち、われわれにとってもっとも危険な地点で行動しているという点がちがうだけである。
したがってヴランゲリの危険が解消しないかぎり、「ワルシャワ進撃」をうんぬんしたり、また一般にわれわれの成功は強固だなどというのは、わらうべきことである。他方、ヴランゲリは勢いをましており、また増大しつつある南方からの危険にたいし、われわれがなにか特別な、真剣な企てをしたということも見られない。

五　ヴランゲリをわすれるな

ポーランド軍にたいする攻撃作戦の結果、わが戦線は南端はロヴノ地区、北端はモローデチノ地区にあって、

それぞれ突出し、西の方へまがった弓状を呈している。これは、ポーランド軍をとりまいた態勢、すなわちポーランド軍にとって脅威的な態勢といえる。

連合国がこうした事情を考慮にいれていることは、うたがいない。連合国は、ルーマニアをロシアとの戦争にひきずりこもうと百方努力し、やっきになってポーランドのために新しい同盟者をさがしもとめ、あらゆる手段でヴランゲリを支援し、総じてポーランド軍をすくい出す努力をかさねている。おそらく連合国はポーランドのために新しい同盟者をさがし出すことに成功するであろう。

ロシアは、新たな敵にたいしても、これに対抗するだけの力を自分のうちに見いだすであろう。これをうたがう根拠はない。だが一つだけ、おぼえておかねばならないことがある。それは、ヴランゲリが健在であるかぎり、ヴランゲリがわれわれの後方を脅威する可能性をもっているかぎり、われわれの戦線はきわめてまずいということ、対ポーランド戦線でのわれわれの成功も、堅固なものではありえないということである。ヴランゲリを清算してはじめて、ポーランドの貴族(パン)にたいするわれわれの勝利は、確保されたものと考えることができよう。だから党は、つぎのような新しい当面のスローガンを、旗のうえに書きしるさねばならない。「ヴランゲリをわすれるな!」、「ヴランゲリに死を!」と。

『プラウダ』第一五一号
一九二〇年七月十一日

赤軍部隊はどうむかえられているか

『クラスノアルメーエッツ』(九二)紙あての報道

共和国革命軍事会議委員同志**スターリン**は、ポーランド戦線で現地住民が、赤軍にたいしてまったく比類のない態度をとっていることを強調せざるをえない、と報じている。

同志**スターリン**はつぎのように言っている。――このような態度は、東部でも南部でも見かけたためしがない。西部の農民大衆は、ヴォルガ沿岸地方や南部にくらべて貧困であるにかかわらず、しかもなお彼らは最後のものまで赤軍兵士とわかちあった。

極端に苦しい「荷役」義務は、苦情もいわずに遂行された。

赤軍兵士にはあらゆる協力、あらゆる援助があたえられた。そして、われわれが五月の末に後退をはじめねばならなかったとき、住民の悲しみは大きかった。

戦線隣接地帯の住民は、ポーランドの占領によって非常な苦痛をなめ、そのため、ポーランドの貴族(パン)が侵入すれば、どんな恐ろしいことになるか、彼らはよく知っていた。

われわれの戦線では、衞生の仕事を農民と農婦の手にまかせている部隊が非常に多い。彼らは傷ついたわが赤軍兵士に大きな配慮と注意をはらっている。

(343)
戦線地帯の向こうにいる白ロシア農民の気持についていえば、われわれの知りえたところでは、そこではつぎつぎに蜂起がおこり、パルチザン部隊が活動して、倉庫をやき、地主を絶滅し、敵の後方を破壊しているということである。

シベリアにおけるコルチャックのばあいとおなじ話がくりかえされている、とあえて言うことができる。われわれの部隊が近ずくにつれて、敵の後方は、いたるところで内部から爆発しはじめる。

われわれは、げんざいポーランドの地主にたいする白ロシアの真の農民革命に際会している。

『クラスノアルメーエッツ』第三三七号
一九二〇年七月十五日

(344)

すべての党組織に

ロシア共産党（ボ）中央委員会の手紙の原案(九二)

われわれの情報によれば、ヴランゲリのもとには、年功をつみ、なにものにもたじろがない、向こう見ずな悪党将軍どもの一団がよりあつまっているということである。

ヴランゲリの兵隊は、りっぱに部隊を編成して、必死にたたかっていて、投降よりも自殺をえらんでいる。技術的に見れば、ヴランゲリ軍は、わが軍よりも補給がよくて、西欧からの戦車、装甲自動車、飛行機、弾薬、被服の輸送は、イギリスが輸送中止を声明したにもかかわらず、今にいたるまでつづけられている。

ヴランゲリとたたかっているわが軍の弱点は、第一に、わが軍が旧デニキン軍の捕虜で水ましされていて、彼らはしばしば敵にねがえっていること、第二に、わが軍が志願兵または動員された共産党員を、集団的にも個別的にも、中央からうけとっていないことである。

(345)

わが軍のなかに転換を生じさせ、凶悪な敵にうちかつことができるようになるためには、わが軍からかつての捕虜を一掃し、志願兵または動員された共産党員の大部隊を規則的に供給する必要がある。

クリミアは、どんなことがあってもロシアにとりもどさなければならない。でなければウクライナとカフカーズは、ソヴェト・ロシアの敵からつねに脅威されることになるであろう。

中央委員会は、本回状の精神にしたがって大衆的煽動を強化し、他の戦線への派遣をへらしても、クリミア戦線にたいして共産党員を規則正しく派遣する仕事を、遅滞なく組織するよう諸君に要請する。

一九二〇年七月に書かれ、一九四五年、『レーニンスキー・ズボールニク』〔『レーニン文集』〕第三十五巻で、はじめて印刷

共和国戦斗予備軍の創設について

――ロシア共産党(ボ)中央委員会政治局への覚え書

一方では、ポーランド軍とヴランゲリを公然と支援しているフランスおよびアメリカの行動、ならびに、この支持を黙認しているイギリスの行動、他方では、ポーランド軍の成功、予想されるヴランゲリの勢力強化、ドロホイ地区におけるルーマニア東部軍の集結、これらは共和国にとって重大な国際的、軍事的情勢をつくりだしている。いまや新しい銃剣(約十万)、新しいサーベル(約三万)および適切な軍需補給を共和国のために確保することに、心をくばらなければならない。

ポーランド軍の最近の成功は、有力な予備軍をもたぬという、わが軍の基本的な欠陥をあばき出した。したがって、いつでも戦線に投入できる強力な予備軍を編成することが、共和国の軍事力の強化をはかる当面の計画のなかで、もっとも重要なものとみとめなければならない。

以上にのべたところから出発して、私は、つぎのような**共和国戦斗予備軍編成計画**を採択するよう提案する。

一、戦斗能力ある第一線師団にたいする正常な人員補充をつずけながら、戦斗能力をうしなった無内容な、また半ば無内容な師団（歩兵）の後方への撤收をただちにはじめること。

二、撤收すべき歩兵師団は、ほぼ一二ないし一五個師にのぼるものと想定し、情報に応じ、たいしたさまたげもなく、これをヴランゲリ戦線、ポーランド戦線またはルーマニア戦線に投入しうるような地区（かならず穀物地区）に集結させること（撤收師団の三分の一は、たとえばオリヴィオーポリ地区、他の三分の一はコノトープ―バフマチ地区、残りの三分の一はイロヴァイスカヤ―ヴォルノヴァッハ地区に集結させることができよう）。

三、これらの師団にたいしては、各師団の銃劍数が七千ないし八千にたっし、すべての師団が一九二一年一月一日までに出動準備を完了するよう、人員補充と補給をおこなうこと。

四、常備騎兵部隊の人員補充にただちにとりかかること。そのため、こんご数カ月間（一月まで）に第一騎兵部隊にはサーベル一万、第二騎兵部隊には八千、ガイ兵団には六千をあたえること。

五、おのおの千五百のサーベルをもつ、騎兵五個旅団の編成にただちにとりかかること（一旅団はテレクのカザック人で、第二はカフカーズの山地人（ゴーレツ）で、第三はウラルのカザック人で、第四はオレンブルグのカザック人で、第五はシベリアのカザック人で編成すること）、旅団の編成は二カ月間に完了すること。

六、自動車工業の新設と強化にあらゆる方策を講じること。そのさい「オースチン」型および「フィアット」型自動車の修理と製作には特別の注意をはらうこと。

七、主として自動車の装甲を念頭において、あらゆる方策を講じて装甲自動車工業を強化すること。

八、あらゆる方策を講じて航空機工業を強化すること。

九、上記の諸項目に応じて補給計画を拡大すること。

イ・スターリン

一九二〇年八月二十五日
モスクワ、クレームリ

二　ロシア共産党（ボ）中央委員会政治局への声明

予備軍にかんするトロツキーの回答はおざなりである。トロツキーがこの回答のなかであげている、このまえの彼の電報には、予備軍編成の**計画**、そうした計画の必要性については、それらしい暗示すらない。**いつ**師団を撤収するか、**どの**地区に撤収するか、師団の補充編成、補充部隊の教育、結合を**いつまでに**完了するか、こうした問題（それは、けっして小さなことではない！）はすべて回避されている。

夏期作戦のさい重要な（**否定的**）役割を演じたのは、予備軍が前線から**遠くはなれていたこと**である（ウラル、シベリア、北カフカーズ）。予備軍は必要なときにまにあわず、非常におくれて到着し、大部分は目的地に到着しなかった。だから予備軍の集結地区は、きわめて重要な要因として、まえもって考慮しておかねばならない。おなじように重要な（これまた否定的な）役割を演じたのは、補充部隊の**無教育**ということである。未熟で、堅く結合されてない補充部隊は、総攻撃の状況下にもちいたさい、おおむね敵の激しい反攻にたえきれず、器材のほとんど全部を敵にひきわたし、何万となく投降した。だから教育と補充編成の期限は、きわめて重要な要因

として、これまた、まえもって考慮しておかねばならない。

さらに重要な（これまた否定的な）役割を演じたのは、わが予備軍のもっている**場当たり的**、**即席的**性格である。われわれは予備専用の部隊をもっていなかったので、予備軍をあらゆるたぐいの雑部隊、はなはだしいのは共和国国内警備隊[九三]から、場当たり的にひどくいそいで、でっちあげたばあいがすくなくない。これがわが軍の堅忍不抜さをそこなった。

簡単にいえば、共和国のために有力な予備軍を確保するための**計画的**活動を（ただちに！）はじめる必要がある。もしそうしなければ、われわれは新しい「予期しない」（「晴天の霹靂」のような）軍事的破局にあう恐れがある。

補給は、トロツキーがあやまって考えているような、「もっとも重要なこと」ではない。われわれは貧しいけれども、ともかく補給問題をかたずけてきたし、しかも兵士に支給された「上衣」や「長靴」の総数の半ばは、農民の手にはいってしまったことを、国内戦の歴史がしめしている。なぜか。それは、兵士が、ミルクやバターや肉と交換に、つまり、われわれが、兵士にあたえないものと交換に、支給品を農民にわたしていたからである（これからさきも、やはり、わたしてしまうことだろう！）。われわれはこのまえの（夏期）作戦でも、補給問題をうまくかたずけた。それでもやはり失敗をなめた（ポーランド戦線におけるわが軍の失敗の責任者として補給部員を非難しようとしたものは、まだないようだ……）。補給よりも重要な要因があることは、明らかである（それについては、まえにのべたところを見よ）。

一般諸官庁に部隊の補給をやらせ、その他すべてのことは野戦司令部にまかせるというような有害な「教え」

は、きっぱりとすてさる必要がある。新しい破局にあいたくなければ、中央委員会は、予備軍と作戦の準備をふくめて、軍官庁諸部局の全活動を知り、これを統制しなければならない。

まさに以上のことから、私はつぎのことを主張する。

（一）軍官庁は「軍服」のことを口実にとやかく言うことをやめ、共和国予備軍編成の具体的計画を作成すること（ただちに作成にとりかかること）。(350)

（二）中央委員会は（国防会議を通じて）この計画を検討すること。

（三）中央委員会は野戦司令部にたいする統制を強化し、総司令官、または野戦司令部参謀長の定期報告を、国防会議または国防会議の構成員からなる、特別委員会に提出すること。

イ・スターリン

一九二〇年八月三十日

はじめて印刷

(351)

ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策

ロシアにおける革命と国内戦の三年間がしめしたように、中央ロシアとその辺境地方との互の支持なしには、革命の勝利は不可能であり、ロシアを帝国主義の毒牙から解放することは不可能である。世界革命の基地である中央ロシアは、原料、燃料、食糧に富む辺境地方の援助なしには、ながくもちこたえることができない。また逆にロシアの辺境地方は、いっそう発展した中央ロシアの政治的、軍事的および組織的な援助なしには、不可避的に帝国主義へ隷属する運命をおわされてしまう。いっそう発展したプロレタリア的西欧は、発展がおくれてはいるが、原料や燃料に富む農民的東洋の支持なしには、全世界のブルジョアジーをしまつすることができないという命題が正しいとすれば、いっそう発展した中央ロシアは、発展がおくれてはいるが、なくてはならない資源に富むロシアの辺境地方の支持なしには、革命の事業を最後まで遂行しえないという、もう一つの命題もまた、おなじように正しい。

(352)

この事情が、ソヴェト政府のあらわれた最初の日から、連合国によって考慮されていたことは、うたがいないのであって、連合国は、もっとも重要な辺境地方を中央ロシアからきりはなすことによって、中央ロシアを経済的に包囲するという計画を実行してきた。その後も、ロシアの経済的包囲計画は、一九一八年から一九二〇年ま

で、連合国がロシアにたいしておこなった、あらゆる出兵の一貫した基礎をなしていて、連合国がウクライナ、アゼルバイジャン、トゥルケスタンで、現にやっている策動も、その例外ではない。それだけに、ロシアの中央と辺境地方のあいだの強固な同盟を確保することは、ますます多くの関心をひいているのである。

ロシアの中央と辺境地方のあいだの、緊密な、たちがたい同盟を保障するような、両者間の一定の関係、一定の結びつきを樹立する必要は、ここから生じる。

では、この関係はどんなものでなければならないか。それは、どういう形態をとるべきであろうか。いいかえれば、ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策は、どういう点にあるのか。

中央と辺境地方のあいだの関係の一形態として、辺境地方をロシアから分離するという要求は、排除されなければならない。というのは、この要求は、中央と辺境地方のあいだの同盟を樹立するという、問題の提起そのものに矛盾しているだけでなく、なによりも、この要求が、中央ならびに辺境地方の人民大衆の利益に根本的に反しているからでもある。いまさら言うまでもないが、辺境地方の分離は、西欧と東洋の解放運動に刺激をあたえている、中央ロシアの革命的威力をほりくずしてしまうであろうし、分離した辺境地方自体も、不可避的に国際帝国主義への隷属におちこむであろう。現在の国際的条件のもとで辺境地方の分離を要求することが、まったく反革命的であることを理解するには、ロシアから分離したグルジア、アルメニア、ポーランド、フィンランドなどが、独立の外観だけをたもちながら、実際には連合国の無条件的な家臣になってしまったのを見るだけで十分であるし、またウクライナとアゼルバイジャンが、前者はドイツ資本の、後者は連合国のえじきになったという

最近の歴史をおもい出すだけで十分である。プロレタリア的なロシアと、帝国主義的な連合国とのあいだに、必死の斗争がもえあがっている現状では、辺境地方には二つの道しかありえない。

あるいは、ロシアとともにいくか、——そのときは辺境地方の勤労大衆は、帝国主義の圧制から解放される。

あるいは、連合国とともにいくか、——そのときは帝国主義の束縛は、さけられない。

第三の道はない。

いわゆる独立国であるグルジア、アルメニア、ポーランド、フィンランドなどのいわゆる独立は、帝国主義者のいずれかのグループにたいする、これらの国家（と言うと失礼だが）の完全な従属をおおいかくしている、欺まん的な外観にすぎない。

もちろん、ロシアの辺境地方、これらの辺境地方にすんでいる民族や種族は、他のあらゆる民族とおなじように、ロシアから分離する固有の権利をもっている。だから、これらの民族のうち、ある一つの民族の大多数が、ちょうど一九一七年のフィンランドのばあいのように、ロシアからの分離を決定するとすれば、ロシアはおそらくこの事実を確認して、分離を承認しなければならないであろう。しかし、ここで問題にしているのは、あらそうことのできない民族の諸権利についてではなく、中央ならびに辺境地方の人民大衆の利益についてである。また問題にしているのは、この利益によって規定される煽動の性格についてであり、もしわが党が自分の本分をすてたくなければ、また諸民族の勤労大衆の意志にはたらきかけて、一定の方向にむかわせたいとおもうならば、わが党がとうぜんおこなうべき煽動の性格についてである。ところが人民大衆の利益は、革命の現段階では、辺境地方の分離を要求するのは、きわめて反革命的であることをものがたっている。

ロシアの中央と辺境地方のあいだの同盟形態としての、いわゆる文化的民族自治制もまた、おなじように排除されねばならない。さいきん一〇年間のオーストリア＝ハンガリア（文化的民族自治制の母国）の実践は、多民族国家の諸民族の勤労大衆のあいだの同盟形態としては、文化的民族自治制はまったくはかない、生命力のないものであるということをしめした。文化的民族自治制の創案者で、今ではその不自然な民族綱領のそばに、もとのおちぶれた姿ですわっているシュプリンガーとバウエルは、その生きた証拠である。最後に、ロシアで文化的民族自治制の宣布者で、かつては名まえを売ったことのあるブンドは、さいきん文化的民族自治制の不必要なことを、みずから公然とみとめねばならなくなり、つぎのように声明した。

「資本主義制度のわくのなかでかかげられた民族的＝文化自治制の要求は、社会主義革命の諸条件のもとでは、その意味をうしないつつある。」（一九二〇年刊『第十二回ブンド協議会』二一ページを見よ。）

中央と辺境地方のあいだの、ただ一つ適当な同盟形態としてのこっているのは、特有の生活様式と民族的構成において、それぞれことなっている諸辺境地方の地方的自治制であり、連邦制的結合の鎖によって、ロシアの辺境地方を中央と結びつけねばならない自治制である。すなわちソヴェト権力が、この世にあらわれた最初の日から宣言してきた、そして、げんざい行政的自治区（コンミューン）と諸ソヴェト自治共和国という形をとって実行されている、ソヴェト自治制なのである。

ソヴェト自治制は、固定した、永久不変のものではなく、多種多様な発展形態と発展段階とをみとめるものである。この自治は、せまい行政的自治（ヴォルガ沿岸地方のドイツ人、チュヴァシ人、カレリア人）から、より広い政治的自治（バシキール人、ヴォルガ沿岸地方のタタール人、キルギーズ人）にうつり、広い政治的自治か

ら、いっそう拡張された自治形態（ウクライナ、トゥルケスタン）にうつり、最後にウクライナ型の自治制から、自治制の最高形態である条約関係（アゼルバイジャン）にうつっていく。ソヴェト自治制のこの伸縮性は、その第一の長所の一つである。なぜなら、この伸縮性は、きわめてことなった文化的、および経済的発展段階にあるロシア辺境地方の多様性を、ことごとく包含することをゆるすからである。ロシアの民族問題についてのソヴェトの政策の三年間は、ソヴェト自治制を多種多様な形態で実現しているソヴェト権力が、正しい道にたっていることをしめした。なぜならソヴェト権力が、ロシアの辺境地方の人里はなれた山奥に通じる自分の道をきりひらき、もっともおくれた、民族的に多種多様な大衆を政治生活へひきあげ、この大衆をさまざまな糸によって中央と結びつけることに成功したのは、ただこの政策のおかげだからである。このような任務は、世界中のどの政府も解決しなかっただけでなく、自分の任務とすることさえしなかったものである（任務とするのをおそれたのだ！）。ソヴェト自治制の原則にもとずくロシアの行政区域の変更は、まだ完了していない。北カフカーズ人、カルムィク人、チェレミス人、ヴォチャーク人、ブリャート人、その他は、なお問題の解決をまっている。だが将来のロシアの行政地図がどんな姿を呈しようと、また、この分野でおかした誤りがどんなものであろうと（いくつかの誤りは実際にあった）、地方的自治制の原則をもとにした行政区域の変更をおこなうことによって、ロシアは、辺境地方をプロレタリア的中央のまわりに堅く結集させ、ソヴェト権力を辺境地方の広範な人民大衆にちかずける道を、大きく一歩前進したことをみとめねばならない。

しかしソヴェト自治制の、あれこれの形態を宣言し、それに応じる命令や規則を制定することは、いや、自治共和国の地方的人民委員会議という形で辺境政府をつくることさえ、辺境地方と中央との同盟を堅固なものにす

るには、まだまだ不十分である。この同盟を堅固にするには、ツァーリズムの凶暴な政策の遺産として辺境地方にのこっている、辺境地方のあの疎隔と閉鎖性、家父長性と非文化性、中央にたいする不信の念を、まずもって清算しなければならない。ツァーリズムは、大衆を奴隷状態と無学につなぎとめておくために、辺境地方に家父長制的＝封建的抑圧をわざとうえつけた。ツァーリズムは、地方の諸民族大衆をもっとも悪い地区においはらって、民族的反目を激化させるために、辺境地方のいい土地には、わざと植民者的分子をすまわせた。ツァーリズムは、大衆を無知につなぎとめておくために、その土地の学校、劇場、啓発施設を圧迫し、ときには、あっさり閉鎖してしまった。ツァーリズムは、現地の住民のすぐれた人々のもつイニシアティヴを、ことごとくつみとった。最後にツァーリズムは、辺境地方の人民大衆の積極性をことごとくころしてしまった。こうしたことによってツァーリズムは、現地の諸民族大衆のあいだに、ロシア的なすべてのものにたいする、このうえなく深い不信の念をうえつけた。そして、この不信の念は、ときとしてロシア的なものにたいする、敵意ある態度にかわっている。中央ロシアと辺境地方のあいだの同盟を堅固なものにするには、この不信の念を清算し、相互理解と同胞的信頼の空気をつくりださねばならない。だが不信の念を清算するには、なによりもまず、辺境地方の人民大衆が封建的＝家父長制的束縛の残存物から解放されるのをたすけ、植民者的分子のもつ、あらゆるたぐいの特権を廃止し、――たんに言葉のうえだけでなく、実際に廃止し、人民大衆に革命の物質的な恩恵をあじわわせねばならない。

つまり、中央のプロレタリア的ロシアが大衆の利益を、しかも、ただ大衆の利益だけを擁護していることを、彼らに証明しなければならない。しかも植民者とブルジョア民族主義者にたいする弾圧手段だけでなく、なによ

りも、徹底的な、よくねりあげられた経済政策によって、このことを証明しなければならないのである。
普通義務教育にかんする自由主義者の要求は、だれでも知っているところである。辺境地方の共産主義者も、この点では自由主義者より右翼的ではありえない。共産主義者が人民の無知を一掃したいとおもうなら、またロシアの中央と辺境地方を精神的にちかずけたいとおもうなら、彼らは辺境地方に普通教育を実施しなければならない。しかし、そのためには、現地の民族学校、民族劇場、民族啓発施設を発達させ、辺境地方の人民大衆の文化水準をたかめることが必要である。無知と無学こそ、ソヴェト権力のもっとも危険な敵だということは、証明を必要としないからである。この方向におけるわれわれの活動が、一般にどれくらいうまくすすんでいるか、われわれは知らない。しかし非常に重要な辺境地方の一つで、地方の教育人民委員部が、地方学校に資金のわずか一割しか支出していない、ということをきいている。もしこれがほんとうだとしたら、この地方では、われわれは、残念ながら、「旧制度」からあまり出ていないものとみとめねばならない。
ソヴェト権力を人民からきりはなされた権力と見てはならない。反対に、ソヴェト権力は、ロシアの人民大衆のなかから生まれ出た、この種の唯一の権力であり、彼らにとって血のかよった身近な権力である。ソヴェト権力が危機的な瞬間にきまってあらわす、あのいまだかつてない力と弾力性は、もともとこれによるものである。
ソヴェト権力は、ロシアの辺境地方の人民大衆にとっても、同様に血のかよった、身近なものになる必要がある。だが血のかよったものになるためには、ソヴェト権力は、なによりもまず、大衆に理解されるものにならなければならない。だから辺境地方のすべてのソヴェト機関、すなわち裁判所、行政機関、経済機関、直接の権力機関（党の諸機関も同様だが）は、できるだけ現地の住民の生活様式や風習、習慣や言語を知っている現地の人

で構成されなければならない、また現地人民大衆のなかのすぐれた人々がみな、これらの施設に吸収され、現地の勤労大衆が、軍隊編成の分野もふくめて、国の統治のあらゆる分野にひきいれられなければならない、またソヴェト権力とその諸機関は、大衆自身の努力の対象であり、彼らの希望を具体化したものだということを、大衆が納得しなければならない。こうした方法によって、はじめて大衆と権力とのあいだの、たちがたい精神的な結びつきを確立することができるし、また、こうした方法によって、はじめてソヴェト権力を辺境地方の勤労大衆に理解される、身近なものにすることができるのである。

二、三の同志は、ロシアの自治共和国一般にソヴェト自治制を、さけられないけれども、あくまで一時的な悪だと考え、この悪は、ある事情からどうしてもやむをえなかったのではあるが、やがてはこの悪を排除するために、それとたたかわねばならないと考えている。この見解は根本的にあやまっていること、いずれにせよ、民族問題にかんするソヴェト権力の政策と、なんの共通点もないことは、証明するまでもあるまい。ソヴェト自治制を抽象的な、頭のなかで考え出したものと見てはならない。まして空虚な宣言ふうの約束と考えてはならない。ソヴェト自治制は、辺境地方と中央ロシアとの連合のもっとも現実的な、もっとも具体的な形態である。ウクライナ、アゼルバイジャン、トゥルケスタン、キルギジア、バシキリア、タタリアその他の辺境地方が、人民大衆の文化的物質的繁栄につとめるかぎり、母語による学校をもたず、主として現地の人々で構成される裁判所、行政機関、権力機関をもたないでは、やっていけないことを否定しようとするものは、あるまい。それだけでなく、これらの地方の真のソヴェト化、中央ロシアと緊密に結びついて、単一の国家的な全体になったソヴェト国への その転化は、現地の学校を広範に組織し、住民の生活様式と言語を知っている人々からなる、裁判所や行政

機関や権力機関などをつくりだすことなしには考え**られない**。ところで、母語をもちいる学校や裁判所、行政機関や権力機関をもうけること、これこそまさに実際にソヴェト自治制を実現することを意味する。なぜならソヴェト自治制とは、ウクライナ的、トゥルケスタン的、キルギーズ的等々の形態をとった、これらすべての施設の総計にほかならないからである。

それでもなおソヴェト自治制は、一時のはかないものだとか、これと斗争する必要があるなどということを、どうしてまじめに言えるだろうか。

二つに一つである。すなわち、——

あるいは、ウクライナ語、アゼルバイジャン語、キルギーズ語、ウズベック語、バシキール語その他の言語が現実に客観的なものであり、したがって、これらの地方で母語による学校、現地の人々からなる裁判所、行政機関、権力機関を発達させることが絶対に必要であるか、——そのばあいには、ソヴェト自治制は、これらの地方で徹底的に、無条件に実施されなければならない。

あるいは、ウクライナ語、アゼルバイジャン語、その他の言語は中身のない思いつきであり、したがって母語による学校、その他の施設は不必要であるか、——そのばあいにはソヴェト自治制は、無用のがらくたとしてなげすてられなければならない。

第三の道をさがすのは、ことがらをわきまえていないせいか、あるいは悲しむべき無思慮の結果である。

ソヴェト自治制の実現をさまたげる重大な障害の一つは、辺境地方に現地出身のインテリゲンツィア勢力が非常にたりないことであり、ソヴェトと党の活動の例外なくすべての部門で、指導者がたりないことである。この

不足は、辺境地方の啓発活動にしろ、革命的建設活動にしろ、いずれの活動をもさまたげないではいない。だからこそ、こんなに数のすくない現地のインテリゲンツィアのグループを遠ざけるのは、ばかげたことであり、事業の害になるであろう。彼らは、おそらく人民大衆につかえたいとおもいながら、それができないでいる。おそらくその理由は、彼らが共産主義者でないので、自分たちが不信の空気でとりまかれていると考え、弾圧がありはしないかとおそれているためである。これらのグループにたいしては、しだいにソヴェト化する目的で、彼らをソヴェト活動にひきいれる政策、工業、農業、食糧関係その他の部署につける政策をもちいて成功をおさめることができる。なぜなら、こうしたインテリゲンツィアのグループは、たとえば反革命的な軍事専門家で、反革命的であったにもかかわらず、ともかく仕事につかせられ、のちにソヴェト化されて重要な部署についたものよりも、たよりにならぬとは、けっして言いきれないからである。

しかし諸民族のインテリゲンツィア・グループを利用しても、指導者にたいする需要をみたすには、まだまだ不十分である。現地の人々のなかから指導者のカードルをつくりだすため、辺境地方であらゆる統治部門にわたって、講習会や学校の網をゆたかに発達させることが同時に必要である。なぜなら、こうしたカードルがいなくては、母語による学校、母語による裁判所、行政機関その他の施設を組織するのが極度に困難になることは、明らかだからである。

ソヴェト自治制の実現をさまたげる、これにおとらず重大な障害は、辺境地方をソヴェト化するにあたって、若干の同志たちがしめしている、あの性急さである。そして、これは往々ひどい拙劣さになっている。中央ロシアから一個の歴史的時代だけおくれている地方、中世的な制度がまだ完全に清算されてはいない地方で、この同

志たちは、「純粋共産主義」実施のための「英雄的努力」をひきうける決心をしているが、こうした騎兵的強襲策、こうした「共産主義」からは、よい結果は生じないと確信をもって言える。この同志たちには、われわれの綱領の周知の条項をおもい出させてやりたい。それによれば、——

「ロシア共産党は、歴史的＝階級的見地にたち、あたえられた民族がどんな歴史的発展段階にあるか、中世からブルジョア民主主義への途上にあるか、ブルジョア民主主義からソヴェト民主主義すなわちプロレタリア民主主義への途上にあるかを考慮する。」

さらに、——

「いずれのばあいであれ、圧迫民族であった民族のプロレタリアートのほうから、被圧迫民族または完全な権利をもたない民族の、勤労大衆がもっている民族感情の残存物にたいして、特別の慎重さと特別の注意とをはらうことが必要である。」(「ロシア共産党綱領」を見よ。)

すなわち、たとえばアゼルバイジャンで住宅の密集化をはかる直接的な方法が、住宅や家のかまどを神聖不可侵なものと考えているアゼルバイジャンの大衆を、われわれからはなれさせるとすれば、住宅密集化の直接的な方法は、おなじ目的をたっするための間接的、迂回的な方法にかえる必要があることは明らかである。あるいはまた、たとえば宗教的偏見に強くそまっているダゲスタンの大衆が、「シャリアート〔回教徒の家族相続法〕にもとずいて」共産主義者についてくるとすれば、宗教的偏見との斗争の直接的な方法は、この国では間接的な、より慎重な方法にかえねばならないことは明らかである、等々。

つまり、おくれた人民大衆の「即時共産主義化」にかんする騎兵的強襲策から、この大衆をソヴェト的発展の

一般的水路にしだいに引きいれるという、周到な、熟慮された政策にうつる必要がある。
だいたい、以上が、ソヴェト自治制実現の実践的条件であって、ロシアの中央と辺境地方の精神的接近と強固な革命的同盟は、この条件をまもることによって保障される。
ソヴェト・ロシアは、たくさんの民族や種族を、相互信頼と自由意志による同胞的協力一致の原則を基礎として、単一のプロレタリア国家のなかで互に協力させるという、世界中でまだ見たことのない実験をおこなっている。革命の三年間は、この実験が成功のあらゆる好機にめぐまれていることをしめした。しかし、この実験が完全な成功を期待しうるのは、現地における民族問題にかんする、われわれの実践上の政策が、多種多様の形態と段階においてとりあげられ、宣言されたソヴェト自治制の諸要求に矛盾しないばあいだけであり、現地におけるわれわれの実践の一歩一歩が、辺境地方の人民大衆を、より高いプロレタリア的な、精神的、物質的文化に参加させる（その生活様式と民族的相貌にふさわしい形態で）のに寄与するばあいだけである。
中央ロシアとロシア辺境地方のあいだの革命的同盟を強固にする保障は、ここにある、そして、この強固な革命的同盟をまえにしては、連合国のあらゆる策動は、こなごなにくだけちるであろう。

『プラウダ』第二二六号
一九二〇年十月十日
署名――イ・スターリン

(363)

労農監督人民委員部責任活動家第一回全ロシア協議会開会の辞

一九二〇年十月十五日

労農監督活動家の第一回全ロシア協議会は、ここに開会された。

同志諸君！　本協議会の実質的な仕事にうつるまえに、労農国家で監督が必要かどうか、もし必要なら、その基本的な任務はどんなものでなければならないか、という問題について、ロシア共産党中央委員会の意見をのべさせていただきたい。

ロシアは、労働者・農民が、はじめて権力を手中におさめた唯一の国である。権力獲得の前提となったのは、世界でもっとも深刻な変革である。それにつづいて国家権力の古い機構は一掃され、新しい機構が誕生した。労働者は通常だんながたのためにはたらき、だんながたが国をおさめるというのが昔の状態であった。革命前には国をおさめる経験が、すべて支配階級の手に集中されていたということは、もともとこのためである。ところが十月革命後権力についたのは、いちども国をおさめたことがなく、ただ人のためにはたらくことだけを知ってい

て、国をおさめる十分な経験をもたない労仂者・農民であった。

これが、ソヴェト国家統治機構が現になやんでいる、いろいろな欠陥の原因になった、第一の事情である。

つぎに古い国家統治機構の一掃によって官僚主義はうちくだかれたが、官僚はのこった。彼らは色をそめなおしてソヴェトの活動家をよそおい、われわれの国家機構にいりこみ、権力をにぎったばかりの労仂者・農民の経験不足を利用して、国有財産私消という古くからの陰謀をたくましくし、古いブルジョア的風習をもちこんだ。

これが国家機構の欠陥の基礎となった、第二の事情である。

最後に、新しい権力は古い権力から破壊されつくした経済機構をうけついだ。この破壊は、ロシアが連合国からおしつけられた国内戦によって、ますますふかめられた。この事情もまた、国の機構に損傷や欠陥を生ずる条件の一つになった。

同志諸君、これこそ、わが国家機構の欠陥が生まれてくる地盤となった、基本的条件なのである。

これらの条件が存在し、国家機構に欠陥がのこっているかぎり、われわれが監督を必要とすることは、明らかである。

もちろん労仂者階級は、国をおさめる経験を身につけようと努力している。しかし権力の地位についた、新しい階級の代表者たちの経験は、まだ不十分である。

もちろん色をそめなおし、われわれの機関にもぐりこんだ官僚どもは、抑制されてはいるが、この抑制は、まだ不十分である。

もちろん、われわれが直面している崩壊は、わが国家機関の熱心な活動によって、しだいにすくなくなっては

いるが、それにもかかわらず崩壊は、なおのこっている。

だからこそ、こうした条件がのこっていて、これらの欠陥があるかぎり、これらの欠陥を究明し、これらを訂正し、わが国家機関が完成の道を前進するのをたすけるような、特別の国家機構が必要なのである。

では監督の基本的任務はなにか。

基本的任務は二つある。

その第一は、監督業務にしたがうものが、その監察業務の結果として、または、その業務の進行中に、中央ならびに地方で、権力の地位についているわが同志たちが、国有財産を登録するもっとも合理的な形式をうちたて、合理的な報告様式をさだめ、補給機構、平時および戦時の諸機構、経済機構を調整するのをたすけることである。

これが第一の基本的任務である。

第二の基本的任務は、労農監督人民委員部がその仕事をすすめる過程において、全国家機構を掌握しうる指導者を、労働者・農民のなかから養成することである。同志諸君、実際に国をおさめるのは、ブルジョア的秩序のもとでは議会に、またソヴェト的秩序のもとではソヴェト大会に、自分の代議員を選挙する人たちではない。もいな実際に国をおさめるのは、事実上国家の執行機構を支配し、これらの機構を指導している人たちである。もし労働者階級が国をおさめるために、真に国家機構を掌握したいとおもうなら、中央だけでなく、問題が審議され決定されるようなところだけでなく、また決定が実行にうつされるところに、経験に富む代理人をもっていなければならない。そのときはじめて、労働者階級は国家を掌握したといえるのである。そこに到達するためには、国の統治をおしえる指導者のカードルを、十分な人数だけそろえる必要がある。労農監督人民委員部の基本的任

(367)

務は、労仂者・農民の広い層をその活動に参加させながら、これらのカードルを養成するにある。労農監督人民委員部は、労仂者・農民のなかから生まれた、こうしたカードルのための学校でなければならない。

これが労農監督人民委員部の第二の任務である。

労農監督が実践すべき仕事のやりかたは、ここから生まれてくる。古い革命前の時代には、統制業務は国家諸施設のそとにあった。それは外的な力であって、諸施設の監督をおこないながら、責任者を追求し、犯罪人をとらえる努力はしたが、ただそれだけにとどまっていた。このやりかたは、私に言わせれば、警察的なやりかたであり、犯罪人あさりのやりかたであり、すべての新聞をわめきたたせるための煽情的暴露のやりかたである。こんなやりかたはすてさらねばならない。これは労農監督のやりかたではない。われわれの監督は、その監察する諸施設を自分に緣のない、よその施設と見るのでなく、自分と血のかよった施設と見て、これを教育し改善していくのでなければならない。大事なことは、個々の犯罪人をとらえることではなく、なによりも、監察をうける施設を研究し、綿密に研究し、真剣に研究し、短所と長所を研究して、これら諸施設を改善する仕事をおしすすめるにある。もっともよくないこと、もっとものぞましくないことは、監督が警察的なやりかたにふけり、監察する施設にいいがかりを見つけだし、小さなことをつつきまわし、基本的な欠点はさておいて、現象の表面をうわすべりすることである。

労農監督人民委員部の仕事のやりかたは、基本的な欠点をえぐり出すことでなければならない。労農監督人民委員部がこうした道をすすむのは、非常に困難なことであり、監察をうける施設にはたらいているものの一部にしばしば不満をよぶことを、私は知っている。また、しばしば労農監督人民委員部のもっとも良心的なはたらき

手が、いらだった役人や、あるいはまた、こうした役人の声に耳をかす共産党員の憎悪になやまされるのを、私は知っている。だが労農監督は、それをおそれてはならない。労農監督は、どんな地位をしめているものでも、個々の人をたいせつにせずに、仕事だけを、仕事の利益だけをたいせつにせよ、という基本的な戒めをもっていなければならない。

この任務は、非常に困難で微妙な任務である。この任務は、それにしたがうものの非常な忍耐力と非常な潔白さ、ゆび一本さされない潔白さを要求する。悲しいことにこのおひざもとのモスクワにおいて、二、三の施設の監察が実際におこなわれたさい、統制の係員自身がその使命にたえないことがわかったと、私は言わなければならない。このような係員にたいして、本人民委員部はいささかも容赦しないことを、言明しておかねばならない。本人民委員部は、彼にたいしてもっとも厳重な処罰を要求するであろう。なぜなら彼らは、労農監督活動家の名誉にどろをぬるからである。労農監督にわれわれの諸施設の欠陥を訂正し、これらの施設にはたらくものの前進――向上をたすけるという、高い任務が課せられているとすれば、また労農監督に、だれをもたいせつにするのではなく、ただ仕事の利益をたいせつにするという任務があたえられているとすれば、労農監督人民委員部の活動家自身が潔白で、非のうちどころなく、正義をまもって容赦することのない人々でなければならない。彼らが他のものを監察し、他のものをおしえる権利、――たんに形式上の権利だけでなく、道徳的な権利をもちうるためには、このことが絶対に必要である。

『労農監督人民委員部報』第九―一〇号
一九二〇年十一月―十二月

(370)

著者から

一九二〇年発行『民族問題論文集』の序文

この小冊子には、民族問題にかんする論文が三つだけおさめられている。出版所は、これだけの論文をえらんだが、このことは、見たところ、えらばれた三つの論文が、わが党内でおこなわれた民族問題の解決における、三つの重要な時期を反映し、かつ、この小冊子が、全体として、民族問題にかんするわが党の政策について、いくぶんでもまとまった姿をえがきだすことを、明らかに目的としているという意義をもっている。

第一の論文（『マルクス主義と民族問題』、『プロスヴェシチェーニエ』誌、一九一三年、を見よ）は、帝国主義戦争開始前一年半にわたる地主的＝ツァーリズム的反動の時代、つまりロシアでブルジョア民主主義革命がしだいに成長していった時代に、ロシア民主党内で民族問題について、原則上の議論がたたかわされた時期を反映している。当時二つの民族理論があいあらそっていた。そして、それに応じて、二つの民族綱領、すなわちブンドとメンシェヴィキの支持するオーストリア民族綱領とボリシェヴィキのロシア民族綱領があいあらそっていた。読者は、この二つの潮流の特徴ずけをこの論文のなかに見いだすであろう。その後の諸事件、とくに帝国主義戦

(371) 争と、別々の民族国家へのオーストリア＝ハンガリアの分解とは、どちらのがわが正しかったかをはっきりしめした。シュプリンガーとバウエルが、その民族綱領のそばに、もとのみすぼらしい姿ですわっている現在、歴史が「オーストリア学派にとどめを」さしたことは、ほとんどうたがいないところである。ブンドさえも「資本主義制度のわくのなかでかかげられた民族的＝文化自治制の（すなわちオーストリア民族綱領の――イ・スターリン）要求は、社会主義革命の諸条件のもとでは、その意味をうしないつつある」（『第十二回ブンド協議会』、一九二〇年、を見よ）ことをみとめねばならなかった。ブンドは、オーストリア民族綱領の理論的基礎が**原則的**になりたちえないこと、オーストリア民族理論が**原則的**になりたちえないことを、まさにこれによってみとめた（無意識にみとめた）とはおもってもいない。

(372) 第二の論文（『十月変革と民族問題』[九五]、『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』誌、一九一八年、を見よ）は、十月革命後の時期を反映している。すなわち中央のロシアで反革命にうちかったソヴェト権力が、反革命の根拠地たる辺境地方のブルジョア民族主義諸政府と衝突した時期、自分の植民地にたいするソヴェト権力の影響が増大していくのにおどろいた連合国が、ソヴェト・ロシアの息の根をとめるため、ブルジョア民族主義諸政府を公然と支持しはじめた時期、ブルジョア民族主義諸政府との斗争が勝利のうちに進行していく過程で、ソヴェト地方自治制の具体的諸形態の問題、辺境地方におけるソヴェト自治共和国の組織の問題、ロシアの東部辺境地方を通じて、ソヴェト・ロシアの影響を東洋の被圧迫諸国に波及させる問題、世界帝国主義にたいする西欧および東洋の統一革命戦線結成の問題、というような実践的な問題が、われわれのまえにあらわれた時期を反映している。この論文は、民族問題と権力の問題との不可分の関係を指摘し、民族政策を被圧迫民族と植民地とにかんする、

一般的問題の一部としてとりあつかっている。この点こそ、「オーストリア学派」、メンシェヴィキ、改良主義者、第二インタナショナルがかねがね反対してきたものであり、また、のちに諸事件のすべての進展によって裏ずけられたものである。

第三の論文（『ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策』、『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』誌、一九二〇年十月号を見よ）は、ソヴェト地方自治制にもとずくロシアの行政区域の変更が、まだおわっていない現在の時期、ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の構成部分として行政自治区（コンミューン）とソヴェト自治共和国が、辺境地方に組織されつつある時期のものである。この論文の重点は、ソヴェト自治制の実行の問題である。すなわち帝国主義の干渉の企てにたいする保障として、中央と辺境地方との革命的同盟を確保する問題である。

この論文が、辺境地方のロシアからの分離にかんする要求を、反革命的な計画としてきっぱり否定しているのは、おかしいとおもわれるかもしれない。だが本質上、そこにおかしいことはない。われわれは、インド、アラビア、エジプト、モロッコ、その他の植民地が連合国から分離するのに賛成である。なぜなら、このばあいの分離は、これら被圧迫諸国の帝国主義からの解放、帝国主義の地位の弱化、革命の地位の強化を意味するからである。われわれは、辺境地方がロシアから分離するのに反対である。なぜなら、このばあいの分離は、辺境地方にたいする帝国主義的奴隷化、ロシアの革命力の弱化、帝国主義の地位の強化を意味するからである。だからこそ連合国はインド、エジプト、アラビア、その他の植民地の分離に反対しながら、同時に辺境地方のロシアからの分離のために斗争しているのである。だからこそ共産主義者は、植民地の連合国からの分離のためにたたかいながら、同時に辺境地方のロシアからの分離に反対して斗争しているのである。分離の問題が具体的な国際的諸条

(373)

件に応じ、革命の利益に応じて決定されるのは、自明のことである。

第一の論文からは、ただ歴史的な興味しかない若干の箇所は削除してもよかったのであるが、論文が論争の性格をおびているため、変更をくわえずに全文をかかげねばならなかった。第二と第三の論文もまた変更をくわえずに印刷されている。

一九二〇年十月

イ・スターリン『論文集』

国立出版所、トゥーラ、一九二〇年

(374)

共和国の政治情勢について

ウラヂカフカズ市でのドンおよびカフカーズ共産党組織地方協議会における報告演説
一九二〇年十月二十七日

同志諸君！　十月革命までは一部の西欧社会主義者のあいだに、社会主義革命は、資本主義的に発展した国でまず最初におこなわれ、そこで成功の栄冠をえるという確信があった。そして、あるものはイギリスこそ、そういう国だと言い、また、あるものはベルギーこそ、そうだなどと予想をたてていた。そしてプロレタリアートが少数で、あまりよく組織されていない、資本主義的におくれた国、たとえばロシアのようなところで、社会主義革命がはじまるはずがない、とほとんどすべてのものが言っていた。十月革命はこの見解をくつがえした。社会主義革命は、じつにこの資本主義的におくれた国、すなわちロシアではじまったからである。

さらに、また一部の十月革命参加者は、ロシアの革命にすぐひきつずいて、西欧で、ロシア革命を支持し推進する、より深刻で重大な革命的爆発がおこるばあいにのみ、ロシアにおける社会主義革命は成功しうる、そして

(375)その成功を堅固なものにすることができると信じていた。しかも、こうした爆発はかならずはじまるものと予想していた。この見解もまた、諸事件によってくつがえされた。なぜなら西欧のプロレタリアートから直接の革命的支持をうけることもなく、敵意をもった諸国家にとりかこまれている社会主義ロシアが、すでに三年間も、その存在と発展をつずけているからである。

社会主義革命は、資本主義的におくれた国ではじまるだけでなく、そこで成功をおさめ、前進し、資本主義的に発展した国々の手本ともなりうることが、明らかになった。

こうして、本協議会が日程にのぼしたロシアの現状にかんする問題は、つぎのような形をとっている。すなわち多かれすくなかれ、ほったらかしにされたロシア、そして敵意をふくむ資本主義国家にとりかこまれた一種の社会主義のオアシスをなしているロシアは、これまでやってきたとおり敵を撃破し、撃滅しながら、こんごももちこたえられるだろうか。

この問題を解決するには、まず最初に、ソヴェト・ロシアの存立と成功を現に保障しており、また、こんごも保障しうる諸条件を明らかにしなければならない。これらの条件は二とおりある。不変的な、われわれの左右しえない諸条件と、可変的な、人間が左右しうる諸条件とである。

(376)第一に、ロシアがはてしない大国で、形勢がよくないばあいには、力をたくわえたのち、ふたたび攻勢に出るために、国の奥ふかく退却して、ながくもちこたえられるだけの地域をもっているという事情は、これを第一の条件にくわえねばならない。もしロシアがベルギーのような小国であって、敵の強襲によって国の運命がすみやかに決定され、機動に困難で、どこにも退却のしようがないほど小さな国であったとすれば、社会主義国として

これほどながく持ちこたえられなかったであろう。

つぎに、また、これも不変的な性質をもち、社会主義ロシアの発展を有利にする第二の条件がある。それは、ロシアが国内にあらゆる種類の燃料、原料、食糧を豊富に産出する、世界でも数すくない国の一つであるという事情、すなわち燃料、食糧その他の点で外国に依存しない国、これらの点で外国をあてにしないでもやっていける国だという事情である。もしロシアが、たとえばイタリアのように、他国の穀物や燃料で生きているとしたなら、ロシアは革命の翌日にも危機一髪の状態におちいったことであろう。なぜならロシアから穀物と燃料とをうばうためには、この国を封鎖するだけで十分であったにちがいないからである。ところが連合国のくわだてたロシア封鎖は、ロシアだけでなく、連合国自身の利益にも打撃をあたえた。なぜなら連合国は、ロシアの原料をうしなったからである。

しかし不変的な諸条件のほかに、なお、これとおなじくソヴェト・ロシアの存在と発展とに欠くことのできない、可変的な諸条件がある。これらの諸条件とは、どんなものか。それはロシアに予備軍を保障する諸条件である。すでに三年もつずいていて、これからまた三年つずくかもしれないロシアと連合国との激烈な戦争、こういう戦争にさいして、戦斗予備軍の問題は、決定的な問題である。——この点が重要なのである。

連合国の予備軍とは、いったいなにか。

われわれの予備軍は、なにか。

連合国の予備軍——それはまずヴランゲリの部隊と、まだ「階級対立の毒」におかされていない若いブルジョア諸国家(ポーランド、ルーマニア、アルメニア、グルジア、その他)の若い軍隊である。この点における連合国

の弱点は、連合国が自分自身の反革命軍をもたないところにある。西欧に革命運動がおこっているため、連合国は自分の国の軍隊、すなわちイギリス、フランス、その他の軍隊をロシアに出動させることができない。その結果、連合国は、他国の軍隊に資金をあたえて、これを利用せざるをえない。ところが他国の軍隊は、自国の軍隊のように、すっかりおもうとおりに動かすわけにはいかない。こうした軍隊が、連合国のさしずにしたがって行動しているという事実は、連合国と、連合国に軍隊を利用されている諸国家の民族的利益とのあいだに摩擦があり、将来もこの摩擦がつずくことを、けっして否定するものではない。〔ポーランドが〕連合国のささやきを無視して署名した〔ロシアと〕ポーランドとの講和は、こうした摩擦のあることをあらためて裏がきしている。ところで、この事情は、連合国の戦斗予備軍の内的な威力をほりくずさずにはおかないのである。

連合国の予備軍は、第二に、パルチザン戦斗、その他いろいろな攻撃を組織して、わが軍の後方をかきみだす反革命勢力にある。

最後に、さらに、連合国によって奴隷化された植民地、半植民地におこりかけている革命運動をおしつぶすために、これらの国を支配している、連合国の予備軍がある。

ヨーロッパ自体における連合国の予備軍として、第二インタナショナルにいたるまで、西欧の社会主義革命をおしつぶすという目的を追求している、ありとあらゆるさそりどもがいることは、いまさら言うまでもない。

ロシアの予備軍――それはまず赤軍、すなわち労伪者・農民からなる軍隊である。連合国にやとわれたり、買収されたりしている軍隊と赤軍との相違は、赤軍が自国の自由と独立のためにたたかっており、赤軍が自分の血をながしてまもっている国の利益、および赤軍がその命令のもとにたたかっている政府の利益と赤軍の利益とが

一致している点である。ソヴェト・ロシアの基本的予備軍がうちにひめている無盡蔵の威力は、ここにある。
ロシアの予備軍は、第二に、発展をつずけながら社会主義革命にうつりつつある西欧の革命運動にある。もし西欧にこの革命運動がなかったなら、連合国は自分自身の反革命軍をもち、ロシアの内政にたいする直接の軍事的干渉をあえてする決心をしただろうということは、うたがいない。
最後に、ロシアの予備軍は、東洋および連合国の植民地・半植民地の増大しつつある動揺にある。この動揺は、東洋諸国を帝国主義のくびきから解放するための、公然たる革命運動にうつることによって、連合国に原料と燃料の資源をうしなわせるという脅威をあたえている。植民地が帝国主義のアキレス腱であって、このアキレス腱への打撃は、連合国を危機におとしいれるということを銘記しなければならない。東洋の革命運動が、連合国のまわりに、自信の喪失と崩壊の空気をつくり出していることは、うたがいない。
これが、われわれの予備軍である。
これらの要因の歴史的発展は、どうか。
一九一八年には、ソヴェト・ロシアは、原料、食糧、燃料の資源（ウクライナ、カフカーズ、シベリア、トゥルケスタン）からきりはなされ、正規軍もなく、西ヨーロッパのプロレタリアートからの支持もない、内部ロシアだけであった。その当時は連合国は、ロシアの内政にたいする直接の軍事的干渉を口にすることができたし、また実際にそれをおこなった。二年をへて、ロシアはすでにまったく面目をあらためている。シベリア、ウクライナ、カフカーズは、トゥルケスタンとともにすでに解放された。ユデーニッチ、コルチャック、デニキンは撃破された。若いブルジョア国家の一部（フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトワニア、ポーランド）は中

立化されている。デニキン軍の残党（ヴランゲリ軍）は壊滅の前夜にある。西欧諸国の革命運動は、その斗争機関である第三インタナショナルをかためながら、もりあがりつつある。そして連合国は、もはやロシアの内政にたいする直接の軍事的干渉を夢見ることができない。連合国に抗する東洋の革命運動は、革命的トルコをその中核としておし出し、斗争機関として行動・宣伝委員会をつくって、成長している。(九六)

簡単にいえば、連合国の予備軍は日に日におとろえ、ソヴェト・ロシアの予備軍は補充されつつある。明らかに、げんざい一九二〇年には、ロシアの敗北する可能性は二年まえにくらべて、比較にならないほどすくない。ロシアが二年まえ連合国の強圧をもちこたえたとすれば、ロシアの予備軍があらゆる斗争分野で成長している現在、ロシアが、なおさらよく持ちこたえるであろうということは、明らかである。

これは、連合国との戦争が終りにちかずいていることを意味するだろうか。われわれが武器をすて、軍隊を解散させて、平和的な労仂にとりかかってもいいということを意味するだろうか。

いや、意味しない。ポーランドとの講和調印という事実を、いやいやながらこらえた連合国は、あらゆる兆候から見て、武器をすてるつもりはない。連合国は南方すなわち外カフカーズ地区に軍事行動の舞台をうつす意図をもっているようである。そのさい連合国のおかこいものになって義務をおわされているグルジアは、たぶん連合国に奉仕をこばまないであろう。

連合国にとっては、この地球にロシアといっしょにいることは、明らかにせま苦しい。地球に平和を確立するためには、両方のがわのうち、どちらかがほろびねばならぬ。問題がこういうふうに提起されるなら、連合国が問題をまさにこのように提起するなら（連合国はもっぱらこのように問題を提起しているのだが）、ロシアが武

器をすてえないことは明らかである。逆に、われわれは、新しい打撃をはねかえすために国の全力を発揮させるよう、あらゆる努力をはらわねばならない。わが国の自由と独立の擁護者たる赤軍を強化し強固にし、西欧の社会主義革命を全面的に支持し、自己を解放するために連合国とたたかっている東洋諸国を、全力をあげ、あらゆる手段をつくして支持すること——これこそわれわれの当面の義務であって、われわれが勝利をのぞむなら、われわれは全精力をそそいで、うまずたゆまず、その遂行につとめねばならない。

そして、もしこの義務を良心的に遂行するなら、われわれはうたがいもなく勝利するであろう。

終りにのぞんで、私は、西欧における革命の勝利が、それなしにはきわめて困難になる一つの条件に言及したいとおもう。私が言っているのは、西欧の革命のために食糧の予備をつくり出すことである。問題は、西欧の諸国家(ドイツ、イタリア、その他)が、ヨーロッパに穀物を供給しているアメリカに完全に依存している点である。これら諸国における革命の勝利は、もしブルジョア的アメリカがこれに穀物の供給をこばんだならば(これはまったくありうることである)、革命の翌日からプロレタリアートを食糧危機に直面させるであろう。ロシアは特別な食糧のたくわえをもたないけれども、若干のたくわえはあつめることができるであろう。そして食糧の見通しが、ここにのべたようになる可能性があるのであるから、西欧の同志たちのためにロシアに食糧の予備をつくりあげる問題を、いますぐ提起すべきであろう。この問題にたいし、一部の同志は、とうぜんはらうべき注意をはらっていない。しかし、この問題は、ご覧のとおり、西欧における革命の進行とその結末に、きわめて重要な意義をもちうるのである。

『コンムニスト』（ヴラヂカフカズ）第一七二号
一九二〇年十月三十日

プロレタリア独裁の三年間

バクー・ソヴェトの祝賀会での報告
一九二〇年十一月六日

同志諸君！　報告にうつるまえに、私は、諸君、すなわちバクー労働者代表ソヴェトへ、アゼルバイジャン革命委員会とその首領、同志ナリマノフへ、ロシア・ソヴェト全ロシア中央執行委員会および人民委員会議のあいさつをつたえたいとおもう。また、共和国革命軍事会議の名において、アゼルバイジャンを解放し、いま身をもってその自由をまもっている赤軍第十一軍に、熱烈なあいさつをおくる。（拍手）

ソヴェト権力が活動してきた過去三年間のロシアの生活では、うたがいもなく、ロシアの国際的地位の問題が根本問題である。ソヴェト・ロシアを人が目にもとめず、ものの数にもいれず、承認もしていなかった時期が、あった。それは、ロシアにソヴェト権力がたてられた日から、ドイツ帝国主義が壊滅するまでの、第一の時期で

あった。この時期には、西欧の帝国主義者、すなわちイギリス連合とドイツ連合とは、互に相手のことで手いっぱいだったので、ソヴェト・ロシアには目もくれなかった。いわば、それどころではなかった。

第二期は、ドイツ帝国主義の壊滅とドイツ革命の開始から、デニキンがトゥーラの門口に立って、ロシアにたいする大攻勢をしかけた瞬間までの時期である。この時期は、ロシアの国際的地位から見て、連合国、すなわちイギリス＝フランス＝アメリカ連合がドイツを壊滅させたのち、自由になったその勢力をあげてソヴェト・ロシアにふりむけた点に特徴がある。それは、――あとでは神話的なものになった――十四カ国の同盟が、われわれをおびやかしていた時期である。

第三期は、いまわれわれがすごしている時期であって、われわれが社会主義の大国として注目され、事実上承認されているだけでなく、また、いささかおそれられてもいる時期である。

第一期

三年まえ、一九一七年の十月二十五日（新暦では十一月七日に）に――ボリシェヴィキの、ペトログラード・ソヴェトの活動家の小さな一団があつまって、ケレンスキーの宮殿を包囲すること、すでに崩壊していた彼の軍隊をとりこにして、そのときひらかれていた労仂者・農民・兵士代表ソヴェト第二回大会に権力をひきわたすことを決定した。

そのころ多くの人々はわれわれを、せいぜい変人、まかりまちがえば「ドイツ帝国主義の手さき」と見て

いた。

国際情勢から見れば、この時期は、ソヴェト・ロシアの完全な孤独の時期とよぶことができよう。われわれを包囲したブルジョア諸国家が、ロシアに敵意をもってのぞんだばかりではなく、また西欧における(384)われわれの社会主義的「同志」でさえ、不信の念をもってわれわれをながめていた。

そのころソヴェト・ロシアが、ともかく国家として維持されたのは、西欧の帝国主義者がお互のあいだの深刻な斗争にいそがしかったからにほかならない。それだけでなく彼らは、ロシアにおけるボリシェヴィキの実験にたいして皮肉な態度でのぞんだ。彼らは、ボリシェヴィキが、ほうっておいてもひとりでに死ぬだろう、とあてにしていたのである。

国内情勢から見れば、この時期は、ロシアにおける旧世界が破壊された時期、旧ブルジョア権力の全機構が破壊された時期として特徴ずけられる。

プロレタリアートは古い国家機関を単に手にいれて、これをうごかすことはできないということを、われわれは理論的に知っていた。マルクスによってあたえられた、このわれわれの理論的命題は、ツァーリの官吏、事務員およびプロレタリアートの上層のある一部がサボタージュをやった期間、すなわち国家権力のびん乱にみちみちた期間に、われわれがぶっつかったとき、事実によって完全に裏ずけられた。

ブルジョア国家の第一の、もっとも重要な機構——旧軍隊とその将官団——は、とりこわされた。これは高いものについた。それをこわしてしまった結果、われわれはいちじまったく軍隊をうしない、ブレスト講和に調印しなければならなかった。だが、そのほかに活路はなかった。歴史は、プロレタリアートを解放するために、こ

れ以外のどのような道も、われわれにあたえなかったのである。

さらにまたブルジョアジーの手ににぎられていた、もう一つの、おなじように重要な機構——官僚機構、ブルジョア行政機構——も、破壊され、とりこわされた。

国の経済的管理の面でもっとも特徴的なことは、ブルジョアジーの経済生活の中枢神経である銀行を、ブルジョアジーの手からとりあげたことである。銀行はブルジョアジーの手からとりあげられ、ブルジョアジーは、いわば、ふぬけの状態となった。その後、経済生活の古い機構をうちこわす仕事とブルジョアジーの収奪、すなわちブルジョアジーから工場をうばい、これを労仂者階級の手にひきわたす仕事が進行した。最後に、古い食糧機構の破壊と、穀物をあつめて住民に配給することのできる、新しい機構をつくる試みがなされた。結びとして、憲法制定議会が廃止された。これらこそソヴェト・ロシアがブルジョア国家機構を破壊するために、この時期に実施せざるをえなかった、ほとんどすべての方策である。

第二期

第二期は、イギリス＝フランス＝アメリカ連合が、ドイツ帝国主義をうちやぶったのち、ソヴェト・ロシアの制裁にとりかかった時からはじまる。

国際的見地からすれば、この時期は、連合国の勢力とソヴェト・ロシアの勢力のあいだの、公然たる戦争の時期として特徴ずけられる。第一期には、われわれは注目もされず、笑いものにされたり、あざけられたりしてい

たが、この時期になると反対に、全資本主義世界を崩壊させる恐れのある、ロシアのいわゆる「無政府状態」をおわらせようと、あらゆる暗黒勢力が大騒ぎした。

(386)国内関係の見地からすれば、この時期は、建設の時期、すなわち古いブルジョア国家機構の破壊がだいたい完了して、新しい建設時代がはじまった時期、主人からうばいとった工場が整備され、真の労働者管理がうちたてられ、ついでプロレタリアートが管理から直接支配にうつっていった時期、破壊された食糧機構のかわりに新しい機構が建設され、中央および地方の破壊された鉄道機構のかわりに新しい諸機関が建設され、古い軍隊のかわりに新しい軍隊が建設された時期として、特徴ずけねばならない。

この時期の建設が、全体として、うまくいかなかったことをみとめねばならない。おもな建設的エネルギー、このエネルギーの十分の九は、赤軍の創設にむけられているからである。なぜなら連合国勢力との必死の斗争では、ソヴェト・ロシアの存立そのものが問題であり、この時期には、その存立は、ただ強力な赤軍の力によってしか、まもりぬくことができなかったからである。そして、われわれの努力は徒労におわらなかったと言わなければならない。なぜならユデーニッチ、コルチャックにうちかった赤軍が、すでにこの時期に、その威力を十分にしめしたからである。

ロシアの国際的地位という見地からすれば、この第二期は、ロシアの孤独が、孤立がしだいになくなっていった時期とよぶことができる。ロシアの同盟者がぼつぼつあらわれはじめた。ドイツ革命は、リープクネヒトのグループを代表として、新しい共産党の土台をきずき、結集した労働者のカードル、共産主義的カードルを生み出した。

フランスでは、以前は目にもとまらぬ小さなグループであったロリオのグループが、共産主義運動の有力なグループになっていった。イタリアでは、最初は弱かった共産主義的傾向が、イタリア社会党のほとんど全部を、その大多数をつかんだ。

東洋では、赤軍の成功にともなって動揺がはじまった。この動揺は、たとえばトルコでは、連合国とその同盟者にたいする直接の戦争にかわった。

(337)

ブルジョア諸国家自身は、この時期になると、すでに第一期におけるような、ロシアに敵意をもつ強固に団結した集団ではなくなった。ソヴェト・ロシア承認問題にかんして、連合国自体の内部で、時とともに意見の相違がつよまっていったことについては、いまさら言うまでもない。ロシアと交渉せよ、ロシアと協定せよという声がひろがりはじめた。たとえばエストニア、ラトヴィア、フィンランドというような国々が、それである。

最後に、イギリスとフランスの労仂者のあいだにひろまった「ロシアから手をひけ」というスローガンは、ロシアの内政にたいする連合国の直接的武力干渉を不可能にした。連合国は、イギリス＝フランス兵のロシア派遣をあきらめざるをえなかった。連合国は、ロシアにたいし、他国の軍隊を利用するだけで満足しなければならなかったが、しかし、これをおもうままに動かすことはできなかった。

第三期

第三期は、いま現にわれわれがすごしているこの時期である。この時期は、過渡期とよぶことができる。この

時期の前半の特徴は、ロシアが主要な敵デニキンをうちやぶって、戦争の終結を見こしながら、戦争目的に適応していた国家機構を新しい軌道に、すなわち経済建設の軌道にのせるという目標をたてたことである。以前は、「すべてを戦争のために」、「すべてを赤軍のために」、「すべてを外敵にたいする勝利のために」と言われたものであるが、今では、「すべてを経済生活を強固にするために」と言われるようになった。それにもかかわらず、デニキンを撃滅し、ウクライナから彼をおいはらったのちにはじまった第三期のこの時期は、ロシアにたいするポーランドの攻撃によって中断された。このばあい連合国は、ソヴェト・ロシアが経済的に強固になり、世界最強の大国となるのを、さまたげるという目的を追求していた。連合国はそうなるのをおそれていた。そこでポーランドをロシアにけしかけたのである。

(388)

すでに経済建設に適応するようにふりかえられていた国家機構は、これをあらためて建てなおさねばならず、ウクライナ、ウラル、ドンにつくられていた労働軍は、それを中心に戦斗部隊を結成してポーランドにたいして派遣するために、あらためて軍事的基調に建てなおさねばならなかった。この時期は、ポーランドがすでに中立化され、われわれがさしあたり新しい外敵をもたなくなったので、終りをつげつつある。ただひとり当面している敵、それはヴランゲリに代表されるデニキン軍の敗残部隊であるが、これはわが同志ブヂョンヌィが、現に撃滅しつつある。

今では、ソヴェト・ロシアが、ほとんど一日で地の底から生まれたように赤軍をつくりあげた、疲れを知らぬ働き手たちの全精力を、経済建設の道にふりむけ、工場、農業、食糧機関を立ちあがらせるために、すくなくともしばらくのあいだは、かなりの息つぎをうるものと予想してもいい根拠がある。

対外的、国際的関係の見地からすれば、第三期の特徴は、人がロシアに目もくれないという態度をやめただけでなく、またチャーチルが、それでロシアをおどかそうとした神話的な十四ヵ国までも、たいへんな努力で舞台におし出してきて、ロシアとたたかいはじめただけでなく、また、なんどかたたかれ、ロシアで、あなどることをゆるさぬ、もっとも偉大な社会主義的人民的強国が成長しているのを感じて、むしろロシアをいささかおそれはじめた点にある。

(389)

国内関係の見地からすれば、この時期の特徴は、ロシアがヴランゲリの壊滅後、自由に腕をふるえるようになり、国内建設に全力をそそいでいる点にある。しかも、いますでに、われわれの経済機関が、第二期におけるよりずっとよく、ずっと堅実に活動していることがみとめられる。一九一八年の夏には、モスクワの労働者は二日に一度、豆粕入りのパンを八分の一フント〔約五〇グラム〕うけとっていた。このあわれな、この苦しい時期はすぎさった。モスクワの労働者は、ペトログラードの労働者と同様に、いま一日に一フント半〔約六〇〇グラム〕のパンをうけとっている。これはすなわち、われわれの食糧機関が整備され、改善され、穀物の集荷をまなびとったことを意味する。

国内の敵にたいするわれわれの政策についていえば、それは三つの期間を通じておなじであったが、それはそうでなければならないし、現にそうである。すなわちプロレタリアートのあらゆる敵を弾圧する政策である。もちろん、この政策を「全般的自由」の政策と考えてはならない。——プロレタリアートの独裁の時代には、全般的自由などというものはない。すなわち、わが国では、ブルジョアジーにとっての言論の自由、出版の自由、その他の自由は、なに一つありえない。われわれの国内政策は、要するに、ブルジョア階級の生き残りどもが、最

小限の自由をもちえないように、都市・農村のプロレタリア層に最大限の自由をあたえる点にある。
ここに、プロレタリアートの独裁に立脚する、われわれの政策の本質がある。

(390)

将來の見通し

もちろん過去三年間のわれわれの建設活動は、希望どおりに成功したわけではない。だが困難な、どうにもならない活動の諸条件に注意せねばならない。これらの条件は、まぬかれがたいものであり、あらそう余地のないものである。だが、それはあくまで克服すべきものである。

第一に、われわれは戦火のもとで建設せねばならなかった。一方の手では家をたてながら、もう一方の手では自分がたてている、その家を防衛する石工を想像してみるがよい。

第二に、われわれは、すべてのものが、私的な利益を追求して、国家全体のことなど気にかけず、経済を国家的な規模で計画的に組織する問題など、提起しようともしないブルジョア経済を建設していたのではない。いな、われわれは社会主義社会を建設していたのである。それは、社会全体の需要が計算され、経済が計画的、意識的に、全ロシア的規模で組織されねばならないということを意味する。この任務が比較にならぬほど複雑で、困難なものだということは、うたがいない。

だからこそ、われわれの建設活動は、最大限の成果をあげえなかったのである。

このような事態のもとでは、われわれの見通しは明白である。すなわち、われわれは外敵を一掃する境目にた

っており、われわれの全国家機構を軍事的軌道から経済的軌道にうつす境目にたっている。外交政策においては、われわれは平和に同意する。われわれは戦争の味方ではない。しかし、もしわれわれに戦争をしいるものがあれば、また二、三の情報がかたっているように、連合国が軍事行動の舞台を南方、外カフカーズにうつそうとつとめているとすれば、われわれになんどかたたかれたあの連合国が、われわれにもういちど戦争をしいるなら、われわれが武器を手からはなさず、部隊を解散させもしないことは自明である。われわれは、これまでとおなじように、あらゆる努力をはらって、赤軍が健在で、つねに戦斗準備ができているように、また赤軍が、これまでと同様に、ソヴェト・ロシアを大胆に、かつ勇敢に敵からまもることができるようにするであろう。

ソヴェト権力の過去をふりかえると、おもわず三年まえ、一九一七年十月二十五日の夜をおもい出さずにはいられない。当時、われわれ、同志レーニンを先頭とするボリシェヴィキの小さなグループは、その手にペトログラード・ソヴェト——このソヴェトは当然ボリシェヴィキ的であった——と、ささやかな赤衛軍をもっていただけであり、わずか二十万から二十五万人くらいの、まだ十分きたえあげられていない、小さな共産党をうごかしていただけであるが、このわれわれの小さなグループが、その夜ブルジョアジーの代表者を権力からしりぞけ、労仂者・農民・兵士代表ソヴェト第二回大会に権力をひきわたしたのであった。

それいらい、三年がすぎた。

すると、どうだろう。このあいだにロシアは、火とあらしをくぐりぬけ、世界のもっとも偉大な社会主義強国にきたえあげられていたのである。

そのころ、われわれの手中にあったのはペトログラード・ソヴェトだけであったが、三年すぎた今では、ロシ

アのすべてのソヴェトが、われわれのまわりに結集している。
われわれの敵が準備していた憲法制定議会のかわりに、いまや、われわれはペトログラード・ソヴェトからそだってきた、全ロシア・ソヴェト中央執行委員会をもっている。
当時われわれは、ペトログラードの労仂者からなる、小さな親衛兵をもっていた。彼らは、ペトログラードで蜂起した士官学校生徒をしまつすることはできたが、まだ弱かったので、外敵とたたかうことはできなかった。ところが今では、われわれはソヴェト・ロシアの敵を粉砕し、さきにはコルチャックとデニキンをうちやぶり、いままた、わが騎兵隊の試錬をへた司令官、同志ブヂョンヌィの手によって、ヴランゲリ軍の最後の残存部隊を粉砕している、いく百万の栄誉ある赤軍をもっている。

(392)

当時、三年まえには、われわれはまだ十分きたえあげられていない、小さな共産党——党員総数およそ二十万ないし二十五万の——をもっていたのだが、三年のちの今、ソヴェト・ロシアがあらしと火をくぐりぬけたのちには、七十万の党員を擁する党、鋼鉄でつくった党、どんな瞬間にも党員の戦列を建てなおすことができ、どのような党活動にも数十万の党員を集中することのできる党、戦列の乱れをおそれることなく、中央委員会の手のちょっとした合図だけで、その戦列を建てなおし、敵に立ちむかうことのできる党を、われわれはもっている。
当時、三年まえ、われわれは、われわれに同情をよせる小さな、グループを西欧にいくつかもっていただけであった。フランスではロリオのグループ、イギリスではマックリーンのグループ、ドイツでは資本主義の悪党にころされたリープクネヒトのグループが、それであった。ところが三年をへた今では、われわれのまえに国際革命運動の最大の組織——ヨーロッパの主要な党、ドイツ、フランス、イタリアの共産党を獲得した第三共産主義

インタナショナルがそだっている。いまや、われわれは第二インタナショナルを粉砕した共産主義インタナショナルという、国際社会主義運動の基本的中核をもっている。

そして第二インタナショナルの首領カウツキー氏が、革命によってドイツからたたき出され、おくれたチフリスで、グルジアの社会居酒屋のもとに隠れ家をもとめざるをえなかったのも、けっして偶然ではない。(九七)

最後に、われわれは三年まえには、東洋においてただ革命にたいする冷淡な態度にしか出あわなかったものだが、今ではその東洋も動揺しはじめている。東洋には、連合国にたいし、帝国主義にたいしてむけられた、いくたの解放運動が、われわれの眼前にある。われわれは、ブルジョア革命的な、だがしかし武器を手にして、連合国にたいする斗争を遂行しているケマル政府という、そのほかのすべての植民地・半植民地を、自分のまわりに結集する革命的中核をもっている。

三年まえには、われわれは東洋が動揺しようとは夢想さえできなかったのに、今では、われわれはブルジョア革命のトルコという東洋の革命的中核をもっているばかりでなく、さらに東洋の社会主義的機関――「行動・宣伝委員会」をもっている。(393)

これらすべての事実、――われわれが三年まえには、革命的な点でどんなに貧しかったか、そして今では、どんなに富んだものになったか、ということをものがたる、これらすべての事実は、われわれに、ソヴェト・ロシアは生きながらえるであろう、それは発展をつづけ、その敵にうちかつであろう、ということを確認する根拠をあたえている。

われわれの道が容易でないことはうたがいないが、困難がわれわれをおどろかせはしないことも

また、うたが

いない。ルーテルの言葉(九八)を言いかえて、ロシアはつぎのように言うことができるであろう。

「ここ、古い資本主義世界と新しい社会主義世界との境界に、私はたっている。ここで、この境界で、私は旧世界を粉砕するために、西欧のプロレタリアの努力と東洋の農民の努力とを結合する。歴史の神よ、われをたすけたまえ。」

『コンムニスト』(バクー)第一五七、一六〇号
一九二〇年十一月七日、十一日

ダゲスタン諸民族大会（九九）

一九二〇年十一月十三日

一　ダゲスタンのソヴェト自治制にかんする宣言

同志諸君！　最近まで南部と西部で、外敵にたいする、ポーランドとヴランゲリにたいする戦争に忙殺されていた、ロシア社会主義連邦共和国のソヴェト政府は、ダゲスタン人民をわきたたせている問題の解決に、その力をそそぐ可能性も、時間もなかった。

ヴランゲリ軍が粉砕され、あわれむべきその残党どもがクリミアへ逃走し、そしてポーランドとは講和が締結された今日、ソヴェト政府は、ダゲスタン人民の自治の問題をとりあげることができる。

かつてロシアにおける権力はツァーリ、地主、工場主の手中にあった。かつてロシアはツァーリと絞刑吏のロシアであった。ロシアは旧ロシア帝国にはいっていた諸民族を抑圧することによって生きていた。ロシアの政府は、ロシア民族をもふくめて、その抑圧する諸民族の血と汗によって、その力によって生きていた。

これは、あらゆる諸民族がロシアをのろっていた時代のことであった。だが、いまや、この時代は過去へさった。この時代はほうむりさられた。それを復活させることは、けっしてできない。

この抑圧的なツァーリ・ロシアの残骸のうえに、新しいロシア――労働者・農民のロシアが成長したのである。

ロシアの構成員となった諸民族の新しい生活がはじまった。ツァーリと金持、地主と工場主のくびきのもとに苦しんできた、これら諸民族の解放の時代がはじまった。

権力が労働者・農民の手にうつって、権力が共産主義的となった、十月革命ののちにはじまった、新しい時代は、たんにロシア諸民族の解放を特徴としただけではなかった。新しい時代は、さらにすすんで西欧帝国主義者の圧迫に苦しみつつある東洋諸民族もふくめて、一般にあらゆる民族の解放の任務を提起した。

ロシアはわが国だけでなく、全世界の諸民族をもうごかしはじめている、解放運動のてことなった。

ソヴェト・ロシア――それは全世界の民族に抑圧者のくびきから解放される道をてらすたいまつである。

いまやロシア政府は、敵にたいする勝利によって、国内発展の諸問題をとりあげることができるようになったので、諸君につぎのとおり宣言することを必要とみとめた。すなわちダゲスタンは、自治制をしかねばならぬ。ダゲスタンは、ロシアの諸民族と兄弟のような結びつきを維持しながら、内部的自治をえるであろうと。

ダゲスタンは自分の特質、自分の風俗・習慣にしたがって統治されねばならない。

われわれは、ダゲスタンの諸民族のあいだでは、シャリアート〔回教徒の家族相続法〕が重要な意義をもっているときいている。またソヴェト権力の敵が、ソヴェト権力はシャリアートを禁止する、といううわさをひろめていることも、われわれの耳にたっしている。

私はここにロシア社会主義連邦ソヴェト共和国政府の名において、このようなうわさは事実無根であることを声明する権限をもっている。ロシア政府は、自分の法律と習慣にもとずいて、みずから統治する完全な権利を、おのおのの民族にあたえているのである。

ソヴェト政府は、シャリアートを、ロシアに居住する他の諸民族のもとにも存在する慣習法と同様に、法的権限のある慣習法とみとめる。

もしダゲスタン人民が自分の法律と習慣を維持したいとのぞむならば、それらは保存されなければならない。それと同時に、つぎのような声明をすることが必要であると考える。すなわちダゲスタンの自治制は、ソヴェト・ロシアからダゲスタンを分離することを意味しないし、また、そうであってはならない。自治は独立ではない。ロシアとダゲスタンは相互の結びつきを維持しなければならない。なぜなら、こうしたばあいにはじめてダゲスタンは自分の自由を維持することができるからである。ソヴェト政府は、ダゲスタンに自治をあたえるにあたって、現地の仂き手のあいだから自分の民族を愛する、誠実で、献身的な人々をえらび出し、経済上ならびに行政上のダゲスタンの、すべての管理機関を彼らに委託しようという目的をいだいている。こうしてのみ、ただこのようにしてのみ、ダゲスタンにおけるソヴェト権力を人民にちかずけることができるのである。ソヴェト権力は、現地の仂き手をひきつけることによって、より高い文化的段階へダゲスタンをたかめるという目的以外には、どのような目的ももたない。

ソヴェト権力は、無知が人民の第一の敵であることを知っている。だから、もっと多くの学校と現地の言語による行政諸機関を創設することが必要である。

ソヴェト権力は、こうした方法によって旧ロシアが彼らをなげいれたどろ沼——無知と無学からダゲスタンの諸民族をひき出そうとのぞんでいる。(397)

ソヴェト政府の考えでは、ダゲスタンには、トゥルケスタン、キルギーズ共和国およびタタール共和国がえているのと同様な、自治制の確立が必要である。

ソヴェト権力は、ダゲスタン諸民族の代表者たる諸君に提案する。モスクワへ派遣すべき代表を選出し、かの地で、ダゲスタンの自治計画を、最高ソヴェト権力の代表者とともにつくりあげることを、諸君のダゲスタン革命委員会に委任されたいと。

ダゲスタンの南部における最近の諸事件、——その事件では裏切者ゴツィンスキーが、ヴランゲリ将軍、すなわち、デニキンのもとにあって、蜂起者とたたかいながら、北カフカーズの山地人の村々を破壊した、あのヴランゲリの意志の遂行者として、——これらの事件は多くのことをものがたっている。

私は、その赤色パルチザンを代表とするダゲスタン人民が、ゴツィンスキーとの戦いで、自分のソヴェト権力を擁護しながら、まさにそれによって、赤旗にたいする自分の忠誠を立証したことを指摘しなければならない。

もし諸君がダゲスタン勤労者の敵、ゴツィンスキーを放逐するならば、諸君はまさにそれによってダゲスタンに自治をあたえた、最高ソヴェト権力の信頼にこたえるのである。

ソヴェト政府——それは自発的にダゲスタンに自治をあたえる最初の政府である。

われわれは、ダゲスタンの諸民族がソヴェト政府の信頼にそうことを期待する。

ダゲスタン諸民族とロシア諸民族との同盟万才！
ダゲスタンのソヴェト自治制万才！

二　結　語

同志諸君！
ソヴェト権力の最後の敵が撃滅された今日、ソヴェト政府から自発的にダゲスタンにあたえられた自治制の政治的意義は明らかになっている。
そこで、つぎの一つの事情に注意をむける必要がある。ツァーリ政府や世界の一般にブルジョア的な、すべての政府が通常、ただ困難な情勢によってよぎなくさせられたばあいに、はじめて人民に譲歩し、あれこれの改革をあたえているのに反して、ソヴェト権力は、反対に、自己の成功の頂点にあって、まったく自発的にダゲスタンに自治制をあたえるのである。
これは、ダゲスタンの自治制が、ダゲスタン共和国の生活のなかに、その確実な、破壊しがたい土台としてはいりこむであろうということを意味する。なぜなら、ただ自発的にあたえられるものだけが確実だからである。
終りにのぞんで、私は強調したい。ソヴェト権力によって諸君にしめされた、あの高い信頼は、われわれの共同の敵にたいする将来の斗争において、ダゲスタンの諸民族によって、みごとに裏書きされるであろう。
自治のソヴェト・ダゲスタン万才！

『ソヴェツキー・ダゲスタン』〔『ソヴェト・ダゲスタン』〕第七六号
一九二〇年十一月十七日

(399)

テレク州諸民族大会（二〇〇）

一九二〇年十一月十七日

一　テレク州のソヴェト自治制にかんする報告

同志諸君！　本日の大会は、テレク州諸民族の生活の機構と、カザック人にたいする彼らの関係とについての、ソヴェト政府の意志を明示するために召集されたものである。

第一の問題は、カザック人にたいする関係である。

生活がしめしているように、同一の行政単位の範囲内で、カザック人と山地人（ゴーレツ）とが同居することは、はて知れぬ紛争をまねいた。

生活がしめしているように、相互侮辱と流血の惨事をさけるためには、山地人大衆からカザック人大衆を分離する必要がある。

生活がしめしているように、相互のあいだに境界をさだめることは、両者にとって有益である。

この理由にもとずいて、カザック人の大多数を特別の県にあつめ、山地人の大部分を自治的な山地人ソヴェト共和国にあつめ、テレク川を両者の境界とさだめることが、政府によって決定された。

ソヴェト権力は、カザック人の利益がふみにじられないように努力した。カザック人同志諸君、ソヴェト権力は諸君の土地を没収しようとはおもわなかった。ソヴェト権力には、ただ一つの考え——すなわちツァーリの将軍や金持のくびきから諸君を解放すること——があっただけである。ソヴェト権力は、革命の当初から、この政策をとってきたのである。

ところがカザック人は、まったくあやしい行動をとった。彼らはいつもそっぽをむいて、ソヴェト権力を信頼しなかった。彼らは、あるいはビチェラーホフと関係を結び、あるいはデニキンやヴランゲリと交際した。しかも、さいきんポーランドとの講和がまだできないで、そのうえヴランゲリがドネツ炭田地方を攻撃していた、その瞬間に、テレク・カザック人の一部は背信的に——こうしか表現のしようがないが——後方からわが軍隊にたいして蜂起したのである。

私が言っているのは、バクーをモスクワから遮断する目的をもった、スンジェンスカヤ線の最近の蜂起についてである。

カザック人は、この企てにいちじ成功した。

この瞬間に山地人は、カザック人にとって恥ずかしいことには、ロシアのいっそうりっぱな市民であることをしめした。

ソヴェト権力はながいあいだ辛抱してきたが、どんながまんにも限度がある。そこで、カザック人の若干のグ

ループが裏切者となったその結果として、彼らにたいしてきびしい措置をとらねばならなくなった。すなわち罪をおかしたカザック村落の住民を移住させ、チェチェン人をそこに植民させなければならなくなったのである。山地人は、今こそテレク・カザック人を侮辱してもいいし、彼らを略奪し、家畜をうばい、女たちをはずかしめてもいい、というふうにこのことを理解した。

私は、もし山地人がそうおもっているなら、とんでもない誤解だと断言する。ソヴェト政府は、カザック人であろうが、山地人であろうが、民族の差別にかかわりなく平等に、すべてのロシア市民を擁護するということを、山地人は知らねばならない。もし山地人が乱暴をやめないなら、ソヴェト権力は、革命的権力のあらゆる厳格さで、彼らを罰するであろうということを銘記すべきである。

将来、特定の県へ退去するものも、山地人自治共和国の領域に残留するものも、カザック人の運命は、まったく彼ら自身の行状にかかっている。もしカザック人が労農ロシアに抵抗する背信的騒擾をやめないならば、政府はふたたび弾圧しなければならなくなるであろう、と私は言わざるをえない。

しかし、もしカザック人がこんごロシアの誠実な市民としてふるまうならば、カザック人の頭から毛筋一本もなくなりはしないことを、私はここに、この大会の全員のまえで宣言する。

第二の問題は、テレク州の山地人にたいする関係である。

山地人諸君！　ツァーリとツァーリの将軍どもが諸君の権利をふみにじり、諸君の自由を破壊していたロシアの歴史における古い時代――抑圧と奴隷制のこのような時代は、永遠に姿をけした。ロシアにおける権力が労仂者・農民の手にうつった今日、これからはロシアには圧迫されるものは、もはや存在してはならないのである。

(402)

ロシアは、まさに諸君に自治制をあたえることによって、吸血鬼たるツァーリと、抑圧者たるツァーリの将軍どもが、諸君からうばった自由を諸君にかえすのである。これは、諸君の内部的生活が、もちろん一般的なロシア憲法のわくのうちにおいてではあるが、諸君の生活様式、気風、習慣にもとずいて建設されねばならないことを意味する。

どの民族も——チェチェン人、イングーシ人、オセット人、カバルダ人、バルカル人、カラチャエフ人も、ならびにまた山地人の自治区域に残留したカザック人も、それぞれの習慣と特質に適応した方法で、それぞれの民族の問題を処理する、それ自身の民族のソヴェトをもたなければならない。ソヴェト・ロシアの忠実なむすこであったし、今でもそうであるよそもの、——ソヴェト権力が、つねに山のように後だてになるであろう、これらの人々については、言うまでもない。

もしシャリアートが必要であろうということが証明されるならば、シャリアートは存続させられるであろう。ソヴェト権力は、シャリアートに宣戦を布告しようとはおもっていないのである。

もし反革命抑圧非常委員会および特務部の諸機関を、住民の習慣と特質に適用しえないことが証明されるならば、この分野にも所要の修正がくわえられねばならないことは、明らかである。

諸民族ソヴェトの先頭には、山地人共和国のソヴェト大会で選出され、かつモスクワと直接に結びついた山地人共和国人民委員会議がたたなければならない。

これは、山地人が不安そうにたずねるように、山地人がこれによってロシアからきりはなされ、ロシアは彼らをすて、赤軍はロシアへひきあげてしまうことを意味するだろうか。いな、意味しない。ロシアは、テレク流域

地方の小民族が、世界の強盗どもとその手さき――グルジアへ逃亡し、山地人の勤労者にたいして、そこから陰謀をたくらんでいる山地人の地主どもにたいして、単独では自分自身の自由をまもりとおすことができないであろうということを理解している。自治は分離を意味するものではなくて、自治的な山地人諸民族とロシアの諸民族との同盟を意味する。この同盟こそ、山地人のソヴェト自治制の基礎である。

同志諸君！　これまでは、諸政府が弱くなって、自国の諸民族の同情を必要とした困難な時期にだけ、諸民族の利益になる、あれやこれやの改革や譲歩をするのが通例であった。ツァーリ政府や一般にブルジョア的な政府はつねにこのようにふるまったのである。彼らとはちがってソヴェト政府は、べつなやりかたで行動している。ソヴェト政府は、困難な瞬間ではなく、戦場でかがやかしいてがらをたてた瞬間、クリミアで帝国主義者の最後の支柱にたいして完全に勝利をおさめた瞬間に、諸君に自治をあたえているのである。

生活は、危機の瞬間に諸政府によってあたえられるものは不確実で、あてにならないということをしめしている。なぜなら、それらのものは危機の瞬間がすぎされば、いつでもとりあげられるからである。もし改革と自由が一時的な、瞬間的な必要の圧力によってあたえられるのではなくて、改革の利益を完全に自覚しながら、また政府の力と権威が開花しているときにあたえられるならば、ただそうしたばあいにだけ、改革と自由は堅固なものとなりうるのである。いまソヴェト政府は、諸君の自由を諸君にかえすにあたって、まさにそのようにふるまっているのである。

山地人諸君、ソヴェト権力は、この行為によって諸君を完全に信頼し、諸君の自治能力を信頼していることをつげたい。

諸君が労農ロシアのこの信頼にこたえることができるものと期待する。

テレク州諸民族とロシアの諸民族との同盟万才！

二　結　語

同志諸君！　私は自治制の諸問題について若干の覚え書をうけとった。私はそれにこたえなければならない。

第一の問題は、山地人ソヴェト共和国の地域的境界の問題である。共和国の境界は一般的には確定している。すなわち、それは北はテレク川、残りの方角ではテレク州の諸民族、――チェチェン人、イングーシ人、カバルダ人、オセット人、バルカル人、カラチャエフ人の居住地域を境界とし、テレク川のこちらがわのよそもの、およびカザック人の村落をふくんでいる。これが山地人自治共和国の領域を形成するであろう。境界のくわしい見取図にかんしていえば、それは山地人共和国および隣接諸県の代表者からなる小委員会によって確定されるべきである。

第二の問題は、どこが山地人自治共和国の中心となるか、また共和国の構成のなかには、グローズヌイおよびヴラヂカフカズの両都市がはいるか、ということである。もちろん、はいる。共和国の首都としては任意の都市を指定することができる。私の個人的な考えでは、テレク州のすべての民族と関係のある中心としては、このような中心はウラヂカフカズであるべきだとおもう。

第三の問題は、自治制そのものの範囲の問題である。どのような型の自治制が山地人共和国にあたえられるか、

(404)

という質問が私に出されている。

自治制にもいろいろある。すなわちカレリア人、チェレミス人、チュヴァシ人、ヴォルガ沿岸地方のドイツ人のもとにおけるような、行政的な自治制や、バシキール人、キルギーズ人、ヴォルガ沿岸地方のタタール人のもとにおけるような、政治的な自治制がある。山地人共和国の自治制は政治的な、もちろんソヴェト的な自治である。これはバシキリア、キルギジア、タタリア型の自治制である。それは、山地人ソヴェト共和国はソヴェト大会で選出されたソヴェト中央執行委員会をいただくであろうということを意味する。中央執行委員会はモスクワと直結する人民委員会議を選出する。共和国は連邦共和国の一般資金から資金の供給をうけるであろう。経済事務および軍事をつかさどる人民委員部は、それに対応する中央の人民委員部と直結するであろう。その他の人民委員部、すなわち司法、農業、内務、教育などの人民委員部は、全ロシア中央執行委員会と結合する山地人ソヴェト共和国中央執行委員会に従属するであろう。外国貿易および外交問題は、完全に中央権力の手中におかれるであろう。

さらに自治制実施の時期にかんする問題がある。くわしい規定、あるいは学者ふうに言えば、共和国の「憲法」を作成するためには、モスクワで政府の代表者とともに、山地人自治共和国憲法を作成することのできるような代表者を、各民族からひとりずつ選出することが必要である。

諸君は、本大会でそのための代表者を、チェチェン人、イングーシ人、オセット人、カバルダ人、バルカル人、カラチャエフ人、および山地人自治共和国にはいるカザック村落から一名ずつ、つごう七名選出するのがよいであろう。

私に民族ソヴェトへの選挙制度について質問が出されている。選挙は憲法の規定にしたがって施行されねばならない。すなわちソヴェトへの選挙権は、勤労者だけにあたえられる。ソヴェトは勤労者のものでなければならない。

わがロシアでは、はたらかざるものは食うべからずと考えられている。諸君は、はたらかざるものは選挙すべからずと声明すべきである。これがソヴェト自治制の根本である。ブルジョア自治制とソヴェト自治制との相違は、ここにある。

つぎの問題は、軍隊にかんするものである。

軍隊は無条件に共同でなければならない。なぜなら山地人共和国は、それ自身の小さな軍隊では自由を擁護することはできないであろうし、また連合国から資金を援助される軍隊に対抗することは、どうしてもできないであろうからである。

演説をおわるにあたって、私は自治制が諸君に、山地人にあたえることのできる根本的なものをしめしたいとおもう。

一生涯山地人を抑圧してきた根本的な悪は、彼らの立ちおくれ、彼らの無知無学である。ただこの悪の根絶だけが、ただ大衆の広範な啓発だけが、山地人を死滅からすくい、彼らを高度な文化に浴させることができるのである。だからこそ山地人は、その自治共和国において、なにはさておき学校と文化教育施設の建設からはじめなければならないのである。

自治制のすべての意義は、それが、自分の国の統治に山地人をひきいれることにある。ここ、諸君のところに

は、自分の民族を統治することのできる現地の人々は、あまりにもすくない。だから食糧委員会、反革命抑圧非常委員会、特務部、国民経済機関などの官庁に、諸君の風習や言語を知らないロシア人がはたらいているのである。国の統治のあらゆる分野に、諸君の仲間がひきいれられなければならない。ここで言っている自治制とは、全統治機関に諸君の言語、諸君の習慣を知る、諸君の仲間がはいるという意味に理解されるべきである。

自治制の意義は、ここにある。

自治制は諸君に自分自身の足であゆむことをまなばせねばならない、——自治制の目標は、ここにある。自治制の成果はすぐにはあらわれないであろう。一日で現地の人々から国家統治の経験ある働き手をつくり出すことはできない。だが二—三年もたたないうちに、諸君は自国の統治になれ、自分たちのあいだから、教師、経営活動家、食糧調達員、耕地整理員、軍人、裁判官および一般に党およびソヴェトの働き手を輩出させるであろう。そのときこそ諸君は、自治を習得したことがわかるであろう。

自国を統治することを諸君におしえ、自国を統治するだけでなく、自己の仇敵にうちかつことをまなんだロシアの労働者・農民と同様の自覚を、諸君にあたえる山地人の自治制万才！

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』、第三九号、四〇号
一九二〇年十二月八日、十五日

(408)

カフカーズの状況

『プラウダ』記者との会談

南部派遣からかえってきた同志**スターリン**は、カフカーズの状況について本紙記者と会談し、つぎのようにのべた。

——革命にとってカフカーズのもつ重要な意義は、そこが原料、燃料、食糧の供給地であるということだけでなく、ヨーロッパとアジアとのあいだ、また、とりわけロシアとトルコとのあいだにあるその位置によっても、さらにまた経済上、戦略上、もっとも重要な道路（バツームーバクー、バツームータヴリーズ、バツームータヴリーズーエルゼルーム）の存在によっても規定される。

こうしたことはみな、げんざい黒海のかぎであるコンスタンチノープルを支配し、外カフカーズをへて東洋へ通じる直通路を維持しようとのぞんでいる連合国が、考慮していることである。

けっきょく、だれがカフカーズをかためるか、だれが石油と、アジアの奥ふかくはいりこんだもっとも重要な道路とを利用することになるか、革命か、それとも連合国か、——ここに問題のすべてがある。

アゼルバイジャンの解放は、カフカーズにおける連合国の立場をいちじるしくよわめた。トルコの連合国との戦いは、(409)同様な結果をもたらした。それにもかかわらず連合国はあきらめずに、カフカーズに自分のくもの網をはりめぐらしている。

チフリスが反革命活動の根拠地になったこと、いうまでもなく連合国の資金とブルジョア的グルジアの援助のもとに、アゼルバイジャン、ダゲスタンおよびテレク州の山地人にブルジョア政府をつくらせたこと、ケマル一派にとりいって、トルコの保護下にカフカーズ諸民族の連邦をつくるという構想を説教していること、連合国の細工でペルシアの内閣がひんぱんに更迭され、ペルシアにはインド土民兵が充満していること、——こうしたことやこれに似た多くのことは、連合国の古おおかみがねむってはいないことを、ものがたっている。ヴランゲリの壊滅以後、この方向をめざす連合国の手さきの活動がいちじるしく強化され、熱狂的性格をおびてきたことはうたがいない。

カフカーズでは、連合国にはどういう成功の機会があり、また革命にはどういう成功の機会があるだろうか。

連合国の成功の機会は、たとえばダゲスタンおよびテレク州ではゼロにおちたということは、うたがいない。ヴランゲリの壊滅と、ダゲスタンおよびテレク州におけるソヴェト自治制の宣言は、これら諸州での強力なソヴェト建設活動とあいまって、この地方のソヴェト政府の地位を強固にした。テレクおよびダゲスタンの数百万の住民の代表者からなる民族大会が、労農ロシアと緊密な同盟を結んで、ソヴェトのためにたたかうことをおごそかにちかったのも偶然ではない。

山地人は、ソヴェト権力の困難な瞬間におこなわれたのではなく、その軍隊のかがやかしい成功の瞬間におこ

(410)
なわれた自治宣言を、山地人にたいするソヴェト権力の信頼のしるしとして正しく評価した。山地人たちは個人的な会談で、私につぎのようにかたった、——「困難な瞬間に、一時的な必要にせまられて、権力から人民にあたえられるものは、不確実である。ちょうどいまソヴェト政府があたえているように、敵にたいする勝利の結果として、上からあたえられる改革と自由だけが確実である」と。

自分の独立をかちとり、ロシアの諸民族と自発的に同盟を結んだアゼルバイジャンでも同様に、連合国の成功の機会はすくない。アゼルバイジャンとバクーの石油にのばされた連合国の毒牙は、アゼルバイジャン勤労者のあいだに、ただ憎悪をまきおこすしかないであろう、ということは証明するまでもあるまい。

ヴランゲリの壊滅後は、アルメニアおよびグルジアでも同様に、連合国の成功の機会は激減した。ダシュナク派のアルメニアは、うたがいもなく彼らをトルコへけしかけ、あとでは臆面もなく彼らを置きざりにして、トルコ人から迫害をうけるにまかせた連合国の挑発の犠牲者となって、没落した。アルメニアにとってはただ一つ、ソヴェト・ロシアとの同盟以外に、救いの可能性は一つものこっていないということは、ほとんどうたがう余地がない。このような事態は、うたがいもないことだが、連合国のまえに迎合することをやめないブルジョア政府をいただく、あらゆる民族にとって、——なかんずくグルジアにとって、よい教訓となるであろう。

グルジアの破滅的な経済事情と食糧事情は、現在のグルジアの支配者たちですら確認している事実である。連合国の網にひっかかり、その結果バクーの石油も、さらにまたクバニの食糧もうしなったグルジア、イギリスおよびフランスの帝国主義的作戦の主要基地にかわり、そのためにソヴェト・ロシアと敵対関係にはいったグルジア——このグルジアは、いま臨終にのぞんでいる。ヨーロッパから革命の波によってたたき出された、死にかけ

た第二インタナショナルの堕落した指導者カウツキー氏が、連合国の網にひっかかった古くさいグルジアに、破産したグルジアの社会居酒屋のところに隠れ家を発見したのも、もっともである。苦難な瞬間にグルジアがアルメニアのように連合国から置きざりにされるであろうということは、ほとんどうたがう余地がない。

侵略者としてのペルシアにおけるイギリス人の立場は、ますます明らかになっている。すこぶるひんぱんにその閣僚を更迭しているペルシア政府が、イギリスの駐在武官のついたてであることは、周知のとおりである。いわゆるペルシア軍隊は存在しなくなり、そのかわりにイギリスのインド土民兵があらわれたことは、周知のとおりである。こうした状態にもとずいて、テヘランおよびタヴリーズでは、おびただしい反英行動が発生したことは周知のとおりである。このような事態がペルシアにおける連合国の成功の機会を、たかめるものでないことは、うたがう余地がない。

最後にトルコである。一般的にはトルコにたいし、特殊的にはケマル派にたいしてむけられたセーヴル条約〔一〇〕の時代は、うたがいもなく終りにちかずいている。一方では、ケマル派と連合国との斗争および、それにもとずいて強化したイギリス植民地における動揺、他方ではヴランゲリの壊滅とギリシアのヴェニゼロスの没落は、連合国にケマルにたいする政策を、いちじるしく緩和することをよぎなくさせた。

連合国の絶対「中立」のもとにケマル派がアルメニアを粉砕したこと、トルコへフラキアおよびスミルナの返還が予定されているといううわさ、ケマル派と連合国の手さき、サルタンとの交渉についてのうわさ、またコンスタンチノープルの明渡しがあるだろうといううわさ、最後にトルコの西部戦線における停戦、――こうしたことに、みな連合国とケマル派との真剣な取引、そして、おそらくケマル派の右傾をものがたる兆候である。

連合国の取引がどういう結果におわるか、ケマル派の右傾がどこまでいくかについて、言うことは困難である。しかし、なおただ一つ、数年前に開始された植民地解放斗争は、どんなことがあっても強大となるであろうということ、ロシアは、公認されたこの斗争の旗手として、この斗争の味方をあらゆる努力、あらゆる手段をつくして支持するであろうということ、この斗争は、もしケマル派が被圧迫民族解放の事業を裏ぎらないならば、彼らと**ともに**、それとも、もし彼**ら**が連合国の陣営にねがえるならば、彼らに**抗して**、勝利へ到着するであろうということは、いずれにしても、うたがいないところである。

西欧に燃えひろがっている革命と、ソヴェト・ロシアの増大しつつある威力とは、このことをものがたっている。

『プラウダ』第二六九号
一九二〇年十一月三十日

ソヴェト・アルメニア万才！

つかれはて、苦悩にみちたアルメニア、連合国とダシュナク派の思想で飢餓、零落、流亡へおいやられたアルメニア、——すべての「親友」にあざむかれたこのアルメニアは、いまや、自分をソヴェト国家と宣言することのうちに、自分の解放を見いだしたのである。

アルメニアの利益の「永遠の擁護者」であるイギリスの偽りの保障も、ウィルソンの評判だおれの十四カ条も、[一〇二]アルメニア統治の「委任状」をにぎる国際連盟の誇大な誓約も、虐殺と肉体的な絶滅からアルメニアをすくうことはできなかった（また、できるものではなかった！）。ただソヴェト権力の思想だけが、アルメニアに平和をもたらし、民族復興の可能性をもたらしたのである。

アルメニアのソヴェト化をもたらした若干の事実は、つぎのようである。連合国の手さき、ダシュナク派の有害な政策は、無秩序と極貧へ国をおいこんでいる。ダシュナク派によってくわだてられたトルコとの戦争は、アルメニアの困難な立場を、最後の土壇場までおしやっている。飢餓と無法に苦しめられたアルメニアの北部諸州は、十一月末ついに蜂起し、同志カシャンを先頭としてアルメニア革命軍事委員会を創設した。十一月三十日にはアルメニア革命軍事委員会議長から同志レーニンへあてて、ソヴェト・アルメニアの誕生と革命軍事委員会に

よるデリジャン市の占領を報じたあいさつの電報がおくられている。十二月一日にはソヴェト・アゼルベイジャンが係争の諸地区を自発的に放棄し、ザンゲズール、ナヒチェヴァン、ナゴルヌイ・カラバフのソヴェト・アルメニアへの譲渡を宣言している。十二月一日、革命軍事委員会はトルコの軍司令部からあいさつをうけとった。十二月二日には、エリヴァンにおけるダシュナク派の政府は放逐され、アルメニアの軍隊は、みずから革命軍事委員会の指揮下にはいったという。同志オルジョニキッゼの通報をうけとった。

いまやアルメニアの首都エリヴァンは、アルメニア・ソヴェト権力の手中にある。

アルメニアとそれをとりかこむ回教徒とのながいあいだの敵対関係は、アルメニア、トルコ、アゼルベイジャンの勤労者のあいだにおける、同胞的連帯の確立によって一挙に解決された。

帝国主義外交の古おおかみの頭をなやました、いわゆるアルメニア「問題」は、**ただ**ソヴェト権力**だけ**が、それを解決する力をもっていたということを、すべての関係者に知らしめよ。

ソヴェト・アルメニア万才！

『プラウダ』第二七三号
一九二〇年十二月四日
署名――イ・スターリン

事項訳注

（一）**エーゼル島の占領**――リガ湾の入り口にあるエーゼル島、ダゲ島、その他の島にたいする、ドイツ陸戦隊の上陸は、一九一七年九月二十九日にはじまった。

（二）**ウクライナ・ラーダ**――ウクライナ中央ラーダのこと。ウクライナ・ラーダは、一九一七年四月にキーエフでブルジョア的および小ブルジョア的政党・政派によってつくられた。十月革命の勝利後は、ラーダはソヴェト政府を承認することを拒絶し、ソヴェト権力との公然たる斗争の道をとり、カレーヂンその他のドン地方の白衛軍の将軍を支持した。一八年四月、ドイツ占領軍は、ラーダをスコロパツキーのゲットマン政府ととりかえた。なおラーダの総書記局は、ラーダによって選出された最高行政機関であった。なお第三巻「事項注七六」を見よ。（二六）

（三）「**最後通牒」とペトログラード・ウクライナ本部にたいする「回答」**――「最後通牒」とは、人民委員会議の「最後通牒」、あるいは『ウクライナ人民にたいする宣言とウクライナ・ラーダにたいする最後通牒的要求』のことで、レーニンが書いたものである。そのなかには、つぎのようにのべてある。「われわれ人民委員会議は、人民のウクライナ共和国を承認し、ウクライナ共和国がロシアから分離する権利、あるいは両者のあいだの連邦関係、その他の関係についてロシア共和国と条約を結ぶ権利を承認する。

ウクライナ人民の民族的権利と民族的独立とにかんするいっさいのことは、われわれ人民委員会議によって、即時、なんの制限もなく、無条件に承認される」と。

ペトログラード・ウクライナ本部（正確にはペトロ

グラード地区軍事会議ウクライナ本部）は、中央ラーダを代表して、人民委員会議と交渉していたが、このウクライナ本部にたいする人民委員会議の「回答」には、つぎのようにのべられている。「ラーダによって提出された諸条件についていえば、それらの条件のうちで原則的性格をもつもの（自決権）は、争論または紛争の対象となるものではなかったし、また現在もなるものではない、なぜなら人民委員会議は、これらの原則を完全に承認し、かつ実行しているからである」と。　（三八）

（四）　この電報の報道によると、一九一七年十二月十三日、労働者・兵士代表ソヴェトと一部の農民代表ソヴェトのあつまった、全ウクライナ・ソヴェト大会で選出されたソヴェト中央執行委員会は、ウクライナにおける全権力を掌握した。（『イズヴェスチヤ』第二五二号、一九一七年十二月十五日を見よ。）　（三七）

（五）　**第三回全ロシア労・兵・農代表ソヴェト大会**——一九一八年一月十一—十八日、ペトログラードでひらかれた。出席代議員は一、〇四六名。人民委員会議の活動報告をレーニンが、ソヴェト中央執行委員会の活動報告をスヴェルドロフが、おこなった。大会は中央執行委員会および人民委員会議の政策を承認する決議を採択し、スターリンが参加してレーニンが書いた『勤労被搾取人民の権利宣言』、フィンランドとアルメニアの独立にかんする人民委員会議の布告、スターリンの提案した、ロシア共和国の連邦的諸機関にかんする決議を確認した。　（五一）

（六）　**宣言**——一九一七年十一月七日ウクライナ中央ラーダの採択した第三宣言のこと。　（五五）

（七）　**カフカズ委員部**または**外カフカズ委員部**——一九一七年十一月チフリスでメンシェヴィキ、エス・エル、ダシュナク派、ムッサヴァチストなどによって組織され、一八年五月二十六日まで存続していた。

（五六）

（八）　**ウクライナ・ソヴェト共和国人民書記局**——ウクライナ共和国の最初のソヴェト政府。一九一七年十二月に、ウクライナ・ソヴェト中央執行委員のなかから選出された。一八年四月、ドイツ軍隊によるウクライナ占領とともに、人民書記局は改組され、ドイツ

占領軍とウクライナ騎兵部隊とにたいする、人民大衆の斗争を指導することが、その主要な任務となった。（五九）

（九）**休戦協定**――ロシアと四国同盟（ドイツ、オーストリア＝ハンガリア、ブルガリア、トルコ）とのあいだの休戦協定のこと。一九一七年十二月二日、ブレスト・リトフスクで調印され、その期間は二八日間であった。講和条約締結の交渉がながびいたので、休戦も延長された。一八年二月十八日、ドイツ軍は休戦協定をやぶり、全戦線にわたって攻勢にうつった。（五九）

（一〇）**旧ラーダとドイツ軍との条約**――ウクライナ中央ラーダ代表と四国同盟との秘密交渉によって、一九一八年一月二十七日に、ブレスト・リトフスクで締結された条約のこと。（六〇）

（一一）**『バクー労働者』**――バクーのボリシェヴィキ組織の機関紙で、一九〇六年、〇八年九―十月、一七年四月―一八年八月と、とびとびに刊行された。アゼルバイジャンでソヴェト権力が勝利したのち、二〇年七月二十五日、新聞は再刊され、最初は『アゼルバイジャンの貧民』という名で、二〇年十一月七日以後は、以前の名で、発行されていた。げんざい『バクー労働者』は、アゼルバイジャン共産党（ボ）中央委員会およびバクー委員会の機関紙である。（七六）

（一二）**連合**――独立国家の結合。アメリカを例にとると、アメリカの一三州はイギリスからの独立をかちとるために、その結合を強化する目的で一七七七―八一年に「連合規約」を成立させた。この連合のばあい、各州は主権、自由、独立性を有するものとされ、したがって、それは独立国家の国際的な結合であった（この連合はアメリカ合衆国とよばれた――合衆国という名称の起源）。しかし、この連合は、通貨、通商、租税など政治・経済上の細分状態からくる困難に出あったため、「連合規約」の全面的改正を必要とし、八七年この改正のための「憲法会議」がひらかれ、けっきょく「最高の立法権、執行権、司法権からなる統一政府をもうけるべき」ことが議決され、この精神でつくられた憲法は八八年に効力を発し、八九年新憲法にもとずく政府が発足した。こうして連邦が成立した。一八六一―六五年の南北戦争は、北部諸州の勝利におわ

り、南部諸州の分離主義は克服されて、中央集権国家が完成された。（八九）

（一三）　**ゾンデルブンド**――スイスの七つのカトリック諸州の反動的同盟のことで、一八四五年に結成され、国の政治的細分を主張していた。四七年にゾンデルブンドと、スイスにおける中央集権を主張していた、スイスの他の諸州とのあいだの武力斗争がおこった。戦争の結果、ゾンデルブンドは敗北し、スイスは諸国家の連合から統一的な連邦国家となった。（八九）

（一四）　**憲法作成委員会**――一九一八年四月一日に組織され、スターリンとスヴェルドロフが議長であった。委員会の活動の基礎となったのは、『勤労被搾取人民の権利宣言』と、スターリンの報告により第三回ソヴェト大会が採択した決議『ロシア共和国の連邦的諸機関について』であった。スターリンの草案『ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の一般的規定』は、一八年四月十九日の委員会の会議で審議され、採択された。（一〇〇）

（一五）　**第五回トゥルケスタン地方ソヴェト大会**――一九一八年四月二十日から、五月一日までひらかれた。大会はトゥルケスタン・ソヴェト連邦共和国の自治制を宣言し、中央執行委員会と人民委員会議を選出した。（一〇三）

（一六）　**タタール＝バシキール・ソヴェト共和国憲法制定大会召集のための会議**――モスクワで、一九一八年五月十―十六日にひらかれ、スターリンが司会した。タタール人、バシキール人、チュヴァシ人およびマーリ人の代表者が出席した。会議はタタール＝バシキール憲法制定ソヴェト大会の召集のため委員会をえらんだ。国内戦がはじまったために大会はひらかれなかった。（一〇七）

（一七）　**『ナーシェ・ヴレーミャ』**（**『われわれの時代』**）――エス・エル系の夕刊紙。一九一七年の十二月から一八年七月まで、モスクワで発行されていた。（一一四）

（一八）　**「講和交渉」**――バツームにおける外カフカズ議会（セイム）とトルコの代表者との講和交渉のことで、一九一八年五月十一日にはじまった。五月二十六日の、外カフカズ共和国の崩壊後、バツームにおける交渉は「独立」グルジアのメンシェヴィキ政府によっておこ

なわれた。一八年六月四日に、講和条約が調印されたが、それによると、バッーム その他がトルコにわたされることになっていた。その他、トルコはグルジアの鉄道の自由通行権をえた。

（一九）**英雄的なアブハジア**――反革命的な外カフカズ議会にたいする蜂起は、一九一八年三月にアブハジアではじまった。外カフカズ委員部の権力機関は廃止され、ソヴェト権力が宣言された。メンシェヴィキは蜂起者にたいして強力な軍隊をおくった。一八年五月十七日までつずいた英雄的な斗争にもかかわらず、メンシェヴィキの軍隊は、蜂起者の抵抗をくだくことに成功した。それにつずいて平和な住民にも手をつけた。残忍な弾圧がはじまった。　　　　　　（一一六）

（二〇）**講和会議**――ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国とウクライナ・ゲットマン政府の代表者の講和会議のこと。この会議は、一九一八年五月二十三日にキーエフではじめられた。　　　　　　（一一七）

（二一）一九一八年五月二十九日、人民委員会議はロシア南部における食糧問題の総指揮者にスターリンを任命した。スターリンの委任状にはこうのべてある。

「人民委員会議の成員、人民委員ヨシフ・ヴィッサリオーノヴィチ・**スターリン**を、非常権限をあたえられた、ロシア南部における食糧問題の総指揮者に任命する。地方、ならびに州の人民委員会議、労・兵・農代表ソヴェト、革命委員会、各部隊の司令部と指揮官、鉄道機関と駅長、河川および海上の商船隊の機関、郵便電信および食糧機関、すべてのコミッサールと特使は、同志**スターリン**の命令を遂行する義務をおう。

人民委員会議議長

ヴェ・ウリヤノフ（レーニン）」　　　　　　（一一八）

（二二）**五人協議会**――モスクワ―キーエフ―ヴォローネジなどの鉄道管理局を指導する、行政的・技術的機関で、ヴォローネジにあった。　　　　　　（一一九）

（二三）一九一八年七月七日にかけての夜、レーニンは、モスクワで「左翼」エス・エルのおこした暴動について、スターリンに直通電話でつたえた。この電話はスターリンがちょくせつツァリーツィンできいたが、レーニンの覚え書にはこう書いてあった。「これ

らやくざなヒステリックな冒険者、火砲を手にしてたった反革命家を、いたるところで、容赦なく弾圧する必要がある……。だから左翼エス・エルには容赦するな。そしてもっとたびたび通知してもらいたい。」（一九三六年一月二十一日『プラウダ』第二一号）。（四〇）

（二四）一九一八年イギリス軍がムルマンスクを占領したことをさす。（四一）

（二五）スターリンからの手紙をうけとったレーニンは、レーニンへのあいさつと署名をけして、この手紙を自分の指令としてペトログラードへおくった。（四九）

（二六）『ソルダート・レヴォリューツィー』（『革命の兵士』）――は、ツァリーツィン戦線の軍事新聞で、スターリンの発意で創刊され、北カフカズ軍管区軍事会議の機関紙として、一九一八年八月七日から発行された。九月二十六日（第四二号）からは、南部戦線軍事革命会議の機関紙、十月二十九日（第六九号）から終刊までは、第十軍軍事革命会議の機関紙となっていた。（五三）

（二七）『ボリバー』（『斗争』）――ロシア社会民主党ツァリーツィン委員会の機関紙で、一九一七年五月から発行されていた。一七年末から、ツァリーツィン労・兵・農・カザック代表ソヴェトの機関紙となり、三三年三月まで発行されていた。（五三）

（二八）予備議会（臨時共和国評議会）――一九一七年九月十四―二十二日、ペトログラードでひらかれた民主主義会議のあいだから選出された、臨時政府の諮問機関。予備議会の創設は、革命の成長をさまたげて、ロシアをソヴェト革命の道から、ブルジョア議会制の道にそらそうとする、エス・エル＝メンシェヴィキの企てであった。『党小史』第七章、第五節を見よ。（五八）

（二九）「防衛会議」――一九一七年八月七日、ソヴェト全ロシア中央執行委員会（エス・エル＝メンシェヴィキ的なものであった）によってペトログラードに招集された。この会議の目的は、帝国主義戦争を継続させるために、国民の力と資金とを動員することであった。（六〇）

（三〇）黒色大会――一九一七年十月十二日から十四日までモスクワで、ロジャンコを議長にしてひらか

れた「第二回モスクワ会議」のこと。会議には、大地主、工場主、僧侶代表、将軍および将校などが出席した。この会議の特徴は、ボリシェヴィズムおよび革命の成長とたたかうために、反革命勢力を統一したことであった。（一九五）

（三一）『**ラボーチー・プーチ**』（『**労働者の道**』）——ボリシェヴィキ党の中央機関紙で、一九一七年の七月事件ののち、臨時政府によって発行を禁止された『プラウダ』のかわりに出された。新聞は一七年九月三日から、十月二十六日まで発行された。『ラボーチー・プーチ』の責任編集者はスターリンであった。（一九六）

（三二）**回教徒共産主義者会議**——一九一八年十一月、モスクワでひらかれた回教徒共産主義組織第一回大会のこと。この大会はロシア共産党（ボ）回教徒組織中央ビューローを選挙した。（一九七）

（三三）論文『ウクライナは解放されつつある』は若干訂正されて、一九一八年十二月一日の『プラウダ』第二六一号に『解放されつつあるウクライナ』という標題の主張として掲載された。（一九八）

（三四）「**ウクライナ臨時労農政府**」——一九一八年十一月下旬に樹立された、ウクライナ・ソヴェト政府。政府の最初の所在地はクールスク市であったが、のちにスージャ市にかわった。政府にはヴォロシーロフ、セルゲーエフ（アルチョーム）その他がくわわった。一八年十一月二十九日、ウクライナ・ソヴェト政府は、ゲットマンの打倒と、ウクライナにおけるソヴェト権力の樹立を布告した宣言を発表した。（一九九）

（三五）「**ウクライナ執政内閣**」——ウクライナの反革命的民族主義的政府で、ペトリューラとヴィンニチェンコを指導者とするウクライナ民族主義者によって、一九一八年末、キーエフで組織された。一九年二月執政内閣は、ウクライナの蜂起した労働者・農民によっておいはらわれた。（二〇〇）

（三六）論文『**光は東方から**』は、一九一八年十二月十五日の『プラウダ』第二七三号に同時に、主張として無署名で発表された。（二〇一）

（三七）**エストニアの勤労者コンミューン**（**エストニア・ソヴェト共和国**）——一九一八年十一月二十九日に、赤軍がドイツ占領軍からナルヴァを解放したのちに成立した。一八年十二月七日、人民委員会議は、

スターリンの書いた、エストニア・ソヴェト共和国の独立承認にかんする布告を確認した。（二〇三）

（三八）**ラトヴィア臨時ソヴェト政府の公式宣言**――ラトヴィアのソヴェト権力は、一九一八年十二月半ばに樹立された。ラトヴィア臨時ソヴェト政府は、一八年十二月十七日に、ラトヴィア勤労人民に国家権力のソヴェトへの移行にかんする宣言を発表した。宣言のなかには、「われわれは、この困難な途上で、この困難な戦いにおいて、われわれが孤独ではないことを知っている。われわれのうしろには、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国がたっている。われわれは今後もこれと堅く結びついているであろう、そして、それはたんに外部的なきずなだけではないのである」とのべられている。（二〇四）

（三九）**リトワニア・タリバ**――リトワニアのブルジョア的国民会議で、ドイツ占領当局の監督をうけて一九一七年九月につくられた。（二〇四）

（四〇）**ハリコフの三日間のストライキ**――一九一八年十二月初旬におこなわれた。ストライキの原因は、ハリコフ・ソヴェトの幹部会をペトリューラ軍が逮捕したことであった。あらゆる企業、電車、発電所の労働者がストライキにはいった。ペトリューラ軍当局は逮捕した人々を釈放せざるをえなかった。そこでストライキは、ソヴェトの決定によって中止された。（二〇五）

（四一）**ヴィルナの大デモンストレーション**――リトワニアのヴィルナおよび、その他の都市におけるデモンストレーションと政治的ゼネストのことで、一九一八年の十二月十六日におこなわれた。それらは、リトワニアおよび白ロシアの共産党中央委員会の呼びかけにより、ブルジョア的タリバとドイツ占領軍の政策にたいする抗議のしるしとして組織されたものであった。ヴィルナのデモンストレーションには約二万の労働者と貧民が参加した。デモンストレーションは「全権力をソヴェトへ！」というスローガンをかかげた。デモンストレーション参加者は、またリトワニアから鉄道および、その他の財産をドイツ軍がもちだすことをやめ、政治犯人を釈放することを要求した。（二〇八）

（四二）**人民委員会議と赤軍にたいするヴィルナ・ソヴェトの熱烈なあいさつ**――一九一八年十二月十六日、ヴィルナ・ソヴェトの会議で採択された。ロシア

社会主義連邦ソヴェト共和国人民委員会議へのあいさつには、「世界プロレタリアートの試錬をへた指導者、同志レーニンに指導される人民委員会議は、自己の完全な解放のために斗争を展開しつつある、リトワニアの労仂者階級の導きの星である」とのべられている。

赤軍へのあいさつでは、「……われわれリトワニアの労仂者は、反革命の武装力にたいする斗争において、諸君が発揮しつつある英雄的な勇敢さを、欲喜しながら見つめている。われわれはまた、赤軍の隊列にくわわり、労仂者階級全体の解放のため、とくに苦しい占領の圧制のもとで苦しみうめく自己の兄弟全体の解放のために、自己の生命を犠牲にしているリトワニアのむすこ――労仂者・農民にもあいさつをおくる」とのべられている。（一〇八）

（四三） **リトワニア労仂者臨時革命政府**――一九一八年十二月の前半に組織された。ボリシェヴィキのヴェ・エス・ミツケヴィチ＝カプスーカスが首班であった。一八年十二月十六日、労仂者臨時政府は、宣言を発表したが、そのなかにはこうのべてある、「一、全権力は労仂者、土地を少ししかもたない農民のソヴェトにうつされる。二、ドイツ占領軍の権力は、今日より廃止されたものとみなす。三、カイゼルのリトワニア・タリバとその閣僚会議は廃止され、法律の保護外におかれるものとみなす。」一方、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国人民委員会議は、レーニンの署名した一九一八年十二月二十二日付の布告によって、リトワニア・ソヴェト共和国の独立を承認した。一八年十二月二十三日、スターリンの報告によって採択された、全ロシア中央執行委員会の決定のなかには、つぎのようにのべられている。「プロレタリアおよび農民大衆の革命的斗争によって樹立された、エストニア、ラトヴィア、リトワニアの諸ソヴェト共和国の目のまえで、中央執行委員会は、これらの国がかつて旧ツァーリ帝国に属していた事実は、これらの国になんの義務をもおわせるものでないことを、あらためて確認し、同時に、中央執行委員会は、げんざい、自決の完全な自由と、労仂者階級の手中への権力の移行の承認とを基礎として、はじめて、かつてのロシア帝国の領土に住むすべての民族の勤労者の自由な、自由意志による、破壊しがたい同盟がつくられつつある……ことを堅く

確信する。」　（二〇九）

（四四）　一九一八年十二月三十日、東部戦線、とくに第三軍の地区で破局的状態が生じたために、党中央・委員会はレーニンの提案により、スターリンを東部戦線に派遣することに決定した。一九年一月一日、中央委員スターリンとジェルジンスキーをメンバーとする党中央委員会および国防会議委員会の調査委員会がもうけられた。その任務は、ペルミの陥落と戦争における敗北の原因を調査し、あわせて第三軍と第二軍の地区における党活動とソヴェトの活動とを復活させる措置を講じることにあった。一九年一月三日、スターリンとジェルジンスキーは東部戦線に出発し、第三軍の戦斗能力の回復と、戦線および後方の強化について大活動をおこなった。東部戦線における調査委員会の活動の結果、同年一月末には、事態を転換させることができた。　（二二一）

（四五）　一九一九年一月十三日、スターリンとジェルジンスキーは、ペルミの破局の原因を調査した経過について『簡単な予備報告』を、レーニンと中央委員会におくった。報告のなかには、第三軍地区の状況を回復させ、第三軍が攻撃にうつるのを保障するために、委員会がとった措置についてもしるされてあった。一月十四日、レーニンはつぎの電報をうって報告にこたえた。

「グラゾフおよび所在地にて
スターリン、ジェルジンスキーあて
暗号至急報第一号をうけとり一読した。現地でとった措置の遂行をみずから指導するよう諸君ふたりにとくにお願いする。そうしなければ成功の保障はない。
レーニン」　（二二六）

（四六）　総司令部がスターリンとジェルジンスキーの要請で第三軍に派遣するはずであった連隊をさす。レーニンは共和国革命軍事会議にこの報告をおくるとき、そのうえに「私の意見では、ヴァツェチスが三個連隊をナルヴァ付近に投じたことは、**まったくのでたらめ**である。**これを撤回すること!!**」と書いている。　（二二九）

（四七）　**非常税にかんする革命的布告**――都市・農村の有産者層にたいする臨時非常税にかんする全ロシ

ア中央執行委員会の布告のことで、一九一八年十一月二日に発表された。布告には、貧農には非常税を免除し、中農には適度に課税し、税の重荷はすべて富農におわせるように指示されていた。

(四八)『イズヴェスチヤ・ヴェ・ツェ・イ・カー』(『全ロシア中央執行委員会通報』)——日刊新聞。一九一七年二月二十八日から、『ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト通報』という題で発行された。第一回全ロシア・ソヴェト大会ののち、新聞は労働者・兵士代表ソヴェト中央執行委員会の機関紙となり、一七年八月一日からは、『中央執行委員会およびペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト通報』という題で発行された。一七年十月二十七日、第二回全ロシア・ソヴェト大会ののち、新聞はソヴェト権力の公式機関紙となった。一八年三月十二日から、『農民・労働者・兵士・カザック人代表ソヴェト全ロシア中央執行委員会通報』という題でモスクワで発行された。同年六月二十二日からは、全ロシア中央執行委員会およびモスクワ・ソヴェトの機関紙となり、のちに、ソ同盟中央執行委員会および全ロシア中央執行委員会の機関紙となった。 (二四〇)

(四九) **大ロシア**——モスクワ国家のとき、大強国的イデオロギーから、ロシア人は、ウクライナ人、白ロシア人にくらべて、「偉大だ」と考え、大ロシア人と自称した。したがって、ここではロシア人のすむロシア国家だけを第一と考え、ロシアの他の民族やその国家のことを考えなかったことをさす。 (二四二)

(五〇) **白ロシア・ソヴェト(第一回)大会**——一九一九年二月二日、ミンスクでひらかれた。大会には二三〇人の代議員が出席した。大会は白ロシアを独立のソヴェト社会主義共和国と宣言し、白ロシア・ソヴェト社会主義共和国の憲法を批准し、中央執行委員会を選出した。大会の活動には、全ロシア中央執行委員会議長スヴェルドロフが参加し、白ロシア・ソヴェト社会主義共和国の独立をみとめるという、全ロシア中央執行委員会の決定を声明した。 (二五二)

(五一) **リトワニア・ソヴェト(第一回)大会**——一九一九年二月十八—二十日に、ヴィルナでひらかれた。大会には二二〇人の代議員が出席した。大会はリトワニア臨時労農政府の報告、白ロシアとの統合の問

題その他を審議した。大会は、リトワニアおよび白ロシア両ソヴェト共和国の統合と、ロシア・ソヴェト共和国との連邦関係の樹立とを必要とみとめて、この問題にかんする決議のなかでつぎのように宣言した。

「すべてのソヴェト社会主義共和国との密接な結びつきを深く感じている大会は、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国は、ラトヴィア、ウクライナおよびエストニアの諸労農政府と、これらすべての共和国からなる単一のロシア社会主義連邦ソヴェト共和国を創設するために、ただちに交渉にはいることをリトワニアおよび白ロシア社会主義ソヴェト共和国の労農政府に委任する。」（二五四）

（五二） 一九一九年二月に連合国評議会が、マルマラ海のプリンセス島でひらこうとした会議のこと。この会議はソヴェト政府とコルチャック、デニキンなどの反革命諸政府の代表をまねいて、ロシアにおける平和の回復をはかることを目的としたが、実際には開催されなかった。（二六〇）

（五三） **ベルン会議**——第二インタナショナルの社会排外主義政党と、中央派の政党との国際会議で、一九一九年二月三—十日に、スイスのベルンにおいてひらかれた。（二六〇）

（五四） **党綱領草案起草委員会**——一九一八年三月八日、第七回党大会で、レーニン、スターリンその他を委員として選出された委員会。委員会の作成した草案は、第八回党大会で採択された綱領の基礎になった。このページに引用されている草案の一部は、そのまま党綱領に採用された。（二六四）

（五五） **ロシア代表ソヴェト第一回会議**——ペトログラード・ソヴェト執行委員会が招集した、全ロシア労働者・兵士代表ソヴェト会議のこと。ペトログラードで、一九一七年三月二十九日から四月三日までひらかれた。（二六七）

（五六） **『プラウダ』**——ボリシェヴィキの日刊新聞。レーニンの指示により、スターリンの発意によって発刊された。一九一二年四月二十二日から一四年七月八日まで、ペテルブルグで出されていた。二月革命ののち（一七年三月五日から）、ボリシェヴィキ党の中央機関紙として再刊された。一七年三月十五日、『プラウダ』の編集部にスターリンがくわえられた。一七

年四月にレーニンがロシアへかえったのちには、彼が指導した。『プラウダ』のもっとも密接な協力者は、モロトフ、スヴェルドロフ、オリミンスキー、サモイロヴァなどであった。この時期に『プラウダ』は、迫求と迫害にもかかわらず、ボリシェヴィキ党のまわりに労働者や革命的な兵士・農民を結集させるために活動し、帝国主義ブルジョアジーやその従僕であるメンシェヴィキ、エス・エルをばくろし、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への移行のためにたたかった。なお本全集第二巻「注一一一」を見よ。（三六七）

（五七）　ドイツ、オーストリア、ハンガリアにおけるプロレタリア革命——戦争による窮乏・食糧危機、十月革命の影響の結果として、西ヨーロッパの各国も革命にとらえられた。一九一八年十一月ドイツの労働者・兵士は、帝政をたおし、ソヴェト（レーテ）を樹立し、全権力をにぎった。しかし労働者をしたがえていた社会民主党の指導者（エーベルトやシャイデマンなど）の裏切りによって革命は阻止され、ブルジョア革命以上に出なかった。

オーストリアでも一八年十一月に革命がおこり、共和国が樹立されたが、社会民主党が政権をにぎり、大衆の革命的運動を阻止した。

ハンガリアでは、一九年三月プロレタリア革命がおこり、ソヴェト政府が樹立されたが、八月、社会民主党の敗北主義と、連合国の封鎖による食糧危機のために、ソヴェト政府は敗北して、反革命が勝利した。

なおイタリアでも、戦後、強力な革命的高揚がおこり、労働者、農村プロレタリア、貧農をまきこんだ。二〇年、革命的高揚が頂点にたっしたときには、工場広範なストライキと農民の土地斗争とがおこなわれ、占領がおこなわれた。（三七〇）

（五八）　革命的社会主義諸政党の国際会議——一九一九年三月二—六日、モスクワでひらかれた。この会議には、欧米のもっとも主要な国々から五二人の代表が参加した。ロシア共産党の代表はレーニン、スターリン、ヴォロフスキーその他であった。会議は、共産主義インタナショナルの第一回大会であることを宣言した。議事日程のもっとも重要な問題は、ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁にかんするレーニンの報告であった。大会はコミンテルン執行委員会を

選出した。

（五九）**ベルンの社会愛国主義的協議会**——第二インタナショナルが、一九一九年二月にベルンでひらいた協議会のこと。（二七〇）

（六〇）**ベルン委員会**——社会排外主義者のベルン協議会が、「ロシアにおける社会、政治状態を調査するため」に任命したもの。その委員は、カウツキー、ヒルファーディング、ロンゲその他であった。ソヴェト政府は、委員会の入国許可願にたいして、一九一九年二月十九日、ソヴェト政府は、ベルン協議会を社会主義的なものとも考えず、どの程度であろうと労働者階級を代表するものとも考えないが、それにもかかわらず、ソヴェト・ロシアへの同委員会の入国を許可すると声明した。「ベルンの高貴な検察官」（レーニン）の入国は、実現しなかった。（二七三）

（六一）「**平和」会議へ招請しようという計画**——プリンセス島における会議への招待をふたたびおこなうという連合国会議の計画について、一九一九年二月末イギリスの新聞に出された報道のこと。（二七三）

（六二）**ロシア共産党（ボ）第八回大会**——一九一九年三月十八—二十三日、モスクワでひらかれた。大会の日程にはつぎの問題がのせられた。一、中央委員会報告、二、党綱領、三、共産主義インタナショナルについて、四、軍事状況と軍事政策、五、農村活動、六、組織問題、七、中央委員会の選挙。中央委員会の報告。党綱領と農村活動にかんする報告は、レーニンがおこなった。

軍事問題は、全体会議と、軍事分科会で審議された。大会ではいわゆる「軍事反対派」が発言した。それは、かつての「左翼共産主義者」と、どの反対派にもくわわらなかったが、陸軍内におけるトロツキーの指導に不満をいだいていた活動家とを結集していた。「軍事反対派」は、党の軍事政策をトロツキーが歪曲したことと、その反党的政策とに反対してたたかったが、陸軍内のパルチザン主義の残存物や軍建設のいくたの問題についてのあやまった見解を擁護した。レーニンとスターリンは「軍事反対派」に反対した。大会は「軍事反対派」のいくたの提案（スミルノフの原案）をしりぞけると同時に、トロツキーの有害な立場を非難した。大会は軍事委員会を選出し、スターリン、ヤ

ロスラーフスキーなどが、その委員となった。委員会は軍事問題にかんする決議をつくり、それは大会によって満場一致で採択された。『党小史』第八章、第二節を見よ。（二七六）

（六三） 国家統制人民委員部の改組にかんする布告の草案はスターリン、スヴェルドロフ、その他を委員とする委員会によって準備された。この草案は一九一九年三月八日と四月三日の人民委員会議の会議で審議された。スターリンは草案の報告をおこなった。草案の作成には、レーニンが参加した。（二七八）

（六四） **二つの文書**――『二十六人のコミッサールの処刑』と『一九一九年三月二十三日のトムソン将軍とチャイキン氏との会見』のこと。これらの文書は、一九一九年四月二十三日の『イズヴェスチヤ』に、この論文の付録として印刷された。（二八〇）

（六五） 『**ズナーミャ・トゥルダー**』（『**労仂の旗**』）――エス・エルのバクー委員会の新聞で、一九一八年一月から一九年の十一月まで発行されていた。（二八〇）

（六六） 『**エヂーナヤ・ロシーア**』（『**統一ロシア**』）――カデット的傾向の新聞で、いわゆる「バクー市ロシア民族委員会」によって一九一八年十二月から一九年七月まで発行されていた。（二八〇）

（六七） 『**イスクラ**』――メンシェヴィキのバクー委員会の新聞。一九一八年十一月から二〇年四月まで発行されていた。（二八三）

（六八） 一九一九年五月、ユデーニッチが攻勢に出、白軍によるペトログラードの包囲と占領の恐れが生じたため、スターリンは国防会議の非常全権委員としてペトログラード戦線に派遣された。一九年五月十七日付の国防会議の委任状には、スターリンは、「西部戦線に生じた事態と関連して、必要な特別処置をとるために」ペトログラード地区および西部戦線の他の地区で指揮をとる、とのべられていた。一九年五月十九日スターリンはペトログラードに到着した。（二八六）

（六九） **クラースナヤ・ゴールカ、セーラヤ・ローシャヂ**――ペトログラード近郊の保塁。一九一九年六月十三日、これらの保塁の守備隊は、エス・エルやメンシェヴィキと結びついた白衛軍の反革命的煽動にしたがって、ソヴェト権力にたいして反乱をおこした。六月十三日、反乱軍にたいする行動のため、スターリ

ンの命令にしたがって、バルチック艦隊の軍艦が出港した。オラニエンバウムに、海岸部隊が臨時に編成され、その中核は水兵部隊であった。六月十四日スターリンは、オラニエンバウムにいき、陸海軍司令部の代表者、部隊、各隊の指揮官、およびコミッサールの会議をひらいた。会議ではスターリンの提案で、陸海から同時に攻撃して、クラースナヤ・ゴールカを占領する計画が採択された。六月十五日、戦線にいたスターリンの直接の指導のもとに、海岸部隊および、その他の各隊は、バルチック艦隊の援助をうけて、攻勢を開始した。クラースナヤ・ゴールカの近接地で反乱軍を撃破して、ソヴェト軍隊は六月十六日〇時三〇分、保塁を占領した。数時間後、セーラヤ・ローシャヂも占領された。（二六九）

（七〇）　ヴィドリッツア工場——ラドガ湖の東岸にある工場で、ペトログラード戦線のオローネッツ地区で行動していた、白色フィンランド軍の主要基地であった。一九一九年六月二十七日、赤軍の数部隊はオネガ艦隊およびバルチック艦隊の支援のもとに、ヴィドリッツァを急襲して占領し、いわゆる「オローネッツ志願軍」の司令部をせん滅し、軍需品、弾薬、食糧などの倉庫を占領した。白色フィンランド軍はフィンランド国境外においはらわれた。（二九七）

（七一）　一九一九年七月初め、白色ポーランド軍は総攻撃にうつり、西方からソヴェト共和国をおびやかした。党中央委員会はスターリンに西部戦線の直接指導をゆだねた。西部戦線の革命軍事会議の委員に任命されたスターリンは、七月九日、スモーレンスクの戦線司令部に到着した。（三〇〇）

（七二）　一九一九年九月二十六日、党中央委員会は、デニキン撃滅を組織するために、南部戦線にスターリンを派遣することを決定した。十月三日、スターリンは戦線司令部についた。スターリンの提案したデニキン撃滅計画は、党中央委員会によって採用された。（三〇一）

（七三）　東部諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会——一九一九年十一月二十二日から十二月三日にわたって、モスクワでひらかれた。大会には、トゥルケスタン、アゼルバイジャン、ヒヴァ、ブハラ、キルギジア、タタリア、チュヴァシア、バシキリア、カフカ

ーズおよび個々の諸都市（ペルミ、ヴィヤトカ、オレンブルグなど）の回教徒の共産主義組織の代表者――約八〇人の代議員が出席した。情勢にかんする報告をレーニンがおこなった。大会は、ロシア共産党（ボ）の回教徒組織中央ビューローの活動報告をきき、東部問題等を審議し、東部における党およびソヴェトの活動の任務をさだめた。第一回大会については、「注三二」を見よ。（三〇九）

（七四）あとがき――論文『南部の戦況について』のあとがきは、西南戦線革命軍事会議およびウクライナ労働軍評議会の機関誌である『レヴォリュツィオンヌイ・フロント』（『革命戦線』）に、この論文を発表するさいに書かれたものである。（三二三）

（七五）ウクライナ労働軍――一九二〇年二月に創設された。そのなかには、経済建設の領域で、主としてドネツ炭田の復興活動に使用するために、西南戦線からえらばれた軍隊が編入された。ウクライナ労働軍の指導のために、ロシア共和国人民委員会議は、全ウクライナ革命委員会と共同で、経済関係の諸人民委員部と西南戦線革命軍事会議との代表者から、労働軍評議会をつくり、特別全権委員兼国防会議委員のスターリンを議長に任命した。（三二五）

（七六）ウクライナ共産党（ボ）第四回協議会――一九二〇年三月十七日から二十三日までハリコフでひらかれた。二七八人の代議員がこれに参加した。会議の日程にはつぎの問題がのぼされた。一、ウクライナ共産党（ボ）中央委員会の政治報告と組織報告、二、ウクライナ・ソヴェト共和国とロシア社会主義連邦ソヴェト共和国との相互関係、三、他の政党にたいする関係、四、経済政策、五、土地問題と農村活動、六、食糧問題、七、ウクライナ共産党（ボ）中央委員会とロシア共産党（ボ）第九回大会への代議員の選挙。

スターリンはロシア共産党（ボ）中央委員会の代表として協議会に参加した。協議会の中心問題は経済政策の問題であった。この問題の審議のとき、工業指導における単独責任制の原則に反対した「民主主義的中央集権主義」の反党的グループ（サプローノフその他）が批判された。農村活動の問題にかんして、協議会はウクライナに土地を少ししかもたない農民と土地をもたない農民との同盟（貧農委員会）を創設するという

重要な決定をおこなった。協議会はスターリンをロシア共産党（ボ）第九回大会への代議員に選出した。（三三七）

（七七）一九二〇年三月十三日のベルリンにおける反革命的クーデター（いわゆるカップ暴動）のこと。カップの組織した政府は労仂者のゼネストの結果、数日後に打倒され、カップはスイスに逃亡した。（三三九）

（七八）**中枢部**——戦時共産主義時代の産業の管理は、戦争の必要に応じるために厳重な中央集権制がとられ、各産業部門は中枢部（および中央機関）によって統合され、中枢部が企業を管理し、生産計画をたて、融資し、労仂条件を指示した。中枢部は、最高国民経済会議にはいり、経済会議の幹部会に従属していた。この制度は一面では官僚主義の源泉になった。二一年、産業の根本的改組がはじまり、中枢部は解体されて、トラストになった。（三三三）

（七九）**経済建設にかんするテーゼ**——ロシア共産党（ボ）第九回大会へ党中央委員会が提出したテーゼ——『経済建設の当面の任務』のこと。このテーゼは一九二〇年三月十二日の『ロシア共産党（ボ）中央委員会通報』第一四号に発表された。（三三五）

（八〇）**第七回（全ロシア）ソヴェト大会**——一九一九年十二月五—九日モスクワでひらかれた。大会は全ロシア中央執行委員会と人民委員会議の活動にかんするレーニンの報告をきき、つぎの問題を審議した。軍事情勢、ソヴェト建設、食糧状態、燃料その他、議事日程にある主要問題にかんして大会が採択した決定（『ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国における食糧問題の組織について』、『ソヴェト建設について』、『ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国における燃料問題の組織について』）は、ソヴェト経済組織とソヴェト行政組織の任務をあつかっていた。

ハリコフ協議会の決議——一九二〇年三月十五日、ウクライナ共産党（ボ）ハリコフ県会議で、経済政策にかんする報告にもとずいて採択された、経済建設にかんする決議のこと。（三三五）

（八一）**ロシア共産党（ボ）第九回大会**——一九二〇年三月二十九日から四月五日まで、モスクワでひらかれた。大会はつぎの問題を審議した。一、中央委員会の報告、二、経済建設の当面の任務、三、労仂組合

運動、四、共産主義インタナショナルの任務、五、組織問題、六、協同組合にたいする態度、七、民警組織への移行、八、中央委員の選出。レーニンは大会で中央委員会の政治報告をおこない、経済建設と協同組合とについて演説した。

大会では、運輸と工業の部門における国の当面の経済的任務が決定された。大会は単一経済計画の問題にとくに大きな注意をはらった。この計画の中心は、国民経済の電化であった。大会では、工業における単独責任制の確立に反対した「民主主義的中央集権主義」の反党的グループ（サプローノフ、オシンスキーその他）が批判された。（三三六）

（八二）**ボロチビスト**——一九一八年五月、独立の党をつくったウクライナの左翼エス・エルのこと。党中央機関紙『ボロチバ』の名をとってボロチビストとよばれた。ウクライナの農民大衆のあいだにボリシェヴィキの影響がつよまったので、二〇年三月、ボロチビストはその党を解散して、共産党に加入せざるをえなくなった。ウクライナ共産党（ボ）第四回協議会はボロチビストを入党させることを決定したが、あらたに採用されたものは、ぜんぶ再登録された。その後、ボロチビストの多くは、党に二心をいだき、党を欺まんする道にたち、ウクライナの反革命的民族主義的分子の反ソヴェト斗争の先頭にたち、ウクライナ人民の仇敵であることがばくろされた。（三三七）

（八三）**合法マルクス主義**——十九世紀末ロシアにマルクス主義が広く普及しだすと、ブルジョア・インテリゲンツィアはマルクス主義の着物をつけはじめ、自分の論文を合法的な（ツァーリズムの許可した）新聞・雑誌に発表した。彼らはマルクス主義の旗を利用しながら、ブルジョアジーの利益に労仂運動を従属させようとした。彼らは自由主義的ブルジョアジーを代表していたので、のちには多くのものが、カデットにはいった。ツガン＝バラノフスキー、ブルガーコフ、ストルーヴェなどが代表者である。（三四〇）

（八四）一八五二年六月二十四日、ラッサールからマルクスへあてた手紙のなかの言葉。レーニンは『なにをなすべきか』の題詞としてこれを引用している。「党派斗争こそが、党に力と活気をあたえる。党がしまりがなくて、はっきりしるされた境界をあいまいに

するということは、その党の弱さをしめす、いちばん大きな証拠である。党は自分をきよめることによって強化される。」　（三四一）

（八五）旧ドイツ社会民主党が分裂したのちにつくられた三つの党、すなわち社会民主党、独立社会民主党、ドイツ共産党のこと。　（三四三）

（八六）ブルィギン国会――ツァーリ政府が一九〇五年に召集しようとした諮問国会。立法権をもたない諮問国会を創設する法律案と、国会選挙規定とは、内務大臣ブルィギンを議長とする委員会によってつくられ、〇五年八月六日のツァーリの詔書とともに発表された。ボリシェヴィキはブルィギン国会の積極的ボイコットを宣言した。「……ブルィギン国会はいちども召集されなかった。それは召集されるまえに、革命の旋風によってふきとばされた。」（レーニン）　（三四五）

（八七）小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』は、一八九七年末に、レーニンが流刑地で書いたものである。その初版は、九八年に、ペ・アクセリロードの序文をつけ、ジュネーヴで、「ロシア社会民主主義者同盟」によって出版された。　（三四七）

（八八）タンメルフォルスの全ロシア協議会――ボリシェヴィキの第一回協議会のこと。一九〇五年十二月十二―十七日にひらかれた。この会議ではじめて、レーニンとスターリンは会った。それまでふたりは手紙によって、または同志を通じて、連絡していた。

協議会の日程には、つぎの問題があった。一、地方からの報告、二、現段階にかんする報告、三、中央委員会の組織報告、四、ロシア社会民主労働党の両派の統一について、五、党の再組織について、六、農業問題、七、国会について。

レーニンは、現段階と農業問題について報告し、また第一次国会（ヴィッテ国会）への態度の問題について演説した。スターリンはこの協議会で、外カフカーズのボリシェヴィキ組織の活動について報告し、国会を積極的にボイコットするレーニン戦術を擁護して演説した。協議会は、事実上、二つの党に分裂した党の統一の復活についての決定と、レーニンの提案した農業問題の決議を採択した。スターリンは、レーニンとともに、国会にたいする態度にかんする決議作成委員会の活動に参加した。この決議で、協議会は党と労働

者階級に国会ボイコットを呼びかけ、全党組織には、プロレタリアートの革命的組織をひろげ、人民のあらゆる層のなかで武装蜂起の煽動をおこなうために、選挙集会を広く利用するように提案した。（三四八）

（八九）**外交文書のやりとり**――一九二〇年四月十一日、イギリス外相カーゾンからロシア社会主義連邦ソヴェト共和国外務人民委員へあてた覚え書にかんしておこなわれた外交文書の往復のこと。この覚え書でカーゾンはソヴェト政府に、特赦を条件としてヴランゲリと、クリミアにあるその軍隊との完全な降伏を提案した。（三五一）

（九〇）サン・レモ（イタリア）における連合国の大国会議は、一九二〇年四月十九日から二十六日までひらかれた。会議ではヴェルサイユ講和条約のドイツによる実行の問題、トルコとの講和条約草案、その他の問題が審議された。（三五九）

（九一）『**クラスノアルメーエッツ**』（『赤軍兵士』）――西部戦線第十六軍、革命軍事会議政治部の日刊新聞。一九一九年三月二十日から二〇年五月十五日まで発行されていた。（三七五）

（九二）この手紙の原案には、党中央委員会書記にあてた、レーニンの決定がついているが、そこでは、「問題なし、即時送付に賛成」と書かれている。手紙は中央委員会によって、一九二〇年七月後半に党組織に送付された。（三七七）

（九三）共和国国内警備隊は一九一九―二〇年に後方や戦線付近地区で、都市、工場、鉄道、倉庫などの警備にあたった。（三八二）

（九四）論文『**マルクス主義と民族問題**』――本全集第二巻所収。なお本全集第二巻「注一二七」を見よ。『プロスヴェシチェーニエ』（『啓発』）については同上「注一四二」を見よ。（四〇一）

（九五）論文『十月変革と民族問題』は、『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』紙、一九一八年十一月九日の第一号にのった。

『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』（『民族生活』）は、民族問題人民委員部の週刊機関紙で、一九一八年十一月九日から二二年二月十六日まで、モスクワで発行されていた。二二年一月二十五日から、新聞は雑誌になって、同じ名で、二四年一月まで発行されて

いた。（四〇二）

（九六）**東部諸民族行動・宣伝委員会**（あるいは宣**伝・行動会議**）——一九二〇年九月にバクーでひらかれた東部諸民族第一回大会で創設された。委員会は、宣伝の組織、東部地方における解放運動の支持と統一を任務としていた。約一年間存続した。（四一〇）

（九七）一九二〇年九月十四日、グルジアに、「社会主義代表」という名目で第二インタナショナルの指導者たち（ヴァンデルヴェルデ、マクドーナルド、ルノーデルなど）が到着した。「代表」の指導者のひとりと称されたカウツキーは、チフリスに九月三十日についた。メンシェヴィキは「代表」とカウツキーに、歓迎の夕をもよおした。二週間後、「代表」は西ヨーロッパにかえったが、カウツキーはチフリスにのこり、そこに二〇年十二月まですんでいた。（四二四）

（九八）一五二一年、カトリック教会がルーテルにその学説を否定するようにもとめたヴォルムスの議会で、ルーテルがおこなった弁明演説のなかの言葉。（四三五）

（九九）**ダゲスタン諸民族大会**——一九二〇年十一月十三日、テミル・ハン・シューラでひらかれた。大会にはおよそ三〇〇人の代議員が出席した。スターリンがダゲスタンの自治制を宣言したのち、オルジョニキッゼが祝辞をのべた。大会は、ダゲスタン諸民族と、ソヴェト・ロシアのはたらく諸民族との同盟は破壊しえないと宣言した。（四二六）

（一〇〇）**テレク州諸民族大会**——一九二〇年十一月十七日、ウラヂカフカズでひらかれた。大会には五〇〇人以上の代議員が出席した。大会の活動には、オルジョニキッゼとキーロフが参加した。スターリンの報告にかんする決議のなかで、大会は「自治州はテレク州の勤労大衆をソヴェト・ロシアと結びつける友愛のきずなを、さらにかためるであろう」という確信を表明した。（四三一）

（一〇一）**セーヴル条約**——第一次世界大戦でドイツの同盟国であったトルコに、連合国がおしつけた講和条約。これは一九二〇年八月十日に、セーヴル（パリの近く）で署名された。コンスタンチノープル政府と結ばれた、この条約の奴隷的条件は、トルコの独立を事実上うばった。（四四四）

（一〇二）　ウィルソンの十四カ条——一九一八年一月にアメリカの大統領ウィルソンがもちだした平和綱領。その条項の一つには、大小をとわず国家の独立と安全の保障がうたわれている。（四四八）

人名訳注

アクセリロード・ペ・ベ（一八五〇—一九二八年）——メンシェヴィキの指導者。一八八三年「労仂解放団」を、プレハーノフなどと創立した。『イスクラ』、『ザリャー』の編集員。一九〇三年、党が分裂したのちには、メンシェヴィキの指導的人物となった。反動期には解党派に属し、大戦中はメンシェヴィキの組織委員会の在外書記局員であった。革命後はソヴェト権力にたいする干渉に協力した。

アフクセンチエフ、エヌ・デ（一八七八年生）——エス・エルのもっとも古い党員で、また指導者のひとり。一九〇五年の革命時はペトログラード・ソヴェトの執行委員。〇七年いらいエス・エル中央委員。反動期には、党の右翼に属して、合法活動を主張し、テロルを否定した。第一次大戦時は社会排外主義者。一七年ケレンスキー連立内閣員。十月革命後は、チェッコ戦線における反革命戦の組織者であった。

アレクセーエフ、エム・ヴェ（一八五七—一九一八年）——帝政ロシアの将軍。一九一五年に大本営参謀総長。二月革命の直後から反革命活動に従事した。四月一日臨時政府によって総司令官に任命され、のちに政府の軍事顧問になった。

ヴァツェチス、イ・イ（一八七三年生）——ソヴェト共和国の全軍隊の初代総司令官。第一次大戦に参加したが、一八年赤軍にはいり、国内戦に参加し、一八年総司令官になる。

ウィルソン、ウッドロウ（一八五六—一九二四年）——アメリカの政治家、法律家。一九一三—二一年大統領。第一次大戦の終りには、ドイツの民主化、民族自決権、秘密外交の廃止、国際連盟の創立などもふくむ平和十四カ条を首唱したが、パリの平和会議では、

自分の主張をすてて、ヴェルサイユ条約に調印した。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一年）——ドイツの最後の皇帝（在位一八八八—一九一九年）。

ヴィンニチェンコ、ヴェ・カ（一八八〇年生）——ウクライナの文学者、政治家。一九〇五年にはウクライナ農民のあいだで活動。〇七—一四年亡命。第一次大戦時にはウクライナ社会民主党中央委員であった。二月革命後ウクライナで中央ラーダ戦争に反対した。二月革命後ウクライナで中央ラーダの創立にくわわり、その書記局の議長となった。十月革命後は外国帝国主義と結びついて、ウクライナ人民共和国の政府の首班となる。一八年執政内閣首班。ウクライナでソヴェト権力が確立したのちには、しだいにこれと和解した。

ヴェニゼロス、エレフテリー（一八六四—一九三六年）——一八八八年代議士、九六年トルコの支配を脱して、ギリシア新政府の法相となる。一九一〇年首相。第一次大戦前のバルカン外交に活躍した。一五年辞職、一六年革命により臨時政府をつくり、一七年王を追放して新王のもとで首相。二〇年総選挙にやぶれて、いちじ政界をしりぞいた。二四年首相として共和国を宣言し、その後数度首相になった。三五年反乱をくわだてて失敗、亡命した。王政復古とともに大赦をうけた。

ヴォロシーロフ、カ・エ（一八八一年生）——ソヴェトの最大の軍事指導者で、赤軍の創立者のひとり。たびたび投獄と流刑に処された。国内戦時代には赤軍を指導し、ツァリーツィンを防衛した。赤軍の騎兵軍の創立者のひとりでもある。一九一九年第一騎兵軍団革命軍事会議員、二一年いらい党中央委員、二六年から同政治局員、二五年陸海軍人民委員、革命軍事会議議長、四〇—四一年人民委員会議議長、ファシスト・ドイツとの戦いにも指導的役割をはたし、げんざい副首相である。

エーベルト、フリードリヒ（一八七一—一九二五年）——ドイツ社会民主党の右翼指導者のひとり。一九〇五年社会民主党幹事長。一二年国会議員となり、シャイデマンとともに、党議員団を指導した。一八年党総理、十一月宰相、革命後人民代表委員会議長として、臨時政府の権力を委任されたが、革命をサボり、ブルジョア制度の維持につとめた。一九年臨時大統領。二二年ドイツ共和国初代大統領に指名された。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八年）——ドイツの社会民主主義者、経済学者、歴史家。第二インタナショナルの思想的代表者。一八八三年いらい『ノイエ・ツァイト』（ドイツ社会民主党の機関誌）の編集者。第一次大戦までは社会民主党の左翼に属していたが、大戦がおこると、国際主義と排外主義とのあいだを動揺する立場にたち、しだいに日和見主義にうつった。一九一七年独立社会党を組織した。十月革命以後は反ボリシェヴィキ的立場をとった。

カレーヂン、ア・エム（一八六一—一九一八年）——帝政ロシアの将軍。第一次大戦に参加。コルニーロフの支持者。十月革命後は、ドン地方で反革命政府を樹立したが、一八年一月銃殺された。

クチェポフ、ア・エス（一八八一年生）——ツァーリ軍の大佐、反革命志願軍の将軍、司令官。平和住民にたいする残虐さで有名である。のちヴランゲリと行動をともにした。

グチコーフ、ア・イ（一八六二年生）——モスクワの大工業家。十月党の創立者のひとり。第三次国会の議長。第一次大戦中は、中央戦時産業委員会議長。一九一七年、臨時政府の陸海軍大臣。十月革命後は亡命して、反革命活動をおこなった。

クラスノフ、ペ・エヌ（一八六九年生）——ロシアの将軍で、帝政主義者。コルニーロフ反乱への参加者。十月革命後、ドン地方にのがれ、一八年にはドイツの援助をうけて反革命戦をおこなったが、一九年亡命した。

クレマンソー、ジョルジュ（一八四一—一九二九年）——フランスの反動政治家。一八七五年いらい、たびたび代議士に選出された。一九〇二年から上院議員、〇六年内相、〇六—〇九年首相、第一次大戦時にはドイツの完全な絶滅を主張した。一七—二〇年首相、陸相となる。

ゲゲチコリ、エ・ペ（一八七九年生）——メンシェヴィキ。一九〇七—一二年、第三国会議員。一七年六月ソヴェト全ロシア中央執行委員に選出された。一八年五月、メンシェヴィキがグルジアの独立を宣言すると、グルジア政府の外相となり、デニキンと交渉した。二一年三月グルジア・ソヴェト権力確立後、亡命。

ケマル、パシア（一八八一—一九三八年）——トルコの政治家。一九一九年国民党員を糾合して、運動をおこし、二〇年アンゴラに新国民議会をもうけ、その議長となる。二二年、スルタン、カリフ制度を廃止。二三年に国民議会は共和制を宣言、ケマルを第一回大統領に選出した。二七年、三一年と大統領に再選された。

ケレンスキー、ア・エフ（一八八一年生）——ロシアの政治家。二月革命後にエス・エルに入党した。臨時政府の法相、陸海軍相をへて、七月事件後、首相兼陸相となる。コルニーロフ反乱の失敗後は最高軍司令官になった。十月革命後国外に亡命、反革命運動をつずけている。

ゴーツ、ア・エル（一八八二年生）——右翼エス・エル。二月革命ののちソヴェト全ロシア中央執行委員会内のエス・エルを指導し、祖国防衛主義の立場をとった。十月革命のときにはペトログラードで士官学校生徒の反革命反乱を組織し、国内戦のさいには反革命組織に参加していた。

コルチャック、ヴェ・ヴェ（一八七四—一九二〇年）——ロシアの提督、第一次大戦のときは黒海艦隊司令長官。十月革命後、一八年秋いらいシベリアで反革命活動をおこない、イギリスの支持をうけ、オムスクに反革命政府をつくっていた。一九年の春にコルチャック軍はヴォルガまでおしよせてきたが、赤軍はこれに大打撃をあたえた。一九二〇年捕虜となり処刑された。

コルニーロフ、エリ・ゲ（一八七〇—一九一八年）——将軍、反革命の巨頭。日露戦争に参加。二月革命後、ペトログラード軍管区司令官。四年労働者のデモンストレーションを弾圧した。ペトログラード・ソヴェトの要求で職をさったが、七月事件以後、最高司令官となり、前線で死刑を復活させ、兵士委員会の権利をとりけすなどの弾圧手段をとった。八月、軍部独裁を樹立しようとペトログラードに進軍したが、敗北した。十月革命後はドン地方で反革命軍を指揮したが、一八年四月戦死した。

サヴィンコフ、ベ・ヴェ（一八七九—一九二五年）——一九〇一年にペテルブルグ「労働者階級解放斗争同盟」にくわわったが、流刑中にエス・エルに接近し、〇

五年の革命後は革命運動から遠ざかっていった。第一次大戦中は帝国主義戦争を支持し、二月革命後にはケレンスキー内閣の軍事大臣となって、戦線での死刑の復活をおこなった。さらに十月革命後は、コルチャックやデニキンなどとともに、反革命勢力の巨頭としてソヴェト権力に反抗した。

サゾーノフ、エス・デ（一八六一—一九二七年）——ツァーリの外交官。一九一〇—一六年、外相。国内戦時代には、パリでデニキンの代弁者であった。

ジェルジンスキー、エフ・エ（一八七七—一九二六年）——古いボリシェヴィキ。たびたび投獄、流刑に処せられた。ポーランド社会民主党をも指導した。第六回党大会で中央委員に選出された。一七年十二月から反革命抑圧非常委員会（のち国家保安部）の議長として反革命とたたかい、二一年交通人民委員、二四年最高国民経済会議議長となり、経済の復興をも指導した。

シポーフ、デ・エヌ（一八五一—一九二〇年）——温和な自由主義者。一八九〇年代、一九〇〇年代のはじめのゼムストヴォ運動の指導者。一九〇五年、十月党の指導者となる。〇六年「平和革新党」にうつる。十月革命後、反革命組織にはいった。

シャイデマン、フィリップ（一八六三—一九三九年）——ドイツ社会民主党の指導者。一九〇三年、国会議員、一二年、ドイツ社会民主党中央委員。第一次大戦がおこると、軍事公債に賛成した。一八年国防相となり、十一月の革命を弾圧、失敗させた。一九年、新共和国の首相となる。

シャウミャン、エス・ゲ（一八七八—一九一八年）——古くからのボリシェヴィキ、職業革命家。二月革命後バクー・ソヴェトの議長。一九一八年三月からはバクー人民委員会議議長となったが、まもなくバクーのソヴェト権力は、イギリスと結んだ反革命勢力にうちまかされ、彼はその後、他の同志二五人とともに、イギリス軍によって銃殺された。

ジャパリッゼ、ペ・ア（一八七八—一九一八年）——一九〇四—〇五年社会民主党バクー委員。石油産業労働組合の指導者のひとり。〇七年、ロンドン大会に参加。その後流刑され、二月革命で解放。一八年党カフカズ地方委員、バクー・ソヴェト議長、『バクー労働

者』の編集員であった。この年、他の二五人の同志とともに、イギリス軍によって虐殺された。

シャミール（一七九八年ごろ—一八七一年）——一八二〇年代から六〇年代までつづいた、カフカーズ人のツァーリ・ロシアにたいする反乱の指導者。チェチェン、ダゲスタン地方をふくむ国家を建設した。一八五九年ロシア軍にとらえられ、カルーガに流刑になり、一八七〇年釈放され、メッカにいき、そこで死んだ。すぐれた組織者、煽動家、軍指揮者であった。

シュテルンベルグ、ゲ・カ（一八六六—一九二〇年）——古いボリシェヴィキ。一九〇九年いらい党活動から遠ざかっていたが、一七年ふたたび活動にはいり、革命のときには、ザモスクヴァレーチ区革命委員、一八年教育人民委員部参与、一八年秋から、第二軍の、のち東部戦線の革命軍事会議員となった。

シュリャプニコフ、ア・ゲ（一八八四年生）——若くから運動に関係したが、一九〇八—一四年まで亡命。一四年帰国、一七年四月金属工労働組合中央委員会議長、十月革命後労働人民委員、一八—二〇年南部戦線および カスピ＝カフカズ戦線、西部戦線第十六軍の各革命軍事会議員、一九—二二年金属工労働組合中央委員会議長。二〇—二一年労働者反対派を指導し、二三、二六、二七年にも反対派的行動をとった。

ジョルダニア、エヌ・エヌ（一八七〇年生）——グルジアの有名なメンシェヴィキ。一八九四年から革命運動にくわわり、たびたび投獄、流刑された。一九〇三年、第二回党大会に参加。第一次国会議員、党議員団の指導者であった。反動期には解党主義者、トロツキーの『ボリバー』と関係があった。十月革命後は、グルジア共和国のメンシェヴィキ政府の首相。のち亡命し、二一年には反革命団体を組織した。

スヴィンフヴード、ペ・エ（一八六一年生）——フィンランドの政治家、法律家。ブルジョア民族主義者。一九〇七—一二年フィンランド議会（セイム）の議長。一七—一八年首相。一八年政治活動からしりぞいていたが、一九三〇年、ファシスト政府の首班となった。

スヴェルドロフ、ヤ・エム（一八八五—一九一九年）——古いボリシェヴィキ、党とソヴェト権力との建設者のひとり。主として地方党組織の建設と指導にあたり、たびたび投獄と流刑にあった。一九一七年の四月

協議会で中央委員に選出され、十月革命の準備に参加した。十月革命後は全ロシア中央執行委員会議長として、ソヴェト諸大会を指導した。

スコーベレフ、エム・イ（一八八五年生）――インテリゲンツィア出身の社会主義者。一九〇三年社会民主党に入党。〇七―一二年亡命、一二―一七年第四次国会議員。このときメンシェヴィキにはしった。二月革命後ペトログラード・ソヴェト副議長、五月から第一次臨時政府の労仂相、六月からソヴェト中央執行委員会副議長。コルニーロフ反乱のとき内閣から脱退した。十月革命後は政治活動からしりぞき、二〇年には外国ににげたが、まもなく帰国。二二年ソ同盟共産党（ボ）に入党、その後経済機関ではたらいていた。

スコロパツキー、ペ・ペ（一八七三年）――白衛軍将校。ウクライナの大地主。十月革命後、ウクライナ軍団を指揮。ドイツ帝国主義の手さきとして、一八年ウクライナのゲットマンとなった。

スミルガ、イ・テ（一八九二年生）――一九〇七年社会民主党に入党。宣伝家・組織者として活動。一七年二月革命後に流刑地からモスクワにかえり、四月中央委員となる。十月革命後、フィンランド戦争に参加。国内戦のあいだは軍事上の活動にはいり、第三軍、東部、南東部、西部、南部、カフカーズ各戦線の革命軍事会議員であった。二一年以後経済方面ではたらき、最高国民経済会議、ゴスプランの各副議長をつとめたが、トロツキスト反対派の指導者のひとりとなり、除名。三〇年復党した。

スミルノフ、ア・ペ（一八七七年生）――一八九五年ペテルブルグ「労仂者階級解放斗争同盟」に加入。その後、主としてトゥヴェリで活動し、しばしば投獄流刑された。第四、第五回党大会に参加。二月革命後は、モスクワではたらき、モスクワ県ソヴェト幹部会員。十月革命後は、内務、食糧、農業人民委員部ではたらいた。一九二三年クレスチインテルンの書記となる。二七―二九年ロシア共和国人民委員会議代理。二八―三〇年党中央委員会書記、中央委員。

ソコリニコフ、ゲ・ヤ（一八八八年生）――若い時から活動し、一九〇九年―一七年まで亡命。二月革命で帰国。四月から社会民主党モスクワ委員。十月革命後、銀行国有化の指導にあたった。一八―二〇年、第

二、第九、第十三、第八军革命军事会議員。二一年財務人民委員代理、二二年同人民委員、二六年ゴスプラン議長代理、二九年イギリス大使、一七―一九年、二二―三〇年党中央委員、三二年林業人民委員代理。三七年反革命裁判で禁錮に処された。

ダン・エフ（一八七一年生）――メンシェヴィキの指導者のひとり。反動期には解党派、第一次大戦中は「中央派」に属した。つねにメンシェヴィキ中央委員で、一九二二年亡命して、反ソ活動をおこなった。

ダントン、ジョルジュ（一七五九―九四年）――フランス革命のもっとも有名な活動家のひとり。パリの自治体組織とコルドリエ・クラブで活動した。一七九一年パリ行政長官。一七九二年臨時政府の法相となり、革命の防衛にあたった。国民公会（コンヴァン）に選出され、山岳党の右翼として、ジロンド党との妥協をはかった。一七九三年公安委員。ダントン派は、主として大ブルジョア的インテリゲンツィアの利益を代表した。ロベスピエールの政権掌握後、革命的行政の解消を要求、処刑された。

チチェリン、ゲ・ヴェ（一八七二―一九三六年）――一九〇五年、社会民主党に入党、〇七年ロンドン党大会に参加。のち亡命して、フランス、イギリスにいき、イギリス社会民主党の左翼と協力した。二月革命後、政治的亡命者帰国組織の書記となる。一八年帰国、一八―三〇年外務人民委員。

チヘイゼ、エヌ・エス（一八六四―一九二六年）――メンシェヴィキ。第三、第四次国会での代議士。社会民主党国会フラクションの議長。第一次大戦当時は中央派、社会平和主義者であった。二月革命後、ペトログラード・ソヴェトの初代議長。十月革命後、一八年にカフカーズにいき、二一年まで、そこで憲法制定議会の議長をしていたが、その後亡命した。

チヘンケリ、ア・イ（一八七四年生）――メンシェヴィキ。法律家。第四次国会議員、第一次大戦中は社会排外主義者。一八―二一年メンシェヴィキのグルジア政府の外相。二一年亡命。

チャイコフスキー、エヌ・ヴェ（一八五〇―一九二六年）――さいしょ革命運動に参加したが、のち同情者的立場をとっていた。一九〇五年いちじエス・エル

に関係したが、まもなく政治活動からしりぞいて、協同組合に専心した。第一次大戦時は祖国防衛派。一七年トゥルドヴィキー、エヌ・エスに関係、十月革命後ソヴェト権力の仇敵、白衛陣営の有名な活動家であった。一八年アルハンゲリスク地方の反革命政府の首班。二〇年デニキンの南ロシア政府の一員であった。亡命中に死亡。

チャーチル、ウィンストン（一八七四年生）――イギリスの保守的政治家。一九〇〇年保守党に入り、下院議員となり、〇六年自由党に転じ、一一年海相となり、ドイツと帝国主義的政策をきそった。一五年辞職。一七年軍需大臣、一八―二二年陸相、航空相、拓相を歴任。二四年保守党に復帰、ボールドウィン内閣の蔵相となる。第二次大戦の開始当時は海相、四〇年から相となる。ネヴィル・チェーンバレンのあとをついで、戦時内閣の首相。四五年の総選挙にやぶれて労働党にあとをゆずったが、五一年の総選挙で勝利をしめ、ふたたび首相となる。イギリス保守党内での強硬派で、イギリス帝国主義のになない手のひとり。

ツェレテリ、イ・ゲ（一八八二年生）――メンシェヴィキ。第二次国会議員。二月革命後、メンシェヴィキ党の指導者のひとりになり、第一次連立内閣にはいった。七月事件後、内相。十月革命後はグルジアのメンシェヴィキ政府の一員であったが、亡命した。

デニキン、ア・イ（一八七二―一九四七年）――ロシアの将軍。十月革命後ドン地方で反革命志願軍を編成、一八年夏、全ウクライナを占領した。一九年十月オリョール、ヴォロネジ付近の戦斗で赤軍に撃破され、二〇年三月亡命した。

トイシコー、レオ（一八六七―一九一九年）――ポーランドとドイツの労働運動活動家。はじめナロードニキ。のち「労働解放団」に参加。一八九一年ローザ・ルクセンブルグのグループにくわわり、その指導者のひとりとなる。のちポーランド社会民主党の指導者のひとり。〇七年ロシア社会民主党ロンドン大会に参加、ポーランド代表団の団長、党中央委員となる。第一次大戦のはじめから、ドイツにすみ、「スパルタクス団」の組織に専心した。一八年ドイツ共産党書記長。一九年三月虐殺された。

ドゥートフ、ア・イ（一八六四―一九二二年）――

オレンブルグのアタマン。十月革命時に、反革命将校を基盤にして、オレンブルグで政権をにぎった。一八年一月オレンブルグを赤軍が占領したのち、カザック居住地方にのがれて白衛軍徒党を組織し、チェッコ反乱軍に支持された。コルチャック権力を承認して、その有力な戦友となった。

トリフォーノフ、ヴェ・ア（一八八八年生）――一九〇四年社会民主党に入党。ロストフ、エカテリンブルグなどで活動。二月革命後、ペトログラード・ソヴェトのボリシェヴィキ・グループ書記。十月革命後、革命軍事会議員、一八年ウラル軍の組織者、第三軍革命軍事会議員、一九―二〇年南部戦線、南東部戦線の革命軍事会議員、のち経済方面で活動していた。

トロツキー、エリ・デ（一八七九―一九四〇年）――一九〇三年第二回党大会でメンシェヴィキに属し、〇五年、亡命から帰国後、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を刊行していた。当時ペトログラード労仂者代表ソヴェトの議長をつとめたことがある。同時にパルヴスと『ルースカヤ・ガゼータ』を刊行した。その後〇八年、ウィーンでヨッフェと『プラウダ』を刊行した。一二年には反党的八月ブロックを組織した。大戦中は中央派の左翼の立場をとり、メンシェヴィキと共同した。マルトフとともに『ナーシェ・スローヴォ』の編集にあたった。一五年には、チンメルワルド会議に参加したが、中央派の立場をすてなかった。二月革命後、帰国し、しばらくしてボリシェヴィキに属するようになった。ペトログラード・ソヴェト議長にえらばれ、また軍事革命委員として十月革命にも参加した。一七年の第六回党大会で中央委員。革命後は内務人民委員、軍事人民委員、革命軍事会議の議長などになった。ブレスト講和のときには、ソヴェト代表となったが、反党的態度をとった。その後いろいろな問題について反対派を指導し、二五年、陸海軍人民委員を免職され、第十四回党大会以後は党を分裂させせようとした。二七年中央委員の地位をとかれ、さらにジノーヴィエフとともに除名された。二九年、国外追放に処され、国外で反ソ活動をつずけ、ソヴェト内外のスパイ、妨害者を指導していたが、メキシコで暗殺された。

ナリマノフ、ナリマン（一八七二―一九二五年）

——作家、東部地方解放斗士のひとり。ペルシア、トルコの社会民主党組織の創立者。一九一三年いらいバクーではたらいていた。一八年バクーの都市経済人民委員、のちアストラハンの教育人民委員代理、一九年いらい内務人民委員部東方課長、民族問題人民委員代理。二〇年アゼルバイジャン革命委員会議長、のち人民委員会議議長。バクーの東部諸民族大会の組織者。のちソ同盟中央執行委員。

ノスケ、グスタフ（一八六八年生）——ドイツ社会民主党員、労仂組合活動家。一九〇六年国会議員、第一次大戦中は政府を支持。一九一八年革命の弾圧に協力した。一九一九年シャイデマン内閣の国防相。二〇—三三年、ハノーヴァー州知事であった。

ハインドマン、ヘンリー（一八四二—一九二一年）——イギリスの弁護士、ジャーナリスト。一八八三年社会民主主義連盟を創立（のち社会民主党と改名）。第一次大戦中は、反ドイツ的立場をとり、極端な排外主義者となる。一九一六年党から除名され、二一年社会民主主義連盟の名で、国民社会主義政党を創立した。

ピチェラホフ、ラザール——大佐。十月革命後カスピ海以東地方で、白衛軍とエス・エルの部隊を指揮した。イギリスから財政的援助をうけ、一八年イギリス軍のバクー占領に協力した。一九年デニキンの援助をうけて、ペトロフスクを占領し、政府をつくった。その後亡命。

ビュカナン、サー・ジョージ（一八五四—一九二四年）——イギリスの外交官、一九一〇—一八年、ペテルブルグ駐在大使。第一次戦争中に、イギリスの利益のためにツァーリ政府に圧力をかけた。さらに二月革命後は臨時政府に圧力をかけ、戦争の継続と革命の弾圧を要求した。またコルニーロフ反乱のさいには、コルニーロフを支持し、十月革命後は連合国の干渉に一役を買った。

ブヂョンヌイ、エス・エム（一八八三年生）——ソヴェトの最大軍事指導者のひとり。ソヴェト騎兵軍団の創立者。国内戦時代にマモントラ、デニキン、ヴランゲリの撃滅に大功をたてた。第八回ソヴェト大会以来、全ロシア中央執行委員会の、第一回ソヴェト同盟大会以来、ソ同盟中央執行委員会の一員となる。三五

年元帥、三七—四〇年騎兵総監、四〇年祖国防衛副司令官、四六年いらいソヴェト会議幹部会員。

ブランキ、オーギュスト(一八〇五—八一年)——フランスの革命家、社会主義者。一八三〇—七一年のすべてのパリの蜂起に参加した。種々の政治団体の組織者。三七年間入獄していた。ブランキは、個人と思想の意義を過大に見て、プロレタリアートの解放は、階級斗争によってではなく、セクト的な少数のインテリゲンツィアの陰謀によって実現されると考えたが、空想的社会主義のうちでは、彼の学説はマルクス主義にもっとも近いものであった。

プレハーノフ・ゲ・ヴェ(一八五七—一九一八年)——ロシア・マルクス主義の最大の理論家のひとり。はじめ人民主義の団体「土地と自由」団に属したが、八三年「労働解放」団を創立。レーニンとともに『イスクラ』を創刊。一九〇三年の党分裂後、はじめはボリシェヴィキであったが、のちメンシエヴィキにうつり、第一次大戦中は社会愛国主義的立場をとっていた。十月革命後はソヴェト権力に反対してはいたが、積極的な反対斗争はおこなわなかった。

ペトリユーラ、エス・ヴェ(一八七七—一九二六年)——ウクライナの社会民主党右翼に属し、ウクライナ中央ラーダ政府の一員。労働者・農民の弾圧とソヴェト・ロシアにたいする戦争の首唱者であった。一八年末ウクライナ執政内閣の一員、一九年二月ヴィンニチェンコのあとをうけて、その首班となり、連合国の援助をうけるために、屈辱的な条件を甘受した。ペトリューラ政権はアタマンの支配、労働者・農民の弾圧、民族的迫害などの反動支配を特徴とした。一九年十二月ポーランドと結び、ポーランド戦争に参加、のち亡命したが、パリで暗殺された。

ホフマン、マックス(一八六九—一九二五年)——ドイツの将軍。ブレスト・リトフスクの平和交渉の初期の同盟国がわの代表。講和条約の成立がながびいたので、交渉をうちきって、一八年二月十一日ソヴェト領土にたいする進撃をおこなった。ロシアの完全な破壊をめざした、ドイツ主戦党の指導者のひとりで、死ぬまでソヴェト・ロシアにたいする国際遠征軍をふたたび組織しようとした。

ポルヤン、ヤ・ヴェ(一八九一年生)——一九一七年

党クバニ委員、エカテリノダール・ソヴェト代議員。一八年党ノヴォロシースク委員、一九年第九北カフカズ革命軍事会議員、二〇年クバニ革命委員会議長、クバニ県執行委員会議長、二二年トゥヴェリ県執行委員会議長、二九年極東地方執行委員会議長。

マイ＝マエフスキー、ヴェ・ゼ（一八六七年生）——将軍、帝政主義者。反革命志願軍を指揮した。

マックレオン、ジョン（一八七九—一九二三年）——イギリス労働運動の活動家、スコットランド労働党の左翼の指導者。第一次大戦中は国際主義者。二〇年コミンテルン第二回大会に参加。のち共産主義運動から脱落した。

マフノ、エヌ・イ（一八八九—一九二二年）——ロシアの無政府主義者。一九〇五年無政府主義運動には いり、〇八年投獄。二月革命後解放された。一八年ウクライナをドイツ軍が占領すると、ドイツ軍と地主にたいする斗争のために農民を糾合した。その軍隊は大酒、泥酔にふけった。ドイツ軍がおいはらわれると、ソヴェト権力と対立した。一九年デニキンと赤軍との斗争のときも赤軍と一時は行動をともにしたが、共産主義者の迫害はやめなかった。赤軍がデニキンに勝利すると、ソヴェト権力と斗争をはじめた。二〇年ヴランゲリとの斗争のさい、赤軍はマフノ軍と協定して、これにあたったが、ヴランゲリをたおしたのちにはマフノは南ウクライナにおけるソヴェト権力の主要な敵となった。二一年ルーマニアに亡命、パリで死んだ。

マモントフ、カ・カ（一八六九年生）——帝政ロシアの大佐、反革命志願軍の将軍。一九一九年タンボフを占領して、赤軍の背後をついた。マモントフの軍隊は、破壊と殺人の残忍な行為をほしいままにした。

マルトフ、エル（一八七三—一九二三年）——メンシェヴィキの指導者のひとり。一八九五年ペテルブルグ「労働者階級解放斗争同盟」に加入。党再建と『イスクラ』発行のためレーニンと協力した。一九〇一年には、ミュンヘンで『イスクラ』や『ザリャー』の仕事に参加したが、〇三年、第二回党大会でメンシェヴィキの指導者となった。二一年亡命、いわゆるウィーン・インタナショナルの創立に参加した。

マンネルハイム、カルル（一八六七—一九五一年）

――フィンランドの軍人、はじめロシア陸軍にはいり、日露戦争に参加。第一次大戦中は、ツァーリの司令部にはいっていた。十月革命後、一八年フィンランドに白軍をつくり、革命運動を鎮圧し、一八年末から、フィンランドの独裁者となる。三一年大統領となり、三三年元帥。反ソ主義者。ソヴェト・フィンランド戦中、第二次大戦中総司令官であった。

ミリューコフ、ペ・エヌ（一八五九年生）――ロシア自由主義者の首領。カデットの指導者。第三、第四次国会議員。第一次大戦中は、ロシア帝国主義の代弁者。二月革命後、臨時政府の外相。帝国主義戦争の継続を主張した。コルニーロフ反乱の組織者のひとり。十月革命後は、反革命活動をおこない、亡命した。

ユデーニッチ、エヌ・エヌ（一八六二年生）――帝政ロシアの将軍。第一次大戦当時、カフカズ戦線の総司令官となり、トルコ人にたいして残虐をはたらいた。十月革命後、一九年にはイギリスの援助でエストニアにつくられた反革命的「西北政府」軍の総司令官となり、二度にわたってペトログラードに攻撃をくわえたが、二度めには惨敗して、エストニアに、にげかえり、その後イギリスに亡命した。

ラシェーヴィチ、エム・エム（一八八四―一九二八年）――古いボリシェヴィキ。オデッサ、ニコラエフ、エカテリンブルグなどの組織で活動していた。二月革命後、ペトログラード・ソヴェトのボリシェヴィキ・グループの責任者となる。十月革命に積極的に参加。国内戦時代には第三軍、南方軍、第七軍、第十五軍の革命軍事会議員。国内戦後シベリア革命委員会議長、二五―二六年反対派に属したことがある。

ラツィス、エム・イ（一八八三年生）――古いボリシェヴィキ。一六年ペテルブルグにきて党の秘密印刷所を組織し、二月革命後ペテルブルグ委員となる。十月革命時は、軍事革命委員会員、革命後は内務人民委員部や全ロシア非常委員会の参与となり、また塩業、石炭業関係の指導機関ではたらいた。

ラッサール、フェルディナンド（一八二五―一八六四年）――ドイツ労仂運動の最大の指導者のひとり。雄弁家、政論家。『新ライン新聞』への寄稿者。「賃

金鉄則」理論から出発して、プロレタリアートの経済斗争、組合組織の意義をみとめず、普通選挙権の獲得におもな注意をむけた。一八六三年、総同盟を創立。協同組合による漸進的な社会主義への移行を考えた。

ラミシヴィリ、ノイ（一八八一年生）——グルジアのメンシェヴィキ。一九〇二年、社会民主党に入党、中央委員となる。第一次大戦のはじめから、祖国防衛派。一八—二〇年、グルジアのメンシェヴィキ政府の内相。二四年、国外からグルジアの反革命暴動を指導した。

リヴォーフ、ゲ・イェ（一八六一—一九二五年）——大公、大地主、政治家。第一次国会議員、カデット。二月革命の直後臨時政府を組織し、第一次および第二次内閣の首相であったが、七月七日に辞職、十月革命後は亡命した。

リープクネヒト、カール（一八七一—一九一九年）——ドイツ社会民主党の左翼の偉大な斗士。他のドイツ社会民主党の裏切者どもとはことなり、あくまでも帝国主義戦争に反対してたたかい、一九一八年十一月のドイツ革命にさいしては、ローザ・ルクセンブルグらとともにスパルタクス団を組織して、右翼の裏切者とたたかった。一九年一月十五日に、ローザとともに、反動将校に虐殺された。

ルクセンブルグ、ローザ（一八七〇—一九一九年）——ドイツ、ポーランド、ロシアの労働運動に参加。一八九三年ポーランド王国社会民主党の創立に参加。一八九七年いらいドイツ社会民主党に積極的に参加した。つねに党の左翼にあって日和見主義とたたかい、一九〇七年にはロンドン党大会でボリシェヴィキと行動をともにした。大戦中は国際主義の立場にたち、第三インタナショナル結成の必要をといた。一九一八年十一月のドイツ革命後、リープクネヒトとともに反動将校に虐殺された。

ルノーデル、ピエール（一八七一—一九三五年）——フランスの社会改良主義者、社会党右翼指導者。ジョーレスにつづいて『ユマニテ』（社会党機関紙）の編集者。一九二〇年の党分裂のとき、共産党に対立して、ロンゲなどとフランス社会党を結成した。

ロイド・ジョージ（一八六三—一九四五年）——イギリスの政治家。自由党の指導者。第一次大戦前は自

由主義的改革の支持者。戦争中は、軍需大臣、一六年首相。ヴェルサイユ条約作成者のひとり。十月革命後は、革命の敵として、ロシアにたいする干渉と封鎖を支持した。二六年から自由党首。三二年政界を引退。

ロジャンコ、エム・ヴェ（一八五九―一九二四年）――大地主。オクチャブリスト。第一次国会いらいの議員。二月革命後は国会臨時委員会の委員。コルニーロフ反乱のときには、その有力な組織者のひとりであった。十月革命後は白衛志願軍に参加、敗北して亡命した。

ロックフェラー、ジョン（一八三九―一九三七年）――アメリカの富豪。一八七〇年スタンダード石油会社を設立。八二年全米石油会社のトラストをつくった。ロックフェラー財団理事長であった。

ロリオ、フェルナン（一八七〇年生）――フランス労働運動の活動家。一九〇一年いらい社会党員。〇六年から労働組合活動に参加。第一次大戦中は、国際主義者。フランス共産党の創立に参加。その指導者のひとり。二六年脱党。

スターリン年譜

（一九一七年十月—一九二〇年）

一九一七年

十月二十五—二十六日　レーニンとスターリン、第二回全ロシア・ソヴェト大会を指導。

十月二十六日　第二回ソヴェト大会で全ロシア中央執行委員に選出され、民族問題人民委員に任命される。

十月二十八日にかけての夜　レーニンとスターリン、ペトログラード軍管区司令部を訪問、ここで軍事活動家とともに、ケレンスキー、クラスノフの軍隊を撃破する作戦計画をつくる。

十月二十八日　レーニンとスターリン、ブルジョア新聞の発行禁止にかんする人民委員会議の決定に署名。

十月三十一日　軍事革命委員会の会議で、戦線の状況にかんする報告をおこなう。

十一月二日　レーニンとスターリン、スターリンの起草した『ロシア諸民族の権利宣言』に署名。

十一月三日　諸政党、プチロフ工場および全ロシア

鉄道労働組合中央執行委員会の代表者会議の討論に参加。

十一月六日　全ロシア中央執行委員会の会議で「全社会主義政党からなる政府」樹立の問題にかんして演説をおこなう。

十一月九日　レーニンとスターリン、総司令官の職からドゥホーニン将軍を罷免する命令に署名。

十一月十四日　ヘルシンキにおけるフィンランド社会民主労働党大会で演説。

十一月十六日　人民委員会議の会議で歴史的貴重品をウクライナ人民にゆずりわたす提案をおこなう。革命裁判所にかんする布告作成委員会の委員に選出される。

十一月十九日　人民委員会議の会議で（一）対フィンランド貿易、（二）ウクライナとラーダにかんする報告をおこなう。

十一月二十日　ソヴェト政府の呼びかけ『ロシアおよび東洋の全勤労回教徒へ』の草案を人民委員会議の審議にかける。また憲法制定議会の選挙委員会の反革命的行動について人民委員会議に報告。

十一月二十二日　反革命的新聞の禁止の問題について軍事革命委員会の会議で発言。

十一月二十七日　金融、経済分野での社会主義国家の政策の実行にかんする問題について人民委員会議の会議で発言。

おそくとも十一月二十七日　レーニンとスターリン、講和交渉計画の概要をつくる。

十一月二十八　レーニンとスターリン、レーニンによ

日　ってつくられた『反革命的内乱の首謀者逮捕にかんする布告』に署名。

十一月二十九日　党中央委員会、レーニン、スターリン、スヴェルドロフをふくめた中央委員会ビューローを創設。

十二月一日　全ロシア回教徒評議会執行委員会代表と『オスマンの聖コーラン』を回教徒に返還することについて会談する。

十二月二日　人民委員会議の会議で、ウクライナにかんし、また白ロシア・ソヴェト大会の組織にかんして報告。

十二月五日　レーニン、スターリン、スヴェルドロフの署名した最高国民経済会議創設の布告、『プラウダ』に発表される。
白ロシアにおけるソヴェト権力の強化を目的とする共同活動について、白ロシア地方委員会代表と協定を結ぶ。

十二月十二日　論文『戦線と後方のウクライナ人の同志への答』を書きあげる。

十二月十四日　全ロシア中央執行委員会の会議で、ウクライナ・ラーダとの関係について報告。

十二月十六日　人民委員会議の会議でオレンブルグ、ウラル軍管区、トゥルケスタンおよびカフカーズの状況について報告。

十二月十八日、　レーニンとスターリン、フィンランドの国家的独立にかんする布告に署名。
人民委員会議の会議でオレンブルグ軍管区の戦況について報告。

十二月十九日　人民委員会議の会議で、ウクライナ中央ラーダについて報告。

十二月二十一日　レーニンとスターリン、赤軍の組織・編成にかんする全ロシア協議会の会議に参加。

十二月二十二日　全ロシア中央執行委員会議の会議でフィンランド独立の問題について報告。

十二月二十三日　レーニン休暇のさいの人民委員会議議長に任命される。

十二月二十四日　人民委員会議の会議を司会し、ドンの情勢、カザック勤労者大会、オレンブルグにたいする革命軍の攻撃準備等について報告。

十二月二十七日　人民委員会議、スターリンの司会する会議で、プチロフ工場の国有化の決定、ならびにシンフェローポリのアナトール航空機組立工場の没収にかんする布告を採択。

十二月二十七―二十八日　ドン地方カザック軍人団体左派の代表委員、および第八カザック師団の代表者と会談。

十二月三十一日　スターリンの論文『「トルコ領アルメニア」について』を『プラウダ』第二二七号に掲載。

スターリンによって書かれた『「トルコ領アルメニア」について』の布告、レーニンとスターリンの署名で『プラウダ』の同号に掲載される。

一九一八年

一月八日　人民委員会議の会議でソヴェト権力の食糧政策の分野での政策立案委員に選出される。

一月十―十八日　第三回全ロシア・ソヴェト大会の活動に参加。

一月十一日　党中央委員会でドイツ軍との講利にかんするレーニンの提案を擁護。

一月十五日　第三回ソヴェト大会ボリシェヴィキ・グループ会議で、ソヴェト共和国連邦について演説。

第三回ソヴェト大会で、民族問題にかんする報告ならびに結語をのべる。大会はスターリンの提案するロシア共和国の連邦的諸機関にかんする決議を採択。

一月二十四日　第七回党大会の召集を審議する党中央委員会会議で、ロシア社会民主労働党（ボ）の綱領の改正に賛成。

党中央委員会の依頼により欧米諸国の社会主義諸政党の革命的一翼の代表委員と会議。

一月二十八日　レーニンとスターリン、ドイツとの講和の即時締結の必要について、ブレスト・リトフスクのソヴェト講和代表団に電報をおくる。

二月二十一日（八日）＊　レーニンとスターリン、ドイツ軍の攻撃に関連して、ボリシェヴィキ党ペトログラード市委員会と同地区委員会にたいし、ドイツ侵略者への抵抗を組織し、労働者の監督のもとにブルジョアジーをざんごう掘りに動員することを指令。スターリンはキーエフのボリシ

エヴィキにも同様の指令をおくる。

＊ 一九一八年二月二十一日（八日）から日付を新暦にかえる。

二月二十三日 スターリン、党中央委員会で、ブレスト講和問題でトロツキー、ブハーリンと斗争するレーニンを支持。

二月二十四日 ブレストの講和代表団派遣につき、またドイツ帝国主義者との交渉における戦術の原則について、直通電話でウクライナ・ソヴェト共和国の人民書記局に指令をあたえる。

早くとも三月二日 レーニンとスターリンは、ムルマンスク・ソヴェトの代表者と直通電話で、英仏の占領からムルマンスクをまもるための緊急外交措置をとるよう要求。

三月六—八日 ロシア共産党（ボ）第七回大会の活動に参加。

三 月 八 日 同大会で党中央委員ならびに党綱領草案起草委員に選出される。

三月十日以前 ペトログラード・ソヴェトから第四回全ロシア臨時ソヴェト大会代議員に選出される。

三 月 十 日 政府とともにモスクワへ出発。

三 月 十 四 日 『イズヴェスチヤ』第四七号にスターリンの論文『ウクライナの結び目』を掲載。

レーニンとスターリン、オルジョニキッゼ（ウクライナの反革命抑圧非常委員）に手紙で、ドイツ占領軍の進撃との斗争のために、クリミアおよびドネツ炭田地方の全ロシアとの戦斗的統一

戦線を創設することを要求。

三月十四―十六日　第四回全ロシア臨時ソヴェト大会の活動に参加。

三月十六日　同大会、スターリンを全ロシア中央執行委員に選出。

三月十九日　エス・シャウミャン、ア・ジャパリッゼへの手紙で、軍事的な点でバクーを強化する必要を指示。

三月二十六―二十七日　『プラウダ』第五五、五六号に論文『社会主義の仮面をかぶった外カフカーズの反革命家』を掲載。

三月三十一日にかけての夜　タシケント・ソヴェトの代表者との直通電話で、トゥルケスタンの国内情勢にかんして会話。

四月一日　全ロシア中央執行委員会ボリシェヴィキ・グループ、スターリンをロシア社会主義共和国の最初の憲法草案の起草委員に選出。

四月二日　人民委員会議の会議で、ドイツ軍のハリコフ攻撃のため、ウクライナ中央ラーダと即時講和交渉をはじめることを提案。

四月三―四日　『プラウダ』第六二、六三号にロシア連邦共和国の組織について、スターリンと『プラウダ』記者との会談を発表。

四月五日　全ロシア中央執行委員会のロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法草案起草委員会の第一回会議で発言。

四月九日　カザン、ウファー、オレンブルク、トゥルケスタンその他のソヴェトへあて

たスターリンの呼びかけが、『当面の任務の一つ』という標題で『プラウダ』第六七号に発表される。

四月十二日　憲法草案起草委員会の会議でロシア・ソヴェト共和国の連邦の型について報告。

四月十九日　スターリンの草案、『ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の一般的規定』、憲法草案起草委員会の会議で審議され、承認される。

四月二十七日　人民委員会議、ウクライナ中央ラーダと講和条約を締結する交渉をおこなうため、スターリンをロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の全権代表に任命。

四月二十九日　代表団とクールスクに到着。

早くとも五月二日　人民委員会議へ報告のためクールスクからモスクワへ出発。

五月五日　レーニンとスターリン、ウクライナ戦線における休戦締結にかんしヴォローネジ、ロストフ、ブリヤンスクへ無線電信をおくる。

五月十一―十六日　タタール＝バシキール・ソヴェト共和国の憲法制定ソヴェト大会の召集についての会議を指導し、かつ、その開会閉会の辞をのべる。

五月二十三日　『プラウダ』第一〇〇号に論文『カフカーズの状況』を掲載。

五月二十九日　人民委員会議、スターリンを、非常権限をあたえられた、南部ロシアの食糧問題の総指揮者に任命。

六月一日　『プラウダ』第一〇八号に論文『ドン地方と北カフカーズについて（事実と陰謀）』を掲載。

六月四日　モスクワからツァリーツィンへ出発。

六月六日　ツァリーツィンに到着。

六月七日　ツァリーツィンにおける輸送の整備、革命的秩序の実施ならびに中央への食糧発送にかんしてとられた措置につきレーニンに打電。

六月十三日　輸送の改善、食糧調達計画および、そのモスクワへの発送にかんする情報をレーニンに打電。

六月二十五日　輸送の整備と食糧積荷の運送のためにカムィシンに到着。

六月二十九日　レーニンに直通電話で、食糧直通列車の北送について報告。

七月七日　レーニンとスターリン、エス・エル左派の暴動にかんし電報を交換。

レーニンにツァリーツィン地区の戦況とトゥルケスタンとについて手紙で報告。

七月八日　バクーにいるエス・シャウミャンに社会主義連邦ソヴェト共和国およびアゼルバイジャンの内外政策について手紙を書く。

七月十日　レーニンへの手紙で、ツァリーツィン戦線を混乱させ、北カフカーズ地方を喪失させたトロツキーの命令に抗議。

七月十五日　ソヴェト・トゥルケスタンを至急救援

する行動の必要を人民委員会議に打電。

七月十七日　ツァリーツィン戦線の巡視の成果についてレーニンに打電。

七月十八日　七月十二日から十六日のあいだに食糧をつんだ五列車をモスクワに出発させたことにつき、レーニンに直通電話で報告。

七月十九日　スターリンをいただく北カフカズ軍管区軍事会議、創設される。

七月二十日　全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の名でエス・シャウミャンに電報をおくり、バクー・ソヴェトが自主的な対外政策を遂行し、外国資本の手さきと徹底的に斗争することを要求。

七月二十四日　モスクワとペトログラードの食糧事情にかんする問題を、直通電話でレーニンと会話。

八月四日　レーニンに手紙で南部の戦況と食糧事情を報告。

八月六日　戦線の補給をおこなう全組織の改組にかんする北カフカズ軍管区軍事会議の命令に署名。

八月八日　スターリンとヴォロシーロフ、コテリニコヴォ駅にいて、クラスノフ徒党の攻撃によって必要になった軍隊輸送にかんして、ツァリーツィン戦線南部地区司令官に命令をあたえる。

八月十三日　ツァリーツィンと同県に戒厳状態を布告する軍事会議の命令に署名。

八月十四日　ツァリーツィンでブルジョアジーをざ

んごう掘りに動員する軍事会議の命令に署名。

八月十七日　ツァリーツィン戦線の情勢緩和について、モスクワのパルホメンコに打電。

八月十九日　スターリンとヴォロシーロフ、戦線の戦斗行動に関連してサレプトにいる。

八月二十四日　スターリンとヴォロシーロフは、ツァリーツィン戦線の攻勢展開にかんする作戦命令に署名。

八月二十六日　スターリンとヴォロシーロフ、戦線での装甲自動車の欠乏と関連して、ツァリーツィンの武器工場の組織替えにかんする命令に署名。

八月三十一日　スターリンとヴォロシーロフ、レーニンにたいする凶悪な暗殺未遂について全ロシア中央執行委員会議長スヴェルドロフに電報をおくる。

九月六日　ツァリーツィン地区におけるソヴェト軍の攻勢の成功を人民委員会議に打電。

九月八日　ツァリーツィンでエス・エルの組織した、「グルゾレス」連隊の反革命蜂起の一掃についてレーニンへ打電。

九月十日　ツァリーツィンの集会で人民委員会議ならびに北カフカズ軍管区軍事会議の名で、戦斗でひいでたツァリーツィン連隊を称賛し、「戦斗における勇敢のために」と記入した旗を彼らに授与する。

九月十二日　南部戦線の状況にかんする問題をレーニンに報告のためモスクワへ出発。

九月十五日　レーニン、スヴェルドロフ、およびスターリン、ツァリーツィン戦線の問題にかんして協議。

九月十七日　再設された南部戦線軍事革命会議議長に任命される。

九月十九日　民族問題人民委員部参与会の構成と活動規準の問題に専念する。

レーニンとスターリン、ツァリーツィン戦線の革命的軍隊にたいして、あいさつの電報をおくる。

九月二十一日　『イズヴェスチヤ』に、ツァリーツィン戦線の状況にかんするスターリンと『イズヴェスチヤ』記者との会談を発表。

九月二十二日　スターリン、モスクワからツァリーツィンにかえる。

九月二十八日　南部戦線の戦斗部隊を四個軍に分割する問題について、南部戦線軍事革命会議の第一回会議を指導。

十月三日　スターリンとヴォロシーロフ、南部戦線を崩壊させかねないトロツキーの行動を、中央委員会で審議するよう要求した電報を、レーニンにおくる。

十月六日　ふたたびモスクワへ出発。

十月八日　人民委員会議の決定により、共和国革命軍事会議の一員に任命される。

十月十一日　モスクワからツァリーツィンへかえる。

スヴェルドロフに直通電話でツァリーツィン戦線の状況を報告。

十月十六日　『ソルダート・レヴォリューツィー』に、スターリンおよび軍事会議の他の委員の署名する『ドンの貧農への手紙』を掲載。

十月十八日　ツァリーツィン付近でクラスノフ軍を撃滅したことをレーニンに打電。

十月十九日　ツァリーツィンからモスクワへ出発。

十月二十二日　ツァリーツィン付近で白衛軍を撃滅した革命軍に謝電をおくる。

ウクライナ共産党（ボ）第二回大会でウクライナ共産党（ボ）中央委員に選出される。

十月二十九日　モスクワ・ソヴェト総会で南部戦線の状況について報告。

『プラウダ』第二三四号に論文『事物の論理、メンシェヴィキ中央委員会の「テーゼ」について』を掲載。

十一月六日　『プラウダ』第二四一号に論文『十月の変革（ペトログラードの一九一七年十月二十四・二十五日）』を掲載。

十一月六―九日　第六回全ロシア臨時ソヴェト大会の活動に参加。

十一月九日　同大会、スターリンを全ロシア中央執行委員に選出。

十一月十一日　ロシア共産党（ボ）中央執行委員会を代表して、モスクワでひらかれた回教徒共産主義者第一回大会で歓迎の辞をのべる。

十一月十三日　全ロシア中央執行委員会の会議で、全ロシア中央執行委員会幹部会員に選出される。

十一月十七日　『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第二号に、論文『仕切壁』を掲載。

十一月二十四日　同第三号に、論文『東洋をわすれるな』を掲載。

十一月三十日　労農国防会議の一員、同会議議長代理に任命される。

十二月一日　労農国防会議の第一回会議の討論で発言。

国防会議の決定により、レーニンとスターリンに、国防会議の諸決定批准権があたえられる。

十二月三日　国防会議の鉄道運輸整備委員会の会議を指導。

十二月七日　人民委員会議、スターリンの書いた、エストニア・ソヴェト共和国の独立承認にかんする布告草案を確認。

十二月十一日　国防会議の会議で、鉄道運輸の整備、政治的煽動、編成されつつある師団へのコミッサールの派遣、戦斗部隊の宿営などについて報告。

十二月二十二日　『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第七号に、論文『事はははかどっている』を掲載。

十二月二十五日　白ロシアの国家組織にかんし、白ロシア民族委員会の責任勤務員と会談。

白ロシア社会主義ソヴェト共和国の組

織ならびに白ロシア共産党（ボ）の問題について、スモーレンスクにいるミャスニコフに直通電話で指示。

十二月二十九日　国防会議の会議で臨戦地帯の食糧事情について報告。

一九一九年

一月一日　ロシア共産党（ボ）中央委員会および国防会議によって、ペルミ明渡しの原因を明らかにし、東部戦線の第三、第二軍地区における党活動と、ソヴェト活動を回復させる措置をとるため、スターリン、ジェルジンスキーを成員とする党調査委員会が組織される。

一月五日　スターリンとジェルジンスキー、ヴィャトカへ到着。

スターリンとジェルジンスキー、レーニンへの手紙で第三軍のために増援部隊輸送にかんする問題を提起する。

十二月三十日　ロシア共産党（ボ）中央委員会、レーニンの提案によりスターリンを東部戦線へ派遣することを決定。

一月七日にかけての夜　スターリンとジェルジンスキー、第三軍司令部のあるグラゾフへ出発。

一月七日　スターリンとジェルジンスキー、ヴィャトカの党州委員会にたいし、戦線へ共産党員を動員する指令をあたえる。

一月十三日　スターリンとジェルジンスキー、ペルミの敗因の審査経過にかんし、予備的な報告をレーニンにおくる。

一月十八日　スターリンとジェルジンスキー、グラゾフからヴィヤトカへ出発。

一月十九日　スターリン、党中央委員会ならびに国防会議の召集したウラルおよびヴィャトカの党ならびにソヴェト諸組織の合同会議で、ヴィヤトカ軍事革命委員会創設の問題について演説。

スターリンとジェルジンスキー、ヴィヤトカ鉄道の混雑緩和にかんして交通人民委員部、第三軍の軍事輸送課、その他の組織の代表者と協議。

スターリンとジェルジンスキー、戦線および第三軍の後方の強化のためにとつた措置についてレーニンに報告。

レーニンに東部戦線の状況改善について報告。

一月二十一日　スターリンとジェルジンスキー、ヴィヤトカからグラゾフの第三軍司令部へ出発。

一月二十五日　スターリンとジェルジンスキー、グラゾフからヴィヤトカへかえる。

一月二十七日　スターリンとジェルジンスキー、ヴィヤトカからモスクワへ出発。

一月三十一日　スターリンとジェルジンスキー、東部戦線から到着したのち、党中央委員会ならびに国防会議の調査委員会の報告をレーニンに提出。

二月九日　『イズヴェスチヤ』第三〇号に、論文『民族問題にかんする政府の政策』を掲載。

二月十七日　国防会議の会議で食料、石炭輸送のた

めの直通列車の組織について報告。

二月二十二日　『イズヴェスチヤ』第四一号に、論文『二つの陣営』を掲載。

三月二日　『プラウダ』第四八号に論文『東部におけるわれわれの任務』を掲載。

三月二―六日　ロシア共産党（ボ）代表団員としてコミンテルン第一回大会の活動に参加。

三月八日　人民委員会議の会議で国家統制人民委員部の改組にかんする布告草案について報告。

三月九日　『プラウダ』第五三号および『ジーズニ・ナツィオナーリノスチェイ』第八号に論文『二年間』を掲載。

三月十六日　『イズヴェスチヤ』第五八号に論文『帝国主義の予備軍』を掲載。

三月十八―二十三日　ロシア共産党（ボ）第八回大会の活動に参加。

三月十九日　同大会の会議で、党綱領の最後的起草委員に選出される。

三月二十一日　同大会で、軍事問題にかんして演説。

三月二十二日　同大会の会議で、軍事問題にかんする決議作成委員に選出される。

三月二十三日　同大会で、党中央委員に選出される。

『イズヴェスチヤ』に、レーニンとスターリンの署名する『ソヴェト・ソヴェト権力とバシキール政府との協定』を発表。

三月二十五日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会で党中央委員会政治局員ならびに組織局員に任命される。

三月三十日　全ロシア中央執行委員会の決定により、国家統制人民委員に任命される。

四月三日　人民委員会議の会議で国家統制人民委員部改組にかんする布告草案の報告をおこなう。

四月九日　全ロシア中央執行委員会総会で、国家統制人民委員部の改組について報告。

レーニン、スターリン、カリーニン、全ロシア中央執行委員会によって確認された国家統制人民委員部にかんする布告に署名。

四月十三日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会の活動に参加。

四月二十一日　レーニンとスターリン、国防会議の決議によって、赤軍補給非常委員会における軍事資金監査組織の調査委員に任命される。

四月二十三日　『イズヴェスチヤ』第八五号に、論文『イギリス帝国主義の手さきによる一十六人のバクーの同志の銃殺について』を掲載。

四月三十日　国家統制人民委員部付属の苦情・申告中央ビューローの設置にかんする通達『ソヴェト共和国の全市民諸君に』に署名。同通達は一九一九年五月八日『イズヴェスチヤ』第九七号に掲載。

五月四日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会の活動に参加。

五月五日　国防会議の会議でソヴェト諸機関の赤査の成果について報告。

五月八日　レーニンとスターリン、ドネツ炭田にたいするデニキンの脅威に関連して南部戦線への軍事援助を強化せよというロシア共産党（ボ）中央委員会の指令をウクライナ人民委員会議におくる。

五月十七日　党中央委員会および国防会議、ユデーニッチの攻撃とペトログラードにたいする脅威に関連して、スターリンをペトログラード戦線へ派遣。

五月十九日　ペトログラードに到着して、総司令官、西部戦線司令官ならびに第七軍司令官と戦況について協議。

直通電話で、ペトログラード付近の状況および戦線強化のためにとられた措置についてレーニンに報告。

五月二十日　ペトログラードからスターラヤ・ルッサの西部戦線司令部へ出発。

五月二十一日　ガッチナ付近の戦線の状況について、直通電話でレーニンならびに共和国革命軍事会議に報告。

五月二十二日　スターラヤ・ルッサから白軍に直接に攻撃されているガッチナ地区へ出発。

五月二十五日　クロンシュタットでバルチック艦隊の状況を研究。

カレリヤ地区戦線の強化を検査。

五月二十八日　戦線の巡視からペトログラードへかえる。

五月三十日　ペトログラード近接地防衛の問題について総司令官、共和国革命軍事会議代表者、西部戦線・第七軍・バルチック艦隊の各司令部代表と協議。

六月の初め　ペトログラードを防衛する軍隊に、戦線での脱走者、裏切者との斗争を呼びかける。

六月八―九日　ナルヴァ地区戦線にいる。

六月十日　ロシア共産党（ボ）中央委員会、スターリンに西部戦線の指揮の集中を実現するように依頼。

六月十三日　クラースナヤ・ゴールカ、セーラヤ・ローシャヂ堡塁における、反革命的暴動の発生に関連して、クラースナヤ・ゴールカ堡塁を砲撃するために、バルチック艦隊の軍艦を外港へ回航させる命令を出し、同時に、陸上からクラースナヤ・ゴールカを攻撃するため、オラニエンバウムで沿岸部隊を編成する指令をあたえる。

六月十四日　オラニエンバウムにつき、クラースナヤ・ゴールカ進撃計画について陸海軍司令部代表、沿岸部隊の司令官、同コミッサールと協議。

六月十五日　クラースナヤ・ゴールカ奪回作戦指導のため、オラニエンバウムから軍事行動地区へ出発。

六月十六日　クラースナヤ・ゴールカおよびセーラヤ・ローシャヂの堡塁を赤軍が奪取したことを、レーニンに報告。

クラースナヤ・ゴールカ堡塁につき、

バルチック艦隊水兵と赤軍部隊の集会に出席。

六月二十二日　赤軍部隊のペトログラード戦線での攻勢について、レーニンに報告。

六月二十八日　ヴィドリッツァ――フィンランド国境におけるフィンランド白軍の軍事基地――を占領した第一狙撃兵師団、オネガ小艦隊およびバルチック艦隊の水兵にあいさつをおくる。

七月三日　モスクワへ到着。

七月三―四日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会の活動に参加。

七月五日　西部戦線革命軍事会議の委員に任命される。

七月八日　『プラウダ』に、ペトログラード戦線の状況にかんするスターリンと『プラウダ』通信員との会談を発表。

七月九日　スモーレンスクの西部戦線司令部に到着。

七月十三日　リトワニア＝白ロシア政府のメンバーと、同政府とミンスク防衛会議とを解散させ、そのメンバーを戦線の諸機関にいれることについて協議。

七月二十三日　ペトログラードおよび西部軍管区軍事委員部に防衛要点組織にかんして西部戦線革命軍事会議の指令に署名。

八月五日　ペトログラード設堡地帯創設に関する西部戦線革命軍事会議の命令に署名。

ペトログラード近接地の白衛軍を粉砕

し、プスコフを占領せよという、戦線の諸軍にあたえる西部戦線革命軍事会議の指令に署名。

八月十一日　西部戦線の状況を手紙でレーニンに報告。

八月十三日　直通電話でオルジョニキッゼに、西部戦線における第十六軍の戦斗地区の状況を照会。

八月二十六日　赤軍部隊によるプスコフの奪取をレーニンに報告。

八　月　『戦斗部隊内の連隊付コミッサールのための訓令』作成にかんし、西部戦線の責任政治活動家の特別会議を指導。

九月二日　ドヴィンスク付近における赤軍部隊の反攻開始について、レーニンへ報告。

九月十日　スモーレンスクからモスクワへ出発。

九月十五日　スモーレンスクにかえる。

九月二十五日　スモーレンスクからモスクワへ出発。

九月二十六日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会の活動に参加。中央委員会総会は、デニキン粉砕の組織のために、スターリンを南部戦線へ派遣することを決定。

九月二十七日　南部戦線革命軍事会議の委員に任命される。

共和国革命軍事会議に参加。スターリンの提案によって南部戦線へ派遣するために、西部戦線の諸連隊によって混成師団をつくるという決定、および南部戦線部隊管理部創設の決定が採択さ

れる。

九月二十八日　スモーレンスクに到着。

九月三十日　スモーレンスクからモスクワへ出発。

十月二日　共和国革命軍事会議の会議に参加。スターリンの提案によって、南部戦線へ派遣されるラトヴィア師団の補充にかんする決定がおこなわれる。

十月三日　セルゲーフスコエ村の南部戦線司令部に到着。

十月九日　オリョール付近のデニキン軍にたいする行動のため突撃部隊を創設せよという南部戦線革命軍事会議の指令に署名。

十月十一日　南部戦線司令部の移転にともなって、セルゲーフスコエ村からセールプホフへ出発。

十月十五日　レーニンへの手紙のなかで、ヴォローネジ地区からハリコフ—ドネツ炭田をとおってロストフにむかう、デニキン攻撃の戦略計画を提出。

十月十七日　オリョール占領にかんして、第十四軍司令官にあたえる南部戦線革命軍事会議の指令に署名。十月二十日オリョールは赤軍部隊によって奪取された。

十月二十日　退却するデニキン軍を追撃し、クールスクへ本攻撃をくわえよという、南部戦線革命軍事会議の、同戦線諸軍にあたえる指令に署名。

十月二十五日　ブヂョンヌイの騎兵団がシクローとマモントフの騎兵団をヴォローネジ付近で粉砕し、赤軍部隊がヴォローネジを

十月三十日　奪取したことを、レーニンに報告。

十一月三日　セールプホフから南部戦線の軍事行動地区へ出発。

十一月四日　戦線巡視からセールプホフへかえる。

十一月六日　モスクワへ出発。

十一月九日　ロシア共産党（ボ）中央委員会政治局の会議に参加。スターリンの提案によって南部戦線補充にかんする決議が採択される。

　セールプホフの南部戦線司令部へかえる。

　全戦線にわたって攻撃を展開し、デニキン軍のクールスク部隊を撃滅せよという、南部戦線革命軍事会議の指令に署名。

十一月十一日　南部戦線革命軍事会議、スターリンの提案により、騎兵軍団創設にかんする決議を採択。

十一月前半　占領から解放された地方におけるソヴェト権力の組織の検査にかんする訓令と、南部戦線地区における革命委員会への訓令との作成を指導。

十一月十六日　モスクワへ出発。

十一月十七日　騎兵軍団創設問題審議のため共和国革命軍事会議の会議に参加。

十一月十八日　セールプホフの南部戦線司令部にかえる。

十一月十九日　第一騎兵団を騎兵軍団と改称するとい

う南部戦線革命軍事会議の命令に署名。

十一月二十一日　モスクワにおける東部諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会代議員の予備会議に参加。この会議はレーニンが司会した。

十一月二十二日　東部諸民族共産主義組織第二回全ロシア大会の開会の辞をのべる。

十一月二十七日　全ロシア中央執行委員会幹部会は、スターリンのペトログラード防衛の功績と南部戦線での献身的活動を表彰するため、赤旗勲章授与の決定をおこなう。

セールプホフから南部戦線の軍事行動地区に出発。

十一月二十九日　ヴォローネジに到着。

十二月五日　カストルナヤ駅に来着し、そこからスタールイ・オスコールへむかう。

十二月六日　第一騎兵軍団の行動地区（ノーヴィ・オスコールに近いヴェリーコ・ミハイローフカ村）へ到着。

南部戦線革命軍事会議と第一騎兵軍団との合同会議で、デニキン粉砕計画の実行における、第一騎兵軍団の任務について演説。

十二月六—七日　騎兵軍団の諸部隊の状態と軍事行動の経過を研究。

十二月七日　スターリンとブヂョンヌイ、ヴェリーコ・ミハイローフカ周辺の戦場を視察。

十二月八日　ノーヴィ・オスコールに到着。

十二月九日　第七回全ロシア・ソヴェト大会、スターリンを全ロシア中央執行委員に選出。

十二月十日　ヴォローネジに到着。

十二月十二日　戦線巡視からヴォローネジの南部戦線司令部へかえる。

キーエフ、ドネツ炭田を占領せよという、戦線の諸軍隊にあたえる南部戦線革命軍事会議の指令に署名。

十二月十三日　セールプホフからモスクワへ出発。

一九二〇年

一月三日　オリョールに到着。

ロストフを占領せよという、南部戦線革命軍事会議の、同戦線の諸軍にたいする指令に署名。

十二月十七日　モスクワからセールプホフへかえる。

十二月十八日　『ペトログラツカヤ・プラウダ』に、南部戦線への援助にたいしてペトログラード労働者へ感謝した南部戦線革命軍事会議を代表するスターリンのあいさつを発表。

十二月二十六日　論文『南部の戦況について』を執筆、同論文は、十二月二十八日『プラウダ』第二九三号に掲載。

十二月二十九日　セールプホフからモスクワへ出発。

一月五日　クールスクの南部戦線司令部に到着。

一月十日　ブヂョンヌイ騎兵部隊によるロストフ占領について、レーニンに報告。

デニキン軍の撃破とドネツ炭田とロストフの占領を祝した、南部戦線革命軍事会議の、同戦線諸軍にたいする命令に署名。

一月十一日　クールスクから西南戦線第十四軍の行動地区へ出発。（一九二〇年一月十日、南部戦線は西南戦線と改称された）。

一月十三日　黒海諸港にのがれたデニキン軍を追撃せよという、西南戦線革命軍事会議の同戦線諸軍あての指令に署名。

一月十四日　戦線の巡視からクールスクへかえる。

一月十五日　クールスクからモスクワへ出発。

一月二十日　人民委員会議の会議で『ウクライナ労仂軍評議会の状態』について報告。人民委員会議、『状態』を確認し、スターリンをウクライナ労仂軍評議会の議長に任命。

二月二日　モスクワからクールスクの西南戦線司令部に到着。

二月七日　全ロシア中央執行委員会の会議で、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の連邦制度問題を研究する同幹部会付属委員会の委員に選出される。

二月十日　革命軍事会議ならびに西南戦線司令部のハリコフへの移転にともない、ハリコフに到着。

二月十二日　ウクライナ労仂軍評議会委員の予備的協議会をおこなう。

二月十三日　ウクライナ労仂軍組織の方策にかんして、直通電信でレーニンに報告。

二月十六日　ウクライナ労働軍評議会第一回会議を指導。席上で労働軍評議会の設置とその任務について報告。

二月二十日　ドネツ炭田の石炭生産の軍隊化と労働者への生活必需品供給にかんするウクライナ労働軍評議会の決定に署名。

三月七日　ウクライナ労働軍への命令のなかで、同労働軍に編入された第四十二師団の戦斗員、指揮官、コミッサールに石炭獲得斗争で勝利をかちとれと呼びかける。

三月九日　ウクライナ労働軍評議会、ウクライナ人民委員会議、その他の組織にいるメンバーの食糧調達活動にかんする協議会をひらく。

三月十五日　レーニンがドネツ県境界設定についておこなった提案にかんして、ウクライナ労働軍評議会の特別会議をひらく。

三月十七―二十三日　ハリコフにひらかれるウクライナ共産党（ボ）第四回全ウクライナ協議会を指導。

三月十七日　同協議会で開会の辞をのべる。

三月十九日　同協議会で経済政策について報告。

三月二十日　同協議会で経済政策にかんする報告の結語をのべる。

三月二十三日　同協議会でロシア共産党（ボ）第九回大会の代議員に選出される。

同協議会の閉会の辞をのべる。

ハリコフからモスクワへ出発。

三月二十九日—四月五日　ロシア共産党（ボ）第九回大会の活動に参加。

四月一日　同大会の第九回会議で労働組合ならびにその組織にかんする問題の決議作成委員に選出される。

四月四日　同大会でロシア共産党（ボ）中央委員に選出される。

四月五日　ロシア共産党（ボ）中央委員会総会の会議で、党中央委員会政治局員および組織局員に任命される。

四月十六日　労働国防会議の会議でドネツ炭田の石炭業の状態について報告。

四月二十三日　『プラウダ』第八六号に論文『ロシア共産党の組織者および指導者としてのレーニン』を掲載。

四月二十九日—五月二日　レーニンとスターリン、ポーランドとの戦争についての煽動組織にかんするロシア共産党（ボ）中央委員会のテーゼ作成に参加。

五月四日　人民委員会議の会議で、タタール・ソヴェト自治共和国創設問題委員会の議長に任命される。

五月十日　労働国防会議の決議によって西部戦線軍の被服補給委員会議長に任命される。

五月十四日　労働国防会議の会議で、西部戦線軍への被服補給について報告。

労働国防会議の決議によって、軍の弾薬・小銃・機関銃の補給、ならびに弾

薬・兵器工場の活動強化措置にかんする委員会の議長に任命される。

五月十七日　軍の弾薬・小銃・機関銃補給ならびに弾薬・兵器工場活動強化措置にかんする委員会の会議をおこなう。

五月二十日　『イズヴェスチヤ』に労農監督人民委員イ・ヴェ・スターリン署名の『労農監督選挙規定ならびにこれへの労仂者・農民の参加についての訓示』を発表。

五月二十一日　労仂国防会議の会議で、軍の弾薬・小銃および機関銃補給委員会の活動の結果について報告。

五月二十五—二十六日　『プラウダ』第一一一号、一一二号に論文『連合国の新たなロシア出兵』を掲載。

五月二十六日　ロシア共産党（ボ）中央委員会、ポーランドのソヴェト共和国侵略に関連してスターリンを西南戦線へ派遣。

五月二十七日　ハリコフの西南戦線司令部に到着。

五月二十九日　西南戦線クリミア地区の強化についてとられた措置について、レーニンに電報で報告。

ハリコフからクレメンチューグに到着。

五月三十一日　西南戦線の状況についてレーニンに報告。

オデッサ防衛措置にかんし第十三、第十四軍司令部にあたえる西南戦線革命軍事会議の指令に署名。

六月初め　クレメンチューグで、第一騎兵軍団の

指揮官と協議をおこない、戦線の状況と騎兵軍団の作戦計画について発言。

六月三日　ポーランド軍のキーエフ部隊を粉砕せよという、第一騎兵軍団司令官にあたえる西南戦線革命軍事会議の指令に署名。

六月十二日　レーニンへ手紙を書き、そのなかで、コミンテルン第二回大会の民族・植民地問題にかんするレーニンのテーゼ草案についての意見をのべる。

赤軍部隊によるキーエフ占領についてレーニンに報告。

六月二十日　クレメンチューグからハリコフへかえる。

六月二十四日　シネーリニコヴォ（西南戦線のクリミア地区）へ出発。

ハリコフの新聞『コムニスト』に、西南戦線の状況にかんするスターリンのウクライナ・ロスタ通信記者との会談を発表。

七月三日　シネーリニコヴォからハリコフへかえる。

七月七日　モスクワへ出発。

七月十一日以前　西南戦線クリミア地区に増援部隊をおくることにかんし、総司令官、戦線司令部指揮官、共和国革命軍事会議議長代理と協議。

七月十一日　『プラウダ』に、ポーランド戦線の状況にかんするスターリンの『プラウダ』記者との会談を発表。

七月十二日　モスクワからハリコフの西南戦線司令部へかえる。

七月十四日　ヴォルノヴァッハ（戦線クリミア地区）に出発。

七月十六日　マリウーポリを訪問、同地でアゾフ海艦隊の状態を研究。

ロシア共産党（ボ）中央委員会総会、スターリンによってつくられたヴランゲリ撃破組織にかんする提案を採択。レーニン、これについてスターリンに知らせる。

七月十九日以前　クリミア戦線へ共産党員を動員せよという、党中央委員会の各党組織への手紙を書く。この手紙はレーニンの提案によって各党組織へおくられた。

七月十九日　ヴォルノヴァッハからロゾヴァヤへ出発。

七月二十日　戦線の巡視からハリコフへかえる。

七月三十一日　ロゾヴァヤへ出発。

八月二日　対ヴランゲリ戦線を独立の戦線に分離するという党中央委員会政治局の決定について、レーニンから知らせをうける。政治局、同戦線革命軍事会議の設置と、この戦線に全注意力を集中することをスターリンに依頼。

八月七日　赤軍がドニエプルを渡河し、アリョーシキ、カホーフカその他ドニエプル左岸の諸拠点を占領したことをレーニンに報告。

八月九日　ロゾヴァヤからアレクサンドロフスク

へ出発。

八月十四日　戦線巡視からハリコフへかえる。

八月十七日　モスクワへ出発。

八月十九日　レーニンとスターリン、クリミア戦線への援助措置にかんして、ウクライナ共産党（ボ）中央委員会、ロシア共産党（ボ）中央委員会カフカズ・ビューローとシベリア・ビューロー、ロシア共産党（ボ）ペトログラード委員会、ならびに西部戦線革命軍事会議に指令をおくる。

八月二十五日　党中央委員会政治局への覚え書で、共和国の戦斗予備軍創設計画を提案。

九月二十二―二十五日　ロシア共産党（ボ）第九回全ロシア協議会の活動に参加。

九月二十二日　党第九回全ロシア協議会で、中央委員会報告の討論のさいに発言。

十月十日　『プラウダ』第二二六号に、論文『ロシアの民族問題にかんするソヴェト権力の政策』を掲載。

十月十五日　労農監督責任活動家第一回全ロシア協議会の開会の辞をのべる。

十月十六日　党中央委員会の依頼により北カフカーズおよびアゼルバイジャンへ出発。

十月十八日　ロストフ・ナ・ドヌーに到着。党活動の状態を研究。

十月二十一日　ウラヂカフカズに到着。

十月二十六日　カフカーズの状況について、党中央委

員会とレーニンに報告。

十月二十七―二十九日　ウラヂカフカズでひらかれたドン・カフカズ共産主義組織の地方協議会の活動を指導。

十月二十七日　ドン・カフカズ共産主義組織地方協議会で、『共和国の政治情勢について』という報告をおこなう。

十月三十日　ウラヂカフカズからバクーに出発。

十一月四日　アゼルバイジャン共産党（ボ）中央委員会政治局会議に、ならびにアルメニアの情勢の問題について、ロシア共産党（ボ）中央委員会カフカズ・ビューローの諸委員とともに参加。

十一月六日　バクー・ソヴェトの革命記念会議で、『プロレタリア独裁の三年間』という報告をおこなう。

十一月九日　アゼルバイジャン共産党（ボ）中央委員会、ロシア共産党（ボ）中央委員会カフカズ・ビューローおよびバクーの党＝ソヴェト諸組織との合同会議で、アゼルバイジャンにおける党＝ソヴェトの活動の任務について報告。

十一月十二日　テミール・ハン・シューラに到着。

十一月十三日　党活動家集会で、ダゲスタン自治宣言に関連して、党＝ソヴェト諸機関の任務について報告。

ダゲスタン諸民族大会でダゲスタン・ソヴェト自治制にかんする宣言をおこなう。

十一月十六日　ウラヂカフカズに到着。

十一月十七日　テレク州諸民族大会で『テレク州ソヴェト自治制について』という報告をおこなう。

テレク州諸民族大会代議員のグループ——カザック農民部会のメンバーのグループと会見。

十一月二十日　ウラヂカフカズからモスクワへ出発。

十一月三十日　スターリンのカフカーズの状況にかんする『プラウダ』記者との会談を『プラウダ』に発表。

十二月四日　『プラウダ』第二七三号に論文『ソヴェト・アルメニア万才！』を掲載。

十二月二十二—二十九日　第八回全ロシア・ソヴェト大会の活動に参加。

十二月二十九日　第八回全ロシア・ソヴェト大会、スターリンを全ロシア中央執行委員に選出。

十二月三十一日　全ロシア中央執行委員会の会議で、全ロシア中央執行委員会幹部会員に選出される。

普及版・スターリン全集

第四巻

一九五四年二月十五日　發行

定価　二八〇円

訳者　スターリン全集刊行会

発行者　東京都文京区本郷一ノ一五　小林・直衞

印刷者　東京都千代田区内幸町二ノ二〇　株式会社太平印刷社

発行所　東京都文京区本郷一丁目一五番地　大月書店

電話小石川(92)三〇九一番
振替・東京一六三八七番

スターリン全集

第四巻

スターリン全集刊行会訳

大月書店

第四回配本